

Oracle® Enterprise Performance Management System

Installation and Configuration Guide

リリース 11.1.2.3

EPM System Installation and Configuration Guide, 11.1.2.3

Copyright © 2008, 2013, Oracle and/or its affiliates. All rights reserved.

著者: EPM 情報開発チーム

Oracle および Java は Oracle Corporation およびその関連企業の登録商標です。その他の名称は、それぞれの所有者の商標または登録商標です。

このソフトウェアおよび関連ドキュメントの使用と開示は、ライセンス契約の制約条件に従うものとし、知的財産に関する法律により保護されています。ライセンス契約で明示的に許諾されている場合もしくは法律によって認められている場合を除き、形式、手段に関係なく、いかなる部分も使用、複写、複製、翻訳、放送、修正、ライセンス供与、送信、配布、発表、実行、公開または表示することはできません。このソフトウェアのリバース・エンジニアリング、逆アセンブル、逆コンパイルは互換性のために法律によって規定されている場合を除き、禁止されています。

ここに記載された情報は予告なしに変更される場合があります。また、誤りが無いことの保証はいたしかねます。誤りを見つけた場合は、オラクル社までご連絡ください。

このソフトウェアまたは関連ドキュメントを、米国政府機関もしくは米国政府機関に代わってこのソフトウェアまたは関連ドキュメントをライセンスされた者に提供する場合は、次の通知が適用されます。

U.S. GOVERNMENT RIGHTS:

Programs, software, databases, and related documentation and technical data delivered to U.S. Government customers are "commercial computer software" or "commercial technical data" pursuant to the applicable Federal Acquisition Regulation and agency-specific supplemental regulations. As such, the use, duplication, disclosure, modification, and adaptation shall be subject to the restrictions and license terms set forth in the applicable Government contract, and, to the extent applicable by the terms of the Government contract, the additional rights set forth in FAR 52.227-19, Commercial Computer Software License (December 2007). Oracle America, Inc., 500 Oracle Parkway, Redwood City, CA 94065.

このソフトウェアもしくはハードウェアは様々な情報管理アプリケーションでの一般的な使用のために開発されたものです。このソフトウェアもしくはハードウェアは、危険が伴うアプリケーション（人的傷害を発生させる可能性があるアプリケーションを含む）への用途を目的として開発されていません。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用する際、安全に使用するために、適切な安全装置、バックアップ、冗長性（redundancy）、その他の対策を講じることは使用者の責任となります。このソフトウェアもしくはハードウェアを危険が伴うアプリケーションで使用したことにより起因して損害が発生しても、オラクル社およびその関連会社は一切の責任を負いかねます。

このソフトウェアまたはハードウェア、そしてドキュメントは、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセス、あるいはそれらに関する情報を提供することがあります。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスに関して一切の責任を負わず、いかなる保証もいたしません。オラクル社およびその関連会社は、第三者のコンテンツ、製品、サービスへのアクセスまたは使用によって損失、費用、あるいは損害が発生しても一切の責任を負いかねます。

目次

ドキュメントのアクセシビリティについて	13
第 1 章 EPM System 製品のインストールについて	15
EPM System 製品について	15
必要な知識	16
ミドルウェア・ホーム、EPM Oracle ホームおよび EPM Oracle インスタンスに ついて	17
Shared Services レジストリについて	18
インストールと構成でサポートされる文字	18
第 2 章 EPM System のアーキテクチャ	21
EPM System のアーキテクチャについて	21
Disclosure Management コンポーネント	22
Essbase コンポーネント	23
FDM コンポーネント	23
FDMEE コンポーネント	24
Financial Close Management コンポーネント	24
テストおよび本番用スタンドアロン Financial Close Management の配置要 件	25
Financial Management コンポーネント	26
Performance Management Architect コンポーネント	27
Planning コンポーネント	28
Profitability and Cost Management コンポーネント	29
Reporting and Analysis コンポーネント	30
Strategic Finance コンポーネント	30
テストおよび本番用スタンドアロン Strategic Finance の配置要件	31
第 3 章 環境の準備	33
サーバーの準備	33
Windows Update の適用	33
ポートの競合の解決	33
ユーザー・アクセス制御の無効化	33
DCOM 既定の認証レベルの設定(Windows 2008)	34
クロックの同期	34

ホスト名の解決	34
アンチウイルス・ソフトウェアの無効化	34
共有ファイル・システム	35
ユーザー・アカウントの準備	35
ディスク・スペースと RAM	36
クライアントのディスク・スペースおよび RAM	36
サーバーのディスク・スペースおよび RAM	37
データベースの準備	39
Oracle Database の使用方法	40
Microsoft SQL Server データベースの使用法	44
IBM DB2 データベースの使用法	45
Java Web アプリケーション・サーバーの準備	50
WebLogic Server	50
IBM WebSphere	50
Web サーバーの準備	51
Oracle HTTP Server	51
Microsoft Internet Information Services (IIS)	51
Web ブラウザの準備	54
ブラウザの設定	54
ActiveX を使用可能にする(Reporting and Analysis)	56
高可用性およびロード・บาลancingのサポート・マトリックス	56
第 4 章 インストール用ファイルのダウンロード	67
インストール・ファイルのダウンロード	67
第 5 章 新しい配置での EPM System 製品のインストール	69
新規インストールのインストール・チェックリスト	69
共有ドライブ環境への配置(UNIX)	72
Financial Close Management (Close Manager および Account Reconciliation Manager)のインストール・チェックリスト	73
インストールの前提条件と要件	79
Web サーバー・インストールの前提条件	82
Financial Reporting および Production Reporting の X11 の構成(AIX および HP-UX)	83
インストールの順序	85
分散環境での EPM System 製品のインストール	85
Oracle BI EE の EPM System との統合	87
EPM System 製品のインストール	88
ようこそ	90
宛先/ミドルウェア・ホーム	91

インストール・タイプ	92
製品の選択	93
確認	94
サイレント・インストールの実行	94
保存した選択項目のロード	96
応答ファイルの変更	96
EPM System クライアントのインストール	97
クライアントのインストールの前提条件	97
クライアント・インストーラのダウンロードと抽出	97
個別の EPM System クライアントのインストール	98
EPM Workspace からの EPM System クライアントのインストール	100
EPM System クライアントの EPM System インストーラからのインストール	102
クライアントのサイレント・インストールの実行	102
デフォルト・インストール・ディレクトリ	103
第 6 章 新しい配置での EPM System 製品の構成	105
EPM System コンフィグレータについて	105
構成の前提条件	106
ホスト名の確実な解決	107
リポジトリ作成ユーティリティを使用したインフラストラクチャのスキーマの作成	107
Financial Close Management の構成の前提条件	109
構成順序	111
分散環境での製品の構成	113
SSL 使用可能環境での製品の構成	114
手動配置用の製品の構成	114
WebSphere Application Server 用の製品の構成	115
製品構成タスクの要約	115
EPM System 製品の構成	118
EPM Workspace のリフレッシュ	122
EPM System コンフィグレータのタスク参照	123
Oracle インスタンスの構成	123
タスクの選択	124
データベースの構成	124
アプリケーション・サーバーでの配置 - WebLogic のドメイン情報の指定	128
アプリケーション・サーバーでの配置: Oracle WebLogic	129
Foundation 構成タスク	132
Performance Management Architect 構成タスク	141

Essbase 構成タスク	142
Reporting and Analysis 構成タスク	147
Planning 構成タスク	149
Financial Management 構成タスク	149
Performance Scorecard - 添付ファイルの場所の構成	157
Strategic Finance 構成タスク	158
Financial Close Management 構成タスク	159
FDMEET 構成タスク	161
FDM の構成タスク	161
サイレント構成の実行	162
スタンドアロン・モードでの Essbase の設定	164
UNIX ベースの EPM System 配置での Financial Management、 Financial Reporting および Web Analysis の Windows への配置	165
構成中の処理	165
構成のトラブルシューティング	165
第 7 章 EPM System Java Web アプリケーションの手動配置	167
仮定と前提条件	167
Java Web アプリケーションの手動配置	167
FDMEET の追加の配置後手順	177
JMS サーバーの構成	178
配置の拡張	178
Oracle HTTP Server の手動構成	179
第 8 章 WebSphere Application Server への EPM System 製品の配置	183
FDMEET の追加の配置後手順	186
IBM HTTP Server の構成	188
WebSphere Application Server の配置の検証	192
第 9 章 新しい配置での手動構成タスクの実行	193
Essbase 手動構成タスク	193
64 ビット AIX でのユーザー制限の設定	194
クライアントによるクラスタ名を使用した検索の有効化	194
Reporting and Analysis 手動構成タスク	195
Financial Close Management 手動構成タスク	195
メッセージ保護のキーストアの設定	197
OID、MSAD、SunOne への WebLogic ドメインの構成	199
管理対象サーバーの起動	200
接続プールの最大容量を増やす	200
外部 LDAP プロバイダの接続プールの増加	201
FDMEET 手動構成タスク	202

第 10 章 EPM System 製品のメンテナンス・リリースのインストールの実行	203
メンテナンス・リリースのインストール・チェックリスト	204
Financial Close Management のメンテナンス・リリースのインストール・チェックリスト	204
インストール・ファイルのダウンロードと解凍	206
メンテナンス・リリース・インストールの前提条件タスクの実行	206
Essbase のメンテナンス・リリース・インストールの前提条件	207
Business Rules メンテナンス・リリースおよびアップグレード・インストールの前提条件	208
Financial Reporting のメンテナンス・リリース・インストールの前提条件	210
Oracle Web Services Manager を使用中の場合のメンテナンス・リリース・インストールの前提条件	211
メンテナンス・インストールでの EPM System 製品のインストールと構成 ..	211
単一の管理対象サーバーへのメンテナンス・インストール配置	215
シナリオ 1: すべての Java Web アプリケーションを固有の管理対象サーバーに配置しているか、すべての Java Web アプリケーションをリリース 11.1.2.0、11.1.2.1 または 11.1.2.2 の単一の管理対象サーバーに配置しています	215
シナリオ 2: 一部の Java Web アプリケーションは単一の管理対象サーバーに配置され、一部の Java Web アプリケーションは固有の管理対象サーバーに配置されている、リリース 11.1.2.1 または 11.1.2.2 環境で作業しています	216
メンテナンス・インストールでの手動構成タスクの実行	217
メンテナンス・インストールでの一般的な手動手動構成タスク	217
メンテナンス・インストールでの EPM Workspace 手動構成タスク	218
メンテナンス・インストールでの Performance Management Architect 手動構成タスク	218
メンテナンス・インストールでの Essbase 手動構成タスク	218
メンテナンス・インストールでの Essbase Studio 手動構成タスクの実行	219
Planning 手動構成タスク	220
Profitability and Cost Management 手動構成タスク	222
Strategic Finance 手動構成タスク	222
FDM 手動構成タスク	222
WebSphere Application Server へのメンテナンス・インストール配置	223
配置の検証および配置レポートの生成	223
EPM System クライアントのメンテナンス・リリースのインストールの実行	224
第 11 章 EPM System 製品のアップグレード	225
アップグレードについて	226

サポートされるアップグレード・パス	227
アップグレード・チェックリスト	228
アップグレード・インストールの前提条件	230
前のリリースのバックアップ	230
製品固有のアップグレード前提条件の実行	230
Business Rules メンテナンス・リリースおよびアップグレード・インストールの前提条件	231
インストール用ファイルのダウンロードおよび準備	232
アップグレードのためのデータの準備	233
前のリリースの Shared Services データのエクスポート	233
Financial Management および Strategic Finance データの旧リリースからのエクスポート	235
構成中の一時使用のためのファイルのコピー	236
データの複製	237
データベースの複製	246
EPM System サービスの停止	247
EPM System 製品の前のリリースのアンインストール	247
アップグレード用の EPM System 製品のインストール	247
アップグレード時の EPM System 製品の構成	248
Shared Services のデータ・インポート中の処理	255
Reporting and Analysis の分散配置のアップグレード	256
EPM System サービスの起動	256
インストールの検証	256
手動構成タスクの実行	257
再ホスティングされた環境への参照の更新	257
再ホスティングされた Essbase サーバーへの参照の更新	257
再ホスティングされた Essbase サーバーへの Provider Services 参照の更新	260
再ホスティングされた Essbase サーバーまたは Provider Services サーバーへの Administration Services 参照の更新	261
再ホスティングされた環境への Essbase Studio 参照の更新	262
再ホスティングされたサーバー環境への Reporting and Analysis 参照の更新	266
再ホスティングされたサーバー環境への Performance Management Architect 参照の更新	268
再ホスティングされたサーバー環境への Planning 参照の更新およびアプリケーションのアップグレード	269
再ホスティングされた Essbase サーバーへの Profitability and Cost Management 参照の更新	271
再ホスティングされた Essbase サーバーまたは Financial Management サーバーへの Strategic Finance 参照の更新	272

再ホスティングされた Essbase サーバーへの Performance Scorecard 参照の更新	273
再ホスティングされたサーバー環境への Integration Services 参照の更新	273
前のリリースから現在のリリースへのアプリケーションのアップグレード	274
アップグレードでの手動構成タスクの実行	275
Performance Management Architect のアップグレード・タスク	275
Essbase アップグレード・タスク	276
Essbase Studio アップグレード・タスク	278
Reporting and Analysis アップグレード・タスク	278
Planning のアップグレード・タスク	281
Financial Management アップグレード・タスク	282
Strategic Finance アップグレード・タスク	283
FDMEET アップグレード・タスク	284
FDM アップグレード・タスク	285
Smart View のアップグレード	286
複数のリリースを含む環境からのアップグレード	286
Shared Services のインスタンスが 1 つの環境からのアップグレード	286
Shared Services のインスタンスが 2 つの環境からのアップグレード	287
アプリケーションのアップグレード・プロセスの繰り返し	288
第 12 章 EPM System 製品の開始と停止	289
単一スクリプトを使用したサービスの開始	289
クライアントの起動	290
第 13 章 インストールの検証と配置の確認	295
インストールの検証	295
前提条件	295
EPM System 診断の使用方法	295
診断の実行	296
配置レポートの生成	297
配置の確認	298
Shared Services 配置の確認	298
EPM Workspace 内の EPM Workspace 配置および製品の確認	299
Financial Close Management の追加確認	300
Administration Services 配置の確認	300
Provider Services 配置の確認	300
Financial Close Management の配置の検証	301
付録 A. ポート	305
デフォルトのポートと Shared Services レジストリ	305
WebLogic 管理サーバー・ポート	306

WebSphere ポート	306
WebSphere Application Server ポート	306
IBM HTTP Server ポート	306
Oracle Enterprise Manager Java Web アプリケーションのポート	307
SOA サーバー・ポート	307
SSL ポート	307
Foundation Services のポート	307
Foundation Services のポート	307
Performance Management Architect のポート	308
Calculation Manager Java Web アプリケーションのポート	309
Essbase のポート	309
Essbase のポート	309
Administration Services のポート	310
Provider Services のポート	310
Essbase Studio のポート	310
Reporting and Analysis のポート	310
Reporting and Analysis Framework のポート	311
Financial Reporting のポート	311
Interactive Reporting のポート	312
Web Analysis のポート	312
Financial Performance Management アプリケーションのポート	312
Financial Management のポート	313
Financial Close Management のポート	313
Planning のポート	314
Performance Scorecard のポート	314
Strategic Finance のポート	314
Profitability and Cost Management のポート	315
Disclosure Management のポート	315
データ管理のポート	315
FDM のポート	315
FDMEE ポート	316
Data Relationship Management のポート	317
付録 B. JDBC URL 属性	319
JDBC ドライバ	319
Oracle RAC の URL	320
Oracle Database の LDAP ベースの URL	320
SSL の URL	320

付録 C. Financial Management のデータベース情報	321
データベース接続のプール	321
例 1	323
例 2	323
付録 D. EPM System サービス	325
EPM System のサービスおよびプロセス	326
Web サーバー	326
Foundation Services アプリケーション・サーバー	327
Performance Management Architect 次元サーバー・サービス	328
Performance Management Architect アプリケーション・サーバー	329
Performance Management Architect データ・シンクロナイザ・アプリケーション・サーバー	329
Calculation Manager アプリケーション・サーバー	330
Essbase サーバー	330
Administration Services サーバー	332
Integration Services サーバー	333
Essbase Studio サーバー	334
Provider Services アプリケーション・サーバー	335
Hyperion Reporting and Analysis Framework - エージェント・サービス	336
Reporting and Analysis Framework アプリケーション・サーバー	336
Financial Reporting アプリケーション・サーバー	337
Web Analysis アプリケーション・サーバー	338
Planning アプリケーション・サーバー	338
Financial Management のサービス	339
Financial Management アプリケーション・サーバー	340
Strategic Finance サーバー	341
Strategic Finance Web アプリケーション	341
Performance Scorecard アプリケーション・サーバー	342
Performance Scorecard Alerter アプリケーション・サーバー	343
Profitability and Cost Management アプリケーション・サーバー	343
Disclosure Management アプリケーション・サーバー	344
Financial Close Management アプリケーション・サーバー	344
Data Relationship Management	345
FDM	346
FDMEE アプリケーション・サーバー	347
用語集	349
索引	353

ドキュメントのアクセシビリティについて

Oracle のアクセシビリティについての詳細情報は、Oracle Accessibility Program の Web サイト <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=docacc> を参照してください。

Access to Oracle Support

Oracle サポート・サービスでは、My Oracle Support を通して電子支援サービスを提供しています。詳細情報は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=info> か、聴覚に障害のあるお客様は <http://www.oracle.com/pls/topic/lookup?ctx=acc&id=trs> を参照してください。

1

EPM System製品のインストールについて

この章の内容

EPM System 製品について	15
必要な知識.....	16
ミドルウェア・ホーム、EPM Oracle ホームおよび EPM Oracle インスタンスについて	17
Shared Services レジストリについて.....	18
インストールと構成でサポートされる文字	18

EPM System 製品について

Oracle(R) Technology Network で [Oracle Documentation Library \(http://www.oracle.com/technology/documentation/epm.html\)](http://www.oracle.com/technology/documentation/epm.html)を確認し、このガイドの更新版がないかどうか確認してください。

Oracle Enterprise Performance Management System 製品は、財務管理アプリケーションのモジュール式スイートと、レポートおよび分析の最も総合的なビジネス・インテリジェンス機能を統合するための、総合的な Enterprise Performance Management システムを形成できます。EPM System 製品の主要なコンポーネントは次のとおりです:

- Oracle Hyperion Foundation Services
 - Foundation Services (Oracle Hyperion Shared Services および Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace を含む)
 - (オプション) Oracle HTTP Server
 - Oracle WebLogic Server
 - Oracle Hyperion EPM Architect
 - Oracle Hyperion Calculation Manager
 - Oracle Hyperion Smart View for Office
- Oracle Essbase
 - Oracle Essbase
 - Oracle Essbase Administration Services
 - Oracle Essbase Integration Services
 - Oracle Hyperion Provider Services
 - Oracle Essbase Studio

- Oracle Hyperion Reporting and Analysis
 - Oracle Hyperion Reporting and Analysis Framework
 - Oracle Hyperion Interactive Reporting
 - Oracle Hyperion Financial Reporting
 - Oracle Hyperion SQR Production Reporting
 - Oracle Hyperion Web Analysis
- Oracle Hyperion Financial Performance Management アプリケーション
 - Oracle Hyperion Planning (Oracle Hyperion Capital Asset Planning、Oracle Hyperion Workforce Planning および Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting を含む)
 - Oracle Hyperion Financial Management
 - Oracle Hyperion Performance Scorecard
 - Oracle Hyperion Strategic Finance
 - Oracle Hyperion Profitability and Cost Management
 - Oracle Hyperion Disclosure Management
 - Oracle Hyperion Financial Close Management
- Oracle データ管理
 - Oracle Hyperion Financial Data Quality Management
 - Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Enterprise Edition
 - Oracle Data Relationship Management

必要な知識

このガイドは、EPM System 製品をインストール、構成および管理する管理者を対象にしています。前提条件となる知識は次のとおりです:

- セキュリティおよびサーバーの管理スキル
- Windows 管理または UNIX/Linux 管理あるいはその両方のスキル
- Java Web アプリケーション・サーバー管理スキル。
- Oracle Internet Directory、LDAP、Microsoft Active Directory などの認証プロバイダを含む組織のセキュリティ・インフラストラクチャおよび SSL の使用に関する十分な理解
- 組織のデータベース環境とサーバー環境に関する十分な理解
- 所属組織のネットワーク環境やポート使用に関する深い理解

ミドルウェア・ホーム、EPM Oracle ホームおよび EPM Oracle インスタンスについて

ミドルウェア・ホーム

ミドルウェア・ホームは、Oracle WebLogic Server ホーム、および必要に応じて1つ以上の Oracle ホーム(EPM Oracle ホームを含む)で構成されています。ミドルウェア・ホームは、ローカル・ファイル・システム、またはネットワーク・ファイル・システム(NFS)を介してアクセス可能なリモート共有ディスク上に配置できます。

ミドルウェア・ホームの場所は、コンピュータへの最初の製品インストール中に定義されます。コンピュータへのその後のインストールには、前に定義された場所が使用されます。デフォルトのインストール・ディレクトリは Oracle/Middleware です。ミドルウェア・ホームの場所は、このドキュメント全体を通して MIDDLEWARE_HOME と呼びます。

EPM Oracle ホーム

Oracle ホームには、特定の製品をホストするのに必要なインストール・ファイルが含まれます。Oracle ホームは、ミドルウェア・ホームのディレクトリ構造内にあります。EPM Oracle ホームには、EPM System 製品用のファイルが含まれます。

EPM System 製品のコンポーネントは、ミドルウェア・ホームの下の EPM Oracle ホーム・ディレクトリにインストールされます。デフォルトの EPM Oracle ホームの場所は MIDDLEWARE_HOME/EPMSys11R1 です。さらに、製品が使用する共通内部コンポーネントが EPM Oracle ホームにインストールされます。マシン上にインストールするすべての製品に対して十分なディスク・スペースがこの場所にあることを確認し、慎重に場所を選択します。この場所を変更できません。

EPM Oracle ホームの場所は、EPM_ORACLE_HOME と呼ばれるシステム環境変数で定義されます。このドキュメント全体を通して、EPM Oracle ホームの場所を EPM_ORACLE_HOME と呼びます。

分散環境では、EPM Oracle ホーム・ディレクトリ構造は各マシンで同じである必要があります。

EPM Oracle インスタンス

EPM Oracle インスタンスには、Oracle HTTP Server、Essbase Server などの、1つ以上のシステム・コンポーネントと、1つ以上のドメイン内の1つ以上の Java Web アプリケーションが含まれます。Oracle インスタンスのディレクトリ構造は、Oracle ホームのディレクトリ構造とは別です。どこにでも配置できます。ミドルウェア・ホーム・ディレクトリ内である必要はありません。

EPM Oracle インスタンスのデフォルトの場所は MIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystem1 です。EPM Oracle インスタンスの場所は、このマニュアルでは、EPM_ORACLE_INSTANCE と示されます。

Java Web アプリケーションは MIDDLEWARE_HOME/user_projects/domains/domainName に配置されます。

通常、すべての製品を1つのマシンにインストールする場合、最初に構成する製品に対して EPM Oracle インスタンスを作成します。その後の各製品については、既存の EPM Oracle インスタンスを変更します。分散環境にインストールする場合は、各マシンに新規の EPM Oracle インスタンスを作成します。

UNIX 環境では共有ドライブに配置できます。これには、共有ドライブにインストールし、その後、各マシンを別々の EPM Oracle インスタンスに配置するように構成します。72 ページの「共有ドライブ環境への配置(UNIX)」を参照してください。

Shared Services レジストリについて

Oracle Hyperion Shared Services Registry は、Foundation Services 用に構成するデータベースの一部です。Shared Services レジストリは、EPM System 製品を初めて構成したときに作成され、インストールする大部分の EPM System 製品に対して次の情報を保管して再利用することにより、構成を簡素化します:

- データベース設定や配置設定などの初期構成値
- 複数の統合された EPM System 製品と各種コンポーネントを統合するために使用するコンピュータ名、ポート、サーバー、URL
- Essbase のフェイルオーバー・コンテンツ

1つの製品に対して構成を変更すると、自動的にその配置で使用されている他の製品にもその変更内容が適用されます。

Shared Services レジストリの内容は、Oracle Hyperion Shared Services Console でライフサイクル管理を使用して表示および管理できます。Oracle Enterprise Performance Management System Lifecycle Management Guide を参照してください。

インストールと構成でサポートされる文字

次の文字が、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストーラおよび Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System コンフィグレータを使用するインストールおよび構成でサポートされます。

表 1 インストールと構成でサポートされる文字

フィールド	サポートされる文字	禁止されている文字
PATH	英数字、ダッシュ(-)、アンダースコア(_)、ピリオド(.)およびチルダ(~)。チルダは Microsoft Windows でのみ使用できます。	その他すべて
ホスト名	英数字、ダッシュ(-)およびドット(.)。 EPM System は、IPv6 アドレスをサポートします。ただし、インストールおよび構成時には、IPv6 アドレスではなくホスト名を入力する必要があります。	その他すべて
ユーザー名	禁止されている文字を除く、英語以外の文字(拡張文字とダブルバイト文字)を含む英数字	+ * / # [] { } () ; : , @ ! " "

フィールド	サポートされる文字	禁止されている文字
クラスタ、データベース名および DSN 名などの他の一般的なフィールド	禁止されている文字を除く、英語以外の文字(拡張文字とダブルバイト文字)を含む英数字	+ . - * \ / # [] { } () ; : , @ ! "
MIDDLEWARE_HOME、EPM_ORACLE_HOME および EPM_ORACLE_INSTANCE	MIDDLEWARE_HOME の場合: Windows で英数字、"_", "-" および "~"。 EPM_ORACLE_INSTANCE の場合: 英数字、"_", "-". EPM_ORACLE_INSTANCE のパスの各フォルダの最初の文字は a-z、A-Z または 0-9 である必要があります。	インストール時に EPM_ORACLE_HOME または MIDDLEWARE_HOME に指定するディレクトリ、または構成時に EPM_ORACLE_INSTANCE に指定するディレクトリには、次の記号または記号の組合せを使用しないでください: /t \t \b .

2

EPM Systemのアーキテクチャ

この章の内容

EPM System のアーキテクチャについて	21
Disclosure Management コンポーネント.....	22
Essbase コンポーネント	23
FDM コンポーネント	23
FMEE コンポーネント	24
Financial Close Management コンポーネント	24
Financial Management コンポーネント	26
Performance Management Architect コンポーネント	27
Planning コンポーネント.....	28
Profitability and Cost Management コンポーネント.....	29
Reporting and Analysis コンポーネント	30
Strategic Finance コンポーネント.....	30

EPM System のアーキテクチャについて

Oracle Enterprise Performance Management System は多層構成アプリケーション環境で、エンド・ユーザーのアクセスには主としてシンククライアント・アーキテクチャを利用するため、クライアント・マシンで必要なのはサポートされているブラウザのみです。クライアントと中間層サーバー間のネットワーク・トラフィックは、一般に通常の Web トラフィックを超えることはありません。

中間層のアプリケーション・サーバーが必要です。Oracle WebLogic Server は、デフォルトのインストールで提供されます。サポートされている別のアプリケーション・サーバーを使用することもできます。サポートされているアプリケーション・サーバーのリストについては、Oracle Enterprise Performance Management System Certification Matrix(<http://www.oracle.com/technetwork/middleware/ias/downloads/fusion-certification-100350.html>)を参照してください。

データ層はデータを異なる方法で格納する 2 つのコンポーネントで構成されています。Oracle Essbase 環境では、データはサーバー・ファイル・システム上のデータベースに格納され、そこで計算されます。Oracle Hyperion Financial Management 環境では、アプリケーション・フレームワーク、メタデータおよびテキスト・データがリレーショナル・リポジトリに格納されます。

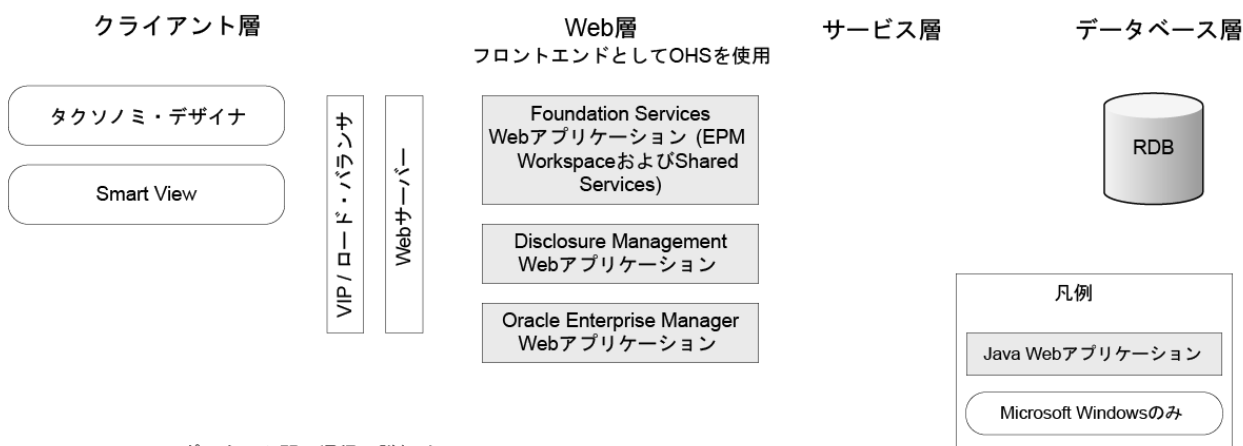
次の各項では、EPM System 製品のコンポーネント・アーキテクチャの図を示します。EPM System コンポーネント間の通信の詳細を取得するには、<http://www.oracle.com/technology/documentation/epm.html> の EPM System 11.1.2.3

Documentation Library (配置およびインストール・タブ)の Oracle Enterprise Performance Management System 通信フローに関する項を参照してください。

注： Oracle Enterprise Performance Management System Standard Deployment Guide は、EPM System 製品を配置する Oracle のベスト・プラクティスの方法を示しています。この方法は、製品の基本配置の作成、次に必要な容量を処理するサービスのスケール・アウトに基づきます。<http://www.oracle.com/technology/documentation/epm.html> の EPM System 11.1.2.3 Documentation Library (配置およびインストール・タブ)からこのドキュメントを入手できます。

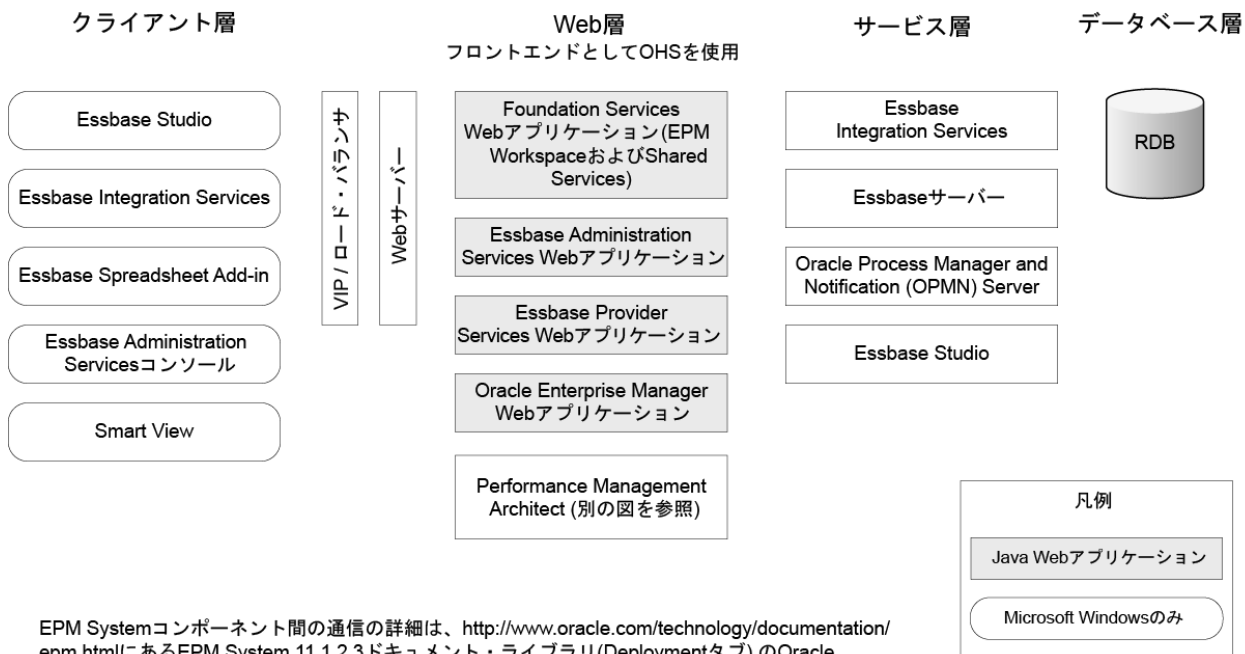
ヒント： PDF 形式でコンポーネント・アーキテクチャ図の最適な表示を得るには、表示倍率を 120%に上げてください。

Disclosure Management コンポーネント



EPM Systemコンポーネント間の通信の詳細は、<http://www.oracle.com/technology/documentation/epm.html>にある EPM System 11.1.2.3ドキュメント・ライブラリ(Deploymentタブ)のOracle Enterprise Performance Management Systemの通信フローに関する項を参照してください。

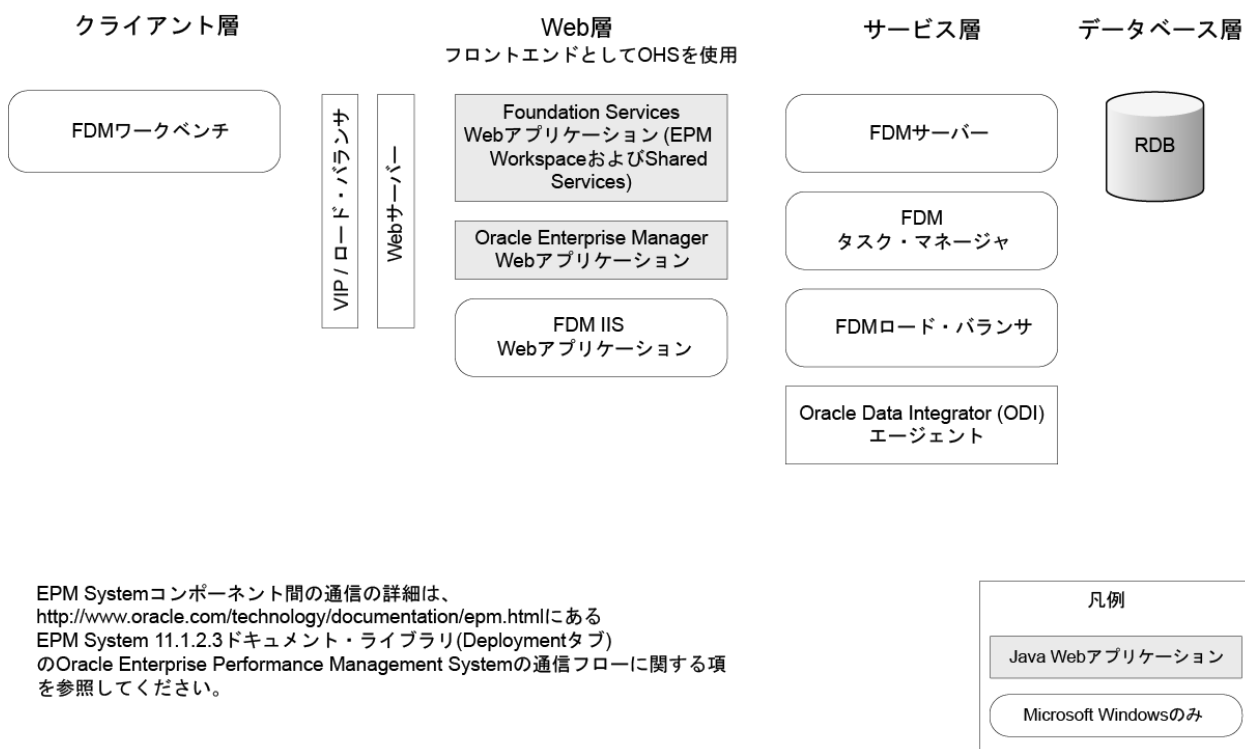
Essbase コンポーネント



EPM Systemコンポーネント間の通信の詳細は、<http://www.oracle.com/technology/documentation/epm.html>にあるEPM System 11.1.2.3ドキュメント・ライブラリ(Deploymentタブ)のOracle Enterprise Performance Management Systemの通信フローに関する項を参照してください。

VIP/ロード・バランサ技術の詳細は、<http://www.oracle.com/technology/documentation/epm.html>にあるEPM System 11.1.2.3ドキュメント・ライブラリ(Deploymentタブ)のOracle Enterprise Performance Management System配置オプション・ガイドのEPM System製品のスケール・アウトに関する項を参照してください。

FDM コンポーネント



EPM Systemコンポーネント間の通信の詳細は、<http://www.oracle.com/technology/documentation/epm.html>にあるEPM System 11.1.2.3ドキュメント・ライブラリ(Deploymentタブ)のOracle Enterprise Performance Management Systemの通信フローに関する項を参照してください。

FDMEE コンポーネント

Web層
フロントエンドとしてOHSを使用

Foundation Services
Webアプリケーション (EPM
WorkspaceおよびShared
Services)

FDMEE
Webアプリケーション
(Oracle Data Integrator
(ODI)エージェントを含む)

Oracle Enterprise Manager
Webアプリケーション

EPM Systemコンポーネント間の通信の詳細は、
<http://www.oracle.com/technology/documentation/epm.html>にある
EPM System 11.1.2.3ドキュメント・ライブラリ(Deploymentタブ)の
Oracle Enterprise Performance Management Systemの通信フローに関する項
を参照してください。

凡例

Java Webアプリケーション

Microsoft Windowsのみ

Financial Close Management コンポーネント

クライアント層

Web層
フロントエンドとしてOHSを使用

サービス層

データベース層

Smart View

VIP / ロード・バランサ

Webサーバー

Foundation Services
Webアプリケーション (EPM
WorkspaceおよびShared
Services)

Financial Close Management
Webアプリケーション (Close
ManagerおよびAccount
Reconciliation Manager)

FDMEE Webアプリケーション
(Oracle Data Integrator
(ODI)エージェントを含む)

Oracle Enterprise Manager Web
アプリケーション

Oracle SOA Suite

RDB

凡例

Java Webアプリケーション

Microsoft Windowsのみ

EPM Systemコンポーネント間の通信の詳細は、<http://www.oracle.com/technology/documentation/epm.html>にある
EPM System 11.1.2.3ドキュメント・ライブラリ(Deploymentタブ)のOracle Enterprise Performance Management
Systemの通信フローに関する項を参照してください。

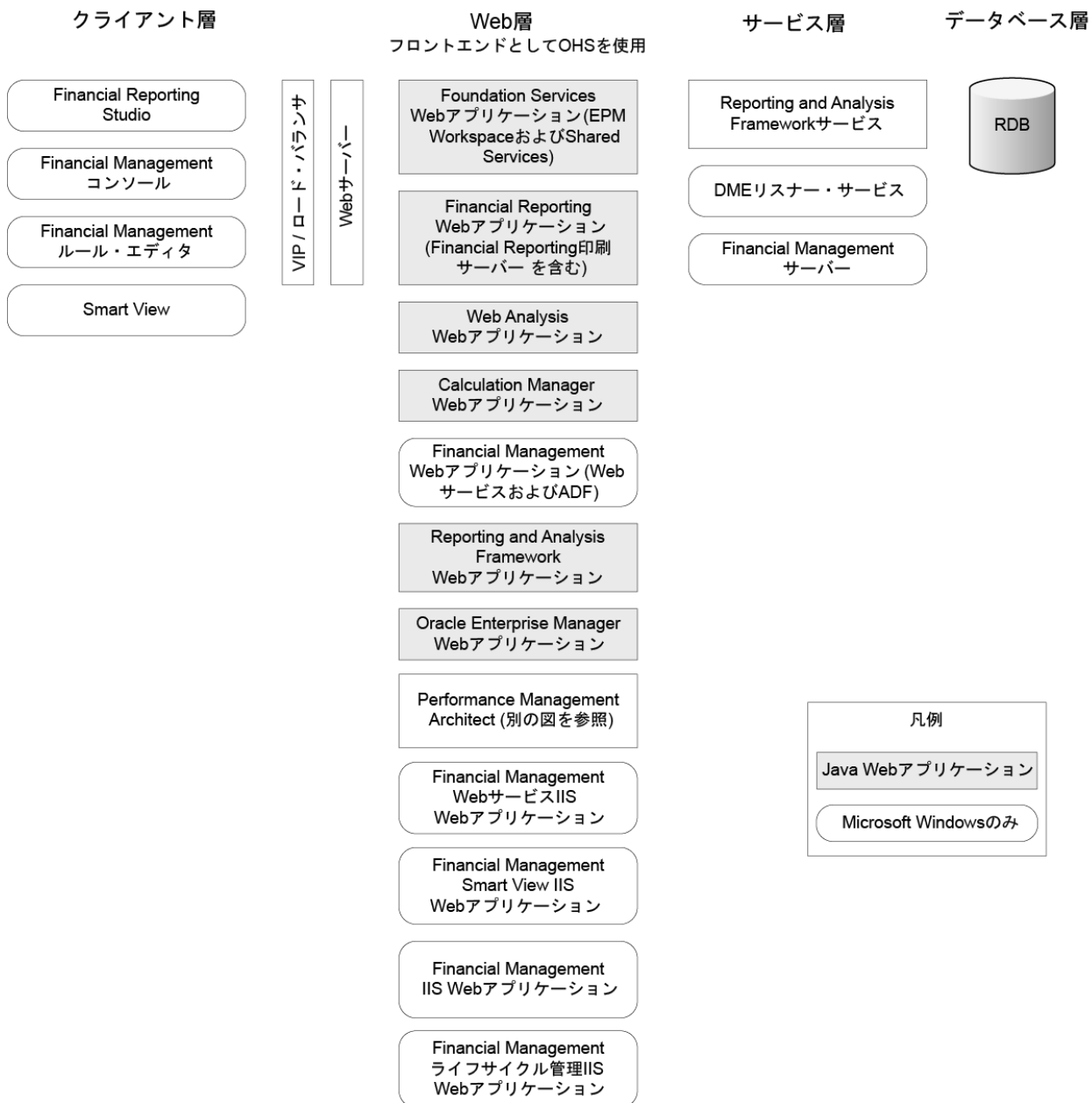
テストおよび本番用スタンドアロン Financial Close Management の配置要件

Oracle Hyperion Financial Close Management のスタンドアロン・バージョンは、次に記載する 2 つのサーバー配置の他の EPM System 製品から独立して配置できます。次の仕様は、500 ユーザー(175 アクティブ)をサポートします。

表 2 Financial Close Management 配置仕様

マシン	製品	プロセッサ/メモリー
サーバー 1	<ul style="list-style-type: none">● WebLogic 管理サーバー● Oracle Hyperion Foundation Services の Java Web アプリケーション(Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace および Oracle Hyperion Shared Services)● Oracle SOA Suite● Oracle HTTP Server	4 コア 2CPU - 16GB
サーバー 2	<ul style="list-style-type: none">● Financial Close Management Java Web アプリケーション(Close Manager と Account Reconciliation Manager)● Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Enterprise Edition Java Web アプリケーション	4 コア 2CPU - 16GB

Financial Management コンポーネント



EPM Systemコンポーネント間の通信の詳細は、<http://www.oracle.com/technology/documentation/epm.html>にあるEPM System 11.1.2.3ドキュメント・ライブラリ(Deploymentタブ)のOracle Enterprise Performance Management Systemの通信フローに関する項を参照してください。

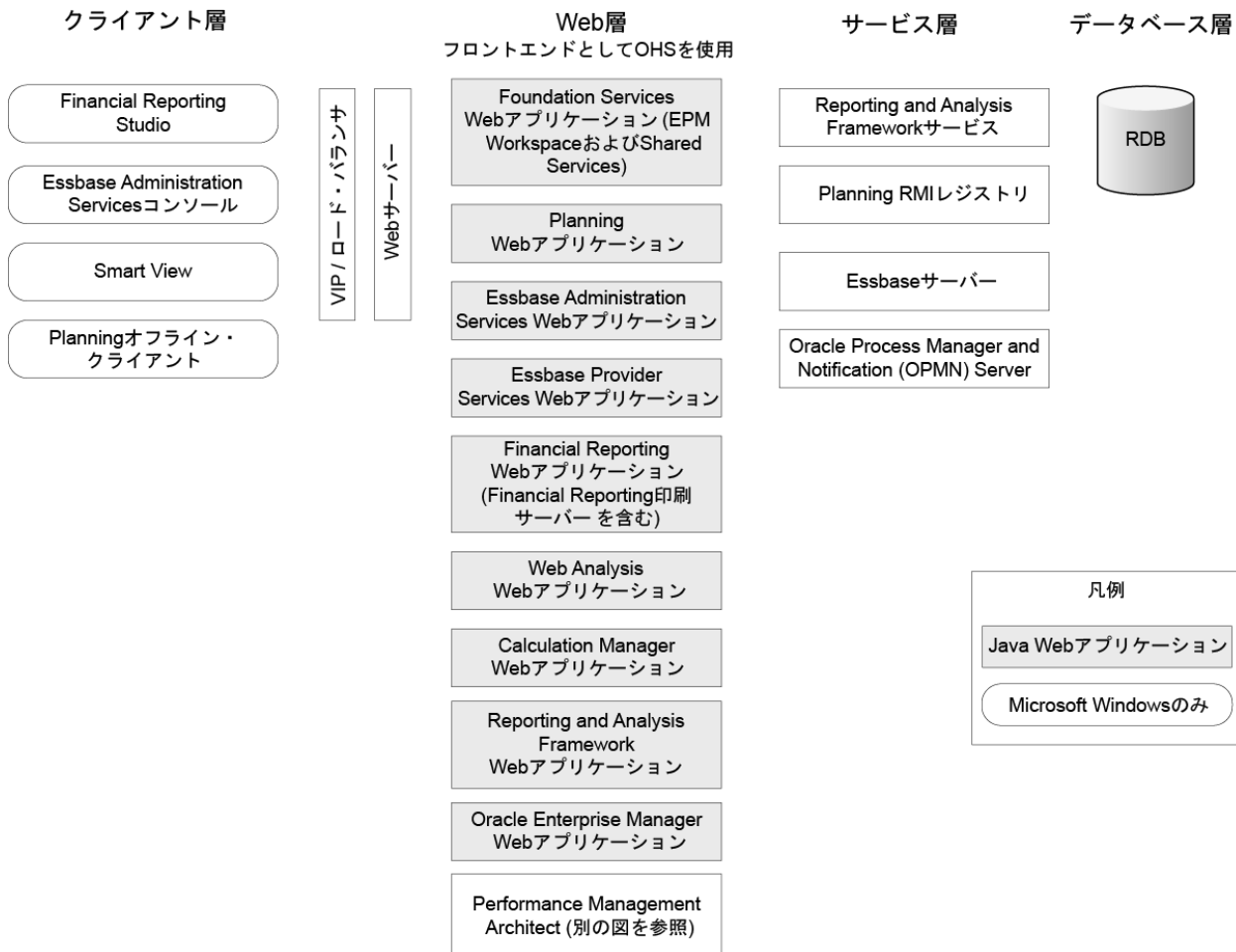
Performance Management Architect コンポーネント



EPM Systemコンポーネント間の通信の詳細は、
<http://www.oracle.com/technology/documentation/epm.html>にある
 EPM System 11.1.2.3ドキュメント・ライブラリ(Deploymentタブ)
 のOracle Enterprise Performance Management Systemの通信フローに関する項
 を参照してください。

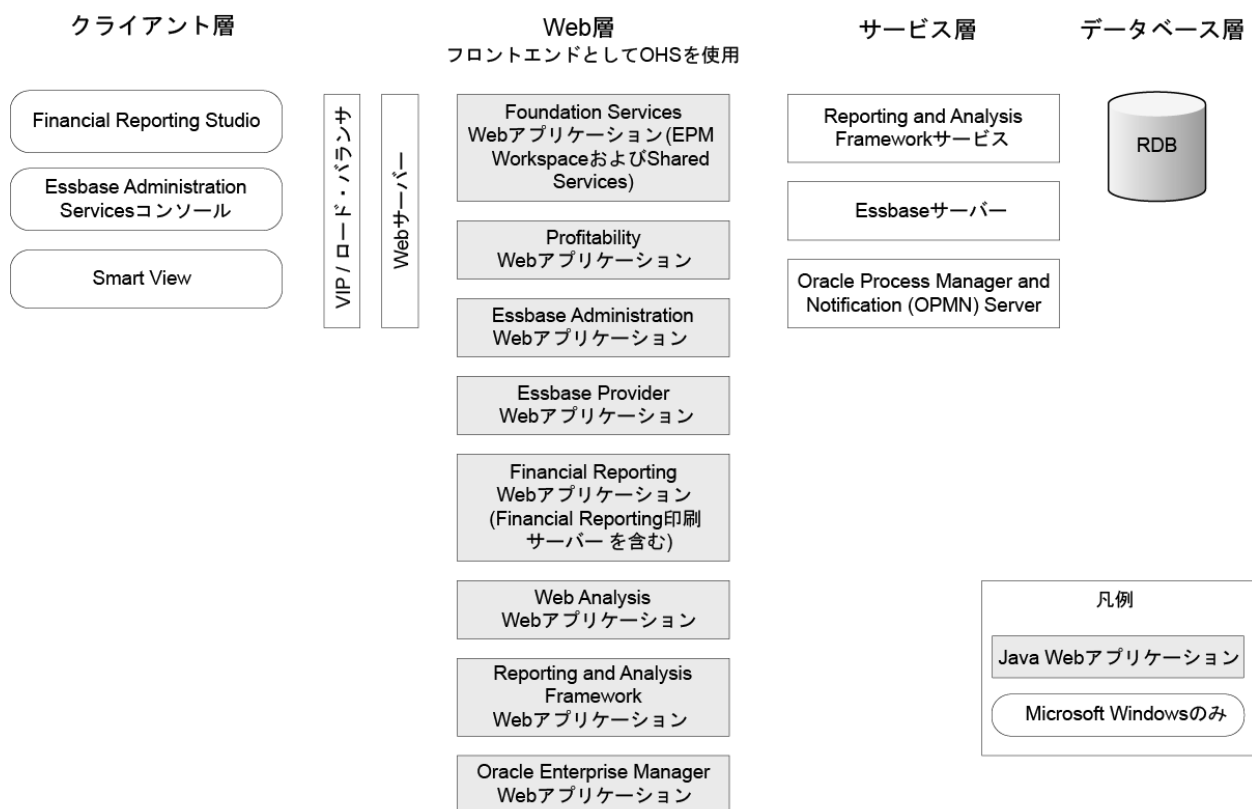


Planning コンポーネント



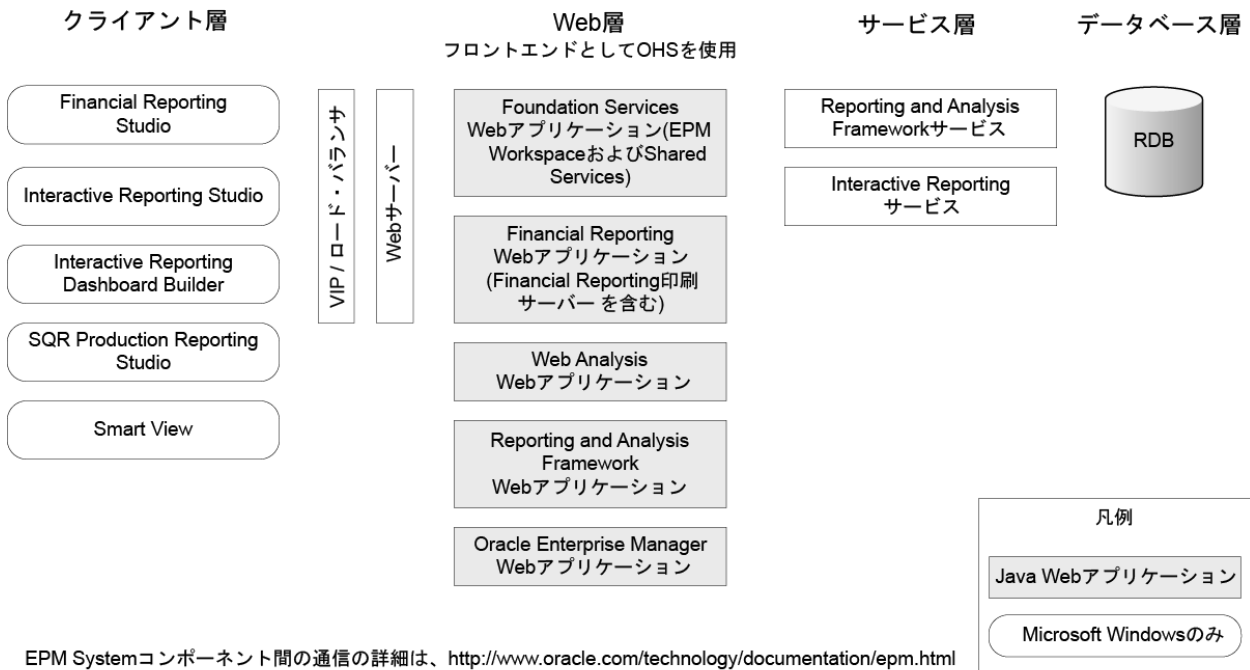
EPM Systemコンポーネント間の通信の詳細は、<http://www.oracle.com/technology/documentation/epm.html>にあるEPM System 11.1.2.3ドキュメント・ライブラリ(Deploymentタブ)のOracle Enterprise Performance Management Systemの通信フローに関する項を参照してください。

Profitability and Cost Management コンポーネント



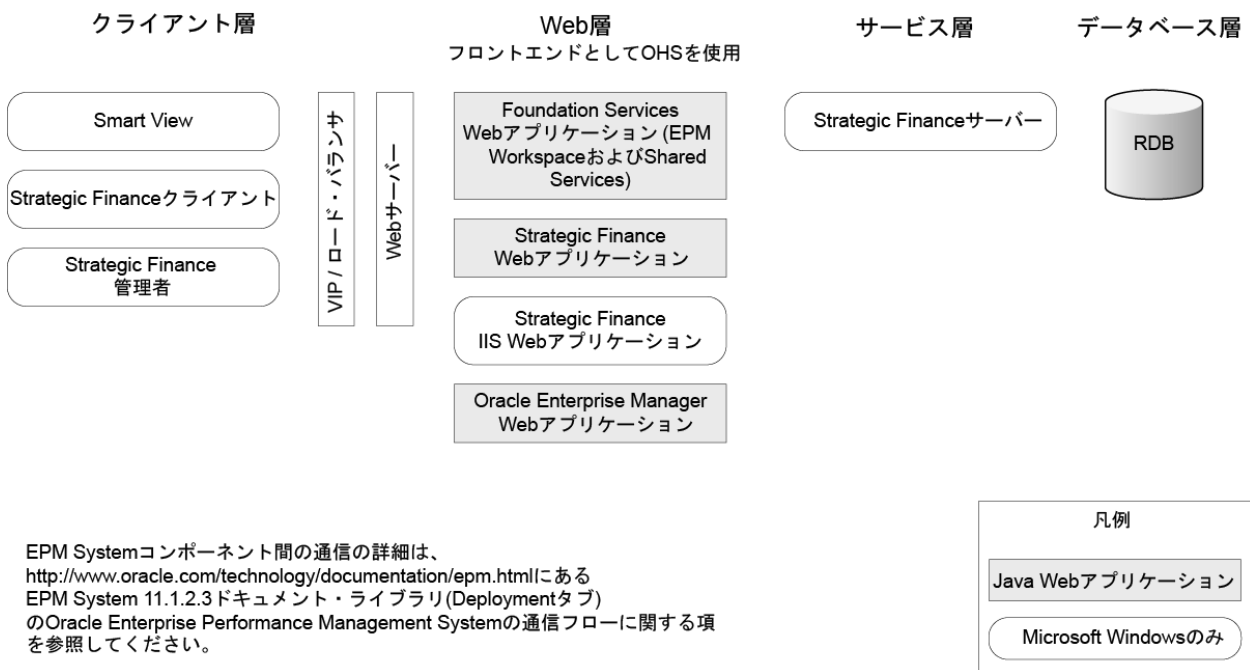
EPM Systemコンポーネント間の通信の詳細は、<http://www.oracle.com/technology/documentation/epm.html>にあるEPM System 11.1.2.3ドキュメント・ライブラリ(Deploymentタブ)のOracle Enterprise Performance Management Systemの通信フローに関する項を参照してください。

Reporting and Analysis コンポーネント



EPM Systemコンポーネント間の通信の詳細は、<http://www.oracle.com/technology/documentation/epm.html>にあるEPM System 11.1.2.3ドキュメント・ライブラリ(Deploymentタブ)のOracle Enterprise Performance Management Systemの通信フローに関する項を参照してください。

Strategic Finance コンポーネント



EPM Systemコンポーネント間の通信の詳細は、<http://www.oracle.com/technology/documentation/epm.html>にあるEPM System 11.1.2.3ドキュメント・ライブラリ(Deploymentタブ)のOracle Enterprise Performance Management Systemの通信フローに関する項を参照してください。

テストおよび本番用スタンドアロン Strategic Finance の配置要件

Oracle Hyperion Strategic Finance のスタンドアロン・バージョンは、次に記載する 1 つのサーバー配置の他の EPM System 製品から独立して配置できます。次の仕様は、50 アクティブ・ユーザーをサポートします。

表 3 Strategic Finance 配置仕様

マシン	製品	プロセッサ/メモリー
サーバー 1	<ul style="list-style-type: none">● Shared Services Java Web アプリケーション● Strategic Finance Web アプリケーション● Strategic Finance サーバー● Oracle HTTP Server	4 コア 2CPU - Windows 2008 R2 の場合、16GB

3

環境の準備

この章の内容

サーバーの準備	33
ユーザー・アカウントの準備	35
ディスク・スペースと RAM.....	36
データベースの準備	39
Java Web アプリケーション・サーバーの準備	50
Web サーバーの準備	51
Web ブラウザの準備	54
高可用性およびロード・バランシングのサポート・マトリックス.....	56

サーバーの準備

Windows Update の適用

配置内の各サーバーに対し、インストールおよび構成する前に、Windows Update を適用して再起動します。

ポートの競合の解決

EPM System 製品のデフォルト・ポート番号に関する情報(ポートを構成可能な場所を含む)は、[付録 A 「ポート」](#) を参照してください。

ユーザー・アクセス制御の無効化

Windows 2008 環境で、配置内の各サーバーのユーザー・アクセス制御(UAC)を無効化します。これはコントロールパネルの「ユーザー アカウント」で、「ユーザー アカウント制御設定の変更」をクリックし、スライドバーを「通知しない」までドラッグして行います。

EPM System サーバー・コンポーネントを正しく機能させるには、UAC を無効のままにする必要があります。UAC は、エンドユーザーのクライアント・デスクトップで有効化できます。

DCOM 既定の認証レベルの設定(Windows 2008)

.NET Framework 4.0 を必要とする製品をホストするマシンで、DCOM 既定の認証レベルを「接続」に設定する必要があります(これはデフォルト値です)。

▶ DCOM の認証レベルを「接続」に設定するには:

- 1 「コントロールパネル」で、「管理ツール」、「コンポーネント サービス」の順に選択します。
- 2 「コンポーネント サービス」、「コンピュータ」、「マイ コンピュータ」の順に移動します。
- 3 「マイ コンピュータ」を右クリックして、「プロパティ」を選択します。
- 4 「既定のプロパティ」タブを選択します。
- 5 「既定の認証レベル」で、「接続」を選択します。

注： 以前の Windows バージョンの場合、値を「なし」に設定します。

クロックの同期

各サーバーのクロックは、1 秒以内の誤差で同期する必要があります。これを行うには、各サーバーを同じネットワーク・タイム・サーバーに指定します。詳細は、オペレーティング・システム・ドキュメントを参照してください。

ホスト名の解決

サーバー内および配置内の他のサーバーからアクセスする場合、各サーバーの正規ホスト名を同じにする必要があります。各サーバーのローカル・ホスト・ファイルを作成して、ホスト名の問題を解決できます。

EPM System は、ホスト名を解決する Java の正規ホスト名解決を使用します。Java で解決されるホスト名を検証するため、EPM System はユーティリティ (epmsys_hostname.bat|sh)を提供します。ユーティリティのアーカイブ (epmsys_hostname.zip)は、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System Installer のアセンブリを解凍するディレクトリで使用可能です。

アンチウイルス・ソフトウェアの無効化

ユーザーがサーバー上のリソースにアクセスするたびに、アンチウイルス・ソフトウェアがオブジェクトを開きスキャンを試みると、アンチウイルス・ソフトウェアにより EPM System 製品でパフォーマンス上の問題が発生する可能性があります。これらの問題を防ぐには、EPM Oracle ホーム・ディレクトリを自動アンチウイルス・スキャンから除外し、このディレクトリをスケジュールした時刻にのみスキャンします。

共有ファイル・システム

高可用性のために構成している場合、次の要素に対して、配置内のすべてのサーバーからアクセス可能な UNC 構文を使用して共有ファイル・システムを設定する必要があります:

- Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理アーティファクト
- Oracle Hyperion Reporting and Analysis リポジトリ・データ
- Essbase サーバー(UNIX)のアプリケーションの場所(ARBORPATH)
- Oracle Hyperion Performance Scorecard 添付ファイル

オプションで、次の場合にも共有ファイル・システムを使用できます:

- Oracle Software Delivery Cloud からダウンロードされたインストール・ファイル
- 分散環境での構成を簡素化するための Oracle HTTP Server 構成ファイル
- Strategic Finance データ
- FDMEE アプリケーション・データ
- Oracle Essbase Studio のサンプルおよび顧客データ・ソースのテキスト・ファイル

ユーザー・アカウントの準備

Windows:

- インストールおよび構成には管理者ユーザーを使用しないでください。EPM System インストーラおよび Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System コンフィグレータを管理者権限を持つユーザーとして実行します。管理者および同じユーザーとして EPM System のすべての製品をインストールし、構成します。
- 製品で要求される場合は、ローカル・ポリシーを割り当てます。Windows の場合、通常、ユーザー ID には「OS の一部としての動作」、「走査チェックのバイパス」、「バッチ・ジョブとしてのログオン」、および「サービスとしてログオン」が必要です。
- Windows 2008 環境でインストールする前に、必ずユーザーアカウント制御(UAC)を無効にしてください。33 ページの「ユーザー・アクセス制御の無効化」を参照してください。
- アップグレード時、メンテナンス・リリースの適用時、またはこのサーバーの適用時には、前のリリースのインストールおよび構成に使用したのと同じユーザー・アカウントを使用します。

UNIX

- (root ユーザーでない)ユーザー・アカウントを準備します。すべての EPM System 製品を同じユーザーとしてインストールおよび構成します。UNIX マシンでは、すべての Oracle 製品について、インストールを行うユーザーは同じ

グループに属している必要があります。このグループには、中央インベントリ(oraInventory)に対する書込み権限が必要です。

- 他の Oracle 製品をすでにインストール済の場合、EPM System 製品をインストールするユーザーは他の Oracle 製品をインストールしたユーザーと同じグループに属している必要があります。たとえば、両方のユーザーが oinstall に属している必要があります。EPM System 製品をアップグレードする場合は、前のリリースのコンポーネントをインストールするために複数のユーザーを使用した場合でもこの要件に従ってください。

インストールと構成に使用されるアカウントのパスワードは次のガイドラインに準拠する必要があります:

- 少なくとも 1 つの大文字が含まれている
- 少なくとも 1 つの数字が含まれている
- 8 文字以上
- 特殊文字が含まれていない

ディスク・スペースと RAM

この項では、EPM System 製品のクライアントおよびサーバーのディスク・スペースと RAM の要件について説明します。

クライアントのディスク・スペースおよび RAM

ディスク・スペースおよび RAM の要件は概算です。インストール・プログラムが、製品のインストールの選択内容に基づいて、必要なディスク・スペースの 2 倍の大きさを確認します。

すべてのクライアントに推奨される RAM の要件は 1GB です。

注: Web ブラウザ・クライアントには、Web ブラウザのディスク・スペース要件を超える要件はありません。

製品ファミリ	コンポーネント	ディスク・スペース(最小) ¹	注意
EPM System インストーラ	EPM System インストーラとすべての EPM System 製品のアセンブリ	16GB	インストール後に、インストール・ファイルとアセンブリを除去できます。
Foundation Services	共通クライアント・コンポーネント	400MB	
	Oracle Hyperion Smart View for Office for Office	100MB	

製品ファミリー	コンポーネント	ディスク・スペース(最小) ¹	注意
	Oracle Hyperion EPM Architect	20MB	ファイル・ジェネレータおよびバッチ・クライアントのコンポーネントのみ
Essbase	Essbase ランタイム・クライアント	150MB	
	Oracle Essbase Administration Services コンソール	300MB	
	Oracle Essbase Integration Services コンソール	90MB	
	Essbase Studio コンソール	80MB	
Reporting and Analysis	Oracle Hyperion Financial Reporting Studio	400MB	
	Oracle Hyperion Interactive Reporting Studio	700MB	
	Oracle Hyperion Dashboard Development Services	190MB	
	Oracle Hyperion SQR Production Reporting Studio	90MB	
	Oracle Hyperion SQR Production Reporting Activator	30MB	
	Oracle Hyperion SQR Production Reporting リモート	10MB	
	Production Reporting ビューア	40MB	
	Oracle Hyperion Web Analysis Studio	40MB	
Financial Performance Management アプリケーション	オフライン Oracle Hyperion Planning	280MB	
	Financial Management クライアント	100MB	
	Strategic Finance クライアント	700MB	
	Oracle Hyperion Disclosure Management	300MB	
Oracle データ管理	Oracle Hyperion Financial Data Quality Management ワークベンチ	200MB	

¹ ディスク・スペースには、Foundation Services と併せてマシンにインストールされる共通クライアント・コンポーネントは含まれません。

サーバーのディスク・スペースおよび RAM

ディスク・スペースと RAM の要件は概略で、マシンによる追加の要件は含まれません。インストール・プログラムが、製品のインストールの選択内容に基づいて、必要なディスク・スペースの2倍の大きさを確認します。ディスク・スペースの推定量には、ドキュメント・ヘルプ・ファイル(ある場合)と EPM System のコンポーネントが含まれます。

コンポーネント	ディスク・スペース(最小)	RAM (最小)
WebLogic Server (WebLogic、JDK、utils、JRockit および Modules を含む)	1.4GB	500MB
Oracle HTTP Server(オプションのコンポーネント)	1.2GB	1GB
共通 Oracle ライブラリ	900MB	NA
Shared Services	800MB ¹	1.5GB
Performance Management Architect	125MB	次元サーバー用に 1GB Web 層とデータ・シンクロナイザにそれぞれ 512MB
Oracle Hyperion Calculation Manager	45MB	256MB
Essbase サーバー	2GB	1GB
アプリケーション・プログラミング・インタフェース	40MB	256MB
Administration Services	1GB ²	32MB に Administration Services の同時ユーザー数を乗算する たとえば、32MB * 10 ユーザー = 320MB
Integration Services	340MB	256MB
Oracle Hyperion Provider Services	680MB	340MB
Essbase Studio サーバー	120MB	256MB
Oracle Hyperion Reporting and Analysis Framework	2GB サービス用: 400MB ファイルのインポート用: 2GB	1GB サービス用: 1GB
Oracle Hyperion Financial Reporting	400MB	1GB
Oracle Hyperion Interactive Reporting	1GB	1GB
Production Reporting	400MB	256MB
Oracle Hyperion Web Analysis	2GB	1GB
Financial Management サーバー	64GB (10GB 使用可能)	4GB
Financial Management のデータベース・サーバー	24GB	4GB
Financial Close Management ³	8GB	4GB
Planning	8GB (10GB 使用可能)	2GB

コンポーネント	ディスク・スペース(最小)	RAM (最小)
Performance Scorecard	4GB 推奨	1GB ⁴
Strategic Finance サーバー	700MB ⁵	2GB
Oracle Hyperion Profitability and Cost Management	8GB	2GB
Disclosure Management	8GB	4GB
FDM データベース・サーバー	<ul style="list-style-type: none"> FDM アプリケーションのサイズに依存 プロセス展開のための複数の HDD 	同時ユーザー数 75 につき 1 GB (2 GB 以上)
FDM のフォルダ構造	FDM アプリケーションのサイズに依存	NA
FDM アプリケーション・サーバー	400MB	同時ユーザー数 75 につき 2GB
FDM Web サーバー	400MB	2GB
FMEE	300MB	2GB
Oracle Data Relationship Management データベース・サーバー	15GB	2GB
Data Relationship Management アプリケーション・サーバー	500MB	2GB

¹ この数値は、Shared Services の基本インストール用です。ライフサイクル管理機能を使用する場合は、アプリケーション・アーチファクトがエクスポートされて、Shared Services ファイル・システムに保管されるので、ディスク・スペースをかなり増やすことをお勧めします。

² データのロードやアウトラインの編集集中に Administration Services にコピーされるデータ・ファイルやアウトライン・ファイルのためのディスク・スペースが十分あることを確認してください。

³ Oracle SOA Suite の要件は含まれていません。

⁴ 1GB には、Performance Scorecard と Alerter サーバーが含まれます。

⁵ エンティティとそのバックアップ・アーカイブや管理ファイルと取引ファイル、連結レポートなどのユーザー・バックグラウンド・タスク・ログのための十分なストレージが必要です。

注： データ・ストレージおよびバイナリ・インストールの場合、Essbase ではディスク・アレイ・デバイスの使用がサポートされます。

データベースの準備

ほとんどの EPM System 製品は、インストールして構成する前に、サポートされている RDBMS(Oracle Database、Microsoft SQL の Server、または IBM DB2)を使用してデータベースを作成します。

EPM System では、サポートされているすべてのデータベースの 64 ビット・バージョンのみでなく、32 ビット・バージョンもサポートされていますが、データベースのバージョンはオペレーティング・システムと一致している必要があります。たとえば、64 ビットのデータベース・バージョンを使用できるのは、64 ビットのオペレーティング・システムのみです。

一般に、データベースは EPM System の配置と同じデータ・センター内にある必要があります。EPM System コンフィグレータで構成する際はタイムアウトの問題を防ぐために、待機時間の発生するリモートの場所でデータベースを探すことはできません。

簡単に配置するために、(次の場合を除いて)すべての製品に対して1つのデータベース・リポジトリを使用します。場合によっては、製品ごとに個別のデータベースを構成する必要があることがあります。パフォーマンス、シングル・アプリケーションまたは製品の場合のロールバック手順、および障害回復プランについて検討してください。

次の製品と製品コンポーネントには、一意のデータベースが必要です:

- Performance Management Architect インタフェース・データ・ソース
- Financial Management の拡張分析および Strategic Finance の拡張分析
- Planning - 各 Planning アプリケーションには、固有のリポジトリが必要です。
- Performance Scorecard
- Data Relationship Management。『Oracle Hyperion Data Relationship Management Installation Guide』を参照してください。

アップグレードについての注意

以前のリリースの EPM System 製品からアップグレードする場合、データベースの複製または再利用に関する詳細は、[第 11 章「EPM System 製品のアップグレード」](#)を参照してください。

Oracle Database の使用方法

この項には、Oracle データベースのインストール、データベースの作成、必要な役割と権限、サイズのガイドラインおよび構成に関する情報が含まれています。

注： EPM System インストーラは、マシン上で必要な場合、Oracle Database クライアントを自動的にインストールします。

Oracle Database の作成の考慮事項

データベースは UTF-8 (Unicode Transformation Format)エンコード方式(文字セット)を使用して作成する**必要があります**。Oracle では、UTF-8 エンコード方式の次の文字セットがサポートされます。

- AL32UTF8 (ASCII プラットフォーム用 UTF-8 エンコード)
- UTF8 (Oracle 用下位互換エンコード)
- UTFE (EBCDIC プラットフォーム用 UTF-8 エンコード)

Oracle Database の権限

データベース・スキーマの所有者に、次の権限を付与する必要があります:

- CREATE ANY SYNONYM
- CREATE CLUSTER
- CREATE INDEXTYPE
- CREATE PROCEDURE
- CREATE SEQUENCE
- CREATE SESSION
- CREATE TABLE
- CREATE TRIGGER
- CREATE TYPE
- CREATE VIEW
- DROP ANY SYNONYM
- UNLIMITED TABLESPACE

Oracle Database のサイズのガイドライン

自動拡張を有効にしてテーブルスペースを設定することをお勧めします。

次の表に、Oracle Database のサイズのガイドラインを示します。

製品	サイズのガイドライン
Shared Services と EPM Workspace	100MB から開始し、ライフサイクル管理による移行の数および監査レコードの数が増加するに従って増やします。
Performance Management Architect	250MB 以上から開始することをお勧めします。
Administration Services	必要なスペースは、作成されるメタデータに依存します。32MB 以上から開始することをお勧めします。
Essbase Studio	必要なスペースは、作成されるメタデータに依存します。32MB 以上から開始することをお勧めします。
Reporting and Analysis	必要なスペースは、リポジトリに保管する予定のオブジェクトの合計サイズに依存します。データ・ファイルまたはテーブルスペースを増やすことなく Reporting and Analysis リポジトリを拡張するスペースを確保できる 250MB 以上から開始することをお勧めします。EPM System コンフィグレータによる構成では、60MB の共有プールが使用されます。
Planning および Calculation Manager	<ul style="list-style-type: none"> ● 合計 5,000 以下のメンバーを持つアプリケーションでは 100MB ● 合計 15,000 以下のメンバーを持つアプリケーションでは 200MB <p>注： アプリケーションのサイズにあわせて、システム・テーブル・データベースのサイズを調整できます。</p>
Financial Management および Calculation Manager	<ul style="list-style-type: none"> ● 合計 5,000 以下のメンバーを持つアプリケーションでは 100MB ● 合計 15,000 以下のメンバーを持つアプリケーションでは 200MB <p>注： アプリケーションのサイズにあわせて、システム・テーブル・データベースのサイズを調整できます。</p>

製品	サイズのガイドライン
Performance Scorecard	500MB
Profitability and Cost Management	250MB 以上から開始することをお薦めします。
FDM	Oracle Hyperion Financial Data Quality Management DBA Guide を参照してください。

Oracle Database 構成の考慮事項

テーブルスペースの考慮事項

次の表に、Oracle Database のテーブルスペースのガイドラインを示します。

製品	テーブルスペースの考慮事項
全般 - すべての製品	<ul style="list-style-type: none"> ● テーブルスペースの全体像を考慮し、EPM System 製品が作成するテーブルを分散するために、1 つ以上のテーブルスペースを割り当てます。 ● テーブルスペースは他のアプリケーションと共有できます。 ● インデックス専用のテーブルスペースを作成してパフォーマンスを向上します。これには、CREATE TABLESPACE システム権限が必要です。 ● テーブルスペースを作成する場合は、パフォーマンスを向上させるために、SEGMENT SPACE MANAGEMENT パラメータを AUTO に設定してください。
Reporting and Analysis	テーブルスペースを Reporting and Analysis 専用にします。このユーザーのデフォルト・テーブルスペースおよび一時テーブルスペースとして使用するテーブルスペースを指定します。SYSTEM テーブルスペースは使用しないでください。
Financial Management	一時テーブルスペースを 1GB 以上に設定します。
FDM	Oracle Hyperion Financial Data Quality Management DBA Guide を参照してください。
Data Relationship Management	<ul style="list-style-type: none"> ● 初期テーブルスペース・サイズを 1GB に設定します ● 500MB に拡張します ● 「自動拡張」を有効にします <p>『Oracle Hyperion Data Relationship Management Installation Guide』を参照してください</p>

その他のパラメータ

次の表に、Oracle Database のその他のパラメータを示します。

製品	その他のパラメータ
一般/全製品	<p>次のように ALTER SYSTEM SET を設定します:</p> <pre>ALTER SYSTEM SET processes=1000 SCOPE=SPFILE;</pre>
Financial Management	Oracle の OPEN_CURSORS を 5000 に設定します。

製品	その他のパラメータ
Performance Scorecard	Oracle の OPEN_CURSORS を 1500 以上に設定します。
FDM	Oracle Hyperion Financial Data Quality Management DBA Guide を参照してください。

Oracle Database のオペレーティング・システムの構成

Reporting and Analysis に対して、必要な環境変数を設定します:

- (UNIX/Linux)
 - ORACLE_HOME
 - PATH
 - (Solaris/Linux)LD_LIBRARY_PATH
 - (AIX)LIBPATH
 - (HP)SHLIB_PATH

Financial Management での文キャッシングの有効化

Financial Management に Oracle Database Client 10.2.x または 11.1.x を使用する場合は、すべての Financial Management アプリケーション・サーバーで Oracle OLE DB の StmtCacheSize レジストリ設定を 10 にする必要があります。これは、Oracle Provider for OLE DB のメモリの問題によるものです。

レジストリ設定のパスは次のとおりです:

```
Hkey_Local_Machine\Software\Oracle\Key_Homename\Oledb
```

11.2.x の Oracle Database Client の場合は変更しないでください。

▶ 高いメモリー使用率を解決するには:

1 文キャッシングを有効にします。

構成値はゼロにできません。推奨される値は 1 から 10 です。

2 次のレジストリ値を編集します:

```
Hkey_Local_Machine\Software\Oracle\Key_Homename\Oledb Value Name:
StmtCacheSize Value (decimal): 1
```

Key_Homename は該当する Oracle ホームを意味します

3 HFM アプリケーション・プロセスを停止して再起動します。

また、64 ビットのオペレーティング・システムで System 11 と 10g データベースを一緒に使用する場合は、すべての Financial Management サーバーの Oracle OLE プロバイダが少なくとも 10.2.0.4.21 以上であることが必要です。32 ビットと 10g の組合せの場合、OLE プロバイダは、少なくともデータベース・サーバーと同じバージョンであることが必要です。32 ビットまたは 64 ビットを実行していて、11.1.0.6 か 11.1.0.7 の OLE プロバイダを使用する場合は、Oracle Database Client 11.1.0.7.33 以上にアップグレードする必要があります。

Microsoft SQL Server データベースの使用方法

この項には、SQL Server データベースの作成、必要な役割と権限およびサイズのガイドラインに関する情報が含まれています。

Microsoft SQL Server のデータベース作成要件

リポジトリとして使用するために Microsoft SQL Server データベースを作成する場合は、必ず次のオプションを設定します：

- READ_COMMITTED_SNAPSHOT = ON を設定します。
- ALLOW_SNAPSHOT_ISOLATION = ON を設定します。
- データベースのセキュリティ・プロパティを設定する際に、SQL Server と Windows の認証オプションを選択します。
- すべての製品で、SQL Server データベースのラテン語照合がサポートされています。大文字と小文字を区別しないデータベースを作成して、SQL_Latin1_General_CP1_CI_AS ステートメントを使用します。

Microsoft SQL Server の役割と権限

データベース・ユーザーには、DB_OWNER 権限と BULK_INSERT を許可するデータベースの所有権を割り当てる必要があります。

注： FDM では、MSSQL サーバーで Windows サービスを実行する Windows アカウントに FDM の Data フォルダへの読取りアクセス権が必要です。

Microsoft SQL Server のサイズのガイドライン

次の表に、Microsoft SQL Server のサイズのガイドラインを示します。

製品	サイズのガイドライン
Shared Services	100MB から開始し、ライフサイクル管理による移行の数および監査レコードの数が増加するに従って増やします。
EPM Workspace	必要なスペースは、リポジトリに保管する予定のオブジェクトの合計サイズに依存します。データ・ファイルまたはテーブルスペースを増やすことなく EPM Workspace リポジトリを拡張するスペースを確保できる 250MB 以上から開始することをお勧めします。EPM System コンフィグレータによる構成では、60MB の共有プールが使用されます。
Performance Management Architect	250MB 以上から開始することをお勧めします。
Administration Services	必要なスペースは、作成されるメタデータに依存します。32MB 以上から開始することをお勧めします。
Essbase Studio	必要なスペースは、作成されるメタデータに依存します。32MB 以上から開始することをお勧めします。

製品	サイズのガイドライン
Planning および Calculation Manager	<ul style="list-style-type: none"> ● 合計 5,000 以下のメンバーを持つアプリケーションでは 100MB ● 合計 15,000 以下のメンバーを持つアプリケーションでは 200MB <p>注： アプリケーションのサイズにあわせて、システム・テーブル・データベースのサイズを調整できます。</p>
Financial Management および Calculation Manager	<ul style="list-style-type: none"> ● 合計 5,000 以下のメンバーを持つアプリケーションでは 100MB ● 合計 15,000 以下のメンバーを持つアプリケーションでは 200MB <p>注： アプリケーションのサイズにあわせて、システム・テーブル・データベースのサイズを調整できます。</p>
Performance Scorecard	500MB
Profitability and Cost Management	250MB 以上から開始することをお勧めします。
Data Relationship Management	<ul style="list-style-type: none"> ● 初期ファイル・サイズを 1GB に設定します。 ● 「自動拡張」を有効にし、10%に設定します。
FDM	Oracle Hyperion Financial Data Quality Management DBA Guide を参照してください。

IBM DB2 データベースの使用方法

この項には、IBM DB2 データベースのインストール、データベースの作成、必要な役割と権限、サイズのガイドラインおよび構成に関する情報が含まれています。

IBM DB2 のインストール情報

IBM DB2 のインストール時、次のことを考慮します：

- IBM DB2 をインストールする場合は、OLAP スタート・キット・オプションを選択解除します。
- Performance Management Architect では、DB2 9 ランタイム・クライアントと DB2 .NET Data Provider をインストールする次元サーバーのマシン以外のコンピュータに DB2 データベースをインストールする必要があります。

注： DB2 9 ランタイム・クライアントが Performance Management Architect コンピュータにインストールされている場合、Global Assembly Cache にエントリが存在することを確認します。

- Financial Management に IBM DB2 データベースを使用する場合は、DB2 ランタイム・クライアントと DB2 .NET Data Provider が、Financial Management アプリケーション・サーバーと同じマシンにインストールされていることが必要です。
- Reporting and Analysis では、サービスをインストールするコンピュータに IBM DB2 Client Application Enabler をインストールする必要があります。Core Service と Job Factory Service に対しては、IBM DB2 RDBMS を使用し、Reporting and

Analysis サービスが別のマシンにある場合、Client Application Enabler を使用して、Reporting and Analysis データベースへのクライアント接続を作成します。

IBM DB2 データベースの作成の考慮事項

非 ASCII 文字セットとの最良の互換性を確保するために、IBM DB2 データベースは UTF-8 (Unicode Transformation Format)エンコード方式(文字セット)を使用して作成する必要があります。多言語サポート(複数の文字セットのサポート)を必要とする場合は、UTF-8 を使用する必要があります。

クライアント構成アシスタントを使用して、EPM System 製品がデータベースに接続するために使用できるデータベース別名を設定します。必ず「ODBC 用にこのデータベースをシステム・データ・ソースとして登録」を選択してください。

IBM DB2 の役割と権限

データベース・ユーザーには、次の権限を割り当てる必要があります：

- CREATETAB
- BINDADD
- CONNECT

IBM DB2 のサイズのガイドライン

次の表に、IBM DB2 のサイズのガイドラインを示します。

製品	サイズのガイドライン
Shared Services	100MB から開始し、ライフサイクル管理による移行の数および監査レコードの数が増加するに従って増やします。
EPM Workspace	必要なスペースは、リポジトリに保管する予定のオブジェクトの合計サイズに依存します。データ・ファイルまたはテーブルスペースを増やすことなく EPM Workspace リポジトリを拡張するスペースを確保できる 250MB 以上から開始することをお勧めします。EPM System コンフィグレータによる構成では、60MB の共有プールが使用されます。
Performance Management Architect	250MB 以上から開始することをお勧めします。
Administration Services	必要なスペースは、作成されるメタデータに依存します。32MB 以上から開始することをお勧めします。
Essbase Studio	必要なスペースは、作成されるメタデータに依存します。32MB 以上から開始することをお勧めします。
Planning および Calculation Manager	<ul style="list-style-type: none">● 合計 5,000 以下のメンバーを持つアプリケーションでは 100MB● 合計 15,000 以下のメンバーを持つアプリケーションでは 200MB <p>注： アプリケーションのサイズにあわせて、システム・テーブル・データベースのサイズを調整できます。</p>

製品	サイズのガイドライン
Financial Management および Calculation Manager	<ul style="list-style-type: none"> ● 合計 5,000 以下のメンバーを持つアプリケーションでは 100MB ● 合計 15,000 以下のメンバーを持つアプリケーションでは 200MB <p>注： アプリケーションのサイズにあわせて、システム・テーブル・データベースのサイズを調整できます。</p>
Performance Scorecard	500MB

IBM DB2 データベース構成の考慮事項

次の表に、IBM DB2 データベース構成の考慮事項を示します。

製品	テーブルスペースの考慮事項
全般 - すべての製品	<p>テーブルスペースの最小要件:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● バッファ・プールとテーブルスペース(32KB のページ・サイズ) ● システムの一時バッファ・プールとシステムの一部テーブルスペース(32KB のページ・サイズ) <p>注： リポジトリを所有するデータベース・ユーザーのデフォルトのテーブルスペースをパーティションに分割しないでください。</p> <p>次のように設定を増やします:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● <code>bufferpool_name</code> バッファ・プールを 1000(デフォルト)から 32000(最大の監査テーブルとインデックスのおよそのサイズ) ● <code>IBMDEFAULTBP</code> バッファ・プールを 1000(デフォルト)から 100000 ● <code>tmp_bufferpool_name</code> バッファ・プールを 1000(デフォルト)から 8000(一時スペースのバッファ・プール) ● <code>DBHEAP</code> を 1200(デフォルト)から 33000 ● <code>SORTHEAP</code> を 256(デフォルト)から 2000 ● <code>LOGBFSIZ</code> を 16(デフォルト)から 128 ● ヒープ・サイズを増やします: <ul style="list-style-type: none"> ○ <code>DRDA_HEAP_SZ</code> パラメータ - 2048 以上 ○ <code>STMHEAP</code>、<code>APPLHEAPSZ</code> および <code>APPL_MEMORY</code> (以前の <code>APP_CTL_HEAP_SZ</code>)パラメータ - 8096
Shared Services および Essbase Studio	<ul style="list-style-type: none"> ● <code>PAGESIZE</code> を 32K に増やす ● <code>bufferpool32768</code> に増やす
Performance Management Architect	<ul style="list-style-type: none"> ● ヒープ・サイズを増やします: <ul style="list-style-type: none"> ○ <code>LOGFILSZ</code> を 4096 にする ○ <code>APPLHEAPSZ</code> を 8192 にする ○ <code>STMHEAP</code> を 10240 にする ● ユーザーにテーブルスペースとバッファプールを作成する権限があることを確認します。 ● ユーザーに一時テーブルスペースを使用する権限が付与されていることを確認します。

製品	テーブルスペースの考慮事項
Planning	<p>Planning を構成する前に、Planning テーブルをサポートするために、十分な大きさのテーブルスペース(少なくとも 32K のページ・サイズ)を使用してデータベースを構成する必要があります。</p> <p>次のサンプル SQL スクリプトによって、必要なバッファ・プールとテーブルスペースを作成します。必要に応じて名前およびディスクの場所を変更してください。デフォルトでは、テーブルスペースの名前は HSPSPACE8_1 で、C:\DB2DATA\HSPSPACE8_1 ディレクトリに作成されます。その他の設定もデフォルトになるため、管理者は環境に応じて設定を調整する必要があります。</p> <p>例:</p> <pre> CREATE BUFFERPOOL hsppool8_1 SIZE 250 PAGESIZE 32 K; CREATE REGULAR TABLESPACE hspspace8_1 PAGESIZE 32 K MANAGED BY SYSTEM USING ('c:\db2data\hspspace8_1') EXTENTSIZE 32 OVERHEAD 24.1 PREFETCHSIZE 8 TRANSFERRATE 0.9 BUFFERPOOL HSPPOOL8_1; </pre> <p>データベース管理者は、Planning リレーショナル・データベースにログオンするユーザーに、新しいテーブルスペースを使用する権限があることを確認する必要があります。</p>

Performance Scorecard に固有の IBM DB2 データベース構成の要件

Performance Scorecard を構成する前に、次の手順を完了する必要があります。

▶ IBM DB2 サーバーを準備するには:

- 1 データベース・ログ・サイズの値を 6500 に設定します。
- 2 データベースに特有の情報で、次のスクリプトを変更します:

```

SET HPSDB=<
hpsdatabase
>

```

```

SET ADMIN=<
adminusername
>

```

```

SET ADMINPWD=<
adminpassword

```



```
>

SET TBSFILE=<
table space file location
>

SET TMPFILE=<
temp file location
>

DB2 CONNECT TO %HPSDB% USER %ADMIN% USING %ADMINPWD%

DB2 UPDATE DATABASE CONFIGURATION FOR %HPSDB% USING APPLHEAPSZ 512

DB2 CREATE BUFFERPOOL HPS_BP SIZE 250 PAGESIZE 32 K

DB2 TERMINATE

DB2STOP

DB2START

DB2 CONNECT TO %HPSDB% USER %ADMIN% USING %ADMINPWD%

DB2 CREATE REGULAR TABLESPACE HPS_SPACE1 PAGESIZE 32 K MANAGED BY SYSTEM
USING ('%TBSFILE%') EXTENTSIZE 32 OVERHEAD 24.1 PREFETCHSIZE 32 TRANSFERRATE 0.9
BUFFERPOOL HPS_BP

DB2 COMMENT ON TABLESPACE HPS_SPACE1 IS 'HPS Table Space'

DB2 GRANT USE OF TABLESPACE HPS_SPACE1 TO PUBLIC

DB2 CREATE SYSTEM TEMPORARY TABLESPACE HPS_TEMP PAGESIZE 32 K MANAGED BY
SYSTEM USING ('%TMPFILE%') EXTENTSIZE 32 OVERHEAD 24.1 PREFETCHSIZE 32
TRANSFERRATE 0.9 BUFFERPOOL HPS_BP DB2 COMMENT ON TABLESPACE HPS_TEMP IS 'HPS
Temporary Table Space'

DB2 TERMINATE

DB2STOP

DB2
```

- 3 name.bat としてファイルを保存します。
- 4 コマンド・センターから、スクリプトを実行します。
- 5 Windows 2003 ユーザーの場合、次の手順を実行します:
 1. 「コントロールパネル」、「コンピュータの管理」、「ユーザーとグループ」の順に選択します。
 2. 「ユーザー・アカウント」ボックスの「詳細」をクリックします。
 3. 「DB2Admin」を選択し、右クリックして、「プロパティ」を選択します。
 4. 「プロパティ」ボックスで「メンバー」を選択します。
 5. 「ユーザー」を選択し、「削除」、「保存」の順にクリックします。

Java Web アプリケーション・サーバーの準備

多くの EPM System 製品には、Java Web アプリケーション・サーバーが必要です。Java Web アプリケーション・サーバーが必要な製品を特定するには、[第 2 章「EPM System のアーキテクチャ」](#)を参照してください。

WebLogic Server

- Oracle では、EPM System 製品とともに使用する WebLogic Server の制限付きの使用ライセンスを提供しています。通常、EPM System インストーラによって WebLogic Server がインストールされます。
- ただし、既存の WebLogic Server インストールがあるときに、EPM System インストーラによってインストールされる WebLogic Server のかわりにこのインストールを使用する場合は、WebLogic Server インストールのミドルウェア・ホームの場所に注意してください。インストール時に、EPM System 製品を同じミドルウェア・ホームにインストールする必要があります。インストールの場所で EPM System インストーラによって既存の WebLogic Server インストールが検出された場合、WebLogic Server はインストールされません。

分散環境での WebLogic Server の使用の詳細は、[85 ページの「分散環境での EPM System 製品のインストール」](#)を参照してください。

IBM WebSphere

- UNIX プラットフォームでは、配置する EPM System 製品のインストールおよび構成を行うユーザー・アカウントに WebSphere プロファイルの作成権限が必要です。非 root ユーザーとして WebSphere プロファイルを作成する権限を付与する詳細手順は、IBM InfoCenter を参照してください。
- IBM WebSphere 7.0.0.23 の補足コンポーネント CD からプラグインをインストールします。プラグインは Reporting and Analysis に必要です。
- WebSphere をインストールする場合、WebSphere Application Server Network Deployment の Web Services Gateway コンポーネントをインストールしないでく

ださい。Web Services Gateway コンポーネントでは SOAP 1.1 フォーマットのメッセージが求められますが、EPM System で生成されるメッセージは SOAP 1.0 フォーマットです。

Web サーバーの準備

Oracle HTTP Server

Foundation Services のインストール時に、Oracle HTTP Server サイレント・インストーラを使用して、Oracle HTTP Server をインストールできます。分散環境での構成をシンプル化するために、Oracle HTTP Server を共有ドライブの場所に構成することもできます。

注意 EPM System 製品をインストールする前に、Oracle HTTP Server のインストールの前提条件を満たしていることを確認し、Oracle HTTP Server インストールのドキュメントおよびリリース・ノートで詳細を確認してください。詳細は、[82 ページの「Web サーバー・インストールの前提条件」](#)を参照してください。

Microsoft Internet Information Services (IIS)

次の製品では、EPM System 製品を構成する前に、ASP.NET サポートを使用可能にした IIS をインストールしておく必要があります：

- Performance Management Architect サービス(次元サーバー)
- Financial Management
- Strategic Finance
- FDM
- Data Relationship Management

IIS に関する注意：

- .NET が検出されない場合、EPM System インストーラによってインストールされます。
- Windows 2008 で、必要なサーバーの役割は、EPM System コンフィグレータで提供されます。
- 構成時に IIS を Web サーバーとして選択した場合は、インターネット・インフォメーション・サービス・マネージャを使用してすべての不明な ISAPI 拡張を許可する必要があります。
- Windows 2003 Server の 64 ビット環境で Smart View および Financial Management を使用する場合、メモリーの消費に基いて IIS リサイクルを無効にする必要があります。

- Windows 2008 で IIS を必要とする製品を構成する場合、IIS 用の Windows サーバー役割がまだインストールされていなければ、EPM System コンフィグレッタによって自動的にインストールされます。Windows Server 2003 では、必要な IIS ファイルをインストールするために、インストール CD、または Windows Server 2003 ファイルのパスの指定を求められます。

IIS のインストールの確認

IIS のインストールを検証するには、IIS サービスが実行されていることを確認します:

- 「IIS Admin Service」
- 「World Wide Web Publishing Service」

IIS のサービスが表示されない場合は、IIS がインストールされていることを確認します。

既存の .NET 4.0 フレームワークの使用可能化(Windows 2003)

Performance Management Architect は、Dimension サーバーをインストールするマシンに .NET 4.0 Framework を必要とします。 .NET 4.0 Framework がマシンにインストールされていない場合、EPM System インストーラによって自動的にインストールされます。

Windows 2003 を使用し、.NET 4.0 がインストールされている場合、IIS で .NET 4.0 を登録して使用可能にする必要があります。

▶ Windows 2003 マシンで .NET 4.0 を使用可能にするには:

- 1 IIS マネージャを開きます。
- 2 左側のペインで、「Web サービス拡張」を選択します。
- 3 ASP.NET 4.0 が右ペインに表示されている場合、「ステータス」列を「許可」に設定して使用可能にします。
- 4 .NET 4.0 がインストールされ、ASP.NET 4.0 が右ペインに表示されていない場合、IIS で .NET 4.0 を登録します:
 1. コマンド・プロンプトで、C:\Windows\Microsoft.NET\Framework\v4.0.30319 ディレクトリに移動します。
 2. aspnet_regiis.exe -iru と入力します。
 3. 手順 1 から 3 を繰り返します。

32 ビット/64 ビット Microsoft IIS 6.0/7.0 のサポート

Microsoft IIS 6.0 は、64 ビットのオペレーティング・システム上で 32 ビットのアプリケーション・ランタイムまたは 64 ビットのアプリケーション・ランタイムをサポートするように構成できます。同時に両方をサポートするには構成できません。したがって、Microsoft IIS 6.0 とともに EPM System 製品をインストールし

て構成する場合は、一般に EPM System の Web 層のコンポーネントの 32 ビットのランタイムと 64 ビットのランタイムを個別のコンピュータにインストールします。

具体的には、Strategic Finance (32 ビット)を Financial Management (64 ビット)が配置されるコンピュータに配置できません。32 ビットのプラットフォームでは、EPM System のすべての製品が共存できます。

注： IIS 7 (Windows 2008 システムのデフォルト)では、32 ビット・コンポーネントと 64 ビット・コンポーネントを共存させることができます。ただし、FDM および Strategic Finance の場合は、IIS 7.0 の実行時に IIS 6.0 互換性モードをインストールする必要があります。

ローカライズされた環境での IIS の使用

ローカライズされた環境で、EPM System を IIS で正常に構成するには次の条件が必要になります：

IIS 7 の場合：

- IIS サイト名はローカライズされません。ローカライズされているかに関係なく、この名前はこのマシンでも "Default Web Site" という英語になります
- IIS には "DefaultAppPool" というアプリケーション・プールが必要です
- "DefaultAppPool" には ID = 1 が必要です
- デフォルト Web サイトの物理パスは次のようになります: %SystemDrive%\inetpub\wwwroot

IIS 6 の場合：

- IIS サイト名はローカライズされません。ローカライズされているかに関係なく、この名前はこのマシンでも "Default Web Site" という英語になります
- IIS には "DefaultAppPool" というアプリケーション・プールが必要です
- "DefaultAppPool" には ID = 1 が必要です
- この ID を C:\WINDOWS\system32\inetsrv\MetaBase.xml で検証します：

```
<IIISWebServer Location = "/LM/W3SVC/  
  1  
  "  
  AppPoolId="DefaultAppPool"  
  DefaultDoc="Default.htm,Default.asp,index.htm,iisstart.htm"  
  ServerBindings=":80:"  
  ServerComment="Default Web Site"  
  ServerSize="1"  
>  
</IIISWebServer>
```

もしくは、"Default Web Site"の ID が既知でそれが 1 ではない場合、次のスクリプトを使用して ID = 1 を割り当てられます。たとえば、ID が 1111 の場合、ID = 1 の割当てに次のスクリプトを使用できます:

```
CSCRIPT %SYSTEMDRIVE%\Inetpub\AdminScripts\adsutil.vbs STOP_SERVER W3SVC/1111
CSCRIPT %SYSTEMDRIVE%\Inetpub\AdminScripts\adsutil.vbs MOVE W3SVC/1111 W3SVC/1
CSCRIPT %SYSTEMDRIVE%\Inetpub\AdminScripts\adsutil.vbs START_SERVER W3SVC/1
```

- IIS サーバーの物理パスは次のようになります: c:\inetpub\wwwroot (ここで c: はシステム・ドライブであるか、Windows 2003 がインストールされているドライブを使用します)

Web ブラウザの準備

この項には、ブラウザに必要な設定と Reporting and Analysis 用の ActiveX の有効化に関する情報が含まれています。

ブラウザの設定

ブラウザのプリファレンスとオプションが有効なことを確認します:

- Internet Explorer および Firefox の場合:
 - JavaScript を使用可能にします。
 - Cookie を使用可能にします。優先設定では、コンピュータへの Cookie の保管が許可されます。最小限の要件では、セッションごとに Cookie が許可されます。
 - ポップアップ・ウィンドウを許可します。
- Firefox バージョン 17.x の場合、リモート XUL Manager をインストールします:
 1. Remote XUL Manager アドオン(<https://addons.mozilla.org/en-us/firefox/addon/remote-xul-manager/>)をインストールします。
 2. Firefox で「ツール」、「Web 開発」、「Remote XUL Manager」の順に選択します。
 3. 会社のドメイン名(mycompany.com など)をリストに追加し、「追加」をクリックします。
 4. Firefox を再起動します。
- Internet Explorer 7 の場合:
 1. 「ツール」、「インターネットオプション」の順に選択し、「セキュリティ」タブをクリックします。
 2. 「レベルのカスタマイズ」をクリックし、「その他」セクションを探します。

3. 「サーバーにファイルをアップロードするときにローカルディレクトリのパスを含める」の設定が「有効にする」に設定されていることを確認します。
- Internet Explorer 9 の場合:
 1. 「ツール」、「互換性表示設定」の順に選択します。
 2. EPM Workspace の URL が互換性表示に対して有効になっていないことを確認します。また、ポップアップ・ウィンドウの下部のすべての使用可能なオプションをオフにします。
 - Internet Explorer (Reporting and Analysis のみ)の場合、ActiveX を有効にします。[56 ページの「ActiveX を使用可能にする\(Reporting and Analysis\)」](#)を参照してください。
 - EPM Workspace の URL を信頼済みゾーンに追加します:
 1. 「ツール」、「インターネットオプション」の順に選択し、「セキュリティ」タブをクリックします。
 2. 「信頼済みサイト」を選択し、「サイト」をクリックします。
 3. EPM Workspace の URL をリストに追加します。
 - Internet Explorer の場合、セキュリティ設定をカスタマイズします。
 1. Internet Explorer で、「ツール」、「インターネットオプション」、「セキュリティ」タブの順に選択します。
 2. Oracle サーバーを含むゾーンを選択し、「レベルのカスタマイズ」ボタンをクリックします。
 3. 「その他」セクションで、「ドメイン間でのデータソースのアクセス」および「サイズや位置の制限なしにスクリプトでウィンドウを開くことを許可する」を有効にします。
 - ノルウェー語で Internet Explorer と EPM Workspace を併用している場合、「言語の優先順位」設定を次のように変更する必要があります:
 1. Internet Explorer で、「ツール」、「インターネットオプション」、「言語」ボタンの順にクリックします。
 2. 「言語の優先順位」ダイアログ・ボックスで、ノルウェー語の設定をそれぞれ選択し、「削除」をクリックします。
 3. 「追加」をクリックし、「no」というユーザー定義値を追加して「OK」をクリックします。
 4. 「言語」フィールドで新しい「ユーザー定義[no]」エントリを選択し、「上へ」をクリックして、このエントリをリストの先頭に移動します。
 5. 「OK」をクリックします。

これで、Internet Explorer を使用して EPM System 製品をノルウェー語で表示できるようになります。

注：「OK」をクリックすると、「言語の優先順位」ダイアログ・ボックス内のカスタム言語設定が、デフォルトの「ノルウェー語(Bokmal) [ne-NO]」設定から「ノルウェー語(Bokmal) [no]」に変わります。

ActiveX を使用可能にする(Reporting and Analysis)

EPM System の Java Web アプリケーションが正しく機能するように使用可能にするには、ActiveX テクノロジをサポートするように Internet Explorer を構成する必要があります。

EPM System 製品は、ActiveX コンポーネントをブラウザにダウンロードしません。かわりに、HTML、JavaScript、および XML がクライアント・ブラウザによって送信されます。

XML のコンポーネントを使用可能にするためのガイドライン:

- ブラウザのセキュリティの設定で、「ActiveX コントロールとプラグインの実行」を「使用可能」に設定して、ActiveX コントロールを使用可能にします。
- 「Project Reporting and Analysis」サイトを信頼済サイトとして追加し、信頼済サイトのカスタム・セキュリティ設定を変更して、ActiveX コントロールとプラグインを実行できるようにします。
- XML の処理に必要なコントロール(MS XML パーサーと XMLHttpRequest コントロール)を定義するグループ・ポリシーを提供して、これらの「管理者の許可済」コントロールをすべてのサイトまたは選択した信頼済サイトに対して使用可能にします。
- その他のすべての ActiveX コントロールおよびプラグインは使用不可のままです。グループ・ポリシーは、信頼済ゾーン内のサイトのコントロールを使用可能にして、ゾーン別に実装できます。
- Active X が使用可能なコントロールについては、「スクリプトを実行しても安全だとマークされている ActiveX コントロールのスクリプトの実行」の設定を使用可能にします。

高可用性およびロード・バランシングのサポート・マトリックス

この項の表では、EPM System コンポーネントでサポートされるクラスタリング方法のリストを製品グループ別に示し、高可用性およびロード・バランシングがサポートされるかどうかをコンポーネントごとに示します。これらの表には、ノートや詳細情報の参照先も示されています。環境のプランニングにこの表を役立ててください。

IBM WebSphere に配置される Java Web アプリケーションのクラスタリングの詳細は、WebSphere ドキュメントを参照してください。

EPM System 製品は次のように垂直のスケーリングをサポートします。

- Financial Management および Strategic Finance Java Web アプリケーションを除く Windows ベースの Java Web アプリケーション
- Essbase サーバー
- UNIX ベースのコンポーネント

次のコンポーネントは垂直のスケーリングをサポートしていません:

- Oracle HTTP Server
- すべての Financial Management コンポーネント
- Performance Management Architect 次元サーバー
- すべての Strategic Finance コンポーネント
- すべての FDM コンポーネント
- Integration Services コンポーネント

表 4 Foundation Services のクラスタリング

製品/コンポーネント	サポートされる方法	高可用性	ロード・バランシング	注意	参照
Foundation Services 管理対象サーバー(Shared Services および EPM Workspace Java Web アプリケーションを含む)	EPM System コンフィグレータを使用した WebLogic のクラスタリング	はい	はい	Shared Services が高可用性のために設定されている場合に、ライフサイクル管理を高可用性のために構成するには、共有ディスクを設定する必要があります。	<ul style="list-style-type: none"> ● 自動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の EPM System コンフィグレータを使用した Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項 ● 手動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の WebLogic 手動配置での Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項
Performance Management Architect Java Web アプリケーション	EPM System コンフィグレータを使用した WebLogic のクラスタリング	はい	はい	なし	<ul style="list-style-type: none"> ● 自動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の EPM System コンフィグレータを使用した Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項 ● 手動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の WebLogic 手動配置での Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項
Performance Management Architect データ・シンクロナイザ Java Web アプリケーション	EPM System コンフィグレータを使用した WebLogic のクラスタリング	はい	はい	なし	<ul style="list-style-type: none"> ● 自動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の EPM System コンフィグレータを使用した Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項 ● 手動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の WebLogic 手動配置での Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項

製品/コンポーネント	サポートされる方法	高可用性	ロード・バランシング	注意	参照
Calculation Manager Java Web アプリケーション	EPM System コンフィグレータを使用した WebLogic のクラスタリング	はい	はい	なし	<ul style="list-style-type: none"> ● 自動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の EPM System コンフィグレータを使用した Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項 ● 手動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の WebLogic 手動配置での Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項
Performance Management Architect 次元サーバーおよびその他のプロセス	Oracle Clusterware のフェイルオーバーのためのクラスタリング	はい	いいえ	なし	<ul style="list-style-type: none"> ● Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の Performance Management Architect 次元サーバーのクラスタリングおよびフェイルオーバーに関する項 ● Oracle Clusterware のドキュメント

表 5 Essbase のクラスタリング

製品/コンポーネント	サポートされる方法	高可用性	ロード・バランシング	注意	参照
Essbase サーバー	<ul style="list-style-type: none"> ● Microsoft Clustering Services を使用したアクティブ-パッシブ・クラスタリング(Windows) ● EPM System コンフィグレータを使用したアクティブ-パッシブ・クラスタリング (UNIX) ● Provider Services でのアクティブ-アクティブ・クラスタリング 	はい	Provider Services で構成されたアクティブ-アクティブ・クラスタはロード・バランシングをサポートします。	<ul style="list-style-type: none"> ● アクティブ-パッシブ・クラスタではライトバックによるフェイルオーバーがサポートされています。 ● アクティブ-アクティブ・クラスタは読み取り専用です。 <p>次の EPM System 製品では、Essbase アクティブ-パッシブ・フェイルオーバーをサポートします:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● FMEE ● Planning ● Administration Services ● Essbase Studio ● Financial Reporting Studio ● Web Analysis <p>次の EPM System 製品では、Essbase アクティブ-パッシブ・フェイルオーバーをサポートしません:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Integration Services ● Interactive Reporting ● FDM ● Oracle Essbase Analytics Link for Hyperion Financial Management 	<ul style="list-style-type: none"> ● アクティブ-パッシブ・クラスタリング(Windows): Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide のアクティブ-パッシブ Essbase クラスタ(Windows)の構成に関する項 ● アクティブ-パッシブ・クラスタリング(UNIX): Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide のアクティブ-パッシブ Essbase クラスタ(UNIX)の構成に関する項 ● アクティブ-アクティブ・クラスタリング: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide のアクティブ-アクティブ Essbase クラスタの構成に関する項

製品/コンポーネント	サポートされる方法	高可用性	ロード・バランシング	注意	参照
Administration Services Java Web アプリケーション	EPM System コンフィグレータを使用した WebLogic のクラスタリング	はい	はい	セッション・フェイルオーバーはサポートされていません。	<ul style="list-style-type: none"> ● 自動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の EPM System コンフィグレータを使用した Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項 ● 手動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の WebLogic 手動配置での Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項
Provider Services Java Web アプリケーション	EPM System コンフィグレータを使用した WebLogic のクラスタリング	はい	はい	なし	<ul style="list-style-type: none"> ● 自動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の EPM System コンフィグレータを使用した Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項 ● 手動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の WebLogic 手動配置での Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項
Integration Services	なし	いいえ	いいえ	なし	なし
Essbase Studio	なし	いいえ	いいえ	なし	なし

表 6 Reporting and Analysis のクラスタリング

製品/コンポーネント	サポートされる方法	高可用性	ロード・バランシング	注意	参照
Reporting and Analysis Framework Java Web アプリケーション	EPM System コンフィグレータを使用した WebLogic のクラスタリング	はい	はい	なし	<ul style="list-style-type: none"> ● 自動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の EPM System コンフィグレータを使用した Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項 ● 手動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の WebLogic 手動配置での Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項
Financial Reporting Java Web アプリケーション (Financial Reporting 印刷サーバーを含む)	EPM System コンフィグレータを使用した WebLogic のクラスタリング	はい	はい	なし	<ul style="list-style-type: none"> ● 自動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の EPM System コンフィグレータを使用した Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項 ● 手動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の WebLogic 手動配置での Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項
Web Analysis Java Web アプリケーション	EPM System コンフィグレータを使用した WebLogic のクラスタリング	はい	はい	なし	<ul style="list-style-type: none"> ● 自動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の EPM System コンフィグレータを使用した Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項 ● 手動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の WebLogic 手動配置での Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項
Reporting and Analysis Framework サービスおよび共通ライブラリ	EPM Workspace を使用した仮想クラスタリング	はい	はい	なし	Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の Reporting and Analysis のクラスタリングに関する項
Interactive Reporting サービス	EPM Workspace を使用した仮想クラスタリング	はい	はい	なし	Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の Reporting and Analysis のクラスタリングに関する項

表 7 Financial Performance Management アプリケーションのクラスタリング

製品/コンポーネント	サポートされる方法	高可用性	ロード・バランシング	注意	参照
Planning Java Web アプリケーション	EPM System コンフィグレータを使用した WebLogic のクラスタリング	はい	はい	なし	<ul style="list-style-type: none"> 自動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の EPM System コンフィグレータを使用した Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項 手動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の WebLogic 手動配置での Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項
Planning RMI レジストリ	なし	いいえ	いいえ	なし	なし
Financial Management サーバー	EPM System コンフィグレータでのクラスタリング	はい	はい	なし	Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の Financial Management サーバーのクラスタリングに関する項
Financial Management Java Web アプリケーション(Web サービスおよび ADF Web アプリケーションを含む)	EPM System コンフィグレータを使用した WebLogic のクラスタリング	はい	はい	なし	<ul style="list-style-type: none"> 自動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の EPM System コンフィグレータを使用した Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項 手動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の WebLogic 手動配置での Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項
Financial Management Web サービスの IIS Web アプリケーション (IIS)	Web サーバーまたはサードパーティ製のロード・バランサを使用したクラスタリング	はい	はい	なし	Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の IIS での Financial Management、Strategic Finance または FDM IISWeb アプリケーションのロード・バランシングに関する項
Financial Management IIS Web アプリケーション (IIS)	Web サーバーまたはサードパーティ製のロード・バランサを使用したクラスタリング	はい	はい	なし	Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の IIS での Financial Management、Strategic Finance または FDM IISWeb アプリケーションのロード・バランシングに関する項
Financial Management ライフサイクル管理 Web サービスの IIS Web アプリケーション (IIS)	Web サーバーまたはサードパーティ製のロード・バランサを使用したクラスタリング	はい	はい	なし	Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の IIS での Financial Management、Strategic Finance または FDM IISWeb アプリケーションのロード・バランシングに関する項

製品/コンポーネント	サポートされる方法	高可用性	ロード・バランシング	注意	参照
Financial Management Smart View IIS Web アプリケーション(IIS)	Web サーバーまたはサードパーティ製のロード・バランサを使用したクラスタリング	はい	はい	なし	Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の IIS での Financial Management、Strategic Finance または FDM IISWeb アプリケーションのロード・バランシングに関する項
Performance Scorecard Java Web アプリケーション	EPM System コンフィグレータを使用した WebLogic のクラスタリング	はい	はい	なし	<ul style="list-style-type: none"> 自動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の EPM System コンフィグレータを使用した Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項 手動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の WebLogic 手動配置での Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項
Profitability and Cost Management Java Web アプリケーション	EPM System コンフィグレータを使用した WebLogic のクラスタリング	はい	はい	なし	<ul style="list-style-type: none"> 自動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の EPM System コンフィグレータを使用した Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項 手動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の WebLogic 手動配置での Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項
Disclosure Management Java Web アプリケーション	EPM System コンフィグレータを使用した WebLogic のクラスタリング	はい	はい	なし	<ul style="list-style-type: none"> 自動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の EPM System コンフィグレータを使用した Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項 手動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の WebLogic 手動配置での Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項
Financial Close Management (Close Manager と Account Reconciliation Manager Java Web アプリケーションを含む)	EPM System コンフィグレータを使用した WebLogic のクラスタリング	はい	はい	なし	<ul style="list-style-type: none"> 自動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の EPM System コンフィグレータを使用した Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項 手動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の WebLogic 手動配置での Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項 ロード・バランシング: Oracle Fusion Middleware 高可用性ガイドの Oracle Fusion Middleware SOA Suite の高可用性の構成に関する項

製品/コンポーネント	サポートされる方法	高可用性	ロード・バランシング	注意	参照
Strategic Finance サーバー	なし	いいえ	いいえ	なし	
Strategic Finance Java Web アプリケーション	EPM System コンフィグレータを使用した WebLogic のクラスタリング	はい	はい	なし	<ul style="list-style-type: none"> ● 自動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の EPM System コンフィグレータを使用した Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項 ● 手動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の WebLogic 手動配置での Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項
Strategic Finance IIS Web アプリケーション(IIS)	Web サーバーまたはサードパーティ製のロード・バランサを使用したクラスタリング	はい	はい	なし	Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の IIS での Financial Management、Strategic Finance または FDM IISWeb アプリケーションのロード・バランシングに関する項

表 8 データ管理製品のクラスタリング

製品/コンポーネント	サポートされる方法	高可用性	ロード・バランシング	注意	参照
FDM アプリケーション・サーバー	FDM 固有のロード・バランサでのクラスタリング	はい	はい	なし	<ul style="list-style-type: none"> ● データベース・ソフトウェアのドキュメント ● Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の FDM クラスタに関する項 ● Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Configuration Guide
FDM 固有のロード・バランサ	なし	はい	いいえ	ロード・バランサは、環境内の複数の場所にインストールするように設計されています。第 1 のロード・バランサが使用できなくなった場合、クライアントは第 2 のロード・バランサを使用します。	なし

製品/コンポーネント	サポートされる方法	高可用性	ロード・バランシング	注意	参照
FDM IIS Web アプリケーション	Web サーバーまたはサードパーティ製のロード・バランサを使用したクラスタリング	はい	はい	なし	Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の IIS での Financial Management、Strategic Finance または FDM IISWeb アプリケーションのロード・バランシングに関する項
FDM タスク・マネージャ	なし	いいえ	いいえ	なし	なし
FDME	EPM System コンフィグレータを使用した WebLogic のクラスタリング	はい	はい	なし	<ul style="list-style-type: none"> ● 自動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の EPM System コンフィグレータを使用した Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項 ● 手動配置: Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の WebLogic 手動配置での Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項
Data Relationship Management IIS Web アプリケーション	Web サーバーまたはサードパーティ製のロード・バランサを使用したクラスタリング	いいえ	はい	Microsoft IIS の複数のインスタンスがアクティブ-アクティブ構成で配置されます。	<ul style="list-style-type: none"> ● Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の Data Relationship Management クラスタに関する項 ● Oracle Data Relationship Management Installation Guide の Data Relationship Management Web アプリケーションのロード・バランシングの構成に関する項
Data Relationship Management アプリケーション・サーバー	Data Relationship Management 独自のロード・バランシングを使用したクラスタリング	いいえ	はい	複数のアプリケーション・サーバーがプライマリ-セカンダリ構成で配置されます。	<ul style="list-style-type: none"> ● Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の Data Relationship Management クラスタに関する項 ● Oracle Data Relationship Management Installation Guide の ホスト・マシンの構成に関する項

4

インストール用ファイルのダウンロード

この章の内容

インストール・ファイルのダウンロード.....67

インストール・ファイルのダウンロード

▶ インストール・ファイルをダウンロードするには:

1 EPM System ファイルを保管するディレクトリを作成します。

ファイルは、共有ドライブ、または配置内の各マシンにダウンロードできます。ネットワーク・ドライブからインストールする場合、このドライブをマッピングします。この手順では、このディレクトリは/download_location と記載します。

ヒント: ファイルを共有ドライブにダウンロードすることをお勧めします。

2 Oracle Software Delivery Cloud (<http://edelivery.oracle.com/>)サイトの「Oracle Enterprise Performance Management System」メディア・パックから/download_location に次のファイルをダウンロードします。一部のファイルはプラットフォーム別に配置されています。使用しているプラットフォームに応じたファイルをダウンロードするようにしてください。

- EPM System インストーラ platformName (パート1) の EPM System リリース 11.1.2.3.0
- 購入した製品の ZIP ファイル。ZIP ファイルには、インストール・アセンブリ (EPM System インストーラ製品用のプラグイン・インストール・ファイル) が含まれます。

Oracle Software Delivery Cloud にあるメディア・パック Readme を読み、購入した製品に基づいて、ダウンロードする ZIP ファイルを確認します。(メディア・パック Readme を参照するには、メディア・パックを選択してから Readme をクリックします。)

3 EPM System インストーラを/download_location に解凍します。

いずれかのファイルがすでに存在していることを知らせるメッセージが表示されたら、「はい」をクリックして、ファイルを上書きします。

ヒント: 7-Zip など、長いパス名を処理できる zip ファイルの解凍プログラムを使用します。

名前に空白を含まないディレクトリに解凍します。

4 インストール・アセンブリを同じディレクトリ(/download_location)に解凍します。

いずれかのファイルまたは共通コンポーネントがすでに存在していることを知らせるメッセージが表示されたら、「はい」をクリックして、ファイルを上書きします。

アセンブリは/assemblies ディレクトリに自動的に解凍されます。

ファイルを1つの場所にまとめてダウンロードした場合は、次の共通ファイルを解凍してください。配置の複数のマシンにファイルをダウンロードした場合は、その配置の各マシンで、次の共通ファイルを解凍します。ファイルはオペレーティング・システムごとに別個のフォルダに解凍します。

- platformNameのEPM Systemリリース11.1.2.3.0 (パート1)
- platformNameのEPM Systemリリース11.1.2.3.0 (パート2)
- platformNameのEPM Systemリリース11.1.2.3.0 (パート3)
- platformNameのEPM Systemリリース11.1.2.3.0 (パート4)

分散環境用のファイルの準備については、次の情報に注意してください:

- 環境内の各マシンにこれらの4つのZIPファイルが必要であっても、1つのマシンにのみ Foundation Services Java Web アプリケーションをインストールします(ただし、クラスタリングには複数のJava Web アプリケーションが必要です)。
- WebLogic Server を管理するマシンでは、環境内の任意のマシンに配置するすべてのアプリケーションに対してすべてのJava Web アプリケーションをインストールする必要があります。詳細は、[85 ページの「分散環境での EPM System 製品のインストール」](#)を参照してください。

5 /assemblies ディレクトリには、このマシンにインストールする各製品のサブディレクトリを含める必要があります。/assemblies ディレクトリが次のようになっていることを確認してください:

```
assemblies/  
  
product  
/  
  
version  
/  
  
assembly.dat
```

注: ProductRef.inf が/assemblies ディレクトリ内にある場合があります。残っていても問題を引き起こすことはありません。

EPM System インストーラは、製品のアセンブリ・ファイルをダウンロードして正しい場所に解凍している場合のみ、その製品をインストールできます。

5

新しい配置でのEPM System製品のインストール

この章の内容

新規インストールのインストール・チェックリスト.....	69
Financial Close Management (Close Manager および Account Reconciliation Manager)のインストール・チェックリスト	73
インストールの前提条件と要件	79
インストールの順序	85
分散環境での EPM System 製品のインストール	85
Oracle BI EE の EPM System との統合	87
EPM System 製品のインストール	88
サイレント・インストールの実行	94
EPM System クライアントのインストール	97

EPM System インストーラは、Web およびサービスコンポーネントをインストールします。さらに、EPM System 製品を構成するときは、データベースを構成します。

クライアントはスタンドアロン・インストーラを使用してインストールされますが、次の例外があります。

- Integration Services コンソール
- FDM ワークベンチ
- Performance Management Architect バッチ・クライアント
- Production Reporting Studio、Viewer および Activator

新規インストールのインストール・チェックリスト

EPM System の配置は、このワークフローに従います。ワークフローの各部分は、次の表で説明されている項で説明されています。

注： Financial Close Management をインストールする場合、73 ページの「Financial Close Management (Close Manager および Account Reconciliation Manager)のインストール・チェックリスト」に記載されているインストール順序と構成順序に従ってください。

注： アップグレードについての注意

EPM System 製品の旧リリースからアップグレードする場合、第 11 章「EPM System 製品のアップグレード」の手順に従い、EPM System インストーラおよび EPM System コンフィグレータを使用して製品を新しい環境にインストールします。アップグレードは、リリース 11.1.2.0、11.1.2.1 または 11.1.2.2 から 11.1.2.3 への移行には適用されません。

リリース 11.1.2.0、11.1.2.1 またはリリース 11.1.2.2 からリリース 11.1.2.3 に移行する場合、EPM System インストーラの「メンテナンス・リリースの適用」オプションをかわりに使用します。第 10 章「EPM System 製品のメンテナンス・リリースのインストールの実行」を参照してください。

タスク	リファレンス
1. システム要件を満たします。	Oracle Enterprise Performance Management System Certification Matrix(http://www.oracle.com/technetwork/middleware/ias/downloads/fusion-certification-100350.html)
2. インストールをプランニングし、前提条件タスクを実行します。	第 3 章「環境の準備」
3. インストール・ファイルを準備します。	第 4 章「インストール用ファイルのダウンロード」
4. EPM System 製品をインストールします。	第 5 章「新しい配置での EPM System 製品のインストール」 ご使用の環境に適用されるインストールの前提条件を満たしていることを確認します。79 ページの「インストールの前提条件と要件」。 ヒント： 開始する前に、実行するインストール・タイプを決定します： <ul style="list-style-type: none">● 新規インストール● メンテナンス・リリースのインストール● 再インストール 各インストール・タイプの詳細は、92 ページの「インストール・タイプ」を参照してください。 アップグレードについての注意 前のリリースからアップグレードする場合、「新規インストール」を選択して新しい場所にインストールする必要があります。 第 11 章「EPM System 製品のアップグレード」を参照してください。

タスク	リファレンス
<p>5. EPM System コンフィグレータを使用して EPM System 製品を構成します。</p>	<p>第 6 章「新しい配置での EPM System 製品の構成」</p> <p>使用している環境に必要なとされる構成要件を満たしていることを確認してください。</p> <p>106 ページの「構成の前提条件」を参照してください。</p> <p>注： 分散環境では、Foundation Services を最初に構成します。他の製品を正常に構成するには、Foundation Services を順序どおりにインストールして構成する必要があります。</p> <p>他の EPM System 製品を構成し、Web サーバーを最後に構成します(Foundation Services の「Web サーバーの構成」タスクを選択します)。その後、Web サーバーを再起動し、EPM Workspace をリフレッシュします。Oracle HTTP Server を共有ドライブに構成した場合、Web サーバーを再起動し、EPM Workspace をリフレッシュするだけです。Web サーバーを再構成する必要はありません。122 ページの「EPM Workspace のリフレッシュ」を参照してください。</p> <p>必要な構成順序の詳細は、111 ページの「構成順序」を参照してください。</p> <p>注： 使用する配置内で SSL を有効にする場合、構成の前に、Oracle Enterprise Performance Management System Security Configuration Guide を参照してください。SSL 構成の内容によって、EPM System コンフィグレータを使用して構成を行う際の選択が異なります。また、SSL 構成を配置する場合は、追加の構成後のタスクがあります。</p>
<p>6. オプションで、EPM System Java Web アプリケーションを手動で配置します。</p>	<p>第 7 章「EPM System Java Web アプリケーションの手動配置」</p>
<p>7. 追加の製品を配置する場合は、Foundation Services をホストする各マシンで、Web サーバーを再構成してから再起動します(または Oracle HTTP Server を共有ドライブに構成した場合は再起動するだけです)。</p> <p>次に、配置内の各 Foundation Services ホスト・マシン上の EPM Workspace をリフレッシュします。</p> <p>122 ページの「EPM Workspace のリフレッシュ」を参照してください。</p>	
<p>8. 使用する製品に必要な手動構成タスクを実行します。</p>	<p>第 9 章「新しい配置での手動構成タスクの実行」</p>
<p>9. EPM System サービスを起動します。</p>	<p>第 12 章「EPM System 製品の開始と停止」</p>
<p>10. Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System 診断を使用して、インストールを検証し、配置を確認します。</p>	<p>第 13 章「インストールの検証と配置の確認」</p>
<p>11. 外部認証を使用可能にし、ユーザーをプロビジョニングします。</p>	<p>Oracle Enterprise Performance Management System User Security Administration Guide</p>

ヒント： インストール、構成および検証中は、システムを作成または変更するために使用するすべてのユーザー名とパスワード(およびそれらが関連付けられているアプリケーションとその目的を含む)のリストを保持します。

共有ドライブ環境への配置(UNIX)

UNIX 環境では、共有ドライブに配置できます(Windows ではサポートされません)。共有ドライブに配置すると、次のことが可能です：

- インストールは 1 回のみで、構成は各マシンで行う
- 分散設定の構成を 1 つのマシンから確認する
- 異なるマシンのログを 1 つのマシンから確認する
- 1 箇所でのパッチが可能である
- 障害リカバリの設定を単純化する

次の手順では、EPM System 製品を共有ドライブに配置するプロセスの概要を示します。この手順をインストール・チェックリストと併せて使用してください。詳細は、[69 ページの「新規インストールのインストール・チェックリスト」](#)を参照してください。

EPM System では、次の共有ドライブ・タイプがサポートされます：

- インストール・プラットフォームでサポートされている共有ディスク・ファイル・システムを使用する SAN ストレージ・デバイス
- サポートされているネットワーク・プロトコルを使用する NAS デバイス

この手順では、すべてのマシンで同じユーザーとしてインストールを実行し、NFS 共有などのユーザーのホーム・ディレクトリがすべてのマシンで同じであることを想定としています。

▶ 共有ドライブ環境への配置：

- 1 配置内のすべてのマシンを同じネットワーク共有にマップします。
- 2 1 つのマシンで EPM System インストーラを実行して、すべての EPM System コンポーネントを共有ドライブにインストールします。

インストール中、「宛先/ミドルウェア・ホーム」・ページで共有ドライブ上のディレクトリを指定します。

- 3 環境内の各マシンで、EPM System コンフィグレータを実行します。

- マシンごとに、「Oracle インスタンス」構成ページで、「EPM Oracle インスタンスのホーム・ディレクトリ」に同じ EPM Oracle インスタンス・ホームを指定し、「EPM Oracle インスタンス名」に新規 EPM Oracle インスタンスの名前を指定します。たとえば、構成後の EPM_ORACLE_INSTANCE のディレクトリ構造は次のようになります：

```
/user_projects
```



```
/node1
/node2
/node
      N
```

domains/epmsystem

- マシンごとに、そのマシンで実行するコンポーネントのみを構成します。
 - WebLogic 管理サーバーとして使用するマシンで、最初に Foundation Services を構成します。
 - 「Shared Services およびレジストリ・データベース接続の設定」構成ページは、最初のマシンにのみ表示されます。
- 4 各マシンで構成を完了し、EPM System コンフィグレータをクローズしてから別のマシンの構成に進みます。

Financial Close Management (Close Manager および Account Reconciliation Manager)のインストール・チェックリスト

Financial Close Management の場合、Oracle SOA Suite および必要なすべてのパッチがインストールされている必要があります。

注： Financial Close Management リリース 11.1.2.1 またはリリース 11.1.2.2 からリリース 11.1.2.3 に移行するためにメンテナンス・リリースを適用する場合は、[204 ページの「Financial Close Management のメンテナンス・リリースのインストール・チェックリスト」](#)を参照してください。

Financial Close Management のインストールに関する次の点に注意してください。

- 分散環境では、配置内の次のマシンに Oracle SOA Suite をインストールする必要がありますが、構成は1つのマシン(SOA サーバーを実行するマシン)でのみ行う必要があります: Financial Close Management、WebLogic 管理サーバー、Foundation Services、およびこれらの製品と統合する場合は、Financial Management (Java Web アプリケーション)、Financial Reporting (Java Web アプリケーション)、FDM (Java Web アプリケーション)。
- Oracle SOA Suite と EPM System は同じ WebLogic ドメインに配置する必要があります。
- Financial Close Management とともに使用することを計画している既存の Oracle SOA Suite インストールがある場合は、EPM System 製品をその同じ Middleware ホームにインストールする必要があります。
- 通常、EPM System インストーラによって WebLogic Server がインストールされます。既存の WebLogic Server インストールがあるときに、EPM System インストーラによってインストールされる WebLogic Server のかわりにこのインストールを使用する場合は、EPM System でサポートされているバージョンである必

要があります。WebLogic Server インストールのミドルウェア・ホームの場所に注意してください。インストール時に、EPM System 製品を同じミドルウェア・ホームにインストールする必要があります。インストールの場所で EPM System インストーラによって既存の WebLogic Server インストールが検出された場合、WebLogic Server はインストールされません。

既存の WebLogic Server のバージョンが EPM System の正しいバージョンではない場合、現在のバージョンをアンインストールするか、正しいバージョンをインストールか、または EPM System インストーラを実行する前に正しいバージョンにアップグレードする必要があります。

次の表は、次のシナリオでの Oracle SOA Suite および Financial Close Management のインストールおよび構成プロセスの概要を示しています。

- EPM System 製品がまだインストールも構成もされていない新規の配置。
- EPM System 製品がすでにインストールおよび構成され、Financial Close Management と Oracle SOA Suite を含むよう拡張する既存の配置。

表 9 新規の EPM System 配置での Oracle SOA Suite および Financial Close Management のインストールおよび構成のロードマップ

タスク	参照
<p>EPM System 製品をインストールします。</p> <p>注： 分散環境では、WebLogic Server を管理するマシンでは、環境内の任意のマシンに配置するすべてのアプリケーションに対してすべての Java Web アプリケーションをインストールする必要があります。</p> <p>EPM System 製品とは異なるマシンに Oracle SOA Suite がインストールされる場合、その SOA マシンに Foundation Services をインストールする必要があります。</p> <p>EPM System のデフォルトのインストールでは、Oracle SOA Suite に必要な WebLogic Server がインストールされます。WebLogic 管理サーバーは、Foundation Services マシンにインストールして配置します。</p> <p>注意 インストール後、次の Oracle SOA Suite 構成手順を完了するまで、EPM System コンフィグレータを使用して EPM System 製品の構成に進まないでください。</p>	<p>88 ページの「EPM System 製品のインストール」。</p> <p>また、分散環境では85 ページの「分散環境での EPM System 製品のインストール」に記載されている追加の要件も必ず確認してください。</p>
<p>Microsoft SQL Server を使用している場合は、『Oracle Fusion Middleware リリース・ノート 11g リリース 1 (11.1.1) for Microsoft Windows (32-Bit)』の Microsoft SQL Server 2008 で SOA インフラストラクチャを起動するために必要な XA 構成に関する項を参照してください。</p>	<p>http://download.oracle.com/docs/cd/E15523_01/relnotes.1111/e10132/soa.htm#CDEIFEAC</p>
<p>リポジトリ作成ユーティリティを実行し、Oracle SOA Suite をインストールします。</p> <p>注： 分散環境では、配置内の次のマシンに Oracle SOA Suite をインストールする必要がありますが、構成は 1 つのマシン(SOA サーバーを実行するマシン)でのみ行う必要があります: Financial Close Management、WebLogic 管理サーバー、Foundation Services、およびこれらの製品と統合する場合は、Financial Management (Web アプリケーション)、Financial Reporting (Web アプリケーション)、FDM (Web アプリケーション)。</p>	<p>107 ページの「リポジトリ作成ユーティリティを使用したインフラストラクチャのスキーマの作成」および109 ページの「Oracle SOA Suite のインストール」</p>

タスク	参照
<p>新しい WebLogic ドメインを作成し、Oracle SOA Suite を構成します。My Oracle Support から入手可能な Oracle Fusion Middleware の必須パッチをインストールする必要もあります。</p> <p>注： 分散環境の場合は、次の追加手順に注意してください：</p> <ul style="list-style-type: none"> ● EPM System 製品とは異なるマシンに Oracle SOA Suite が搭載されている場合、その SOA マシンに Foundation Services もインストールする必要があります。 ● Oracle SOA Suite が WebLogic 管理サーバー・マシンとは別のマシンで構成されている場合、WebLogic 管理サーバー・マシンをホストしているマシンで pack コマンドを使用してドメインを圧縮し、次に SOA サーバーをホストしているマシンで unpack コマンドを使用してドメインを解凍します。 <p>SOA クラスタを構成する予定の場合は、この時点でクラスタを構成します。SOA クラスタの構成の詳細は、Oracle® Fusion Middleware 高可用性ガイドの Oracle Fusion Middleware SOA Suite の高可用性の構成に関する項を参照してください。</p>	<p>110 ページの「Oracle SOA Suite の構成と開始」</p> <p>および</p> <p>第 5 章「新しい配置での EPM System 製品のインストール」</p> <p>ヒント： EPM System コンフィグレータに進む前に、エラーの SOA 起動ログを確認して、エラーを解決します。Enterprise Manager コンソールで SOA のステータスも表示できます。</p>
<p>SOA 管理対象サーバーを停止する。WebLogic Server が Foundation Services と同じマシンにある場合は、そのサーバーを停止します。</p>	
<p>EPM System 製品を構成し、Close Manager の場合は「SOA に配置」、Account Reconciliation Manager の場合は「SOA に配置」および「FDM EE の SOA に配置」を除く、すべての必要な構成タスクを選択します。</p> <p>配置を行う際には、Oracle SOA Suite の配置時に作成された WebLogic ドメインを拡張する必要があります。</p> <p>手動で Java Web アプリケーションを配置する場合は、ここで実行します。第 7 章「EPM System Java Web アプリケーションの手動配置」を参照してください。</p> <p>注： 分散環境での構成では、次の情報に注意してください：</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Foundation Services を最初に構成する必要があります。 ● 分散環境で Financial Close Management を構成する場合、EPM System コンフィグレータを起動する前に、WebLogic 管理サーバーが実行されていることを確認します。 ● EPM System 製品を、別のマシンでホストされるドメインに配置する場合(かつ、ドメインが EPM System コンフィグレータを使用して作成されていない場合)、管理サーバー・コンピュータの jps-config.xml および system-jazn.xml を手動で更新する必要があります。 <p>第 7 章「EPM System Java Web アプリケーションの手動配置」の170 ページの 手順 19 および 174 ページの手順 20 を参照してください。</p>	<p>118 ページの「EPM System 製品の構成」</p>
<p>WebLogic 管理サーバー、SOA 管理対象サーバーの順に起動します。</p>	<p>110 ページの「Oracle SOA Suite の構成と開始」</p>
<p>EPM System コンフィグレータを起動し、Close Manager の場合は「SOA に配置」を選択して、Account Reconciliation Manager の場合は「SOA に配置」および「FDM EE の SOA に配置」を選択します。</p> <p>EPM System 製品を、別のマシンでホストされるドメインに配置する場合(かつ、ドメインが EPM System コンフィグレータを使用して作成されていない場合)、「Web サーバーの構成」タスクも選択する必要があります。</p>	<p>118 ページの「EPM System 製品の構成」</p>

タスク	参照
<p>WebLogic 管理サーバーを再起動します。</p> <p>Java Web アプリケーションの論理アドレスを変更するために、任意の時点で構成を変更する場合(EPM System Configurator の Web アプリケーションの論理アドレスの更新ページを使用)、次のタスクを実行する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Close Manager の場合: <ol style="list-style-type: none"> 1. 実行中のタスクまたはアラートがないことを確認します。 2. EPM System コンフィグレータを起動し、「タスクの選択」ページの「Financial Close」、「Financial Close Management」セクションで、「SOA に配置」を選択します。 3. 「次へ」をクリックして、構成を続行してから、「終了」をクリックします。 ● Account Reconciliation Manager の場合: <ol style="list-style-type: none"> 1. オープン期間がないことを確認します。オープン期間が存在する場合は、それらをロックします。実行しているデータロードがないことを確認します。 2. EPM System コンフィグレータを起動し、「タスクの選択」ページの「Financial Close」、「Financial Close Management」セクションで、「SOA に配置」および「EDM EE の SOA に配置」を選択します。 3. 「次へ」をクリックして、構成を続行してから、「終了」をクリックします。 4. ロックされた期間のロックを解除します。 ● 両方:soainfra データソースに接続し、次のクエリーを実行します。 <pre style="margin-left: 40px;">UPDATE WFTASKDISPLAY SET httpport = <LWA Port> , httpsport=0, hostname = <LWA Host> WHERE URI like '/workflow/%';</pre> 	
<p>分散環境で Oracle SOA Suite が EPM System 製品と異なるマシンにある場合は、その SOA マシンに Foundation Services がインストールされていることを確認します。次に、SOA マシンで、EPM System コンフィグレータを開始し、デフォルトで選択される構成タスク(「共通設定の構成」、「データベースの構成」、「Oracle Configuration Manager の構成」)を使用して構成を行います。データベース構成の際、Foundation Services マシンの構成時に入力した Foundation Services データベース情報を指定します。</p> <p>ヒント: Shared Services 登録の失敗に関するメッセージはすべて無視できます。</p>	<p>第 6 章「新しい配置での EPM System 製品の構成」</p>
<p>Financial Close Management の手動構成タスクを実行します。</p>	<p>195 ページの「Financial Close Management 手動構成タスク」</p>
<p>SOA サーバーを停止し、EPM System 製品、SOA サーバー、Financial Close Management の順に起動します。</p>	<p>第 12 章「EPM System 製品の開始と停止」 および 344 ページの「Financial Close Management アプリケーション・サーバー」</p>
<p>インストールを検証し、配置を確認します。</p>	<p>第 13 章「インストールの検証と配置の確認」</p>

EPM System 製品をいくつかすでにインストールし、構成してある場合、次のロードマップを使用して Financial Close Management と Oracle SOA Suite を既存の配置に追加できます:

表 10 既存の EPM System 配置での Oracle SOA Suite および Financial Close Management のインストールおよび構成のロードマップ

タスク	参照
<p>Financial Close Management をインストールする。</p> <p>注: 分散環境では、WebLogic Server を管理するマシンでは、環境内の任意のマシンに配置するすべてのアプリケーションに対してすべての Java Web アプリケーションをインストールする必要があります。</p> <p>EPM System のデフォルトのインストールでは、Oracle SOA Suite に必要な WebLogic Server がインストールされます。WebLogic 管理サーバーは、Foundation Services マシンにインストールして配置します。</p> <p>注意 インストール後、次の Oracle SOA Suite 構成手順を完了するまで、EPM System コンフィグレータを使用して EPM System 製品の構成に進まないでください。</p>	<p>88 ページの「EPM System 製品のインストール」。</p> <p>また、分散環境では85 ページの「分散環境での EPM System 製品のインストール」に記載されている追加の要件も必ず確認してください。</p>
<p>Microsoft SQL Server を使用している場合は、『Oracle Fusion Middleware リリース・ノート 11g リリース 1 (11.1.1) for Microsoft Windows (32-Bit)』の Microsoft SQL Server 2008 で SOA インフラストラクチャを起動するために必要な XA 構成に関する項を参照してください。</p>	<p>http://download.oracle.com/docs/cd/E15523_01/relnotes.1111/e10132/soa.htm#CDEIFEAC</p>
<p>リポジトリ作成ユーティリティを実行し、Oracle SOA Suite をインストールします。</p> <p>注: 分散環境では、配置内の次のマシンに Oracle SOA Suite をインストールする必要がありますが、構成は 1 つのマシン(SOA サーバーを実行するマシン)でのみ行う必要があります: Financial Close Management、WebLogic 管理サーバー、Foundation Services、およびこれらの製品と統合する場合は、Financial Management (Web アプリケーション)、Financial Reporting (Web アプリケーション)、FDM (Web アプリケーション)。</p>	<p>107 ページの「リポジトリ作成ユーティリティを使用したインフラストラクチャのスキーマの作成」および109 ページの「Oracle SOA Suite のインストール」</p>

タスク	参照
<p>WebLogic 管理サーバー・マシンから Oracle SOA Suite を構成します。</p> <p>注： 構成時、初めて EPM System を配置する際に作成された WebLogic ドメインを拡張する必要があります。</p> <p>My Oracle Support から入手可能な Oracle Fusion Middleware の必須パッチをインストールする必要もあります。</p> <p>注： 分散環境の場合は、次の追加手順に注意してください:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● EPM System 製品とは異なるマシンに Oracle SOA Suite が搭載されている場合、その SOA マシンに Foundation Services をインストールする必要があります。 ● Oracle SOA Suite が WebLogic 管理サーバー・マシンとは別のマシンで構成されている場合、WebLogic 管理サーバー・マシンをホストしているマシンで pack コマンドを使用してドメインを圧縮し、次に SOA サーバーをホストしているマシンで unpack コマンドを使用してドメインを解凍します。 <p>ヒント： SOA 管理対象サーバーを起動する前に、WebLogic 管理サーバーを再起動する必要がある場合があります。</p> <p>SOA クラスタを構成する予定の場合は、この時点でクラスタを構成します。SOA クラスタの構成の詳細は、Oracle® Fusion Middleware 高可用性ガイドの Oracle Fusion Middleware SOA Suite の高可用性の構成に関する項を参照してください。</p>	<p>110 ページの「Oracle SOA Suite の構成と開始」 および 第 5 章「新しい配置での EPM System 製品のインストール」</p> <p>ヒント： EPM System コンフィグレータに進む前に、エラーの SOA 起動ログを確認して、エラーを解決します。Enterprise Manager コンソールで SOA のステータスも表示できます。</p>
<p>SOA 管理対象サーバーを停止する。WebLogic Server が Foundation Services と同じマシンにある場合は、そのサーバーを停止します。</p>	
<p>EPM System 製品を構成し、Close Manager の場合は「SOA に配置」、Account Reconciliation Manager の場合は「SOA に配置」および「FDM EE の SOA に配置」を除く、すべての必要な構成タスクを選択します。</p> <p>配置時、EPM System を配置する際に作成された WebLogic ドメインを拡張する必要があります。</p> <p>手動で Java Web アプリケーションを配置する場合は、ここで実行します。第 7 章「EPM System Java Web アプリケーションの手動配置」を参照してください。</p> <p>Foundation Services の「Web サーバーの構成」タスクを完了する必要もあります。</p> <p>分散環境で Financial Close Management を構成する場合、EPM System コンフィグレータを起動する前に、WebLogic 管理サーバーが実行されていることを確認します。</p>	<p>118 ページの「EPM System 製品の構成」</p>
<p>WebLogic 管理サーバー、SOA 管理対象サーバーの順に起動します。</p>	<p>110 ページの「Oracle SOA Suite の構成と開始」</p>
<p>EPM System コンフィグレータを起動し、Close Manager の場合は「SOA に配置」を選択して、Account Reconciliation Manager の場合は「SOA に配置」および「FDM EE の SOA に配置」を選択します。</p>	<p>118 ページの「EPM System 製品の構成」</p>
<p>WebLogic 管理サーバーを再起動します。</p>	

タスク	参照
<p>分散環境で Oracle SOA Suite が EPM System 製品と異なるマシンにある場合は、その SOA マシンに Foundation Services がインストールされていることを確認します。次に、SOA マシンで、EPM System コンフィグレータを開始し、デフォルトで選択される構成タスク(「共通設定の構成」、「データベースの構成」、「Oracle Configuration Manager の構成」)を使用して構成を行います。データベース構成の際、Foundation Services マシンの構成時に入力した Foundation Services データベース情報を指定します。</p> <p>ヒント： Shared Services 登録の失敗に関するメッセージはすべて無視できません。</p>	
<p>Financial Close Management の構成後のタスクを実行します。</p>	<p>195 ページの「Financial Close Management 手動構成タスク」</p>
<p>SOA サーバーを停止し、EPM System 製品、SOA サーバー、Financial Close Management の順に起動します。</p>	<p>第 12 章「EPM System 製品の開始と停止」および344 ページの「Financial Close Management アプリケーション・サーバー」</p>
<p>EPM Workspace を再起動し、EPM Workspace から Financial Close Management にアクセスします。</p>	
<p>インストールを検証し、配置を確認します。</p>	<p>第 13 章「インストールの検証と配置の確認」</p>

インストールの前提条件と要件

サブトピック

- [Web サーバー・インストールの前提条件](#)
- [Financial Reporting および Production Reporting の X11 の構成\(AIX および HP-UX\)](#)

次のインストールの前提条件に注意してください。

- Oracle Enterprise Performance Management System Certification Matrix(<http://www.oracle.com/technetwork/middleware/ias/downloads/fusion-certification-100350.html>)。
- データベースの準備、IIS を必要とする製品用の IIS の準備、および Web ブラウザの準備を行うためのインストールの前提条件は、[第 3 章「環境の準備」](#)を参照してください。
- インストールに必要なファイルをダウンロードします。[第 4 章「インストール用ファイルのダウンロード」](#)を参照してください。[Oracle Software Delivery Cloud](#)にあるメディア・パック Readme を読んで、各自の環境に対して必須または任意の製品を確認してください。
- Calculation Manager が Internet Explorer および Firefox で動作する場合、Adobe Flash Player をインストールする必要があります。
- SSL 対応環境で EPM System 製品の配置を予定している場合、インストールと構成の前に、Oracle Enterprise Performance Management System Security Configuration Guide を参照してください。選択する SSL 実装により、構成時に

選択するオプションが影響を受けます。オプションで、非 SSL を配置して SSL を使用するように再構成できます。Oracle Enterprise Performance Management System Security Configuration Guide を参照してください。

- Windows 2008 にインストールしている場合、インストールする前に UAC を無効にします。EPM System 製品をインストール、構成および実行するには、UAC を無効にする必要があります。UAC は、エンドユーザーのクライアント・デスクトップで有効化できます。
- 使用可能な一時スペースが 1GB あることを確認します。必要に応じて、他の /tmp ディレクトリを指定できます。
- Essbase を 32 ビットまたは 64 ビットの Linux システムにインストールする前に、次のパッケージをインストールします:

- compat-libstdc++-33-3.2.3-47.3 以上
- libaio-0.3.105-2 以上

- Red Hat Enterprise Linux AS リリース 4 での Planning の場合、Linux サーバ上で glibc 2.5 にアップグレードする必要があります。詳細は、Linux のドキュメントを参照してください。
- Oracle Business Intelligence Enterprise Edition または Oracle Business Intelligence Publisher がインストールされているマシンにインストールする場合は、2 つの異なるミドルウェア・ホームにインストールします。EPM System および Oracle BI EE の将来のパッチ・セットは、異なるときにリリースされるため、マージされた Fusion Middleware ホームのアップグレードにとって制約となる場合があります。

Fusion Middleware の詳細は、<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/index.html#middleware> を参照してください。

- FDMEE をインストールおよび構成している場合は、Oracle Data Integrator は自動的にインストールおよび構成されます。Oracle Data Integrator のデータベースは FDMEE と同じデータベース内にあり、Oracle Data Integrator エージェント・アプリケーションは FDMEE と同じ JVM に配置されます。オプションで、ODI_Studio_11123.zip を使用して ODI Studio をインストールできます。
- FDMEE は、Financial Close Management の Account Reconciliation Manager に必要です。
- 次の製品のいずれかをインストールする場合は、Windows 用の Financial Management ADM ドライバもインストールする必要があります。
 - Web Analysis(必須)
 - Financial Reporting (デフォルトで選択されますが、これをインストールしない選択もできます)
 - Strategic Finance
 - FDM
 - FDMEE

EPM System インストーラでは、Windows マシンに Windows バージョンのドライバがインストールされます。EPM System インストーラでは、Oracle BI EE を

使用するために、すべてのプラットフォームに UNIX バージョンのドライバをインストールします。

- **Financial Close Management** とともに使用することを計画している既存の Oracle SOA Suite インストールがある場合は、その Oracle SOA Suite インストールのミドルウェア・ホームの場所をメモしてください。インストール時に、EPM System 製品を同じミドルウェア・ホームにインストールする必要があります。
- 通常、EPM System インストーラによって WebLogic Server がインストールされます。既存の WebLogic Server インストールがあるときに、EPM System インストーラによってインストールされる WebLogic Server のかわりにこのインストールを使用する場合は、EPM System でサポートされているバージョンである必要があります。WebLogic Server インストールのミドルウェア・ホームの場所に注意してください。インストール時に、EPM System 製品を同じミドルウェア・ホームにインストールする必要があります。インストールの場所で EPM System インストーラによって既存の WebLogic Server インストールが検出された場合、WebLogic Server はインストールされません。

既存の WebLogic Server のバージョンが EPM System の正しいバージョンではない場合、現在のバージョンをアンインストールするか、正しいバージョンをインストールか、または EPM System インストーラを実行する前に正しいバージョンにアップグレードする必要があります。

- **Financial Reporting** では、Financial Reporting Studio でレポートを設計する際に使用するフォントを、Financial Reporting Java Web アプリケーション・サーバーのホストのサーバーにインストールします。PDF の生成が UNIX サーバーで実行可能になったため、Financial Reporting Studio のレポート設計で使用するフォントを Financial Reporting Java Web アプリケーション・サーバーで使用できる必要があります。それ以外の場合、Financial Reporting Studio Java Web アプリケーション・サーバーのデフォルトのシステム・フォントが使用され、想定どおりの結果になりません。
- UNIX で印刷するために Interactive Reporting を準備するには、Acrobat Reader がインストールされていることを確認してください。PATH に Acrobat Reader のインストール場所がない場合は、新規環境変数 PATH_TO_ACROREAD を設定します。このパスが、Acrobat Reader のインストール場所になります。
- AIX および HP-UX の場合、Financial Reporting 印刷サーバーの X11 を構成します。チャートを使用する Production Reporting ジョブの場合も、X11 を構成する必要があります。

チャートを生成するには、Production Reporting の DISPLAY 値も設定する必要があります。

[83 ページの「Financial Reporting および Production Reporting の X11 の構成 \(AIX および HP-UX\)」](#)を参照してください。

- FDM サーバー・マシンに Microsoft Excel をインストールします。
- Disclosure Management をインストールする前に、Microsoft Office Professional をインストールします。Disclosure Management クライアントを使用するには、Microsoft Office のインストール時に、Word および Excel に対して「.NET プログラミング サポート」を選択する必要があります。

- ターミナル・サービスを使用して Strategic Finance をインストールする場合は、セッションをインストール・モードに切り替えてから、EPM System インストーラを実行します(change user /install)。

Web サーバー・インストールの前提条件

(オプション) EPM System インストーラでは、Foundation Services のインストール中、Oracle HTTP Server サイレント・インストーラを使用して Oracle HTTP Server がインストールされます。開発環境などで Oracle HTTP Server をインストールしない場合、EPM System インストーラにより、プロキシ・サーバーの役割を果たす組み込みの WebLogic HTTP Server が Foundation Services の一部としてインストールされます。本番環境では、WebLogic と使用するために、Oracle HTTP Server をインストールすることをお勧めします。WebSphere に配置する場合は、IBM HTTP Server を使用する必要があります。

Oracle HTTP Server をインストールする場合、Oracle HTTP Server のインストールの前提条件を満たしていることを確認し、Oracle HTTP Server のインストールのドキュメントおよびリリース・ノートで、動作が保証されているオペレーティング・システム、サポートされている UNIX/Linux パッケージ、および重要なインストールに関する問題と回避方法を確認してください。

- Oracle HTTP Server のシステム要件については、http://www.oracle.com/technology/software/products/ias/files/fusion_requirements.htm を参照してください。
- Oracle HTTP Server の認証については、http://www.oracle.com/technology/software/products/ias/files/fusion_certification.html を参照してください。
- Oracle HTTP Server のインストールについては、Oracle HTTP Server のインストールのドキュメント(http://download.oracle.com/docs/cd/E15523_01/webtier.htm)およびリリース・ノート(http://download.oracle.com/docs/cd/E15523_01/relnotes.htm)を参照してください。
- Oracle HTTP Server のインストール上の問題と回避策については、ご使用のプラットフォームの readme (http://download.oracle.com/docs/cd/E15523_01/relnotes.htm)を参照してください。

AIX の場合、Oracle HTTP Server とともに Oracle Database を使用する場合、Oracle HTTP Server をインストールする前に rootpre.sh を root ユーザーとして実行する必要があります。配置内のマシンごとにこのスクリプトを 1 回実行します。スクリプトのファイルは SystemInstaller-11120-aix.zip に含まれています。詳細は、『Oracle(R) Fusion Middleware リリース・ノート 11g リリース 1(11.1.1) for AIX Based Systems (64-Bit)』(http://download.oracle.com/docs/cd/E15523_01/doc.1111/e14771/toc.htm)を参照してください。

Windows で、ページング・ファイル・サイズが 512MB 以上あることを確認します。ページング・ファイル・サイズを自動管理するオプションは選択しないでください。

EPM System インストーラを使用したインストール時に、Oracle HTTP Server のインストール・ステータスに関する情報のステータスを確認します。Oracle HTTP

Server のインストールが失敗している場合、詳細をログで確認します。ログには Oracle HTTP Server サイレント・インストーラからの情報がレポートされています。ログは次の場所にあります:

- Windows の場合: EPM_ORACLE_HOME/diagnostics/logs/ohs
- UNIX の場合: EPM_ORACLE_HOME/diagnostics/logs/install/common-ohs-oui-out.log

Oracle HTTP Server 製品のログも確認できます。Web サーバー・ログの詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide を参照してください。

Financial Reporting および Production Reporting の X11 の構成(AIX および HP-UX)

Financial Reporting 印刷サーバーは、Oracle Outside In Image Export テクノロジーを使用します。Outside In Image Export は、AIX および HP-UX プラットフォームに対して X11 を必要とします。これは、Xvfb または x11vnc でサポートされます。

AIX 5L の Xvfb を使用可能にする

▶ Xvfb を使用可能にするには:

- 1 Reporting and Analysis Java Web アプリケーション・サーバー・コンポーネントを実行しているコンピュータに root ユーザーとしてログオンします。
- 2 次のコマンドを発行し、コンピュータで仮想フレーム・バッファを使用できるかどうかを調べます:

```
lsllpp -l X11.vfb
```

- 3 X11.vfb がインストールされていない場合は、AIX インストール・メディアから X11.vfb をインストールします。パッケージをインストールしたら、次のサイトから最新の PTF を適用します:

<http://techsupport.services.ibm.com>

- 4 Xvfb を開始します:

```
/usr/bin/X11/X -force -vfb :1
```

ここで、:1 は使用されていないディスプレイの番号です。

HP-UX の Xvfb を使用可能にする

▶ Xvfb を使用可能にするには:

- 1 Reporting and Analysis Java Web アプリケーション・サーバー・コンポーネントを実行しているコンピュータに root ユーザーとしてログオンします。
- 2 次のコマンドを発行し、コンピュータで仮想フレーム・バッファを使用できるかどうかを調べます:

```
swlist -l product | grep 'Xserver cumulative patch'
```

- 3 システムにインストールされているパッチが、HP の推奨するレベル(現時点では PHSS_31293)に対応していることを確認します。
- 4 /etc/X11/X0screens to /etc/X11/X1screens をコピーします。ここで、1 は使用されていないディスプレイの番号です。次に例を示します:

```
cp /etc/X11/X0screens /etc/X11/X1screens
```

- 5 このファイルの最後に次の行を追加して、/etc/X11/X1screens を編集します:

```
ServerOptions
```

```
ServerMode XVfb
```

- 6 Xvfb を開始します:

```
nohup /usr/bin/X11/Xvfb :1 -screen 0 1024x800x8 \  
-pn -fp /usr/lib/X11/fonts/misc -sp /etc/X11/SecurityPolicy &
```

ここで、:1 は使用されていないディスプレイの番号です。

DISPLAY 変数の設定

Reporting and Analysis Java Web アプリケーション・サーバー・コンポーネントを UNIX 上で開始する前に、次のように DISPLAY 環境変数に、使用可能な物理または仮想(Xvfb)グラフィック・デバイスのアドレスを設定します:

```
DISPLAY=  
hostname  
:0.0 ; export DISPLAY
```

便宜上、DISPLAY が自動的に初期化されるように Reporting and Analysis Java Web アプリケーション・サーバー・コンポーネントの開始スクリプトを編集しておくことをお勧めします。

Financial Reporting のディスプレイを設定するには、EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/deploymentScripts の setCustomParamsFinancialReporting.bat|.sh を編集します。

注： Financial Reporting Java Web アプリケーション・サーバー・コンポーネントおよび Production Reporting のみに DISPLAY を設定する必要があります。Production Reporting では、新規グラフィック機能を使用してチャートを生成するために DISPLAY の設定が必要です。

インストールの順序

EPM System インストーラを使用すると、複数の製品を1つのマシンに一度にインストール、構成および配置できます。EPM System インストーラは、コンポーネントを正しい順序でインストールするため、マシンに一度にインストールする製品をいくつでも選択できます。

EPM System インストーラは、Web 層またはサービス層のコンポーネント(Essbase サーバーを含む)をインストールする各マシンに WebLogic Server をインストールします。WebLogic Server の一部としてインストールされる.jar ファイルと Oracle 共通ディレクトリは、EPM System コンフィグレータと共通サービスによって使用されます。WebLogic Server を Essbase サーバー上で実行する必要はありません。

OPMN は、OPMN を使用して EPM Oracle インスタンス構造を作成するため、EPM System コンフィグレータを使用するすべてのマシンに Foundation Services とともにインストールされます。

Essbase をスタンドアロン・モード(Foundation Services を使用しない)でインストールする場合は、Foundation Services Java Web アプリケーションのインストールをスキップできます。ただし、Shared Services レジストリ・データベースは構成する必要があります。Shared Services レジストリ・データベースを Foundation Services のインストールなしで構成するには、[164 ページの「スタンドアロン・モードでの Essbase の設定」](#)を参照してください。

分散環境での EPM System 製品のインストール

EPM System 製品は、一般に分散環境にインストールされます。必要なコンピュータ数は、次の要素によって異なります:

- アプリケーションのサイズ
- ユーザー数
- 複数のユーザーによる同時使用の頻度
- 高可用性に関する組織の要件
- 組織のセキュリティ要件

配置計画の参考となるサンプルのアーキテクチャ図は、[第2章「EPM System のアーキテクチャ」](#)を参照してください。

EPM System インストーラにより、分散コンピュータ環境でのコンポーネントのインストール・タスクが簡略化されます。どのコンピュータのどのコンポーネントでもインストール、構成および検証できます。1つのマシンでコンポーネントをインストール、構成および検証すれば、別のマシンで同じプロセスを繰り返せます。

分散環境でのインストールおよび構成では、次の情報に注意してください。

分散環境でのインストールの考慮事項

- 分散環境では、EPM Oracle ホームはすべてのマシンで同じである必要があります。たとえば、EPM Oracle ホームのパスは、構成する最初のマシンで Oracle/Middleware である場合、配置内のすべてのマシンで Oracle/Middleware である必要があります。
- Foundation Services は、クラスタリングに複数の Java Web アプリケーション・インスタンスが必要でないかぎり、配置内の1つのマシンにのみ必要です。または、Financial Close Management を使用している場合、Oracle SOA Suite が EPM System 製品と異なるマシンにある場合は、その SOA マシンに Foundation Services をインストールする必要があります。
- (オプション) Oracle HTTP Server は Foundation Services とともにインストールされます。
- WebLogic Server を管理するマシンでは、環境内の任意のマシンに配置するすべてのアプリケーションに対してすべての Java Web アプリケーションをインストールする必要があります。(WebLogic 管理サーバーは、Foundation Services マシンにインストールして配置します。)
- 分散環境内のリモート・マシンごとに、このマシン上で実行する Java Web アプリケーションをインストールしてから、EPM System コンフィグレータを使用して Java Web アプリケーションを自動的に配置するか、Java Web アプリケーションを手動で配置します。

EPM System インストーラは、WebLogic Server を分散環境内の各マシン(Web 層およびサービス層コンポーネント)にインストールします。

- IIS を Web サーバーとして使用する場合、各 IIS アプリケーションをインストールし、IIS Web サーバーと同じ場所に配置します。
- 複数の環境(開発、テスト、本番など)にインストールする場合は、Foundation Services 製品を各環境にインストールします。
- Financial Management Web および Financial Management サービスを同じマシン上にインストールする場合は、同じ EPM Oracle インスタンスでインストールおよび構成される必要があります。
- IIS 6.0 の場合、64 ビットのコンポーネントがすでにインストールされている 64 ビットのシステムには、一部の 32 ビットのコンポーネントをインストールできません。32 ビットのコンポーネントを別のシステムにインストールするか、32 ビットのシステムにすべての 32 ビットのコンポーネントをインストールする必要があります。具体的には、Strategic Finance (32 ビット)を Financial Management (64 ビット)が配置されている同じコンピュータに配置できません。32 ビットのプラットフォームでは、すべての EPM System 製品が共存可能で

す。IIS 7 (Windows 2008 システムでのデフォルト)の場合、32 ビットと 64 ビットのコンポーネントが共存可能です。

- Web Analysis は、Web Analysis と同じ Shared Services Registry に登録される Financial Management サーバーにのみ、Financial Management データ・ソースの接続をサポートします。

Oracle BI EE の EPM System との統合

- Oracle BI EE または BI Publisher がインストールされているマシンに EPM System をインストールする場合は、2 つの異なるミドルウェア・ホームにインストールします。EPM System および Oracle BI EE の将来のパッチ・セットは、異なるときにリリースされるため、マージされた Fusion Middleware ホームのアップグレードによって制約となる場合があります。

Fusion Middleware の詳細は、<http://www.oracle.com/technetwork/documentation/index.html#middleware> を参照してください。

- Oracle BI EE または BI Publisher を EPM Workspace と統合する予定の場合は、インストール後、Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide を参照してください。
- EPM Workspace リリース 11.1.2.2 と Oracle BI EE リリース 11.1.1.7 を統合するには、Oracle® Fusion Middleware System Oracle Business Intelligence Enterprise Edition の管理者ガイドを参照してください。Oracle BI EE リリース 10g との EPM Workspace 統合を使用していた場合は、Oracle BI EE リリース 11.1.1.7 にアップグレードできますが、EPM Workspace との統合はアップグレードされません。Oracle® Fusion Middleware System Oracle Business Intelligence Enterprise Edition の管理者ガイドに記述されている手順を使用して、統合を再構成する必要があります。
- (UNIX) Oracle BI EE を Essbase のデータ・ソースとして使用する場合は、構成後、Essbase を起動する前に、Oracle BI EE ドライバ用に追加環境変数を設定する必要があります。Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide を参照してください。
- Financial Management との Oracle BI EE の統合の場合、Oracle BI EE をインストールした後、Financial Management データ・ソースからのインポートまたはデータ・ソースへの接続設定を行う前に、Oracle BI JavaHost プロセスを実行しているシステムに Financial Management ADM ドライバがインストールされているようにする必要があります。

次のタスクを実行します:

1. EPM System インストーラを使用して、Oracle BI JavaHost プロセスを実行しているマシンで Financial Management ADM ドライバをインストールします。
2. EPM System コンフィグレータを使用して、Shared Services と Financial Management のデータベース接続の詳細を指定します。「DCOM の構成」ページで、Financial Management サーバーに接続中のユーザーであるドメイン・ユーザーを指定します。

3. 構成後、Financial Management で必要な環境変数が含まれるように、Oracle BI JavaHost プロセスを実行中の各システムで `opmn.xml` を編集します。
Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide を参照してください。

EPM System 製品のインストール

EPM System は、グラフィカル・ユーザー・インターフェースを使用するか、コンソール・モード・インターフェースを使用するか、またはサイレント・モードのインストール応答ファイルを使用してインストールできます。

EPM System 製品をインストールする場合は、実行するインストールのタイプを選択します。

- 新規インストール(アップグレードにも使用)。
- リリース 11.1.2.0、11.1.2.1 またはリリース 11.1.2.2 からリリース 11.1.2.3 に移行する場合はメンテナンス・リリースを適用します。
- このリリースを再インストール

インストールについて次の点に注意してください:

- Oracle SOA Suite および WebLogic Server はすでにインストールされているが、EPM System 製品はまだインストールされていない場合、インストール時に、まず「メンテナンス・リリースの適用」を選択して最新の WebLogic Server をインストールしてから、「新規インストール」を選択して EPM System 製品のインストールに進みます。
- Windows マシンでは、インストールおよび構成に Administrator ユーザーを使用しないでください。管理者権限のあるユーザーとして、EPM System インストーラおよび EPM System コンフィグレータを実行します。すべての EPM System 製品と同じユーザーとして、EPM System Diagnostics をインストールし、構成して実行します。Windows 2008 を使用している場合は、UAC を無効にした状態でインストールします。EPM System 製品をインストール、構成および実行するには、UAC を無効にする必要があります。UAC は、エンドユーザーのクライアント・デスクトップで有効化できます。
- UNIX マシンで、root ユーザーを使用してインストールおよび構成を行わないでください。すべての EPM System 製品と同じユーザーとして、EPM System Diagnostics をインストールし、構成して実行します。UNIX マシンでは、すべての Oracle 製品について、インストールを行うユーザーは同じグループに属している必要があります。このグループには、中央インベントリ(oraInventory) に対する書込み権限が必要です。
- EPM System インストーラを、Oracle Universal Installer の別のインスタンス (Oracle Database のインストーラなど) の実行中に実行することはできません。
- UNC アドレスからではなく、マップ済ドライブから EPM System インストーラを実行します。

▶ EPM System 製品をインストールするには:

1 方法を選択します:

- (Windows) EPM System インストーラファイルを抽出したルート・ディレクトリで `installTool.cmd` をダブルクリックします。
- (Windows) Windows コンソールで、EPM System インストーラ・ファイルを抽出したルート・ディレクトリに移動し、`installTool.cmd -console` と入力します。
- サイレント・インストールの応答ファイルを作成します。94 ページの「サイレント・インストールの実行」を参照してください。
- (UNIX) EPM System インストーラ・ファイルを抽出したルート・ディレクトリに移動し、`./installTool.sh` と入力します。
- (UNIX) EPM System インストーラ・ファイルを抽出したルート・ディレクトリに移動し、`./installTool.sh -console` と入力します。

`-tmp` パラメータを使用すると、他の `tmp` ディレクトリを指定できます。例: `./installTool.sh -tmp /templocation。`

EPM System インストーラは起動中に初期チェックを実行します。Windows 2008 システムで User Account Control (UAC) が有効になっているというメッセージが表示された場合は、UAC を無効にして再起動してから、EPM System インストーラを再起動します。

EPM System インストーラが起動します。

ヒント: EPM System インストーラの最初のページは、EPM System インストーラ・ウィンドウから離れたり、初期状態のウィンドウの位置を変更したりすると、他のウィンドウの背後に隠れて開く場合があります。ウィザードの最初のページに切り替えるには、[Alt] を押しながら [Tab] を押します。

2 言語を選択します。

EPM System インストーラ全体を通して、選択した言語でのインストールにコンポーネントが利用できない場合、コンポーネントはアスタリスク(*)が付いて網掛けで表示されます。

3 EPM System インストーラの各ページを確認して完了し、「次へ」をクリックして次のページに移動します。

コンソール・モードで、必要な選択内容の隣に数値を入力します。

ヒント: EPM System インストーラは、インストールするアセンブリのリストを準備した後に開始し、進行状況インディケータを表示します。選択した製品の数によっては、数分かかる場合があります。EPM System インストーラにより、各アセンブリのインストールの完了を示す進行状況が表示されます。

次の表に、EPM System インストーラの各ページの詳細情報を参照できるリンクを示します。

表 11 EPM System インストーラのページ

ページ	参照
ようこそ	90 ページの「ようこそ」
宛先/ミドルウェア・ホーム	91 ページの「宛先/ミドルウェア・ホーム」
インストール・タイプ	92 ページの「インストール・タイプ」
製品の選択	93 ページの「製品の選択」
確認	94 ページの「確認」

- 4 インストールが完了したら、「構成」をクリックまたは選択して EPM System コンフィグレータを使用して製品を構成するか、または「終了」をクリックまたは選択して EPM System インストーラを閉じます。

注： Financial Close Management をインストールする場合、EPM System コンフィグレータを使用した構成を行う前に追加手順を実行する必要があります。行うプロセスについては、[73 ページの「Financial Close Management \(Close Manager および Account Reconciliation Manager\)のインストール・チェックリスト」](#)を参照してください。

ようこそ

- ▶ インストールを続行する前に、前提条件を十分に確認してください。システムが EPM System インストーラを実行するための前提条件を満たしていることを確認したら、「次へ」をクリックまたは選択してインストールを続行します。

EPM System インストーラでは、次のことが確認されます：

- コンピュータ・ホスト名が IP アドレスに解決されるかどうか。マシンのホスト名が IP アドレスに解決される場合、EPM System Installer によって、警告が表示されます。この問題を解決し、IP アドレスではなくホスト名を指定してから続行することをお勧めします。
- システムにサポートされているオペレーティング・システムがあるかどうか。
- インストールを実行するための最小メモリー要件をシステムが満たしているかどうか。
- インストールしているユーザーに管理者権限があるかどうか(Windows のみ)。
- システムが環境変数の前提条件を満たしているかどうか。
- インベントリが書込み可能であるか。
- 使用可能な一時スペースが 1GB あるかどうか。
- WebLogic Server の基本的なインストール前チェック。

チェック・マークは、システムが EPM System Installer の前提条件を満たしていることを示します。前提条件項目のいずれかにチェック・マークが表示されていない状態で続行を選択した場合、インストールが成功しない場合があります。

ヒント: hosts ファイルを使用してホスト名を解決する場合、ホスト名は hosts ファイルの最初のエントリによって解決されます。分散環境で通信の問題を予防するには、完全修飾名が Shared Services レジストリに保管されるように、hosts ファイルの最初のエントリがマシンの完全修飾ドメイン名になるようにしてください。

宛先/ミドルウェア・ホーム

▶ インストール先の場所を指定するか、またはその場所を参照して選択し、「次へ」をクリックまたは選択します。デフォルトの場所は Oracle/Middleware です。

指定した宛先がミドルウェア・ホームになります。デフォルトでは、EPM System インストーラによってデフォルトの EPM Oracle ホームがミドルウェア・ホームの下に作成されます。デフォルトの場所は Oracle/Middleware/EPMSys11R1 です。

[17 ページの「ミドルウェア・ホーム、EPM Oracle ホームおよび EPM Oracle インスタンスについて」](#)を参照してください。

インストール時、EPM_ORACLE_HOME に指定するディレクトリに、次の記号の組合せを使用しないでください:

/t

\t

\b

ミドルウェア・ホームについて次の点に注意してください:

- このマシンにインストールする予定のすべての製品をインストールするために必要なディスク・スペースが十分であることを確認してください。
ディスク・スペースの要件は、[36 ページの「ディスク・スペースと RAM」](#)を参照してください。
- 環境内の各マシンについてミドルウェア・ホームを選択します。
分散環境では、EPM Oracle ホームはすべてのマシンで同じである必要があります。たとえば、EPM Oracle ホームのパスは、構成する最初のマシンで Oracle/Middleware である場合、配置内のすべてのマシンで Oracle/Middleware である必要があります。

- このマシンに EPM System 製品を再インストールする場合、インストール内容に製品を追加する場合、またはメンテナンス・リリースを適用する場合は、ミドルウェア・ホームの既存の場所がデフォルトのインストール先として記載され、変更はできません。
- 宛先のパスに半角スペースは使用できません。たとえば、c:\Program Files は使用できません(ショート・パス表記を使用する場合を除く)。
- 先頭の文字は英数字である必要があります。

注： 前に EPM System Installer を使用し、インストールの選択内容をファイルに保存している場合は、選択内容をロードしてインストールの宛先と製品を事前に移入できます。同じマシンに同じ製品をインストールする場合、この方法は便利です。「ロード」をクリックして、保存済の選択内容のファイルに移動し、「開く」をクリックします。

インストール・タイプ

▶ インストール・タイプを選択し、「次へ」をクリックまたは選択します。インストール・タイプがマシンに適していない場合、オプションは使用できません。

注： 単一のセッションで複数のインストール・タイプを組み合わせることはできません。たとえば、1つの製品の新規インストールを実行すると同時に、別の製品の再インストールを実行することはできません。

次のインストール・タイプから選択します：

- 新規インストール
 - このコンピュータに初めて EPM System 製品をインストールしている場合は、このオプションを選択します。
 - 最初にインストールしなかったコンポーネントを追加でインストールする場合は、このオプションを選択します。
 - EPM System 製品の前のリリースからアップグレードする場合はこのオプションを選択します。EPM System 製品の前のリリースが存在するマシンでは新しいインストールの場所に、または新しいマシンにインストールする必要があります。
- このリリースを再インストール

既存のインストールを修復する場合など、この EPM System 製品のこのバージョンをすでにインストールし、それを再インストールする必要がある場合は、このオプションを選択します。

EPM System 製品を再インストールする場合は、まずすべての EPM System サービスを停止する必要があります。
- メンテナンス・リリースの適用

リリース 11.1.2.0、11.1.2.1 または 11.1.2.2 をすでにインストールしている場合は、このオプションが選択されています。

メンテナンス・リリースを適用している場合は、まずすべての EPM System サービスを停止する必要があります。

メンテナンス・リリースを適用する場合、EPM System インストーラによってリリースがすべてのインストール済 11.1.2.0、11.1.2.1 または 11.1.2.2 製品に適用されます。メンテナンス・リリースを配置内の一部の製品のみに適用することはできません。

製品の選択

- ▶ インストールする製品と製品コンポーネントを選択し、「次」をクリックするか選択します。

「メンテナンス・リリースの適用」がインストール・タイプの場合、EPM System インストーラにより、リリースがすべてのインストール済 11.1.2.0、11.1.2.1 または 11.1.2.2 製品に適用されます。メンテナンス・リリースを配置内の一部の製品のみに適用することはできません。「製品の選択」では、製品の選択または選択解除はできません。

次の表に、製品選択のオプションを示します。

表 12 製品選択のオプション

アクション	詳細
インストールする製品コンポーネントを選択します。	エントリを展開および縮小すると、各製品およびコンポーネントに対して特定のオプションを選択または選択解除できます。
すべて選択解除/すべて選択	すべての製品を選択するには「すべて選択」、すべての製品を選択解除するには「すべて選択解除」を選択します。このオプションは、メンテナンス・リリースを適用する場合は使用できません。
使用できない製品の表示/非表示	インストール・アセンブリが使用可能な製品のみを表示するには、「使用できない製品のコンポーネントを非表示」を選択します。 すべての製品を表示するには、「使用できない製品のコンポーネントを表示」を選択します。

通常は、任意のコンピュータに任意の組合せのコンポーネントをインストールできます。製品の選択について、次のことに注意してください:

- アセンブリが正しい場所にダウンロードされており、選択したコンポーネントが、インストール先のプラットフォームでサポートされている場合のみ、製品をインストールできます。製品が、「製品の選択」ページで使用不可の場合、アセンブリが正しい場所にあることを確認してください。
- 製品のコンポーネントを選択すると、その情報およびステータスが画面の下部に表示されます。インストールに Microsoft Internet Information Server (IIS)が必要で、それがインストールされていない場合は、画面の下部に警告が表示され、IIS をインストールするまで先に進めません。サポートされていないプラットフォームにインストールしようとする、警告が表示されます。
- Shared Services および EPM Workspace Java Web アプリケーションは、Foundation Services Java Web アプリケーションのインストール時にインストールされます。

- 「新規インストール」を選択し、製品のこのリリースをすでにインストールしている場合、その製品は「製品の選択」ページに表示されません。
- コンポーネントが選択されていても使用できない場合があります(選択解除はできません)。これは、選択された別のコンポーネントに必要なコンポーネントです。

確認

- ▶ インストールする製品の要約を確認します。必要に応じて「戻る」をクリックまたは選択して訂正します。「次へ」をクリックまたは選択してインストールを開始します。

ディスク・スペースが不十分な場合は、EPM System インストーラによって警告が表示されます。

「インストール・タイプ」列には、次のいずれかが表示されます:

- これが新規インストールの場合、またはアップグレードとして新規インストールを実行している場合は、「インストール」。
- この EPM System 製品の同じリリースの再インストールの場合は、「再インストール」。
- EPM System をリリース 11.1.2.0、11.1.2.1 または 11.1.2.2 からリリース 11.1.2.3 へ移行するメンテナンス・インストールの場合は、「メンテナンス」。

インストールの選択内容を保存して、別のコンピュータで同じインストールを実行するかまたはサイレント・インストールの応答ファイルのベースとして使用するには、[94 ページの「インストールの選択項目の保存」](#)を参照してください。

インストールの選択項目の保存

別のコンピュータ上にこの同じコンポーネント・セットをインストールする場合は、インストールの選択項目をファイルに保存できます。すると、インストール時に別のコンピュータに選択項目をロードして、EPM System インストーラのページの「宛先」および「製品の選択」を事前に設定できます。

- ▶ インストールの選択項目を保存するには、「保存」をクリックまたは保存して場所を参照し、ファイル名を指定して「保存」をクリックまたは選択します。

この手順では、サイレント・インストールの応答ファイルの基として使用できる編集可能なファイルが作成されます。応答ファイルの使用の詳細は、[96 ページの「保存した選択項目のロード」](#)を参照してください。

サイレント・インストールの実行

サイレント・インストールでは、各マシンでインストール設定を手動で指定せずに EPM System 製品を複数のコンピュータにインストールできるように、インストール・プロセスが自動化されます。

サイレント・インストールを使用可能にするには、インストールの設定を応答ファイルに記録します。次に、応答ファイルに保存されたインストール・オプションを使用して、コマンド・ラインからサイレント・インストールを実行できます。

▶ インストール設定を記録してサイレント・インストールを実行するには:

- 1 **EPM System** インストーラを含むディレクトリに移動します。
- 2 コマンド・ラインから次のコマンドを実行します:

```
installTool.cmd -record  
filename
```

Windows の場合、または

```
installTool.sh -record  
filename
```

UNIX の場合

filename には、応答ファイルの絶対パスまたはファイル名が含まれます。

ファイルは XML フォーマットで保存されますが、.xml 拡張子でファイルを保存する必要はありません。

EPM System インストーラが起動します。

- 3 **EPM System** インストーラの作業を、記録対象となるオプションを指定しながら進めます。

インストール・オプションは、応答ファイルに記録されます。応答ファイルのインストール・オプションは後で変更できます。

これで、サイレント・モードでインストールを実行する準備ができました。

- 4 応答ファイルを、インストールを実行するマシンにコピーします。また、インストールするマシンからアクセスできるネットワーク・ドライブにファイルをコピーできます。
- 5 コマンド・ラインから次のコマンドを入力します:

```
installtool.cmd -silent  
filename
```

Windows の場合、または

```
installtool.sh -silent  
filename
```

UNIX の場合。

インストールはバックグラウンドで実行されます。

アップグレードについての注意

サイレント応答ファイルは、EPM System リリース 11.1.1.0、11.1.2.1、11.1.2.2 とリリース 11.1.2.3 との間で互換性がありません。EPM System 製品の前のリリースと使用するために、サイレント応答ファイルを作成した場合、EPM System リリース 11.1.2.3 と使用するには再作成する必要があります。

保存した選択項目のロード

EPM System インストーラからインストールの設定も記録できます。

- ▶ インストール時にインストールの設定を記録するには、インストールの確認ページで、「保存」をクリックまたは選択して場所を参照し、ファイル名を指定して「保存」をクリックまたは選択します。ファイルは、サイレント・インストールの場合と同じフォーマットで保存されます。
- ▶ 同じインストール先および製品コンポーネントの選択項目を使用してインストールを再現するには、EPM System インストーラを開始して、「宛先」ページで「ロード」をクリックまたは選択し、保存した選択ファイルを参照して「開く」をクリックまたは選択します。

応答ファイルの変更

応答ファイルを作成した後、それを変更してインストール・オプションを特定のマシン用にカスタマイズできます。たとえば、すべての製品のマスター・サイレント・ファイルを作成した後、各マシンのマスター・サイレント・ファイルを作成し、ミドルウェア・ホームの場所を変更して、このマシンにインストールする製品コンポーネントのみを保持します。

- ▶ 応答ファイルを変更するには:
 - 1 任意のテキスト・エディタで応答ファイルを開きます。このファイルは XML フォーマットです。
 - 2 次のオプションを使用してファイルを編集します。
 - <HyperionHome> - ミドルウェア・ホームの場所。
 - <SelectedProducts> - 特定の層にインストールする製品コンポーネント。<Product name>、<ProductComponent name>、<InstallTier>、および <Component>に変更を加えます。
 - <Product name> - 製品の名前。製品名は、XML 属性なので引用符で囲みます。
 - <ProductComponent name> - 製品のコンポーネント。コンポーネント名は、XML 属性なので引用符で囲みます。
 - <InstallTier> - コンポーネント・インストール用のインストール層 (Client、Service、WebApplication)。
 - <Component> - インストールするサービス。
 - 3 ファイルを XML フォーマットで保存します。

EPM System クライアントのインストール

サブトピック

- [クライアントのインストールの前提条件](#)
- [クライアント・インストーラのダウンロードと抽出](#)
- [個別の EPM System クライアントのインストール](#)
- [EPM Workspace からの EPM System クライアントのインストール](#)
- [EPM System クライアントの EPM System インストーラからのインストール](#)
- [クライアントのサイレント・インストールの実行](#)
- [デフォルト・インストール・ディレクトリ](#)

クライアントのインストールの前提条件

EPM System クライアントをインストールする前に次の前提条件を確認します。

- **Planning オフライン・クライアント:** Microsoft Excel と Smart View を同じマシンにインストールします。

Planning Java Web アプリケーションは同じマシンにインストールされている必要はありませんが、稼働中である必要があります。

Planning オフラインは、64 ビットのオペレーティング・システムではサポートされませんが、64 ビットの Smart View インストールではサポートされません。Smart View とともに Planning オフラインを使用する場合、32 ビット・バージョンの Smart View および 32 ビット・バージョンの Microsoft Office を使用する必要があります。

- **予測プランニング:** Microsoft Excel と Smart View を同じマシンにインストールし、Planning にアクセスできるようにします。
- **Smart View:** Microsoft Excel を「Visual Basic」オプションを使用してインストールします。Smart View には .Net 4.0 が必要です。
- **Strategic Finance:** Strategic Finance とともに Smart View を使用するには、Strategic Finance クライアントをインストールする前に Smart View クライアントをインストールします。
- **Interactive Reporting:** ユーザーが Interactive Reporting クライアントを(すべてのユーザーが使用できる機能により)インストールした後、後続ユーザーは Dashboard Studio および Dashboard Architect アプリケーションの実行のために、regServers.bat スクリプト(EPM_ORACLE_HOME\products\biplus\bin に配置)を実行する必要があります。

クライアント・インストーラのダウンロードと抽出

個別の EPM System クライアントのインストールおよび EPM Workspace からの EPM System クライアントのインストールの場合は、クライアント・インストーラを使用します。

▶ EPM System クライアント・インストーラをダウンロードおよび抽出するには:

- 1 ローカル・コンピュータで、`client_installer_folder` を作成します; たとえば、`EPM_Clients_unzipped` です。
- 2 Oracle Software Delivery Cloud から、`ClientInstallers-11123.zip` をダウンロードします。
- 3 ダウンロードしたファイルの中身を、[手順 1](#) で作成したフォルダに抽出します。

ダウンロードしたファイルの中身を抽出すると、次のようにインストーラ・ファイルを含むサブフォルダがクライアント・インストーラ・フォルダに作成されます:

- `DisclosureManagement/DiscManAddIn/DiscManSetup.msi`
- `DisclosureManagement/taxodesigner/TaxonomyDesigner.msi`
- `EPMAClients/EPMAClients.exe`
- `EssbaseAdministrationServicesConsole/EASConsole.exe`
- `EssbaseClient/EssbaseClient.exe`
- `EssbaseStudio/EssbaseStudioConsole.exe`
- `FinancialManagementClient/HFMClient.exe` および `HFMClientx64.exe`
- `FinancialReportingStudio/FinancialReportingStudio.exe`
- `OracleInteractiveReportingClients/OracleInteractiveReportingClients.exe`
- `Planning/OfflinePlanning.exe` および `PlanningSVExtensions.msi`
- `PredictivePlanning/predictiveplanning.exe` および `predictiveplanning-x64.exe`
- `ProductionReportingRemoteClient/OracleProductionReportingRemote.exe`
- `Smartview/SmartView.exe` および `Smartview/SmartView-x64.exe`
- `StrategicFinanceClient/HSFClient.exe` および `HSFClient-x64.exe`

個別の EPM System クライアントのインストール

サブトピック

- [EPM System クライアント・インストーラの実行](#)
- [コマンドラインからの EPM System クライアント・インストーラの実行](#)

ただし、次の EPM System クライアントには、独自の Windows インストーラが用意されています。

- Disclosure Management
- Integration Services コンソール・クライアント

EIS サーバーが EPM System Installer で選択された場合は常にインストールします。

- Essbase Administration Services コンソール
- Essbase クライアント
Essbase クライアント・インストーラは、Windows のみです。UNIX では、Essbase クライアントは Essbase サーバーとともにインストールされます。
- Essbase Studio コンソール
- Financial Management コンソール
- Financial Reporting Studio
- Interactive Reporting (Oracle Hyperion Interactive Reporting Studio および Dashboard Development Services)
- プランニング管理拡張機能
- Planning オフライン・クライアント
- 予測プランニング(Planning のモジュール)
- Performance Management Architect (ファイル・ジェネレータ)
バッチ・クライアントは、インストールで EPMA Web 層が選択されると常に EPM System インストーラによってインストールされます。
- Production Reporting リモート・クライアント
Production Reporting Activator、Oracle Hyperion SQR Production Reporting Developer および Production Reporting Viewer は必ず Production Reporting エンジンとともにインストールされます。
- Smart View
- Strategic Finance クライアント

アップグレードについての注意

Windows インストーラを使用して以前のリリースでクライアントをインストールした場合は、以前のリリースのクライアントをアンインストールする必要はありません。

EPM System インストーラを使用して以前のリリースのクライアントをインストールした場合は、Windows インストーラを使用して新規バージョンのクライアントをアンインストールする前に、クライアントをアンインストールする必要があります。

EPM System クライアント・インストーラの実行

注： ターミナル・サービスを使用してクライアントをインストールする場合は、セッションをインストール・モードに切り替えて(change user /install) から、EPM System クライアント・インストーラを実行します。

▶ EPM System クライアント・インストーラを実行するには:

- 1 client installer folder でクライアント・インストーラのサブフォルダを開き、クライアント・インストーラのファイル名をダブルクリックします。

サブフォルダおよびインストーラの名前は、97 ページの「クライアント・インストーラのダウンロードと抽出」を参照してください。

Financial Management、予測プランニング、Smart View および Strategic Finance には、32 ビット版および 64 ビット版の両方のインストーラがあることに注意してください。Financial Management の場合、64 ビット版インストーラは 64 ビットの一部のクライアント・コンポーネントをインストールしますが、Financial Management とその依存ファイルは 32 ビットです。

- 2 インストール・ウィザードを進め、インストールが完了したら「終了」をクリックします。

注： Smart View の関数グリッドを有効にするには、Financial Reporting Smart View プロバイダをインストールします。EPM_ORACLE_HOME/common/epmstatic/reporting_analysis/client に移動して、FRSVPProvider.msi を実行し、Microsoft Excel を再起動します。

コマンドラインからの EPM System クライアント・インストーラの実行

コマンドラインから以下のパラメータを使用して EPM System クライアント・インストーラを実行することができます。

表 13 クライアント・インストールのコマンドライン・オプション

オプション	使用方法
/v" command line options "	クライアント・インストーラに渡されるコマンドライン・オプションを指定します。
/s	サイレント・インストーラとしてクライアント・インストーラを実行します。
/qn	インストールを非対話式にします。
INSTALLDIR=	インストール・ディレクトリを指定します。 注： EPM_ORACLE_HOME 環境変数が定義されている場合は、クライアントのインストールで INSTALLDIR=の値は無視され、クライアントは EPM_ORACLE_HOME にインストールされます。
l*v ログ・ファイル・パスおよび名前	指定されたファイルにインストール情報を記録します。

EPM Workspace からの EPM System クライアントのインストール

EPM Workspace をインストールして構成してある場合、次のクライアントのインストーラをダウンロードして EPM Workspace から起動することができます。

- Disclosure Management タクソノミ・デザイナ
- Financial Management クライアント
- オフライン・プランニング

- プランニング管理拡張機能
- 予測プランニング
- Smart View
- Strategic Finance クライアント

▶ EPM Workspace から EPM System クライアント・インストーラを実行するには:

- 1 クライアント・インストーラをクライアント・インストーラ・フォルダからコピーし、EPM Workspace サーバー上のフォルダに配置します。

クライアント・インストーラ・フォルダの情報は、97 ページの「クライアント・インストーラのダウンロードと抽出」を参照してください。

EPM Workspace のクライアント・インストーラの配置場所については、表 14 を参照してください

表 14 EPM Workspace のクライアント・インストーラの配置場所

EPM System クライアント	クライアント・インストーラ	EPM Workspace 内の場所
Disclosure Management タクソノミ・デザイナー	DisclosureManagement/taxodesigner/TaxonomyDesigner.msi	EPM_ORACLE_HOME/common/epmstatic/wspace/disclosure_mgmt/taxodesigner/TaxonomyDesigner.msi
Financial Management クライアント	FinancialManagementClient/HFMClient.exe 注： Financial Management クライアントの 64 ビットバージョンは EPM Workspace からインストールできません。	EPM_ORACLE_HOME/common/epmstatic/wspace/hfm/HFMClient.exe
オフライン・プランニング	Planning/OfflinePlanning.exe	EPM_ORACLE_HOME/common/epmstatic/wspace/OfflinePlanning/Client/OfflinePlanning.exe
プランニング管理拡張機能	Planning/PlanningSVExtensions.msi	EPM_ORACLE_HOME/common/epmstatic/wspace/PlanningSmartviewExtension/PlanningSVExtension.msi
予測プランニング	PredictivePlanning/predictiveplanning.exe 注： 予測プランニングの 64 ビットバージョンは EPM Workspace からインストールできません。	EPM_ORACLE_HOME/common/epmstatic/wspace/predictive_planning/predictiveplanning.exe
Smart View	Smartview/SmartView.exe 注： EPM Workspace から 64 ビット・バージョンの Smart View をインストールできません。	EPM_ORACLE_HOME/common/epmstatic/wspace/SmartView.exe

EPM System クライアント	クライアント・インストーラ	EPM Workspace 内の場所
Strategic Finance クライアント	StrategicFinanceClient/HSFClient.exe 注： Strategic Finance クライアントの 64 ビットバージョンは EPM Workspace からインストールできません。	EPM_ORACLE_HOME/common/epmstatic/wspace/hsf/Client/HSFClient.exe

- 「ツール」、「インストール」の順に選択し、インストールする製品を選択します。

EPM System クライアントの EPM System インストーラからのインストール

EPM System インストーラを使用して、固有の Windows インストーラのない EPM System クライアントをインストールできます。

- ▶ EPM System クライアントを EPM System インストーラからインストールするには:
 - 1 EPM System インストーラを起動します。
 - 2 「製品の選択」パネルで、インストールするクライアントを選択します。
 - 3 EPM System インストーラのパネルを使用して続行します。

クライアントのサイレント・インストールの実行

管理者はサイレント・インストールを有効にできます。サイレント・インストールが有効な場合、サイレント・インストール・コマンドをスクリプトに含めてプロセスを自動化できます。これによって、インストールを実行するたびに設定を指定する必要がなくなります。

- ▶ Disclosure Management 以外の EPM System クライアントのサイレント・インストールを行う場合、次のコマンドを使用します:

```
installer file name /s /v"/qn INSTALLDIR=installation directory /1*v log file path and name"
```

- ▶ Disclosure Management のサイレント・インストールを行う場合、次のコマンドを使用します:

```
DiscManSetup.msi /qn INSTALLDIR= installation directory /1*v log file name
```

注： インストーラ・ファイルの名前については、[97 ページの「クライアント・インストーラのダウンロードと抽出」](#)を参照してください。コマンドライン・パラメータの詳細は、[表 13](#)を参照してください。

デフォルト・インストール・ディレクトリ

表 15 デフォルトのクライアント・インストール・ディレクトリ

クライアント	デフォルト・インストール・ディレクトリ
Disclosure Management	c:/Program Files/Oracle Hyperion Disclosure Management
管理サービス・コンソール	EPM_ORACLE_HOME/products/Essbase/eas/console
Essbase クライアント	EPM_ORACLE_HOME/products/Essbase/EssbaseClient
Essbase Studio コンソール	EPM_ORACLE_HOME/products/Essbase/EssbaseStudio/console
Financial Management クライアント	EPM_ORACLE_HOME/products/FinancialManagement
Financial Reporting Studio	EPM_ORACLE_HOME/products/FinancialReportingStudio
Interactive Reporting	EPM_ORACLE_HOME/products/biplus
Performance Management Architect	EPM_ORACLE_HOME/products/Foundation/BPMA/EPMAFileGenerator
プランニング管理拡張機能	32 ビット C:..Program Files/Oracle/Planning extension for Smart View 64 ビット C:..Program Files (x86)/Oracle/Planning extension for Smart View
Planning オフライン	EPM_ORACLE_HOME/products/OfflinePlanning
予測プランニング	C:/Program Files/Oracle/Crystal Ball
Production Reporting	EPM_ORACLE_HOME/products/biplus
Smart View	C:/Oracle/SmartView
Strategic Finance	EPM_ORACLE_HOME/products/hsf/Client

6

新しい配置でのEPM System製品の構成

この章の内容

EPM System コンフィグレータについて	105
構成の前提条件	106
構成順序	111
分散環境での製品の構成	113
SSL 使用可能環境での製品の構成	114
手動配置用の製品の構成	114
WebSphere Application Server 用の製品の構成	115
製品構成タスクの要約	115
EPM System 製品の構成	118
EPM System コンフィグレータのタスク参照	123
サイレント構成の実行	162
スタンドアロン・モードでの Essbase の設定	164
UNIX ベースの EPM System 配置での Financial Management、Financial Reporting およ び Web Analysis の Windows への配置	165
構成中の処理	165
構成のトラブルシューティング	165

EPM System コンフィグレータについて

EPM System コンフィグレータは、コンピュータに初めて EPM System 製品をインストールするときにインストールされ、そのコンピュータ上にインストールされるすべての製品の構成に使用されます。EPM System 製品がインストールされる各コンピュータ上で EPM System コンフィグレータを使用します。(EPM System クライアントは構成の必要はありません。)

この章では、構成ワークシートを使用して、構成タスクをプランニングし、障害リカバリが必要になった場合に備えて構成手順をドキュメント化します。

構成の前提条件

サブトピック

- [ホスト名の確実な解決](#)
- [リポジトリ作成ユーティリティを使用したインフラストラクチャのスキーマの作成](#)
- [Financial Close Management の構成の前提条件](#)

構成の前提条件の注意:

- Foundation Services をホストするマシン以外に配置する場合、WebLogic Server 管理サーバーが Foundation Services のホスト・マシン(FNDHOST1)で確実に実行されるようにします。Foundation Services のホスト・マシンで、「スタート」、「すべてのプログラム」、「Oracle WebLogic」、「ユーザー・プロジェクト」、「EPMSystem」、「WebLogic Server の管理サーバーの開始」の順に選択して、WebLogic Server 管理サーバーを開始します。
- ホスト名が配置の各マシンに対し確実に適切に解決されるようにします。107 ページの「[ホスト名の確実な解決](#)」を参照してください。
- Java Web アプリケーションを単一の管理対象サーバーに配置する場合は、WebLogic Server の使用と、64 ビットオペレーティング・システムが必要です。
- UNIX システムで、ulimit が 4096 であることを確認します。コマンド:
ulimit -n で現在の ulimit の設定をクエリーできます。
- SSL 対応環境で EPM System 製品の配置を予定している場合、構成の前に、Oracle Enterprise Performance Management System Security Configuration Guide を参照してください。選択する SSL 実装により、構成時に選択するオプションが影響を受けます。オプションで、非 SSL を配置して SSL を使用するよう再構成できます。Oracle Enterprise Performance Management System Security Configuration Guide を参照してください。
- 次のいずれかの製品を使用する場合は、107 ページの「[リポジトリ作成ユーティリティを使用したインフラストラクチャのスキーマの作成](#)」を参照してください。
 - Financial Close Management
 - Profitability and Cost Management、および Profitability and Cost Management タスクを自動化するために Oracle Web Services Manager を使用する予定がある
 - FDMEE、および RuleService/SetupService を使用する予定または FDMEE と Account Reconciliation Manager、Peoplesoft Commitment Control for Budget Write-back and Validation または Fusion Financials for Budget Write-back を統合する予定がある。
 - Web サービスを使用している場合、Financial Management。
 - Provider Services、Essbase Web サービスを使用する場合。
- Financial Close Management を使用している場合は、109 ページの「[Financial Close Management の構成の前提条件](#)」を参照してください。

ホスト名の確実な解決

構成前に、ホスト名が配置の各マシンに対し確実に適切に解決されるようにします。EPM System は、ホスト名を解決する Java の正規ホスト名解決を使用します。Java で解決されるホスト名を検証するため、EPM System はユーティリティ (epmsys_hostname.bat) を提供します。

▶ ホスト名を確実に解決するには、次の手順に従います。

- 1 JAVA_HOME 変数を設定します。コマンド・プロンプトから、set JAVA_HOME=pathToJAVA と入力します。たとえば、EPM System Installer が Java に使用するデフォルトの場所の場合、次のコマンドを入力します: set JAVA_HOME=c:\oracle\middleware\jdk160_35。
- 2 EPM System ファイルの解凍先ディレクトリ(epm_unzipped など)から、epmsys_hostname.zip を解凍します。
- 3 コマンド・プロンプトで、EPM System ファイルの解凍先ディレクトリ(epm_unzipped など)に変更し、次のコマンドを入力します。

```
epmsys_hostname.bat
hostName
```

- 4 コマンドラインで結果を確認します。

例:

```
InetAddress details of host
hostName
Address is xx.xxx.xxx.xxxName is
hostName
Canonical Name is
hostName
.
mycompany
.com
```

- 5 ホストの詳細を確認できませんというエラーが表示された場合、ホスト名を解決するには、ローカルの hosts ファイルを作成し、このサーバーのエントリを追加します。

リポジトリ作成ユーティリティを使用したインフラストラクチャのスキーマの作成

リポジトリ作成ユーティリティ(RCU)を使用して、Oracle SOA Suite (SOA)や Oracle Web Services Manager (OWSM)などの異なる Oracle Fusion Middleware 製品をサポートする複数のスキーマを作成します。一部の EPM System 製品ではこれらのミドルウェア・テクノロジーを使用するため、RCU を使用して、ミドルウェア・インフラストラクチャをサポートするために必要なスキーマを作成する必要があります。

Financial Close Management、Profitability and Cost Management、FDMEE、Financial Management、Provider Services または Data Relationship Management とともに Oracle Web Services Manager を使用する場合は、これらの EPM System 製品を構成する前にリポジトリ作成ユーティリティ(RCU)をインストールする必要があります。RCU は、Oracle Web Services Manager (OWSM)とともに機能するために必要なスキーマを作成します。Oracle Web Services Manager は EPM Workspace とともに自動的にインストールされますが、構成はされません。

また、Financial Close Management は SOA テクノロジーに依存し、SOA スキーマの作成には RCU が必要です。次の手順を使用して、SOA および OWSM に必要なインフラストラクチャを作成します。

▶ リポジトリ作成ユーティリティを使用してスキーマを作成するには:

- 1 Oracle EDelivery 上の Oracle Enterprise Performance Management System メディア・パックから、リポジトリ作成ユーティリティをダウンロードします。
- 2 Installer-RCU フォルダに移動します。
- 3 rcuHome.zip をリポジトリ作成ユーティリティのインストール先へコピーして、内容を抽出します。
- 4 rcuHome/bin から、オペレーティング・システムの適切なファイルを使用して、リポジトリ作成ユーティリティを実行します:
 - Windows の場合は、rcu.bat を実行します。
 - UNIX の場合は、./rcu を実行します。

注: AL32UTF8 を使用しないデータベースの使用に関するメッセージはすべて無視します。

新しいデータベース・スキーマは「メタデータ・サービス」に必要で、EPM System 製品データベースを反映しません。

- 5 「作成」、「次へ」の順にクリックします。
- 6 「データベース接続の詳細」ページで、DBA または SYSDBA 権限を持つ sys などのユーザーを必ず指定します。
- 7 「コンポーネントの選択」ページで、以下のタスクを実行します:
 - Financial Close Management、Profitability and Cost Management、FDMEE、Financial Management、Provider Services または Data Relationship Management の場合: 「AS 共通スキーマ」を展開して、「Metadata Services」を選択します(まだ選択されていない場合)。
 - また、Financial Close Management の場合: 「SOA および BPM インフラストラクチャ」を展開し、次の SOA インフラストラクチャ・コンポーネントを選択します: 「SOA インフラストラクチャ」および「ユーザー・メッセージング・サービス」。(「Business Activity Monitoring」(BAM)を選択する必要はありません。)

Identity Management の場合、「OID」がデフォルトで選択されています。「Oracle Identity Federation」を選択しないでください。

- Oracle Web Services Manager の構成に必要なため、すべてのコンポーネントについて、「スキーマ所有者」の名前をメモしておいてください。
- 8 「スキーマ・パスワード」ページでは、「すべてのスキーマに同じパスワードを使用」を選択することをお勧めします。このパスワードをメモしておいてください。
 - 9 「要約」ページで、選択内容を見直してから「作成」をクリックします。
 - 10 「完了の要約」ページで、「閉じる」をクリックします。

リポジトリ作成ユーティリティの詳細については、『Oracle® Fusion Middleware Repository Creation Utility ユーザーズ・ガイド 11g リリース 1 (11.1.1)』を参照してください。

Financial Close Management の構成の前提条件

サブトピック

- [Oracle SOA Suite のインストール](#)
- [Oracle SOA Suite の構成と開始](#)

Financial Close Management を構成するには、事前に Oracle SOA Suite をインストール、構成および開始しておく必要があります。

Oracle SOA Suite のインストール

ここでは、Oracle SOA Suite のインストール手順の概要について説明します。この手順の詳細は、Oracle(R) Fusion Middleware Oracle SOA Suite インストールेशन・ガイド 11g リリース 1(http://download.oracle.com/docs/cd/E15523_01/doc.1111/e13925/overview.htm#sthref12)を参照してください。そこに記載されたロードマップには、後続の手順に関するドキュメント・リンクが含まれています。

▶ Oracle SOA Suite をインストールするには:

- 1 Oracle(R) Fusion Middleware Oracle SOA Suite インストールेशन・ガイド 11g リリース 1に記載されているすべての前提条件およびシステム要件を満たしていることを確認します。

注： Oracle SOA Suite を使用するには WebLogic Server が必要です。これは EPM System のデフォルトのインストールでインストールされます。

- 2 Oracle SOA Suite に必要なスキーマを作成するためのリポジトリ作成ユーティリティ (RCU)がインストールおよび実行済みであることを確認します。107 ページの「リポジトリ作成ユーティリティを使用したインフラストラクチャのスキーマの作成」を参照してください。
- 3 Oracle EDelivery 上の Oracle Enterprise Performance Management System メディア・パックから Oracle SOA Suite をダウンロードし、デフォルト・オプションを使用してインストールします。EPM System 製品がすでにインストールされている場合は、Oracle/Middleware などの同じミドルウェア・ホームにインストールしてください。

インストール中、EPM System インストール(MIDDLEWARE_HOME/JDK160_35)内の JDK を使用します。

- 4 インストールの完了後、Oracle SOA Suite を構成します。110 ページの「Oracle SOA Suite の構成と開始」を参照してください。

Oracle SOA Suite の構成と開始

109 ページの「Oracle SOA Suite のインストール」に記載されているとおりに Oracle SOA Suite がインストールされていることを確認します。Financial Close Management を構成する前に、事前に Oracle SOA Suite を構成および開始しておく必要があります。

ここでは、Oracle SOA Suite の構成手順の概要について説明します。この手順の詳細は、Oracle(R) Fusion Middleware Oracle SOA Suite インストレーション・ガイド 11g リリース 1 (http://download.oracle.com/docs/cd/E15523_01/doc.1111/e13925/configure.htm#CACEEJJJ)の Oracle SOA Suite の構成に関する章を参照してください。

► Oracle SOA Suite を構成するには:

- 1 WebLogic 管理サーバー・マシンから、Oracle Fusion Middleware 構成ウィザードを実行して WebLogic ドメインを構成し、そのドメインに構成する製品を選択します。構成ウィザードを開始するには、SOA_ORACLE_HOME/common/bin (または MIDDLEWARE_HOME/oracle_common/common/bin)から config.sh (UNIX)または config.cmd (Windows)を実行します。

EPM System と Oracle SOA Suite は同じドメインに配置する必要があることに注意してください。ドメインに関する選択は、配置シナリオによって異なります。

- EPM System 製品が未構成の新規の配置では、WebLogic ドメインを新たに作成する必要があります。
- 既存の配置で EPM System 製品がすでに構成され、Financial Close Management と Oracle SOA Suite を含むよう拡張しようとしている場合、EPM System の配置時に作成された既存の WebLogic ドメインを拡張する必要があります。

この手順には、次のような追加の詳細があることに注意してください。リストされているのはすべての手順でなく、Financial Close Management 固有の選択肢が必要な手順のみです。

- ドメインの作成/拡張時に、Oracle SOA Suite およびすべての Oracle 共通コンポーネント(Oracle Enterprise Manager、Oracle WSM Policy Manager、Oracle JRF WebServices Asynchronous サービスおよび Oracle JRF など)の中から、未選択の製品を選択します。
- デフォルトの JDK を選択します。本番モードを選択することをお勧めします。(WebLogic 管理サーバーの起動時、本番モードを使用する際にユーザー名とパスワードの入力を求められた場合、管理サーバー・ドメインの構成時に入力したユーザー名とパスワードを入力します。)

- JDBC データソースを構成する際、RCU の実行時に入力したデータベース詳細を入力します。
- サーバー・ポートはデフォルトの設定を使用します。デフォルトでは、管理サーバー・ポートは 7001 で soa_server1 ポートは 8001 です。

2 WebLogic 管理コンソールを使用して WebLogic 管理サーバーおよび Oracle SOA Suite 管理サーバーを開始します。

- WebLogic 管理サーバーを開始するには、MIDDLEWARE_HOME/
user_projects/domains/domainName/startWebLogic.cmd コマンドを実行します。
- SOA 管理対象サーバーを開始するには、MIDDLEWARE_HOME/
user_projects/domains/domainName/bin/startManagedWebLogic.cmd
soa_server1 コマンドを実行します。

Financial Close Management を構成する前に、Oracle SOA Server が実行されている必要があります。

ヒント： SOA の設定は通常 2 つのサーバーで実行されます。1 つはポート 7001 で実行され、Enterprise Management アプリケーションをホストする管理サーバー、もう 1 つはポート 8001 で実行され、SOA インフラストラクチャをホストする管理対象サーバーです。ドメインのユーザー名とパスワードを使用して <http://host:7001/em> にログインし、両方のサーバーのステータスを確認します。

次に行うプロセスについては、73 ページの「[Financial Close Management \(Close Manager および Account Reconciliation Manager\)のインストール・チェックリスト](#)」を参照してください。

73 ページの「[Financial Close Management \(Close Manager および Account Reconciliation Manager\)のインストール・チェックリスト](#)」に記載されている構成順序に従って、EPM System 製品を構成する必要があります。その後で、手動構成タスクを実行します。

構成順序

他の製品を正しく構成するために、Foundation Services をインストールして構成する必要があります。一般的に、新しい配置については、各マシンにおいて、全 EPM System 製品をそのマシン上にインストールされている製品に対して同時に構成することをお勧めします。デフォルトでは、EPM System コンフィグレータによってすべての製品があらかじめ選択されます。

アップグレードについての注意

EPM System 製品の以前のリリースからアップグレードする場合、構成順序の詳細は、228 ページの「[アップグレード・チェックリスト](#)」を参照してください。

構成順序の注意:

- 最初に Foundation Services を構成します。他の製品を正しく構成するために、Foundation Services をインストールして構成する必要があります。次に、配置内のマシンごとに、マシンにインストールされる製品について全 EPM System 製品を一度に構成します。
- 最後に Web サーバーを構成します。(Foundation Services の「Web サーバーの構成」タスクを選択します。)その後、Web サーバーを再起動し、EPM Workspace をリフレッシュします。Oracle HTTP Server を共有ドライブに構成した場合、Web サーバーを再起動し、EPM Workspace をリフレッシュするだけです。Web サーバーを再構成する必要はありません。[122 ページの「EPM Workspace のリフレッシュ」](#)を参照してください。
- 各マシンの構成を完了して、別のマシンの EPM System コンフィグレータを起動する前に、EPM System コンフィグレータを終了します。
- 分散環境で構成する場合は、すべてのマシンで Shared Services データベースを構成します。最初の実行で、Shared Services レジストリを設定します。後続のマシンの構成では、「前に構成された Shared Services データベースに接続」を選択し、これにより、マシンは Shared Services レジストリの場所を識別できます。
- 追加の製品を配置する場合は、Foundation Services をホストする各マシンで、Web サーバーを再構成してから再起動します(または Oracle HTTP Server を共有ドライブに構成した場合は再起動するだけです)。

次に、配置内の各 Foundation Services ホスト・マシン上の EPM Workspace をリフレッシュします。

[122 ページの「EPM Workspace のリフレッシュ」](#)を参照してください。

- 「データベースの構成」タスクを、「アプリケーション・サーバーへの配置」タスクと同時に、または以前に実行する必要があります。
- 分散環境で Financial Management を構成する場合は、すべての IIS Web アプリケーションおよび Java Web アプリケーションを同じマシンにインストールし、アプリケーション・サーバーへの配置タスクおよび Financial Management の Web サーバーの構成タスクを同じマシンで実行する必要があります。
- Financial Close Management を構成する場合、必要な構成順序があります。[73 ページの「Financial Close Management \(Close Manager および Account Reconciliation Manager\)のインストール・チェックリスト」](#)を参照してください。
- EPM System コンフィグレータを使用した自動 Web サーバー構成は、EPM System インストーラ(Oracle HTTP Server またはプロキシ Web サーバー)または IIS によってインストールされた Web サーバーに対してのみサポートされています。
- Financial Reporting サーバー、Web Analysis、FDMEE、Strategic Finance および FDM をホストするマシン上でこれまで実行したことがない場合は、Financial Management の「DCOM の構成」タスクも実行する必要があります。
- 構成を完了した後で、製品について必要な手動構成タスクを実行します。

EPM System のクラスタリングおよびスケーリングの詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide を参照してください。

EPM System コンフィグレータを使用して全構成タスクを完了した後で次の製品を構成します:

- Oracle Data Relationship Management。Oracle Data Relationship Management Installation Guide。
- FDM。EPM System コンフィグレータのタスクにより、Shared Services レジストリ内の FDM Web サーバーが登録されます。残りの構成は、FDM で行われます。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Configuration Guide を参照してください。

注: Essbase をスタンドアロン・モード(Foundation Services を使用しない)でインストールする場合は、Foundation Services Java Web アプリケーションのインストールをスキップできます。ただし、Shared Services レジストリを構成する必要があります。Foundation Services をインストールせずに Shared Services レジストリを構成するには、コマンド・ラインから `-forceRegistry` オプションを使用して EPM System コンフィグレータを実行します。164 ページの「スタンドアロン・モードでの Essbase の設定」を参照してください。

分散環境での製品の構成

分散環境のインストール要件を満たしていることを確認します。85 ページの「分散環境での EPM System 製品のインストール」を参照してください。クラスタリングおよび高可用性の詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide を参照してください。

分散環境での構成の考慮事項:

- Foundation Services を最初に構成する必要があります。他の製品を正しく構成するために、Foundation Services をインストールして構成する必要があります。最後に Web サーバーを構成します。
- 各マシンに新しい EPM Oracle インスタンスを作成します。
- WebLogic 管理サーバー・マシン以外のマシンに Java Web アプリケーションを配置する場合、WebLogic 管理サーバーが実行されている必要があります。
- すべての EPM System 製品を単一の WebLogic ドメインに配置します。
この要件の例外は、165 ページの「UNIX ベースの EPM System 配置での Financial Management、Financial Reporting および Web Analysis の Windows への配置」に記載されています。
- EPM System コンフィグレータでの構成中、Web サーバー・マシンは Shared Services レジストリをホストするマシンの接続を必要とします。
- ロード・バランシングとフェイルオーバーのために 1 件の配置で複数の Web サーバーを使用する場合は、Web サーバーを実行するマシンごとに Web サーバーを構成します。複数の Web サーバーを使用する場合、ロード・バランサ(ハードウェアまたはソフトウェア)を使用してトラフィックをサーバーにルー

ティングし、Java Web アプリケーション・クラスタの論理 Web アドレスをロード・バランサにする必要があります。Web サーバーが 1 つのみの場合、Java Web アプリケーション・クラスタの論理 Web アドレスを Web サーバーにすることができます。

- サービスの複数のインスタンスが稼働している場合に高可用性が得られるよう EPM System を構成する際には、EPM System コンフィグレータの次のフィールドに共有ディスク上の同じ場所を指定する必要があります：
 - Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理の LCM のエクスポートとインポートの場所
 - Reporting and Analysis Framework のリポジトリ・ディレクトリ
例: \\SharedHost\SharedLocation\data\RM1
 - Essbase サーバー(UNIX)のアプリケーションの場所へのフル・パス (ARBORPATH)
例: \\SharedHost\SharedLocation\data\Essbase
 - Performance Scorecard - 添付ファイルの場所の構成。パスを UNC パスにできません。
例: \\SharedHost\SharedLocation\data\HPS
- オプションで、構成プロセスを簡略化するために、Oracle HTTP Server を共有ドライブに構成することができます。

SSL 使用可能環境での製品の構成

SSL 対応で EPM System 製品を構成している場合、構成時に行う構成順序と選択内容は、選択する SSL 実装タイプによって異なります。詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Security Configuration Guide を参照してください。オプションで、非 SSL を配置して SSL を使用するように再構成できます。Oracle Enterprise Performance Management System Security Configuration Guide を参照してください。

注： Essbase はデフォルトで、自己署名証明書を使用する一方向 SSL のみをサポートしています。デフォルトの証明書の使用は、テスト環境のみでの使用をお勧めします。本番環境では、信頼できるサードパーティ認証局が発行した証明書を使用してください。詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Security Configuration Guide を参照してください。

手動配置用の製品の構成

EPM System Java Web アプリケーションを手動で配置する場合、/configtool-manual.bat|.sh コマンドにより EPM System コンフィグレータを起動します。「アプリケーション・サーバーへの配置」タスクおよび「Web サーバーの構成」タスクを除く必須構成タスクを実行します。次に、その他の手動手順を実行します。

118 ページの「EPM System 製品の構成」および第 7 章「EPM System Java Web アプリケーションの手動配置」を参照してください。

WebSphere Application Server 用の製品の構成

WebSphere Application Server に EPM System Java Web アプリケーションを配置する場合、`/configtool-manual.bat|.sh` コマンドにより EPM System コンフィグレータを起動します。「アプリケーション・サーバーへの配置」タスクおよび「Web サーバーの構成」タスクを除く必須構成タスクを実行します。次に、その他の手順を実行します。

118 ページの「EPM System 製品の構成」および第 8 章「WebSphere Application Server への EPM System 製品の配置」を参照してください。

製品構成タスクの要約

構成についての注意

- EPM System コンフィグレータは事前構成タスクを実行し、構成中に製品を Shared Services に登録します。これらのタスクは選択する必要はありません。必要に応じて自動的に実行されます。
- Shared Services レジストリ・データベース構成は構成するマシンごとに 1 度だけ表示されます。
- クライアントには構成が必要ないので、次の表に含まれていません。

次の表に、Foundation Services 製品で使用できる構成オプションの要約を示します。

表 16 Foundation Services 構成タスクの要約

	データベースの構成	アプリケーション・サーバーへの配置	製品固有の構成タスク
Foundation Services	X	X この選択により、Shared Services および EPM Workspace Java Web アプリケーションが配置されます。	<ul style="list-style-type: none">● 共通設定の構成● Oracle Configuration Manager の構成● Oracle BI および Publisher との接続の設定(オプション)● (アップグレードのみ)前のリリースからのデータのインポート● Web サーバーの構成● Web アプリケーションの論理アドレスの構成(オプション)● このマシンでのコンパクト・サーバーのスケール・アウト

	データベースの構成	アプリケーション・サーバーへの配置	製品固有の構成タスク
Performance Management Architect	X (Windows のみ)	X この選択により、Web 層およびデータ・シンクロナイザ Java Web アプリケーションが配置されます。	X 次元サーバーの構成
Calculation Manager	X	X	

次の表に、Essbase 製品で使用できる構成オプションの要約を示します。

表 17 Essbase の構成タスクの要約

	データベースの構成	アプリケーション・サーバーへの配置	製品固有の構成タスク
Essbase			X Essbase サーバーの構成
Administration Services	X	X	X (アップグレードのみ)前のリリースからのデータのインポート
Provider Services		X	X (アップグレードのみ)前のリリースからのデータのインポート
Essbase Studio	X (Essbase Studio カタログでは必須)		X サンプルおよび顧客データ・ソースのテキスト・ファイルの Essbase Studio の場所の構成
Integration Services			X Essbase Integration Services の構成

次の表に、Reporting and Analysis 製品で使用できる構成オプションの要約を示します。

表 18 Reporting and Analysis の構成タスクの要約

	データベースの構成	アプリケーション・サーバーへの配置	製品固有の構成タスク
Reporting and Analysis	X	X	X <ul style="list-style-type: none"> ● Reporting and Analysis サービスの構成 ● Framework サービスの構成 ● Financial Reporting RMI ポートの構成 ● Financial Reporting サーバーおよび Web Analysis をホストするサーバーでは、Financial Management の「DCOM の構成」タスクも選択する必要があります。
Production Reporting			X <ul style="list-style-type: none"> ● SQR Production Reporting

次の表に、Financial Performance Management Applications 製品で使用できる構成オプションの要約を示します。

表 19 Financial Performance Management Applications 製品の構成タスクの要約

	データベースの構成	アプリケーション・サーバーへの配置	製品固有の構成タスク
Financial Management (全構成タスクが Windows のみ)	X	X	X <ul style="list-style-type: none"> ● DCOM の構成 ● アプリケーション・サーバーの構成 ● アプリケーション・クラスタの構成 ● Web サーバーの構成 ● (アップグレードのみ)前のリリースからのアプリケーションのアップグレード
Planning	X	X	X <ul style="list-style-type: none"> ● RMI サーバーの構成
Performance Scorecard	X	X	X <ul style="list-style-type: none"> ● 添付ファイルの場所の構成
Oracle Hyperion Profitability and Cost Management	X	X	
Strategic Finance		X	X <ul style="list-style-type: none"> ● ポートおよびデータ・フォルダの構成 ● Web サービス構成 ● Strategic Finance をホストしているマシンでこれまで実行されていない場合は、Financial Management の「DCOM の構成」タスクも実行する必要があります。

	データベースの構成	アプリケーション・サーバーへの配置	製品固有の構成タスク
Oracle Hyperion Disclosure Management	X	X	
Financial Close Management Close Manager	X	X	X <ul style="list-style-type: none"> ● SOA に配置 ● コンテンツ管理システムの場所の構成(オプション)
Financial Close Management Account Reconciliation Manager	X	X	X <ul style="list-style-type: none"> ● コンテンツ管理システムの場所の構成(オプション) ● FDM EE の SOA に配置 ● SOA に配置

次の表に、データ管理製品で使用できる構成オプションの要約を示します。

表 20 データ管理製品の構成タスクの要約

	データベースの構成	アプリケーション・サーバーへの配置	製品固有の構成タスク
FDM			X <ul style="list-style-type: none"> ● FDM Web アプリケーションの構成 ● FDM サーバーの構成 ● FDM をホストしているマシンでこれまで実行されていない場合は、Financial Management の「DCOM の構成」タスクも実行する必要があります。
FMEE	X	X	X <ul style="list-style-type: none"> ● HFM アダプタの登録 ● FMEE をホストしているマシンでこれまで実行されていない場合は、Financial Management の「DCOM の構成」タスクも実行する必要があります。

EPM System 製品の構成

製品をホストしている各マシンで EPM System コンフィグレータを実行して、構成または再構成を実行します。

EPM System コンフィグレータを使用した構成中にサポートされる文字のリストについては、[18 ページの「インストールと構成でサポートされる文字」](#)を参照してください。

注： Windows マシンでは、インストールおよび構成に Administrator ユーザーを使用しないでください。管理者権限のあるユーザーとして、EPM System インストーラおよび EPM System コンフィグレータを実行します。すべての EPM System 製品と同じユーザーとして、EPM System Diagnostics をインストールし、構成して実行します。Windows 2008 を使用している場合は、UAC を無効にした状態で構成します。EPM System 製品をインストール、構成および実行するには、UAC を無効にする必要があります。UAC は、エンドユーザーのクライアント・デスクトップで有効化できます。

注： UNIX マシンで、root ユーザーを使用してインストールおよび構成を行わないでください。すべての EPM System 製品を同じユーザーとしてインストールおよび構成します。UNIX マシンでは、すべての Oracle 製品について、インストールを行うユーザーは同じグループに属している必要があります。このグループには、中央インベントリ(oraInventory)に対する書込み権限が必要です。

注： アップグレード時、またはメンテナンス・リリースの適用時には、前のリリースのインストールおよび構成に使用したのと同じユーザーでインストールおよび構成を実行する必要があります。

▶ EPM System 製品を構成するには:

1 EPM System コンフィグレータを起動するメソッドを選択します:

- EPM System インストーラの最後のページで、「構成」をクリックまたは選択します。
- 「スタート」メニューで、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「EPM System コンフィグレータ(すべてのインスタンス)」の順に選択します。
- EPM_ORACLE_HOME/common/config/version_number に移動し、configtool.bat (.sh)を起動します。
- EPM System コンフィグレータをコンソール・モードで実行するには、コマンド・ラインで-console パラメータを使用してこれを起動します。たとえば、EPM_ORACLE_HOME/common/config/version_number/startconfigtool.bat -console のようにします。
- サイレント構成の詳細は、162 ページの「サイレント構成の実行」を参照してください。
- Java Web アプリケーションを手動で配置する場合、コマンドラインで EPM_ORACLE_HOME/common/config/version_number/configtool-manual.bat (.sh)を使用して EPM System コンフィグレータを起動します。

構成の完了後、詳細は第 7 章「EPM System Java Web アプリケーションの手動配置」を参照してください。

- WebSphere Application Server に配置する場合、コマンド・ラインで EPM_ORACLE_HOME/common/config/version_number/configtool-

manual.bat (.sh)を使用して EPM System コンフィグレータを起動します。

構成の完了後、[第 8 章「WebSphere Application Server への EPM System 製品の配置」](#)を参照してください。

ヒント： EPM System コンフィグレータを EPM_ORACLE_INSTANCE から起動した場合、EPM System コンフィグレータでは既存の EPM Oracle インスタンスが構成され、Oracle インスタンスの構成ページは表示されません。

EPM System コンフィグレータにより、初期チェックが実行されます。チェックの内容は次のとおりです：

- 環境変数が設定されている
- .oracle.products が存在する
- 必要な .jars がすべて存在する
- Windows system32 が PATH に含まれている
- 有効な EPM Oracle ホームがある
- Essbase がインストールされると、OPMN もマシンにインストールされます。
- Financial Management がインストールされると、DCOM の認証レベルが適切に設定されます。

2 EPM System コンフィグレータの各ページを確認して完了し、「次へ」をクリックして次のページに移動します。

コンソール・モードで、必要な選択内容の隣に数値を入力します。

次の表に、EPM System コンフィグレータの各ページの詳細が記載されているリンクを示します。

ページ	参照
Oracle インスタンス	123 ページの「Oracle インスタンスの構成」
タスクの選択	124 ページの「タスクの選択」
Shared Services とレジストリ・データベースの接続の設定	データベースが作成され、起動されたことを確認します。 データベースをまだ作成していない場合は、 39 ページの「データベースの準備」 を参照してください。 134 ページの「Shared Services とレジストリ・データベースの接続の設定」 の説明に従って情報を入力します。
データベースの構成	データベースが作成され、起動されたことを確認します。 データベースをまだ作成していない場合は、 39 ページの「データベースの準備」 を参照してください。 124 ページの「データベースの構成」 の説明に従って情報を入力します。

ページ	参照
アプリケーション・サーバーの配置	129 ページの「アプリケーション・サーバーでの配置: Oracle WebLogic」の説明に従って情報を入力します。
製品固有の構成タスク	各製品を構成するための詳しい手順については、次の項を参照してください: <ul style="list-style-type: none"> ● 132 ページの「Foundation 構成タスク」 ● 141 ページの「Performance Management Architect 構成タスク」 ● 142 ページの「Essbase 構成タスク」 ● 147 ページの「Reporting and Analysis 構成タスク」 ● 149 ページの「Planning 構成タスク」 ● 149 ページの「Financial Management 構成タスク」 ● 157 ページの「Performance Scorecard - 添付ファイルの場所の構成」 ● 158 ページの「Strategic Finance 構成タスク」 ● 159 ページの「Financial Close Management 構成タスク」 ● 161 ページの「FDM の構成タスク」

- 3 (オプション)サイレント構成の応答ファイルの構成選択を保存するには、「保存」をクリックまたは選択して場所を参照し、ファイル名を指定して「保存」をクリックまたは選択します。

この手順では、サイレント構成の応答ファイルとして使用できる編集可能なファイルが作成されます。162 ページの「サイレント構成の実行」を参照してください。

- 4 構成タスクの完了を確認し、「次へ」をクリックまたは選択します。

EPM System コンフィグレータは、構成プロセスのステータスを表示します。

構成にかかる時間は、選択した製品やタスクによって異なります。操作の進行状況は、EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/logs/config/configtool.log に記録されます。

構成が終了すると、各タスクのステータスが表示されます。構成の結果は、EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/logs/config/configtool_summary.log に記録されます。

- 5 「タスク・パネル」をクリックまたは選択し、「タスクの選択」ページに戻って追加の構成タスクを完了します。
- 6 最後に Web サーバーを構成します。
- 7 「終了」をクリックまたは選択します。

構成が正常に終了した場合、必要な手動構成タスクを実行し、サービスを開始し、サービスの起動を検証します。

第 9 章「新しい配置での手動構成タスクの実行」、第 12 章「EPM System 製品の開始と停止」および第 13 章「インストールの検証と配置の確認」を参照してください。

特定の製品の構成を停止しても、プロセス全体が停止することはありません。他の製品の構成は継続します。構成プロセスが完了した後に、EPM System コンフィグレータの要約ページにエラー・メッセージが表示されます。

エラーが表示された場合は、次のタスクを実行します:

- ログ・ファイルを確認します。
- 構成に関する問題の解決については、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide を参照してください。
- Oracle HTTP Server インストールに関するエラーが表示された場合、Oracle HTTP Server のインストール要件を満たしていることを確認してください。[82 ページの「Web サーバー・インストールの前提条件」](#)を参照してください。
- 構成時に Oracle Configuration Manager が使用不可能である場合、EPM System コンフィグレータでは、「Oracle Configuration Manager の構成」タスクが失敗したことが示されます。Oracle Configuration Manager が使用可能である場合は、EPM System コンフィグレータを再起動し、「Oracle Configuration Manager の構成」タスクを選択してください。

8 EPM Workspace をリフレッシュします。

Financial Close Management を使用している場合、次に行うプロセスについては [73 ページの「Financial Close Management \(Close Manager および Account Reconciliation Manager\)のインストール・チェックリスト」](#)を参照してください。

EPM Workspace のリフレッシュ

追加の製品を配置する場合は、Foundation Services をホストする各マシンで、Web サーバーを再構成してから再起動します(または Oracle HTTP Server を共有ドライブに構成した場合は再起動するだけです)。

次に、配置内の各 Foundation Services ホスト・マシン上の EPM Workspace をリフレッシュします。

▶ EPM Workspace をリフレッシュするには:

- 1 ブラウザ・セッションを開始します。
- 2 次の URL にアクセスすることで、EPM Workspace にアクセスします。

```
http://  
FNDHOST1  
:9000/workspace/refresh
```

この URL は、Oracle HTTP Server ポートではなく、EPM Workspace が使用可能な管理対象サーバー・ポートであるポート 9000 を使用します。

- 3 ログイン画面で、「admin」および配置パスワードを入力します。
成功メッセージを取得する必要があります。
- 4 配置内の各 Foundation Services ホスト・マシン上で次の手順を繰り返します。

EPM System コンフィグレータのタスク参照

サブトピック

- Oracle インスタンスの構成
- タスクの選択
- データベースの構成
- アプリケーション・サーバーでの配置 - WebLogic のドメイン情報の指定
- アプリケーション・サーバーでの配置: Oracle WebLogic
- Foundation 構成タスク
- Performance Management Architect 構成タスク
- Essbase 構成タスク
- Reporting and Analysis 構成タスク
- Planning 構成タスク
- Financial Management 構成タスク
- Performance Scorecard - 添付ファイルの場所の構成
- Strategic Finance 構成タスク
- Financial Close Management 構成タスク
- FDMEE 構成タスク
- FDM の構成タスク

Oracle インスタンスの構成

▶ 配置に対して新規または既存の EPM Oracle インスタンスを指定します。

EPM System コンフィグレータは、EPM System 製品の動的コンポーネント(実行時に変更できるコンポーネント)を EPM Oracle インスタンス・ディレクトリに配置します。EPM Oracle インスタンスのデフォルトの場所は `MIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystem1` です。

通常、すべての製品を 1 つのマシンにインストールする場合、最初に構成する製品に対して新規の EPM Oracle インスタンスを作成します。その後の各製品については、既存の EPM Oracle インスタンスを変更します。

分散環境にインストールする場合は、各マシンに新規の EPM Oracle インスタンスを作成します。

追加のインスタンスをインストールおよび構成して、スケール・アップまたはスケール・アウトします。Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide を参照してください。

次の表に、EPM Oracle インスタンスの構成オプションを示します。

EPM System コンフィグレータ	説明	ユーザーの情報
EPM Oracle インスタンスのホーム・ディレクトリ	EPM Oracle インスタンスの作成先ディレクトリを指定します。デフォルトの EPM Oracle インスタンスの場所は MIDDLEWARE_HOME/user_projects です。既存の EPM Oracle インスタンスを変更するには、EPM Oracle インスタンスの場所を参照します。	
EPM Oracle インスタンス名	EPM Oracle インスタンスの名前を指定します。デフォルトの EPM Oracle インスタンス名は epmsystem1 です。既存の EPM Oracle インスタンスを変更するには、EPM Oracle インスタンス名を指定します。	

タスクの選択

- ▶ このマシンに対して構成する製品とタスクを選択するか、「次へ」をクリックまたは選択して、必要なすべてのタスクを選択します。

タスクの選択の注意:

- 新しいインストールでは、デフォルトですべての必要なタスクが選択されます。
- 後で実行するタスクは選択解除できます。
- 全タスクを選択したり選択解除したりするには、「すべて選択」または「すべて選択解除」を選択します。
- デフォルトで選択されている必須のタスクは選択を解除できません。使用できない(グレー表示の)タスクが選択されている場合、そのタスクは実行され、選択は解除できません。
- Shared Services への登録など、製品のコンポーネントを初めて構成する際、共通タスクは EPM System コンフィグレータが自動的に実行します。EPM System コンフィグレータは、Shared Services レジストリを使用して、Shared Services の場所を確認します。
- EPM Workspace Java Web アプリケーションと Shared Services Java Web アプリケーションは、Hyperion Foundation の「アプリケーション・サーバーへの配置」タスクを選択すると配置されます。

データベースの構成

- ▶ 「タスクの選択」 ページで選択した製品に対して使用するデータベースの設定を指定します。製品ごとに個別にデータベース接続情報を指定するか、選択した複数の製品に対して同じ設定を使用することができます。

簡単に配置するために、新規インストールの場合、すべての製品に対して1つのデータベースを使用できます。場合によっては、複数の製品ごとに異なるデータベースを構成することが必要になることもあります。パフォーマンス、シングル・アプリケーションまたは製品の場合のロールバック手順、および障害リカバリ・

プランについて検討してください。Close Manager と Account Reconciliation Manager が同じデータベース・スキーマを使用することをお勧めします。

データベースの構成の注意:

- データベースが設定されていることを確認してください。
データベースをまだ作成していない場合は、39 ページの「データベースの準備」を参照してください。
- 選択されている製品のいずれかがサポートされていない場合、そのデータベース・タイプを使用できない場合があります。この場合、この製品を個別に構成してください。各製品でサポートされているデータベースのリストについては、Oracle Enterprise Performance Management System Certification Matrix(<http://www.oracle.com/technetwork/middleware/ias/downloads/fusion-certification-100350.html>)を参照してください。
- スケールアウトの目的で、Financial Management、Oracle Hyperion EPM Architect または FDMEE の追加インスタンスを構成している場合は、データベースの構成中、テーブルを削除して再作成するか、または既存のデータベースを再利用するかを尋ねるプロンプトが表示されたら、「既存のデータベースを再使用します」を選択します。
- Oracle データベースを使用する場合は、正しい文字セットを使用してデータベースが作成されたかどうかを EPM System コンフィグレータが確認します。正しくない場合は、修正を要求するプロンプトが表示されます。
- EPM System データベースのスキーマはドキュメント化され、Oracle® Technology Network の [Oracle Documentation Library](http://www.oracle.com/technology/documentation/epm.html)(<http://www.oracle.com/technology/documentation/epm.html>)(配置およびインストールタブ)に公開されている ZIP ファイル(EPM Data Models リリース 11.1.2.3)から入手できます。

アップグレードについての注意

アップグレードしているデータベース構成について次の点に注意してください:

- 「既存のデータベースを次から現在のリリースにアップグレードします」を選択し、リリース番号を選択します。
- アップグレード中で、Oracle Hyperion Business Rules を使用している場合は、構成する前にビジネス・ルールの移行の前提条件タスクを実行する必要があります。231 ページの「Business Rules メンテナンス・リリースおよびアップグレード・インストールの前提条件」を参照してください。EPM System コンフィグレータにより、データベースの構成中にルールが Oracle Hyperion Calculation Manager ルールに移行されます。ルールは EPMDData/planning/hbrRules.xml にエクスポートされます。

次の表に、データベースの構成オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
データベース・タイプ	データベース・タイプを選択します。	

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
既存のデータベースを次から現在のリリースにアップグレードします	<p>アップグレードについての注意</p> <p>以前のリリースからアップグレードする場合は、「現在のリリースにアップグレードする既存のデータベース」を選択し、リリースを選択します。</p> <p>注： このタスクは、データベースを作成していることが前提です。データベースを作成していない場合は、39 ページの「データベースの準備」を参照してください。</p>	
製品名	データベース接続情報を指定する製品を選択します。行った変更は、選択したすべての製品に適用されます。	
サーバー	<p>各製品に対し、データベースをホストするコンピュータまたはサーバーの名前を指定します。</p> <p>Oracle RAC の場合、サーバー名として VIP 名またはいずれかのノード名を指定します。</p>	
ポート	各製品に対し、デフォルト値を選択するか、データベースがリスニングするカスタム・サーバー・ポート番号を指定します。	
サービス名または SID、またはデータベース名	<p>各製品に対し、データベースの名前を指定します。</p> <p>Oracle RAC データベースを使用している場合は、RAC サービス名を指定します。</p> <p>Financial Management と Oracle Database 構成時に、EPM System コンフィグレータでは、EPM System コンフィグレータを使用してインストールされた Oracle Database クライアントを使用するように Financial Management を構成し、固定の名前を使用して <code>tnsnames.ora</code> エントリを更新します。</p>	
ユーザー名	各製品に対し、データベースのユーザー名を入力します。	
パスワード	各製品に対し、データベースのユーザー・パスワードを入力します。	
選択した行に対する詳細なデータベース・オプション(オプション)	<p>クリックまたは選択して、選択した製品の追加情報を指定します。127 ページの「データベース構成の詳細設定オプション(オプション)」を参照してください。</p> <p>このオプションを使用して Oracle RAC を構成するか、または LDAP ベースの JDBC の URL を使用できます。詳細設定データベース・オプション・ページに入力する値は、メインの「データベース構成」ページで入力した値を上書きします。</p>	

データベースを使用するように EPM System 製品を構成する際、EPM System コンフィグレータによりデータベースが接続されており、サポートされているデータベース・タイプであることが確認されます。このリリースでサポートされているデータベースのリストについては、Oracle Enterprise Performance Management System Certification Matrix(<http://www.oracle.com/technetwork/middleware/ias/downloads/fusion-certification-100350.html>)を参照してください。

Microsoft SQL Server データベースを使用する場合は、SQL Server 接続用に Windows 認証を使用できます。[127 ページの「Microsoft SQL Server Windows 認証の設定」](#)を参照してください。

Microsoft SQL Server Windows 認証の設定

▶ SQL Server 接続用に Windows 認証を設定するには:

- 1 Windows 認証を使用するように SQL Server を構成します。
- 2 Windows アカウントに、データベースへの適切なアクセス権を付与します。
- 3 構成タスク・リストから「データベースの構成」を選択します。
- 4 データベース・リストから、「SQL Server」を選択します。
- 5 「ユーザー名」と「パスワード」以外の全データベース情報を指定します。

EPM System コンフィグレータの「共通設定」ページで、「Windows サービスをローカル以外のシステム・アカウントとして実行」に Windows サービスのドメイン・ユーザーを指定することも必要です。132 ページの「共通設定の構成」を参照してください。

データベース構成の詳細設定オプション(オプション)

次の表に、データベース構成の詳細設定オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
変更された JDBC URL の編集および使用	データベース接続の JDBC URL を指定する場合に選択します。	
JDBC URL	データベース接続の追加属性を入力します。 JDBC URL を入力すると、「データベースの構成」ページで入力した値を上書きします。 Oracle データベースの場合、LDAP ベースの JDBC URL を入力できます。 詳細は、付録 B「JDBC URL 属性」を参照してください。	
データベースに対して保護された接続を使用(SSL)	データベースに対して保護された通信を有効にする場合に選択します。 SSL 対応の JDBC 接続を使用するには、特定のパラメータを入力する必要があります。 詳細は、付録 B「JDBC URL 属性」を参照してください。 使用している SSL 実装でこのオプションの選択が適切かどうかについては、Oracle Enterprise Performance Management System Security Configuration Guide を参照してください。	
信頼できるキーストア	キーストアの場所を入力または参照します。	
信頼できるキーストア・パスワード	キーストアのパスワードを入力します。	
Oracle の場合		
データ・テーブルスペース	テーブル・データの保管に使用する既存のテーブルスペースの名前を入力します。データ・テーブルスペースは、テーブル・データのストレージの割当てに使用されるデータベースの論理ポーションです。	

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
インデックス・テーブルスペース	インデックスが作成されたデータベース・テーブルスペースを指定するには、インデックスの場所を選択します。	

アプリケーション・サーバーでの配置 - WebLogic のドメイン情報の指定

▶ Java Web アプリケーションを配置する WebLogic ドメインに関する情報を指定します。

1 つのドメイン内にすべての EPM System 製品を配置します。

注： Financial Close Management を使用している場合は、EPM System と Oracle SOA Suite を同じドメインに配置する必要があります。Oracle SOA Suite を構成済みの場合は、EPM System 製品を同じドメインに配置します。

EPM System 製品を、別のマシンでホストされるドメインに配置し、ドメインが EPM System コンフィグレータを使用して作成されていない場合、管理サーバー・コンピュータの `jps-config.xml` および `system-jazn.xml` を手動で更新する必要があります。第 7 章「EPM System Java Web アプリケーションの手動配置」の 170 ページの手順 19 および 174 ページの手順 20 を参照してください。

次の表に、WebLogic Server ドメインを定義するためのオプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
Web アプリケーションを既存のドメインに配置してください。/Web アプリケーションを新規ドメインに配置してください。このドメインの管理サーバーは、このマシンに作成されます。	Java Web アプリケーションを既存のドメインと新規ドメインのどちらに配置するかを指定します。 新規ドメインを作成すると、このドメインの WebLogic 管理サーバーがこのマシンに作成されます。	
ドメイン名	新規ドメインを定義するには、ドメイン名を入力します。デフォルトのドメイン名は <code>EPMSysSystem</code> です。 既存のドメインに配置するには、配置に使用するドメインを指定します。	
管理サーバー・ホスト	既存のドメインの場合は、管理サーバー・ホストを指定します。	
管理サーバー・ポート	デフォルト・ポートを使用するか、または、マシン上にインストールされている他のアプリケーションと競合しないポート番号を入力して、デフォルト値を変更します。	

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
管理者ユーザー	ドメインの管理ユーザー名を入力します。デフォルトでは、EPM System コンフィグレータは <code>epm_admin</code> を使用します。	
管理者パスワード	管理パスワードを入力するか、新規ドメインの新パスワードを入力します。 ヒント： このパスワードをメモしておいてください。	
管理パスワードの確認	新規ドメインを定義している場合は、管理パスワードを確認します。	

アプリケーション・サーバーでの配置: Oracle WebLogic

- ▶ アプリケーション・サーバーのオプションを指定するか、「次へ」をクリックまたは選択して、デフォルトのエントリをそのまま使用します。

次の表に、WebLogic アプリケーション・サーバー配置の構成オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
Web アプリケーションを単一の管理対象サーバーに配置してください	<p>単一の管理対象サーバーへの配置の場合はこのオプションを選択します。</p> <p>このオプションを選択すると、選択したすべての Java Web アプリケーションが WebLogic で単一の管理対象サーバーに配置されます。</p> <p>このオプションは次の場合のみ使用できます:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 新規ドメインの作成、または EPM System コンフィグレータのリリース 11.1.2.3 で作成した既存ドメインの拡張を、WebLogic 管理サーバーをホストするマシンで行う場合。 ● 同じマシンおよび同じドメインに対して垂直方向にスケーリング中で、既存の単一の管理対象サーバーが存在する場合。 ● メンテナンス・リリースのインストールを適用する場合、前のリリースで単一の管理対象サーバーに配置していなければ、デプロイメント内のすべてのマシンに Java Web アプリケーションを再配置する必要があります。その後、EPM System コンフィグレータを再起動してこのオプションを選択できます。 <p>Foundation Services をホストしているマシン以外のマシン上の単一管理対象サーバーに製品を追加するには、「このマシンでのコンパクト・サーバーのスケール・アウト」を選択します。</p> <p>Java Web アプリケーションを単一の管理対象サーバーに配置することで、メモリー要件が軽減され、起動時間が短縮されます。1 つの EPM System 配置で使用できる管理対象サーバーは 1 つのみです。単一の管理対象サーバーをスケールアウトできます。</p> <p>このオプションを選択すると、すべての管理対象サーバー名が EPMServer0 に変更され、すべてのポートが 9000 または 9443 (SSL) に変更されます。ポートを変更した場合、変更はすべての行に反映されます。</p> <p>このオプションを一度選択してから選択解除すると、ポートの値はデフォルトの個々のポートに戻ります。別のポートがすでに構成されている場合、値はユーザー指定のポートに戻ります。</p>	
EAR/WAR	配置するコンポーネントを選択します。	
管理対象サーバー名	WebLogic 管理対象サーバーの名前を表示します。	
ポート	<p>デフォルト・ポートを使用するか、または、マシン上にインストールされている他のアプリケーションと競合しないポート番号を入力して、デフォルト値を変更します。</p> <p>付録 A「ポート」 を参照してください。</p>	
SSL ポート	<p>デフォルト・ポートのままにするか、配置用に使用する SSL ポートを指定します。このポートを指定すると、Java アプリケーション・サーバーのデフォルト証明書を使用して SSL が設定されます。有効な証明書で Java アプリケーション・サーバーを更新する場合の推奨事項については、Oracle Enterprise Performance Management System Security Configuration Guide を参照してください。</p> <p>SSL を使用する場合は、安全な通信を確保するために、構成後、Java アプリケーション・サーバーで非 SSL ポートを無効化(または SSL ポートにリダイレクト)する必要があります。</p>	
ステータス	配置ステータスを示します	

配置の注意:

- 1つのドメイン内にすべての製品を配置します。
- 製品が Java Web アプリケーション・サーバーへの接続に使用する論理アドレスを指定するには、「Web アプリケーションの論理アドレスの更新」タスクを使用します。次のシナリオのように、Java Web アプリケーションが Java Web アプリケーション・サーバーと直接通信しない場合、このタスクを選択します:
 - ロード・バランサを使用してクラスタを設定しました。
 - SSL オフローダを使用しています。

136 ページの「[Web アプリケーションの論理アドレスの構成](#)」を参照してください。

- デフォルトでは、EPM System コンフィグレータでは、32 ビットのバイナリは 32 ビットの実オペレーティング・システム上の 32 ビットの実アプリケーション・サーバーに配置され、64 ビットの実バイナリは 64 ビットの実オペレーティング・システム上の 64 ビットの実アプリケーション・サーバーに配置されます。
- EPM Workspace Java Web アプリケーションと Shared Services Java Web アプリケーションは、Hyperion Foundation の「アプリケーション・サーバーへの配置」タスクを選択すると配置されます。
- カスタム認証モジュールを実装する場合、EPM 製品のクラスパスに Java アーカイブ(.jar)を含める必要があります。カスタム認証モジュールの実装手順の詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Security Configuration Guide を参照してください。

配置中の処理: WebLogic Server

配置の注意:

- EPM System コンフィグレータでは、指定した Oracle WebLogic Server ドメインに各アプリケーションが配置されます。新規ドメインの場合、ドメインは最初のアプリケーションが配置されたときに作成されます。各アプリケーションは個別の JVM で実行しますが、一緒に実行して同じ管理対象サーバーに配置される Shared Services および EPM Workspace、または複数の Java Web アプリケーションを単一の管理対象サーバーに配置する場合を除きます。
- EPM System コンフィグレータは、アプリケーションを MIDDLEWARE_HOME/user_projects/domains/domainName に配置します。
- EPM System コンフィグレータでは、最初の Java Web アプリケーションを配置する際に、Oracle Enterprise Manager が自動的に配置されます。
- 開始スクリプトと停止スクリプトは、EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/に作成されます。
- アプリケーションごとに、EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/deploymentScripts に setCustomParamsProduct.bat ファイル (UNIX の場合、.sh 拡張子) があります。開始スクリプトの使用時に、JAVA_OPTIONS を変更できます。
- EPM System コンフィグレータは、管理サーバーごとにクラスタを作成します。

Foundation 構成タスク

サブトピック

- [共通設定の構成](#)
- [Shared Services とレジストリ・データベースの接続の設定](#)
- [Web アプリケーションの論理アドレスの構成](#)
- [Oracle Configuration Manager の構成](#)
- [Oracle BI EE および Publisher との接続の設定](#)
- [Shared Services の管理ユーザーとパスワードの設定](#)
- [このマシンでのコンパクト・サーバーのスケール・アウト](#)
- [Web サーバーの構成](#)
- [Foundation Services - 前のリリースからのデータのインポート](#)

共通設定の構成

- ▶ Shared Services レジストリに指定されているすべてのマシン上のすべての製品の設定を指定するか、または「次へ」をクリックまたは選択してデフォルト値をそのまま使用します。

「共通設定の構成」 ページは EPM System の配置ごとに 1 度だけ表示されます。

別のマシン上で構成を行い、いずれかのオプションを変更した場合は、新しい選択内容は構成されていないすべての製品およびマシンに適用されます。マシン上で再構成を行うと、新しい設定は再構成した製品とその後の構成に適用されます。

次の表に、共通設定の構成オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
構成済コンポーネント用 Windows サービスの作成(Windows のみ)	Windows の開始時に自動的に開始する Windows サービスとして各サービスを構成します。	
Windows サービスをローカル以外のシステム・アカウントとして実行	Windows サービスを構成するためのローカル以外のシステム・アカウントを指定するために選択し、ユーザー名およびパスワードを指定します。このユーザーは、管理者グループのメンバーである必要があります。 注： このオプションを選択することをお勧めします。Reporting and Analysis を分散環境で使用する場合、共有データ・フォルダに読取り/書込みアクセスできるユーザーとして実行されるようサービスを更新する必要があります。 このオプションを選択しなかった場合、EPM System コンフィグレータは、ローカル・システム・アカウントを使用して Windows サービスを作成します。サービスを開始する前に、適切なドメイン・アカウントを使用して変更します。	
ユーザー名	Windows サービスを開始するユーザーのユーザー名を入力します。このフィールドが空白の場合、EPM System コンフィグレータがローカル・システム・アカウントを使用してサービスを作成します。	
パスワード	Windows サービスを開始するユーザーのパスワードを入力します。	

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
Web アプリケーション・サーバー通信に SSL を使用(手動構成が必要)	<p>SSL 実装に応じて、すべての Java Web アプリケーションで SSL 通信を使用します。このオプションが選択されている場合は、URL は https 形式で表示されます。</p> <p>注： このオプションを選択しても、Java Web アプリケーション・サーバーの安全な通信は使用可能になりません。また、証明書の作成と JRE および JDK へのロードも行われません。詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Security Configuration Guide を参照してください。</p> <p>オプションで、非 SSL を配置して SSL を使用するように再構成できます。Oracle Enterprise Performance Management System Security Configuration Guide を参照してください。</p>	
メール・サーバー・ホスト	標準の Simple Mail Transfer Protocol (簡易メール転送プロトコル)を使用する電子メール機能を統合する製品の場合は、送信メール(SMTP)サーバーを指定します。電子メール・アラートを使用可能にするには、SMTP サーバー名を指定する必要があります。	
ポート	メール・サーバーのポート番号を指定するか、デフォルト値を使用します。メール・サーバーとの通信に SSL を使用している場合は、SSL ポートを入力します。	
管理者の電子メール・アドレス	通知で使用する、管理者の電子メール・アドレスを指定します。	
メール・サーバーとの通信に SSL を使用	すべての電子メール通信に SSL 通信を使用する場合に選択します。	
認証を使用して電子メールを送信	メール・サーバーが認証を要求するかどうかを指定し、ユーザー名とパスワードを指定します。	
ユーザー名	SMTP サーバーのユーザー名を指定します。	
パスワード	SMTP サーバーのパスワードを指定します。	
LCM のエクスポートとインポートの場所	<p>ライフサイクル管理アーティファクトをエクスポートおよびインポートする場所を入力します。</p> <p>クラスタリングされている環境があり、ライフサイクル管理を使用してアーティファクトを移行する予定の場合、共有ドライブの場所を指定します。共有の場所はすべての Shared Services インスタンスにアクセス可能である必要があります。ライフサイクル管理を使用してアーティファクトがエクスポートされる際、内容は共有ディスク上のパスにエクスポートされます。インポートされるときは、共有ディスクのエクスポートされた場所から内容が読み込まれます。</p> <p>たとえば、Windows で共有ドライブの場所を指定する場合は \\sharedHost\sharedLocation と入力し、UNIX では /sharedHost/sharedLocation と入力します。</p> <p>構成後、Shared Services のすべてのインスタンスを再起動します。</p> <p>各インスタンスに対して、共有ディスク/フォルダにアクセス権限のあるドメイン・ユーザーのログインを使用して、Shared Services をサービスとして起動します。</p>	

Shared Services とレジストリ・データベースの接続の設定

▶ Shared Services とレジストリ・データベースに対して設定を指定します。

EPM System 製品を最初に構成するときに、Foundation Services で使用するデータベースを構成します。ここには、Shared Services レジストリが含まれます。

Shared Services データベースおよびレジストリ・データベースを構成する際には、EPM System コンフィグレータにより、そのデータベースにアクセスでき、そのデータベースがサポートされているデータベース・タイプであることが確認されます。データベースが検出された場合、検出されたデータベースを使用するか、データベースを作成するかを選択するように求めるメッセージが表示されます。

Oracle データベースを使用する場合は、正しい文字セットを使用してデータベースが作成されたかどうかを EPM System コンフィグレータが確認します。正しくない場合は、修正を要求するプロンプトが表示されます。

サポートされているデータベースのリストについては、Oracle Enterprise Performance Management System Certification Matrix(<http://www.oracle.com/technetwork/middleware/ias/downloads/fusion-certification-100350.html>)を参照してください。

このリリースのデータベースの前提条件については、39 ページの「データベースの準備」を参照してください。

Microsoft SQL Server データベースを使用する場合は、SQL Server 接続用に Windows 認証を使用できます。127 ページの「Microsoft SQL Server Windows 認証の設定」を参照してください。

Shared Services レジストリの詳細は、18 ページの「Shared Services レジストリについて」を参照してください。

注： このタスクは、データベースを作成していることが前提です。データベースを作成していない場合は、39 ページの「データベースの準備」を参照してください。

EPM System 製品をアンインストールしてから同じ場所に再インストールする場合、Shared Services およびレジストリ・データベースを再使用することはできません。

アップグレードについての注意

- 以前のリリースからアップグレードする場合、「Shared Services データベースの初回構成を実行」を選択し、新しいデータベースのデータベース接続情報を入力します。
- リリース 11.1.1.4 からのアップグレードで、すべての EPM System 製品が 1 つのデータベースを使用するよう構成すると、既存の Shared Services テーブルがデータベース内で検出されたという警告が表示されます。表を削除および再作成するようプロンプトが表示されたら「はい」を選択します。

注： リリース 11.1.2.0、11.1.2.1 または 11.1.2.2 からリリース 11.1.2.3 に移行するためにメンテナンス・リリースを適用する場合、「前に構成された Shared Services データベースに接続」を選択します。

次の表に、Shared Services とレジストリ・データベースの構成用オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
前に構成された Shared Services データベースに接続/ Shared Services データベースの初回構成を実行	<p>Shared Services およびレジストリ・データベースを初めて構成するには、「Shared Services データベースの初回構成を実行」を選択します。このデータベースには、すべての製品に共通する情報の保管に使用される Shared Services レジストリが含まれます。</p> <p>分散環境で構成する場合は、すべてのマシンで Shared Services データベースを構成する必要があります。最初マシンで、Shared Services レジストリを設定します。後続のマシンについては、「前に構成された Shared Services データベースに接続」を選択します。この場合、マシンが Shared Services レジストリの場所を認識できます。</p> <p>一部の製品では、この同じデータベースを使用して製品情報を保管できます。この場合、各製品は、このデータベース内に独自のテーブルを持ちます。</p> <p>アップグレードについての注意</p> <p>以前のリリースからアップグレードする場合、「Shared Services データベースの初回構成を実行」を選択し、新しいデータベースのデータベース接続情報を入力します。</p> <p>リリース 11.1.2.0、11.1.2.1、または 11.1.2.2 からリリース 11.1.2.3 に移行するためにメンテナンス・リリースを適用する場合、「前に構成された Shared Services データベースに接続」を選択し、続いてリリース番号を選択します。</p>	
データベース・タイプ	データベース・タイプを選択します。	
サーバー	<p>Shared Services データベースを作成するデータベース・サーバーの名前を指定します。</p> <p>Oracle RAC の場合、サーバー名として VIP 名またはいずれかのノード名を指定します。</p>	
ポート	データベースがリスニングするサーバー・ポート番号として、デフォルト値を選択するか、カスタム Shared Services サーバー・ポート番号を指定します。	
サービス名または SID、またはデータベース名	<p>Shared Services データベースの名前を指定します。</p> <p>Oracle RAC データベースを使用している場合は、RAC サービス名を指定します。</p>	
ユーザー名	データベース・ユーザーの名前を入力します。	
パスワード	データベース・ユーザーのパスワードを入力します。	

EPM System コンフィグ グレータのフィールド	説明	ユーザー の情報
詳細オプション(オプション)	<p>クリックまたは選択して追加情報を指定します。</p> <p>これらのオプションの詳細は、127 ページの「データベース構成の詳細設定オプション(オプション)」を参照してください。</p> <p>Oracle RAC または LDAP ベースの JDBC の URL を構成するには、このオプションを使用します。</p>	

Web アプリケーションの論理アドレスの構成

- ▶ Java Web アプリケーションに使用する論理アドレスの詳細を指定するか、「次へ」をクリックまたは選択してデフォルト値を使用します:

ロード・バランサを使用している場合など、配置済 Java Web アプリケーションの論理アドレスを変更する場合、このオプションを使用します。このタスクを使用すると、Java Web アプリケーションを再配置せずに論理アドレスを変更できます。最初の Java Web アプリケーションの配置中にこのタスクを選択できます。

注： このタスクは、配置内の 1 つのマシンでのみ実行する必要があります。

次の表に、Java Web アプリケーションに使用する論理アドレスの構成のオプションを示します。

EPM System コンフィグ グレータのフィールド	説明	ユーザー の情報
すべての Web アプリケーションの論理 Web アドレスを次に設定/各 Web アプリケーションの論理 Web アドレスを個々に次に設定	同じアドレスをすべての Java Web アプリケーションに適用するか、Java Web アプリケーションごとに異なるアドレスを適用するかを選択します。	
製品コンポーネント	Java Web アプリケーションが配置されるコンポーネントを示します	
ホスト	使用可能なモジュールごとに、この Web サーバーがプロキシ要求を行うホスト名を確認します。	
ポート	アプリケーションのアプリケーション・サーバー・リスニング・ポートのポート番号を確認または更新します。ここで指定するポートは、配置済アプリケーションのリスニング・ポートと一致する必要があります。	
SSL ポート	<p>論理 Web アドレスの SSL ポートを確認または更新します。</p> <p>SSL を使用する場合は、安全な通信を確保するために、構成後、Java アプリケーション・サーバーで非 SSL ポートを無効化(または SSL ポートにリダイレクト)する必要があります。</p>	

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
コンテキスト	コンテキスト・パスを確認します。コンテキスト・パスは、配置済 Java Web アプリケーションにアクセスする URL の一部です。たとえば、次の URL では workspace がコンテキスト・パスです： http://webserverhost.example.com:19000/workspace	

注： 全エントリについて完全修飾ホスト名を使用してください。例：
webserverhost.example.com。

Oracle Configuration Manager の構成

- ▶ My Oracle Support および Oracle Configuration Manager からの通知に使用する連絡先情報を指定します。

Oracle Configuration Manager では、マシンの構成情報とインストール済 Oracle ソフトウェアの情報が定期的に収集され、My Oracle Support にアップロードされます。詳細は、「詳細の表示」をクリックまたは選択してください。

EPM System コンフィグレータでは、構成する最初のマシンにこのページが表示され、配置されている各追加マシンの値が使用されます。

オプションを変更するか、パスワードを更新する場合は、EPM_ORACLE_HOME/ccr/bin にある Oracle Configuration Manager ツールを使用します。

次の表に、Oracle Configuration Manager の登録のオプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
電子メール	MyOracle Support からの通知に使用する電子メール・アドレスを入力します。	
詳細の表示	「詳細の表示」をクリックまたは選択して、Oracle サポート・ポリシーに関する情報を表示します。	
セキュリティ・アップデートを My Oracle Support 経由で受け取ります。	セキュリティ更新を受け取るかどうかを指定します。	
My Oracle Support のパスワード	My Oracle Support のパスワードを入力します。	

注： Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System インストーラにより、Oracle Configuration Manager が EPM_ORACLE_HOME/ccr にインストールされます。

Oracle Configuration Manager の詳細は、http://docs.oracle.com/cd/E24625_01/index.htm を参照してください。

Oracle BI EE および Publisher との接続の設定

EPM Workspace と Oracle BI EE リリース 10.1.3.4.2 以上を統合する場合、このタスクを使用します。この構成タスクを実行する前に、前提条件タスクおよび手動構成タスクについて Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide を参照してください。

EPM Workspace と Oracle BI EE リリース 11.1.1.7 を統合するには、Oracle® Fusion Middleware System Oracle Business Intelligence Enterprise Edition の管理者ガイドを参照してください。

- ▶ Oracle BI EE および BI Publisher で使用する EPM Workspace の構成情報を指定します。

このタスクの実行後、Web サーバーを再構成する必要があります。Web サーバーがこのマシン上にある場合、「Oracle BI EE および Publisher への接続」を選択する際、同時に「Web サーバーの構成」を選択します。

次の表は、EPM Workspace を Oracle BI EE および BI Publisher とともに使用するための構成オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
Oracle BI EE の設定		
ホスト	Oracle BI EE がインストールされているホストを指定します。	
ポート	Oracle Business Intelligence Enterprise Edition がリスニングしているポートを指定します。	
SSL ポート	SSL を使用している場合は SSL ポートを指定します。	
URL コンテキスト	コンテキスト・パスを確認します。コンテキスト・パスは、配置済 Java Web アプリケーションにアクセスする URL の一部です。デフォルト値は /analytics です。	
Oracle BI Publisher の設定		
ホスト	BI Publisher がインストールされているホストを指定します。	
ポート	Oracle Business Intelligence Publisher がリスニングしているポートを指定します。	
SSL ポート	SSL を使用している場合は SSL ポートを指定します。	
URL コンテキスト	コンテキスト・パスを確認します。コンテキスト・パスは、配置済 Java Web アプリケーションにアクセスする URL の一部です。デフォルト値は /xmlpserver です。	

Shared Services の管理ユーザーとパスワードの設定

- ▶ セキュリティを強化するには、Shared Services の管理ユーザーのパスワードを再設定します。(オプション)デフォルトの admin 以外の管理者名を指定します。

EPM System コンフィグレータは、事前にプロビジョニングされたユーザー(デフォルト名は admin)を作成します。これにより、構成後に Shared Services にログオンしてユーザーを作成およびプロビジョニングできます。EPM System コンフィグレータによって、構成時に新しい管理パスワードの指定を求められます。構成後に、Oracle Hyperion Shared Services Console で管理ユーザー・パスワードを変更します。Oracle Enterprise Performance Management System Security Configuration Guide を参照してください。

次の表に、Shared Services の管理ユーザー・パスワードを再設定するためのオプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
管理者名	(オプション) Shared Services 管理者ユーザーとして、デフォルト名の admin 以外の名前を指定します。	
パスワード	Shared Services の管理ユーザーの新パスワードを入力します。 ヒント: このパスワードをメモしておいてください。	
パスワードの再入力	新パスワードを確認するために、Shared Services の管理ユーザーのパスワードを再入力します。	

このマシンでのコンパクト・サーバーのスケール・アウト

EPM System Java Web アプリケーションを単一の管理対象サーバーに配置した場合、このオプションを使用してサーバーをスケール・アウトします。

「このマシンでのコンパクト・サーバーのスケール・アウト」オプションは、次に当てはまる場合にのみ選択できます:

- WebLogic 管理サーバーが現在のマシンにインストールされていません。
- 単一の管理対象サーバーが WebLogic 管理サーバーに配置されています。
- 単一の管理対象サーバーがマシンでまだスケール・アウトされていません。

Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の単一の管理対象サーバーのスケール・アウトに関する項を参照してください。

Web サーバーの構成

- ▶ Web サーバー情報を指定するか、「次へ」をクリックまたは選択してデフォルト値を使用します。

このページの情報は、Shared Services レジストリに記録されている配置済アプリケーションと、この構成順序で配置中のアプリケーションから取得された情報です。

追加の製品を配置する場合は、Foundation Services をホストする各マシンで、Web サーバーを再構成してから再起動します(または Oracle HTTP Server を共有ドライブに構成した場合は再起動するだけです)。

次に、配置内の各 Foundation Services ホスト・マシン上の Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace をリフレッシュします。

[122 ページの「EPM Workspace のリフレッシュ」](#)を参照してください。

注： Web サーバーに対して SSL を使用可能にするには、手動で構成する必要があります。Oracle Enterprise Performance Management System Security Configuration Guide を参照してください。

次の表に、Web サーバーの構成のオプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
Web サーバー・タイプ	Web サーバーを選択します。 Web サーバーを手動で構成するには、「手動による Web サーバー構成のレジストリの設定」を選択します。 Web サーバーの手動構成の詳細は、 179 ページの「Oracle HTTP Server の手動構成」 を参照してください。	
Web サーバー・ポート	Web サーバー・ポートを指定します。SSL を使用する場合は、入力するポート番号が安全なポートであることを確認してください。	
HTTP サーバーの場所	Web サーバーの場所を指定または参照します。 Oracle HTTP Server を使用している場合は、分散環境での構成をシンプル化するために、共有ドライブの場所に構成できます。「詳細設定オプション」をクリックしてから、共有ドライブの場所を指定します。この共有の場所は、配置内のすべての Web サーバからアクセス可能である必要があります。 注： Windows および UNIX の両方にコンポーネントを配置し、Oracle HTTP Server が両方にある場合は、共有ドライブに構成することはできません。ローカル・ドライブに構成する必要があります。	
Web アプリケーションの論理 Web アドレスをこの Web サーバーに設定	EPM System コンフィグレータによってすべての Java Web アプリケーションの論理 Web アドレスを Web サーバーに設定する場合はこのオプションを選択します。このオプションは Web サーバーをロード・バランサとして使用する場合に選択します。 このオプションを選択しなかった場合、EPM System コンフィグレータは物理 Java Web アプリケーションのアドレスを論理アドレスとして使用します。	

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
コンポーネント	Web サーバーが構成されるコンポーネントを確認します。	

Foundation Services - 前のリリースからのデータのインポート

このオプションは、前のリリースからアップグレードする場合のみ使用できます。アップグレードしない場合は、この項をスキップしてください。このタスクを完了するには、Shared Services データを前のリリースからエクスポートしておく必要があります。

アップグレードについての注意

- ▶ 以前のリリースからアップグレードする場合、Shared Services データをインポートする場所を指定します。Shared Services アップグレード・ユーティリティによって作成される hssmigratedata.zip へのフル・パスを指定する必要があります。

前のリリースからの Shared Services データをまだエクスポートしていない場合、[233 ページの「前のリリースの Shared Services データのエクスポート」](#)を参照してください。

このタスクは、Foundation Services の「アプリケーション・サーバーへの配置」タスクを選択または完了している場合のみ選択します。

この構成タスク中の処理の詳細は、[255 ページの「Shared Services のデータ・インポート中の処理」](#)を参照してください。

Performance Management Architect 構成タスク

次元サーバーの構成

- ▶ 次のオプションを指定して次元サーバーのポートを構成するか、「次へ」をクリックまたは選択してデフォルト値をそのまま使用します。

次の表に、次元サーバー・ポートの構成オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
次元サーバー・ポート	使用するポートを指定するか、「次へ」をクリックまたは選択してデフォルト・ポートをそのまま使用します。	
次元サーバーのJNI ブリッジ・ポート	使用するポートを指定するか、「次へ」をクリックまたは選択してデフォルト・ポートをそのまま使用します。	

Essbase 構成タスク

サブトピック

- [Essbase サーバーの構成](#)
- [Essbase Integration Services の構成](#)
- [サンプルおよび顧客データ・ソースのテキスト・ファイルの Essbase Studio の場所の構成](#)
- [Administration Services - 前のリリースからのデータのインポート](#)
- [Provider Services - 前のリリースからのデータのインポート](#)

Essbase サーバーの構成

- ▶ Essbase サーバーの構成情報を指定するか、「次へ」をクリックまたは選択してデフォルト設定をそのまま使用します。一般的には、デフォルト値を使用することをお勧めします。ただし、Essbase の前のリリースからアップグレードする場合、「アプリケーションの場所へのフル・パス(ARBORPATH)」で、既存の場所または Essbase アプリケーション・ディレクトリを複製した場所を指定します。デフォルトの場所は正しくない可能性があります。

構成中にスタンドアロン・モードの Essbase を選択しないと、EPM System コンフィグレータは Essbase を Shared Services に自動的に登録して、Shared Services の接続情報を ARBORPATH/bin にある `essbase.cfg` に書き込みます。さらに、Essbase サーバーの起動に使用するファイルに環境変数が指定されます。

次の表に、Essbase サーバーのオプションの構成を示します。

表 21 Essbase サーバー構成

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
Essbase クラスタ名	<p>クラスタ名を指定し、ライトバック機能を持つアクティブ-パッシブ Essbase のフェイルオーバーを実現するクラスタを作成します。クラスタに含めることができる Essbase インスタンスは 2 つのみです。</p> <p>最初のマシンで Essbase の最初のインスタンスを構成するときに、クラスタを定義します。2 番目のマシンで Essbase の 2 番目のインスタンスを構成する場合、「既存のクラスタへの割当て」を選択し、「OK」をクリックして、最初のマシンで作成したクラスタにこの Essbase サーバーを追加します。</p> <p>Essbase クラスタ名は、配置環境内で一意である必要があります。特殊文字またはスペースを含めることはできません。</p> <p>Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide のアクティブ-パッシブ Essbase クラスタ(Windows)の構成、またはアクティブ-パッシブ Essbase クラスタ(UNIX)の構成に関する項を参照してください。</p>	

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
エージェント・ポート番号	<p>Essbase がクライアント要求をリスニングするデフォルトのポート番号をそのまま使用します。デフォルト値を変更する場合は、他のプログラムで使用していないポート番号を入力してください。</p> <p>このポートでエージェントがリスニングできるようにするには、「アクティブ」を選択します。</p>	
SSL エージェント・ポート番号	<p>Essbase がクライアント要求をリスニングする SSL ポートを指定します。</p> <p>このポートでエージェントがリスニングできるようにするには、「アクティブ」を選択します。</p>	
開始ポート	<p>デフォルトの番号をそのまま使用するか、Essbase サーバーがクライアント要求をリスニングする最初のポート番号を入力します。</p> <p>ポート値は、ARBORPATH/bin にある <code>essbase.cfg</code> に格納されます。</p>	
終了ポート	<p>Essbase サーバーが接続を行うために使用できる最大のポート番号。</p> <p>Essbase は、1 つのアプリケーションにつき少なくとも 2 つのポートを使用します。大規模なアプリケーションでは、より広いポート範囲が必要です。</p>	
アプリケーションの場所へのフル・パス(ARBORPATH)	<p>アプリケーションの場所。</p> <p>汎用命名規則(UNC)形式を使用して、パスを指定できます。UNIX で高可用性のために Essbase を構成する場合は、UNC を使用することをお勧めします。</p> <p>注： 前のバージョンの Essbase は、ARBORPATH を使用してインストールの場所を参照しました。</p> <p>UNIX で Essbase クラスタを設定する場合、アプリケーションの場所は共有ドライブまたは UNC パスである必要があります。クラスタ内の 2 番目のマシンを構成する場合、場所は、クラスタ内の最初のマシン用に指定した場所と一致する必要があります。</p> <p>アップグレードについての注意</p> <p>Essbase の以前のリリースからアップグレードする場合は、既存の場所または Essbase アプリケーション・ディレクトリを複製した場所を指定します。デフォルトの場所は正しくない可能性があります。</p>	

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
Essbase で使用される言語を設定してください(ESSLANG)	<p>ESSLANG 変数は、ロケール定義です。たとえば、米語をサポートするためには、ESSLANG を English_UnitedStates.Latin1@Binary に設定します。</p> <p>指定された値に基づいて、EPM System コンフィグレータにより <code>setEssbaseEnv.bat</code> (EPM_ORACLE_INSTANCE/EssbaseServer/essbaseserver1/bin 内)が ESSLANG 値を使用して更新され、この値が Essbase で使用されます。</p> <p>コンピュータ上のオペレーティング・システム・ロケールの設定を確認し、一致する ESSLANG 値を選択します。コンピュータの ESSLANG 設定は、コンピュータのオペレーティング・システムのロケール設定に一致する必要があります。</p> <p>また、Windows マシンでは、ESSLANG 値とシステム・ロケールがオフラインで使用する Planning アプリケーションの言語と一致する必要があります。</p> <p>Essbase 製品を正常に開始するためには、正しい ESSLANG 設定を選択する必要があります。ESSLANG 設定は、アプリケーションおよびデータベースの機能に影響します。</p> <p>Windows では、ESSLANG がすでにコンピュータに設定されている場合(たとえば、すでに Essbase をインストール済である場合)、デフォルトでは現在の値が選択されます。</p> <p>UNIX プラットフォームでは、オペレーティング・システムの設定とは無関係に、ESSLANG 設定はデフォルトで English (Latin I)に設定されます。</p> <p>ESSLANG の詳細は、144 ページの「ESSLANG 変数」を参照してください。</p> <p>サポートされる ESSLANG 値の完全なリストは、Oracle Essbase Database Administrator's Guide を参照してください。</p>	
スタンドアロン・モードで Essbase を配置してください	<p>Shared Services セキュリティではなく、Essbase サーバーの従来のセキュリティを選択します。</p> <p><code>-forceRegistry</code> オプションを使用して EPM System コンフィグレータを開始した場合は、このオプションを使用できません。</p>	

ESSLANG 変数

Essbase サーバー・インストールでは、毎回 ESSLANG 値を設定する必要があります。Oracle Essbase Database Administrator's Guide のファイル・エンコードの管理についてのトピックを参照してください。

ESSLANG のデフォルト値は、English (Latin1)です。英語以外の言語の ESSLANG 値の例については、Oracle Essbase Database Administrator's Guide の Unicode モードのアプリケーションについてのトピック内のサポートされているロケールのリストを参照してください。

構成中、EPM System コンフィグレータが、Shared Services レジストリと Essbase の開始に使用する起動ファイルに、指定した ESSLANG 値を書き込みます。

Administration Services と Provider Services に対しては、ESSLANG 値を指定するよう求められません。デフォルト値である English_UnitedStates.Latin1@Binary が設定されます。

ESSLANG 設定の管理

Essbase サーバー・コンピュータ上の ESSLANG 環境変数は、使用するアプリケーションのロケール値を保持する必要があります。

注： Essbase サーバー・コンピュータ上でアプリケーションを作成した後で ESSLANG 変数を変更した場合、そのアプリケーションは開始できなくなります。

データの破損を防ぐために、次のような状況では、ESSLANG ロケール指定はクライアントと Essbase サーバー間で同じにする必要があります：

- クライアントが Unicode に対応していません。
- Unicode 対応のクライアントが、Unicode に対応していないバージョンの Essbase サーバーにある既存のアウトラインに上書き保存します。
- Unicode 対応のクライアントが、Unicode 対応の Essbase サーバーにある非 Unicode アプリケーションにアウトラインを保存します。

Unicode 対応のクライアントが Unicode モードのアプリケーションに属するアウトラインを表示および更新する場合は、クライアント・コンピュータと Essbase サーバー・コンピュータとで ESSLANG ロケールの指定が異なってもかまいません。

英語以外の環境で Essbase RTC を使用する製品に対しては、クライアント上で ESSLANG を手動で設定する必要があります。

Essbase Integration Services の構成

この構成タスクでは Oracle Essbase Integration Services 起動スクリプトを 1 つしかない EPM System 起動スクリプトに追加します。ただし、EPM System コンフィグレータのページは表示されず、情報を入力する必要はありません。

- ▶ 「タスクの選択」 ページで「Essbase Integration Services の構成」を選択して、EPM System コンフィグレータを実行します。

サンプルおよび顧客データ・ソースのテキスト・ファイルの Essbase Studio の場所の構成

- ▶ サンプル・ファイルのインストールで使用する場所、またはデータ・ソースとして使用するテキスト・ファイルの場所を指定するか、あるいは、「次へ」を選択して、デフォルト値を受け入れます。

次の表に、サンプルおよび顧客データ・ソースのテキスト・ファイル構成の Essbase Studio の場所のオプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
サーバー・データファイルの場所	<p>サンプル・ファイルのインストールで使用する場所、またはデータ・ソースとして使用するテキスト・ファイルの場所を指定します。デフォルトの場所は EPM_ORACLE_INSTANCE/BPMS/bpms1/datafiles です。</p> <p>アップグレードについての注意</p> <p>以前のリリースからアップグレードする場合は、既存の場所または Oracle Essbase Studio データ・ファイルを複製した場所を指定します。</p>	

Administration Services - 前のリリースからのデータのインポート

このオプションは、前のリリースからアップグレードする場合のみ使用できます。アップグレードしない場合は、この項をスキップしてください。このタスクを完了するには、前のリリースからデータを準備しておく必要があります。

アップグレードについての注意

- ▶ 以前のリリースからアップグレードする場合は、Administration Services データのインポート元の場所を指定します。

アップグレード用に前のリリースからのデータをまだ準備していない場合、[236 ページの「構成中の一時使用のためのファイルのコピー」](#)を参照してください。

このタスクは、Administration Services の「データベースの構成」タスクを選択または完了している場合のみ選択可能です。

構成中にこのデータは Shared Services レジストリに移動され、ファイルは使用されなくなります。

Provider Services - 前のリリースからのデータのインポート

このオプションは、前のリリースからアップグレードする場合のみ使用できます。アップグレードしない場合は、この項をスキップしてください。このタスクを完了するには、前のリリースからデータを準備しておく必要があります。

アップグレードについての注意

- ▶ 以前のリリースからアップグレードする場合は、Provider Services データのインポート元の場所を指定します。

アップグレード用に前のリリースからのデータをまだ準備していない場合、[236 ページの「構成中の一時使用のためのファイルのコピー」](#)を参照してください。

このタスクは、Oracle Hyperion Provider Services の「アプリケーション・サーバーへの配置」タスクを選択または完了している場合のみ選択可能です。

構成中にこのデータは Shared Services レジストリに移動され、ファイルは使用されなくなります。

Reporting and Analysis 構成タスク

サブトピック

- [Reporting and Analysis Framework サービスの構成](#)
- [Reporting and Analysis サービスの構成](#)
- [Financial Reporting RMI ポートの構成](#)
- [Reporting and Analysis フレームワーク・エージェント・ポートの構成](#)
- [SQR Production Reporting](#)

注： Financial Reporting サーバー・マシンでは、Financial Management の「DCOM の構成」タスクも選択する必要があります。

Reporting and Analysis Framework サービスの構成

- ▶ 次の Reporting and Analysis Framework サービス情報を指定するか、「次へ」をクリックまたは選択して、デフォルト値をそのまま使用します：

次の表に、Reporting and Analysis Framework サービスの構成オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
リポジトリ・ディレクトリ	<p>Reporting and Analysis リポジトリ・データが保管されるディレクトリを、次のように指定します: EPM_ORACLE_INSTANCE/ReportingAnalysis/data/RM1。</p> <p>高可用性のために構成する場合、リポジトリ・ディレクトリが書込み可能な共有ドライブである必要があります。すべての Reporting and Analysis インスタンスは同じ共有ファイル・システムの場所を使用する必要があります。例: \ \SharedHost\SharedLocation\data\RM1</p> <p>注： このサービスを Windows サービスとして実行する場合、マップ済ドライブのかわりに UNC パスを使用します。これにより、Windows が起動時にマップ済ドライブを作成しようとするときに発生する可能性がある潜在的な権限エラーを阻止します。</p> <p>アップグレードについての注意</p> <p>以前のリリースからアップグレードする場合は、既存の場所または Reporting and Analysis リポジトリを複製した場所を指定します。</p>	
ポートの範囲	Oracle Hyperion Reporting and Analysis Framework サービスに使用するポート範囲を指定します。	

Reporting and Analysis サービスの構成

- ▶ Interactive Reporting サービスを構成するための次のオプションを指定するか、「次へ」をクリックまたは選択してデフォルト値を使用します。

次の表に、Oracle Hyperion Interactive Reporting サービスの構成オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
ポートの範囲	使用するポート範囲を指定するか、「次へ」をクリックまたは選択してデフォルト・ポート範囲をそのまま使用します。	

Financial Reporting RMI ポートの構成

- ▶ 次のオプションを指定して Financial Reporting RMI ポートの範囲を構成するか、「次へ」をクリックまたは選択してデフォルト値をそのまま使用します。

次の表に、Financial Reporting RMI ポートの構成オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
ポートの範囲	使用するポート範囲を指定するか、「次へ」をクリックまたは選択してデフォルト・ポート範囲をそのまま使用します。	

Reporting and Analysis フレームワーク・エージェント・ポートの構成

- ▶ 次のオプションを指定して Reporting and Analysis エージェント・ポートを構成するか、「次へ」をクリックまたは選択してデフォルト値をそのまま使用します。

次の表に、Oracle Hyperion Reporting and Analysis フレームワーク・エージェント・ポートの構成オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
エージェント・ポート	使用するポートを指定するか、「次へ」をクリックまたは選択してデフォルト・ポート範囲をそのまま使用します。	
エージェント RMI ポート	使用するポートを指定するか、「次へ」をクリックまたは選択してデフォルト・ポート範囲をそのまま使用します。	

SQR Production Reporting

このタスクは Oracle Hyperion SQR Production Reporting へのショートカットを作成しますが、EPM System コンフィグレータ・ページは表示されないため、情報を入力する必要はありません。

- ▶ 「タスクの選択」 ページで「SQR Production Reporting」を選択し、EPM System コンフィグレータを続行します。

Planning 構成タスク

Planning RMI サーバーの構成

- ▶ 次のオプションを指定して Planning RMI サーバー・ポートを構成するか、「次へ」をクリックまたは選択してデフォルト値をそのまま使用します。

次の表に、Oracle Hyperion Planning RMI サーバー・ポートの構成オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
ポート	使用するポートを指定するか、「次へ」をクリックまたは選択してデフォルト・ポートをそのまま使用します。	

Financial Management 構成タスク

サブトピック

- [Financial Management - DCOM の構成](#)
- [Financial Management - アプリケーション・サーバーの構成](#)
- [Financial Management - クラスターの構成](#)
- [Financial Management - Web サーバーの構成](#)
- [Financial Management - Web アプリケーションの構成](#)
- [Financial Management - Smart View プロバイダの使用可能化](#)
- [Financial Management - ライフサイクル管理プロバイダの使用可能化](#)
- [Financial Management - Web サービスの使用可能化](#)
- [Web サーバー構成の詳細設定オプション](#)
- [Financial Management - 前のリリースからのアプリケーションのアップグレード](#)

EPM System コンフィグレータを管理者として実行し、Financial Management を構成する必要があります。

Financial Management - DCOM の構成

- ▶ 分散型コンポーネント・オブジェクト・モデル(DCOM)のアカウント情報を指定して、DCOM セキュリティを構成します。

アプリケーション・サーバー・プロセスが起動する ID で、Windows 管理者を指定する必要があります。このタスクは、Financial Management Web サーバー層をホストするマシン上またはサービス層上で実行します。

注： DCOM ユーザーを構成するグループ・ポリシー権限を持つドメインまたはローカル管理者として実行する必要があります。

Financial Management のアプリケーション・サーバーの全プロセスは管理者 ID(Windows の管理ユーザー)で実行されるため、他の管理者がアプリケーション・サーバーにログオンしてアプリケーション・サーバーのプロセスを開始する必要はありません。

次の表に、Financial Management DCOM の構成オプションを示します。

EPM System コンフィグ レータの フィールド	説明	ユー ザー の情 報
ドメイン・ ユーザー	ユーザー名を指定します。 ドメインとユーザー名の制約事項: <ul style="list-style-type: none"> ● ユーザー名は、管理対象のコンピュータのその他のユーザー名またはグループ名と重複できません。ユーザー名には、最大 20 文字の大文字および小文字を使用できます。ユーザー名は、ピリオド(.)とスペースのみでは構成できません。また、"'/\[\]:; =,*?<>&' の特殊文字も使用できません。 ● 一重引用符(')はユーザー名に使用しないでください。ユーザー名に一重引用符が含まれているユーザーは、Financial Management にログオンできません。 ● ユーザー・アカウントを構成するときに、IP アドレスをドメイン名としては使用できません。 	
パスワード	パスワードを入力します。パスワードは、14 文字までで大文字小文字を区別します。システムによるパスワードの確認はないので、パスワードが有効なパスワードであるかどうか自分で確認します。 注： システムのローカル・セキュリティ・ポリシーを変更した場合は、一旦ログオフしてからログオンしなおして、変更を適用する必要があります。	
パスワードの 再入力	確認のためパスワードを再度入力します。	
このマシンで の DCOM の使 用可能化	このマシン上で DCOM を使用可能にします。 このオプションは、アプリケーション・サービスと Financial Management の Web 層インストールに対して使用できます。DCOM がコンピュータ上ですでに使用可能になっている場合にはこのオプションは使用できません。 このオプションは、コンピュータ全体に対して DCOM を使用可能にします。DCOM を使用可能にすると、マシンに対するリモート・クライアントによるサーバーの起動やオブジェクトへのアクセスが可能になります。DCOM デフォルト認証レベルを、Windows 2003 の場合は「なし」に、Windows 2008 の場合は「接続」に設定します。DCOM を使用可能にする手順は、Financial Management アプリケーション・サーバーが別のコンピュータにある場合に、Financial Management クライアント・コンポーネントがそのアプリケーション・サーバーにアクセスするために必要です。また、Financial Management クライアント・コンピュータをそのアプリケーション・サーバー・コンピュータと別のドメインに置くことも可能になります。	

Windows 管理者情報を入力すると、EPM System コンフィグレータが次の手順を実行します:

- Windows 管理ユーザー(DCOM ユーザー)がローカル・マシン上にない場合、これを作成します。

- ユーザーをローカルの管理者グループに追加します。Financial Management 管理者ユーザーまたはそのグループは、各アプリケーション・サーバー上のローカル管理者グループのメンバーである必要があります。
- 管理ユーザーに、「オペレーティング・システムの一部として機能」および「バッチ・ジョブとしてログオン」のローカル・セキュリティ・ポリシーを割り当てます。これらのローカル・セキュリティ権限は、各 Financial Management アプリケーション・サーバー上のユーザーに対して使用可能にする必要があります。
- 全 Financial Management アプリケーション・プロセスに対して DCOM を実行するユーザーの ID を設定します。
- ユーザーに DCOM を起動する権限を設定します。

DCOM ユーザー・パスワードを変更する場合、または別の DCOM ユーザー名とパスワードを使用する場合には、ユーザー設定が有効で機能することを確認し、EPM System コンフィグレータを使用して DCOM ユーザー名とパスワードを再入力します。このタスクは、Financial Management の Web 層とサービス層上で実行してください。

Financial Management - アプリケーション・サーバーの構成

- ▶ アプリケーション・サーバー情報を指定するか、「次へ」をクリックまたは選択してデフォルト値を使用します。

次の表に、Financial Management アプリケーション・サーバーの構成オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
アプリケーション・サーバーの最大遅延	デフォルト値をそのまま使用するか、アプリケーションが変更されてから、別のアプリケーション・サーバーからアプリケーションにアクセスするユーザーにその変更が表示されるまでの間の秒数を入力します。	
データ同期の最大遅延	デフォルト値をそのまま使用するか、データを変更してから、別のアプリケーション・サーバーからそのデータにアクセスするユーザーにその変更が表示されるまでの間の秒数を入力します。	
データベース接続プール・サイズ	アプリケーションのリレーショナル・データベース接続プールの最大数を指定します。Financial Management は、アプリケーションごとに約 25 のリレーショナル・データベース接続を必要とします。 プール済データベース接続の詳細は、付録 C 「Financial Management のデータベース情報」を参照してください。	
DME リスナー・ポート	使用するポートを指定するか、「次へ」をクリックまたは選択してデフォルト・ポートをそのまま使用します。	

Financial Management - クラスタの構成

▶ クラスタに追加するアプリケーション・サーバーの名前を指定します。

アプリケーション・サーバー・クラスタは、同じアプリケーションを実行するアプリケーション・サーバーのセットです。クラスタ化されたアプリケーション・サーバーは、負荷分散機能とフェイルオーバー機能を提供し、アプリケーションはユーザーに対して使用可能な状態であり続けながら、サーバーの保守を透過的に行えます。

次の表に、Financial Management クラスタの構成オプションを示します。

EPM System コンフィグ レータの フィールド	説明	ユー ザー の情 報
定義済クラス タ	<p>サーバーを指定するクラスタを選択します。</p> <p>このリストには、インストールに含まれるすべてのマシンで指定されている全クラスタが表示されます。</p> <p>クラスタは追加、編集または除去もできます。</p> <p>クラスタを追加する際には、クラスタ名を指定し、特定のセッションへのリクエストをすべて同じサーバーに送信する場合は「固定サーバーを使用」を選択します。</p> <p>アップグレードについての注意</p> <p>このリストには、以前のリリースで構成した全クラスタが表示されます。クラスタが存在していない場合には、EPM System コンフィグレータがデフォルトのクラスタを作成します。</p> <p>以前のリリースの Financial Management 構成で使用したインスタンス名と同じクラスタ名を使用する必要があります。</p>	
使用可能な サーバー	<p>クラスタに含めるサーバーを選択して、「追加」をクリックまたは選択します。</p> <p>このリストには、使用可能な全サーバーが表示されます。サーバーが1つのみの場合、そのサーバーがここに表示されます。クラスタにすでに追加されているサーバーは、使用できないサーバーとして、ここには表示されません。</p>	
クラスタ内の サーバー	<p>このリストには、現在選択されているクラスタ内の全サーバーが表示されます。このリストからサーバーを除去するには、そのサーバーを選択して「削除」をクリックまたは選択します。</p> <p>アップグレードについての注意</p> <p>アップグレード済のバージョンを新しいサーバーにインストールした場合、必ずアップグレードしたサーバー名をクラスタに追加して以前のリリースのサーバーを削除してください。</p>	

1つのデータベース・サーバーに接続する複数のアプリケーション・サーバーを使用している場合には、アプリケーション・サーバー上のシステム・クロックが同期化されていることを確認します。クロックが同期化されていない場合、表示されているデータが最新ではない可能性があります。

注： Financial Management アプリケーション・サーバー間の同期化はシステム時刻に基づきます。クロックの変更は、この同期化に影響します。夏時間への変更については、まずサーバーを停止してから時刻を変更し、それから再起動することをお勧めします。

Financial Management - Web サーバーの構成

- IIS における IIS Web アプリケーションとして使用可能にするコンポーネントを選択するか、「次へ」をクリックまたは選択して、デフォルト値を使用します。

Financial Management ASP.NET Web サービスは、Financial Management Web サーバー構成の一部として配置されます。

次の表に、Financial Management Web サーバーの構成オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
Financial Management Web アプリケーション用 IIS の構成	Financial Management を IIS における IIS Web アプリケーションとして使用可能にするを選択し、Financial Management Web サーバー用のオプションを指定します。153 ページの「Financial Management - Web アプリケーションの構成」を参照してください。	
IIS を構成して Smart View Provider の使用可能化	IIS における IIS Web アプリケーションとして Smart View を使用可能にするを選択し、Smart View Web サーバー用のオプションを指定します。154 ページの「Financial Management - Smart View プロバイダの使用可能化」を参照してください。	
IIS を構成してライフサイクル管理の使用可能化	IIS における IIS Web アプリケーションとしてライフサイクル管理を使用可能にするを選択します。155 ページの「Financial Management - ライフサイクル管理プロバイダの使用可能化」を参照してください。	
IIS を構成して Financial Management Web サービスの使用可能化	IIS における Financial Management Web サービス IIS Web アプリケーションを使用可能にするを選択します。155 ページの「Financial Management - Web サービスの使用可能化」を参照してください。	
Web セッションのタイムアウト	デフォルト値をそのまま使用するか、タイムアウトを分単位で指定します。 この値は、IIS におけるすべての Financial Management IIS Web アプリケーションに適用されます。	

Financial Management - Web アプリケーションの構成

- Financial Management 用 Web サーバーを構成するか、「次へ」をクリックまたは選択してデフォルト値をそのまま使用します。

次の表に、Financial Management Web アプリケーションの構成オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
Web サーバーのインストール・ディレクトリ	デフォルト値をそのまま使用するか、Financial Management Web インストール・ディレクトリのパスを入力または参照します。 注： デフォルトの場所は、Web コンポーネントのインストール・ディレクトリ(EPM_ORACLE_HOME/products/FinancialManagement/Web/HFM など)です。	
仮想ディレクトリ名	デフォルト値をそのまま使用するか、HFM など、仮想ディレクトリ名を入力します。	
詳細設定オプション	Web サーバー構成の詳細オプションを指定するには、「詳細設定オプション」をクリックまたは選択します。 154 ページの「Financial Management Web アプリケーションの詳細設定オプション」 を参照してください。	

Financial Management Web アプリケーションの詳細設定オプション

- ▶ Financial Management Web アプリケーションに対する追加オプションを指定します。

次の表に、Financial Management Web アプリケーション構成の詳細設定オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
アップロード・ファイルの最大サイズ	ロードする Web ファイルの最大サイズを入力します。 IIS 6.0 を使用する場合、Web 上でファイルをロードおよび抽出する際の ASP ファイル・サイズ・プロパティを設定できます。ロードおよび抽出中に問題が発生する場合以外は、デフォルトのファイル・サイズ・プロパティを使用することをお勧めします。ただし、大規模なファイルをロードまたは抽出し、ブラウザに大量のデータを送信してエラーが発生する場合は、ファイル・サイズの設定を変更できます。 たとえば、大規模なファイルをロードする場合、最大アップロード・ファイル・サイズが小さく設定されすぎていると 403 エラー・メッセージが表示される場合があります。この場合、最大ファイル・サイズを増やす必要があります。ファイル・サイズはバイト単位で入力します。したがって、200MB のファイルをロードする場合には、最大アップロード・ファイル・サイズを 200,000,000 バイトに変更します。	
応答バッファ・サイズ	抽出する Web ファイルの最大サイズを入力します。	

Financial Management - Smart View プロバイダの使用可能化

- ▶ Smart View 用に Web サーバーを構成します。

次の表に、Financial Management Smart View プロバイダの構成オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
Web サーバーのインストール・ディレクトリ	Smart View がインストールされている場所を入力するか、デフォルトの場所を使用します。 注： デフォルトの場所は EPM_ORACLE_HOME/products/FinancialManagement/Web/HFMOofficeProvider です。	
仮想ディレクトリ名	Smart View 用の仮想ディレクトリ名を入力するか、デフォルトの仮想ディレクトリを使用します。 デフォルトのディレクトリ名は HFMOofficeProvider です。	
詳細設定オプション	Smart View 構成の詳細設定オプションを指定する場合にクリックまたは選択します。156 ページの「Web サーバー構成の詳細設定オプション」を参照してください。	

Financial Management - ライフサイクル管理プロバイダの使用可能化

- ▶ ライフサイクル管理用の Web サーバーを構成します。

次の表に、Financial Management ライフサイクル管理の構成オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
Web サーバーのインストール・ディレクトリ	ライフサイクル管理がインストールされている場所を入力するか、デフォルトの場所を使用します。 注： デフォルトの場所は EPM_ORACLE_HOME/products/FinancialManagement/Web/HFMLCMSservice です。	
仮想ディレクトリ名	ライフサイクル管理用の仮想ディレクトリ名を入力するか、デフォルトの仮想ディレクトリを使用します。 デフォルトのディレクトリ名は hfmlcmservice です。	
LCM のコールバック・ポートの範囲	使用するポートの範囲を指定するか、「次へ」をクリックまたは選択してデフォルト・ポート範囲をそのまま使用します。	
詳細設定オプション	ライフサイクル管理構成の詳細設定オプションを指定する場合にクリックまたは選択します。156 ページの「Web サーバー構成の詳細設定オプション」を参照してください。	

Financial Management - Web サービスの使用可能化

- ▶ Financial Management Web サービスの Web サーバーを構成します。

次の表に、Financial Management Web サービスの構成オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
Web サーバーのインストール・ディレクトリ	Financial Management Web サービスがインストールされている場所を入力するか、デフォルトの場所を使用します。 注： デフォルトの場所は EPM_ORACLE_HOME/products/FinancialManagement/Web/HFMAApplicationService です。	
仮想ディレクトリ名	Financial Management Web サービス用の仮想ディレクトリ名を入力するか、デフォルトの仮想ディレクトリを使用します。 デフォルトのディレクトリ名は hfmapplicationsservice です。	
詳細設定オプション	Financial Management Web サービス構成の詳細設定オプションを指定する場合にクリックまたは選択します。156 ページの「Web サーバー構成の詳細設定オプション」を参照してください。	

Web サーバー構成の詳細設定オプション

- ▶ Smart View、ライフサイクル管理および Financial Management Web サービスの Web サーバー構成の追加オプションを指定します。

次の表に、Smart View、ライフサイクル管理および Financial Management Web サービスの Web サーバー構成の詳細設定オプションを示します。

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
アップロード・ファイルの最大サイズ(Web サービスのみ)	ロードする Web ファイルの最大サイズを入力します。 IIS 6.0 を使用する場合、Web 上でファイルをロードおよび抽出する際の ASP ファイル・サイズ・プロパティを設定できます。ロードおよび抽出中に問題が発生する場合以外は、デフォルトのファイル・サイズ・プロパティを使用することをお勧めします。ただし、大規模なファイルをロードまたは抽出し、ブラウザに大量のデータを送信してエラーが発生する場合は、ファイル・サイズの設定を変更できます。 たとえば、大規模なファイルをロードする場合、最大アップロード・ファイル・サイズが小さく設定されすぎていると 403 エラー・メッセージが表示される場合があります。この場合、最大ファイル・サイズを増やす必要があります。ファイル・サイズはバイト単位で入力します。したがって、200MB のファイルをロードする場合には、最大アップロード・ファイル・サイズを 200,000,000 バイトに変更します。	
応答バッファ・サイズ(Web サービスのみ)	抽出する Web ファイルの最大サイズを入力します。	
HTTP 圧縮の使用可能化	Web ブラウザと Web アプリケーション間の通信の圧縮を使用可能にするかどうかを指定します。 デフォルトでは、圧縮が有効になっています。	
プロキシ・サーバーの継続活動の使用可能化	Web サーバーとクライアントの間でプロキシ・サーバーを使用している場合は、このオプションを選択して、接続の間隔を秒数で指定します。	

EPM System コンフィグレータのフィールド	説明	ユーザーの情報
継続活動間隔(秒)	Web サーバーとクライアントの間でプロキシ・サーバーを使用している場合は、このオプションを選択して、接続の間隔を秒数で指定します。	
クライアント・バージョンの方が新しい場合は常に警告(Smart View プロバイダのみ)	新しいアドイン・バージョンに対して警告が発生されるようにします。	
クライアントを常にアップグレード(Oracle Hyperion Smart View for Office プロバイダのみ)	最新のアドイン・バージョンにアップグレードして、クライアントとサーバーのバージョン間の互換性を確保します。	

Financial Management - 前のリリースからのアプリケーションのアップグレード

このオプションは、前のリリースからアップグレードする場合のみ使用できます。アップグレードしない場合は、この項をスキップしてください。

アップグレードについての注意

- ▶ 「タスクの選択」 ページで「前のリリースからのアプリケーションのアップグレード」を選択して、EPM System コンフィグレータを実行します。

EPM System コンフィグレータにはこのタスクのページがなく、情報を入力する必要はありません。

このタスクは、Financial Management の「データベースの構成」および「Financial Management DCOM の構成」タスクを選択または完了している場合のみ選択可能です。

このタスクの実行中に、EPM System コンフィグレータにより、Financial Management アプリケーションが前のリリースから現在のリリースにアップグレードされます。

Performance Scorecard - 添付ファイルの場所の構成

- ▶ Performance Scorecard ファイルにアクセスするためのデフォルトの場所を使用するか、新規ディレクトリを指定してから、「次へ」をクリックまたは選択します。

次の表に、Performance Scorecard の構成オプションを示します。

EPM System コンフィグ レータのフィールド	説明	ユー ザーの 情報
Performance Scorecard - 添付ファイルの場所の 構成	<p>Performance Scorecard ファイルにアクセスするために、デフォルトの場所を使用するか、別のディレクトリを指定します。</p> <p>ファイルは EPM_ORACLE_INSTANCE/HPS/hpsfiles に保管されますが、格納場所へのシンボリック・リンクまたはドライブ・マッピングを使用している場合は、ここでシンボリック・リンク名またはドライブ・マップ・パスを入力します。</p> <p>高可用性のために構成する場合、共有ドライブの場所を指定する必要があります。</p> <p>例: \\SharedHost\SharedLocation\data\HPS</p> <p>アップグレードについての注意</p> <p>以前のリリースからアップグレードする場合は、既存の場所または Oracle Hyperion Performance Scorecard ファイルを複製した場所を指定します。</p>	

Strategic Finance 構成タスク

サブトピック

- [Strategic Finance のポートおよびデータ・フォルダの構成](#)
- [Strategic Finance の Web サービスの構成](#)

Strategic Finance のポートおよびデータ・フォルダの構成

- ▶ Strategic Finance データ・ディレクトリの場所を指定するか、「次へ」をクリックまたは選択してデフォルト値を使用します。

次の表に、Strategic Finance の構成オプションを示します。

EPM System コンフィ グレータのフィールド	説明	ユー ザーの 情報
データ・ディレクト リの場所	<p>デフォルト値をそのまま使用するか、Strategic Finance データの場所を指定します。</p> <p>アップグレードについての注意</p> <p>Strategic Finance の以前のリリースからアップグレードする場合は、既存の場所または以前のリリースのデータ・ディレクトリを複製した場所を指定します。</p>	
サービス・ポート	<p>デフォルト・ポートをそのまま使用するか、Strategic Finance サービス・ポートを指定します。</p>	

Strategic Finance の Web サービスの構成

- ▶ Strategic Finance Web サーバーを構成するためには次のオプションを指定します:

次の表に、Strategic Finance Web サーバーの構成オプションを示します。

EPM System コンフィグ レータのフィールド	説明	ユー ザーの 情報
Web サービスの使用可能化	Web 用に Strategic Finance Web サービスのアプリケーション・プログラミング・インタフェースをアクティブ化するために選択します。これは、FDM へのインタフェースを有効にするために使用可能にする必要があります。	
Strategic Finance サー バー	デフォルト値をそのまま使用するか、関連付ける Oracle Hyperion Strategic Finance サーバーを指定します。	

Financial Close Management 構成タスク

サブトピック

- [コンテンツ管理システムの場所の構成\(オプション\)](#)
- [SOA に配置](#)
- [FDM EE の SOA に配置](#)

コンテンツ管理システムの場所の構成(オプション)

既存のコンテンツ管理システムがある場合、その中に格納されているドキュメントにリンクするよう Financial Close Management を構成できます。

- ▶ 使用するドキュメント管理システムの場所を指定します。

次の表に、Oracle Hyperion Financial Close Management のカスタム設定の構成オプションを示します。

EPM System コンフィグ レータの フィールド	説明	ユー ザーの 情報
URL	<p>ドキュメント管理システムをホスティングしているシステムの URL を入力します。 たとえば、リリース 10g の場合は次のように入力します:</p> <pre>http://host:port/</pre> <p>たとえば、リリース 11g の場合は次のように入力します:</p> <pre>http://host:port/_dav/cs/</pre> <p>サポートされているドキュメント管理システムについては、Oracle Enterprise Performance Management System Certification Matrix(http://www.oracle.com/technetwork/middleware/ias/downloads/fusion-certification-100350.html)を参照してください。</p>	

SOA に配置

この構成タスクには、必要な構成順序があります。

詳細は、73 ページの「Financial Close Management (Close Manager および Account Reconciliation Manager)のインストール・チェックリスト」を参照してください。

- ▶ 「タスクの選択」 ページで「SOA に配置」を選択し、EPM System コンフィグレータを続行します。このタスクの完了後、WebLogic 管理サーバーを再起動する必要があります。

EPM System コンフィグレータにはこのタスクのページがなく、情報を入力する必要はありません。

EPM System コンフィグレータの共通設定のページでメール・サーバー・ホストを構成した場合、「SOA に配置」タスクの実行中に、EPM System コンフィグレータはその情報を使用して SOA 電子メール・ドライバを構成します。

このタスクの実行中に、EPM System コンフィグレータにより、これらの製品についての情報が SOA コンポーネントに埋め込まれ、SOA コンボジットが配置されます:

- Financial Management
- FDM
- Financial Reporting

FDM EE の SOA に配置

Account Reconciliation Manager を使用する場合のみ、このタスクが必要です。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Enterprise Edition をインストールおよび構成した場合にのみこのタスクは使用可能です。

この構成タスクには、必要な構成順序があります。詳細は、73 ページの「[Financial Close Management \(Close Manager および Account Reconciliation Manager\)のインストール・チェックリスト](#)」を参照してください。

- ▶ 「タスクの選択」 ページで「FDM EE の SOA に配置」を選択し、EPM System コンフィグレータを続行します。このタスクの完了後、WebLogic 管理サーバーを再起動する必要があります。

EPM System コンフィグレータにはこのタスクのページがなく、情報を入力する必要はありません。

FDM EE 構成タスク

- ▶ 「タスクの選択」 ページで「HFM アダプタの登録」を選択し、EPM System コンフィグレータを続行します。

「EPM System コンフィグレータ」 ページが表示されず、ユーザーは情報を入力する必要はありません。

FDM の構成タスク

サブトピック

- [FDM サーバーの構成](#)
- [FDM Web アプリケーションの構成](#)

このタスクでは、FDM に関する情報で Shared Services レジストリが更新され、FDM が Shared Services に登録されますが、EPM System コンフィグレータのページは表示されないため、情報を入力する必要はありません。Oracle Hyperion Financial Data Quality Management の構成情報については、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Configuration Guide を参照してください。

FDM サーバーの構成

- ▶ 「タスクの選択」 ページで「FDM サーバーの構成」を選択して、EPM System コンフィグレータを実行します。

FDM Web アプリケーションの構成

- ▶ 「タスクの選択」 ページで「FDM Web アプリケーションの構成」を選択して、EPM System コンフィグレータを実行します。

サイレント構成の実行

サイレント構成では、構成プロセスが自動化され、各マシンに構成設定を手動で指定することなく、複数のコンピュータ上に EPM System 製品を構成できます。

サイレント構成を実行するには、応答ファイルに構成設定を記録します。その後、コマンド・ラインから、応答ファイルに保存した構成オプションを使用して、サイレント構成を実行できます。

注： リモート・デスクトップを使用してサイレント構成を実行する場合、管理コンソール・セッションを使用してリモート・デスクトップを実行します。(mstsc /admin を使用してリモート・デスクトップを起動します。)

- ▶ 構成設定を記録してサイレント構成を実行するには:

- 1 EPM System コンフィグレータが含まれるディレクトリに移動します。デフォルトでは、このディレクトリは `EPM_ORACLE_HOME/common/config/version_number` です。
- 2 コマンド・ライン・プロンプトから、`configtool.bat -recordfilename` または `./configtool.sh -record filename` と入力します。filename は、絶対パスかファイル名になります。

ファイルは XML フォーマットで保存されますが、.xml 拡張子でファイルを保存する必要はありません。

EPM System コンフィグレータが起動します。

ファイル名を指定しない場合は、EPM System コンフィグレータが自動的にファイルを作成します: `EPM_ORACLE_HOME/common/config/version_number/configResponse.xml`。

- 3 EPM System コンフィグレータの実行中、記録するオプションを指定します。

注： サイレント構成を記録する場合、EPM System コンフィグレータを 1 回のみ実行できます。(「製品の選択」ページに戻って、構成タスクを増やせません。)
「タスクの選択」ページに戻った場合は、応答ファイルが再度記録されます。

構成オプションは XML フォーマットの応答ファイルに記録されます。パスワードは暗号化されたフォーマットで応答ファイルに保存されます。

これで、サイレント・モードで製品を構成する準備が整いました。

- 4 製品を構成するマシンに応答ファイルをコピーします。また、構成するマシンからアクセスできるネットワーク・ドライブにファイルをコピーできます。
- 5 コマンド・ラインから次のコマンドを入力します:

```
configtool.bat -silent filename または ./configtool.sh -silent filename。
```

構成がバックグラウンドで実行されます。

EPM System コンフィグレータ内から構成設定を記録することもできます。構成設定を記録するには、構成時に、構成の確認ページで、「保存」をクリックまたは選択して、場所を参照し、ファイル名を指定して、「保存」をクリックまたは選択します。ファイルはサイレント構成の場合と同じフォーマットで保存されます。

アップグレードについての注意

サイレント応答ファイルは、以前のリリースとリリース 11.1.2.3 間で互換性はありません。EPM System の以前のリリースと使用するために作成したサイレント応答ファイルを EPM System リリース 11.1.2.3 と使用する場合は、再作成する必要があります。

構成オプションを変更するため、応答ファイルを後で変更できます。

垂直にスケールされている環境を構成している場合、レスポンス・ファイルに次のエントリを追加すると、一意のポートによってサイレント・レスポンス・ファイルを区別する必要はありません:

```
<auto_port_tick>true</auto_port_tick>
```

各環境でデータベース、WebLogic および Shared Services 管理ユーザーのパスワードが異なっても、同じサイレント応答ファイルを異なる環境で使用できます。セキュリティ上の理由から、生成されたサイレント・ファイルのパスワードの値が暗号化されたフォーマットで格納されますが、EPM System コンフィグレータは暗号化されていないフォーマットもサポートします。サイレント・ファイルのデータベース、WebLogic、および Shared Services のパスワード・プロパティを次のフォーマットに変更することをお勧めします:

```
Database Password  
<property name="password" encrypt="true">clearTextPasword</property>
```

```
Weblogic Admin Password in applicationServerDeployment section  
<property name="adminUser">epm_admin</property>  
<property name="adminPassword" encrypt="true">clearTextPasword</property>
```

```
Shared Services Admin Password in bean name="customConfiguration" for Foundation  
<property name="adminUserName">admin</property>  
<property name="adminPassword" encrypt="true">clearTextPasword</property>
```

各環境のファイルのバージョンをコピーし、環境に適切なパスワードに clearTextPassword を置き換えます。各環境のサイレント・ファイルを実行した後、セキュリティ上の理由から、ファイルが EPM System コンフィグレータで書込み可能な場合、パスワードは暗号化されたフォーマットでファイルに格納されます。

スタンドアロン・モードでの Essbase の設定

Essbase をスタンドアロン・モードで(Shared Services を使用しないで)インストールする場合は、Foundation Services Java Web アプリケーションのインストールをスキップできます。ただし、Shared Services レジストリ・データベースの構成は必要です。Foundation Services Java Web アプリケーションをインストールしないで Shared Services レジストリ・データベースを構成するには、コマンド・ラインから -forceRegistry オプションを使用して EPM System コンフィグレータを実行します。このオプションにより、構成中に「Shared Services およびレジストリ・データベース構成」ページが表示されるので、Shared Services レジストリに対してデータベース詳細情報を入力できます。EPM System コンフィグレータにより、データベースに Shared Services レジストリのテーブルが入力されますが、Foundation Services のテーブルは入力されません。

▶ Foundation Services Java Web アプリケーションをインストールしないで Shared Services レジストリを構成するには:

1 コマンド・ラインから -forceRegistry オプションを使用して、EPM System コンフィグレータを開始します:

- Windows コンソールから、EPM_ORACLE_HOME/common/config/version_number に移動し、configtool.bat -forceRegistry と入力します。
- UNIX では、EPM_ORACLE_HOME/common/config/version_number に移動し、./configtool.sh - forceRegistry と入力します。

-forceRegistry オプションは、EPM System コンフィグレータのサイレント・モードとコンソール・モードでも動作します。例:

```
configtool.bat|.sh -forceRegistry -record
```

```
configtool.bat|.sh -forceRegistry -silent
```

```
configtool.bat|.sh -forceRegistry -console
```

2 Shared Services レジストリのデータベース詳細情報を入力して、構成を続行します。

注: Oracle Essbase をスタンドアロン・モードで設定し、Shared Services モードに切り替える場合、Oracle Essbase Administration Services を使用します。Oracle Essbase Administration Services Online Help を参照してください。

UNIX ベースの EPM System 配置での Financial Management、Financial Reporting および Web Analysis の Windows への配置

EPM System 配置内のすべての Java Web アプリケーションは、すべて Windows マシンまたはすべて UNIX マシンのいずれかに配置する必要があります。ただし、Java Web アプリケーションが UNIX に配置されている場合、EPM System コンフィグレータを使用して、Windows の異なるドメインに配置することで、Financial Management、Financial Reporting および Web Analysis Java Web アプリケーションを Windows に配置する必要があります。これが必要なのは、Financial Management が Windows でのみ実行され、Oracle Hyperion Financial Reporting および Oracle Hyperion Web Analysis が Oracle Hyperion Financial Management をデータ・ソースとして Windows でのみサポートするからです。

構成中の処理

製品の構成中、EPM System コンフィグレータは次のアクションを行います：

- 選択された構成タスクを実行します。
- 各製品を Windows サービスの一部として開始されるように構成します。これは、構成中にユーザーが「共通設定の構成」ページでこのオプションを選択している場合です。
- Oracle Hyperion Foundation Services を構成する際、デフォルトの Shared Services 管理者役割がネイティブ・ディレクトリに作成されます。これは、プロビジョニングされる前のユーザーの作成にすぎません。その後、EPM System コンフィグレータを使用して、製品を Shared Services に登録する際、Shared Services 管理者役割が、製品の管理者役割にプロビジョニングされます。
- Windows 2008 で IIS を必要とする製品を構成する場合、IIS 用の Windows サーバー役割がまだインストールされていなければ、EPM System コンフィグレータによって自動的にインストールされます。Windows Server 2003 では、必要な IIS ファイルをインストールするために、インストール CD、または Windows Server 2003 ファイルのパスの指定を求められます。

構成のトラブルシューティング

構成の結果は、EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/logs/config/configtool_summary.log に記録されます。

エラーが発生した場合は、次のタスクを行います：

- 製品を個別に構成します。
- 構成の確認、ログを使用したデバッグ、トラブルシューティング、および構成上の共通の問題の解決策については、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide を参照してください。

ヒント: EPM System コンフィグレータは、スクリプト ziplogs を EPM_ORACLE_INSTANCE/bin に提供しています。このスクリプトを実行することにより、インストールおよび構成時の問題をトラブルシューティングするためのファイルをサポートに提供できます。このツールは、インストール、構成およびツールを使用した場合は検証およびレジストリ・レポートのログを含めた、すべてのログ・ファイルを収集し、ZIP ファイルとして EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/ziplogs に保存します。

7

EPM System Java Webアプリケーションの手動配置

この章の内容

仮定と前提条件	167
Java Web アプリケーションの手動配置.....	167
Oracle HTTP Server の手動構成	179

WebLogic Server を使用した Java Web アプリケーションの管理の詳細は、http://download.oracle.com/docs/cd/E15523_01/wls.htm を参照してください。

仮定と前提条件

- ユーザーは経験豊富な Java Web アプリケーション・サーバー管理者です:経験豊富な Java Web アプリケーション・サーバー管理者でない場合は、EPM System コンフィグレータを使用して EPM System Java Web アプリケーションを自動的に構成および配置する必要があります。
- 環境内のすべてのマシンに、EPM System インストーラを使用して EPM System 製品をインストールしています。

Java Web アプリケーションの手動配置

▶ EPM System Java Web アプリケーションを手動で配置するには:

- 1 次のコマンドを使用して EPM System コンフィグレータを起動し、「Web サーバーの構成」タスクを除くすべての必須構成タスクを実行します。なお、「アプリケーション・サーバーへの配置」タスクは使用できません。

Windows:

```
EPM_ORACLE_HOME/common/config/  
version_number/configtool-manual.bat
```

UNIX:

```
EPM_ORACLE_HOME/common/config/  
version_number/configtool-manual.sh
```

このコマンドを使用して EPM System コンフィグレータを起動すると、Java Web アプリケーションの配置タスクが非表示になり、Shared Services への製品登録タスクがスキップされます。

第 6 章「新しい配置での EPM System 製品の構成」を参照してください。

- 2 分散環境の各マシンで手順 1 を繰り返します。
- 3 Fusion Middleware 構成ウィザードを起動します: コマンド・ラインで、ディレクトリを MIDDLEWARE_HOME/oracle_common/common/bin に変更し、config.cmd (Windows)または config.sh (UNIX)を起動します。
- 4 「新しい WebLogic ドメインの作成」を選択し、「次へ」をクリックします。

注: EPM System 製品はすべて同じドメインに配置する必要があります。任意の EPM System 製品がすでに配置されている場合、「既存の WebLogic ドメインの拡張」を選択します。また、Financial Close Management を使用している場合は、EPM System および Oracle SOA Suite を同じドメインに配置する必要があります。Oracle SOA Suite がすでに構成されている場合、「既存の WebLogic ドメインの拡張」を選択して EPM System 製品を同じドメインに配置します。

ミドルウェア・ホームにインストールされているすべての Java Web アプリケーションがリストに表示されます。EPM System 製品の場合、EPM System インストーラでのインストール時にインストールされた構成テンプレートからリストが生成されます。

- 5 「次の製品をサポートするために、自動的に構成されたドメインを生成する」を選択し、配置する EPM System Java Web アプリケーションを選択してから、「次」をクリックします。

すべての Java Web アプリケーションを同時に構成することをお勧めします。

- 6 ドメイン名と場所を入力し、「次へ」をクリックします。

デフォルトでは、ドメインの場所は、MIDDLEWARE_HOME/user_projects/domains です。

- 7 ドメイン管理者のユーザー名とパスワードおよびドメインの説明を入力し、「次へ」をクリックします。
- 8 WebLogic ドメインの起動モード(開発または本番)を選択し、使用する JDK を指定して、「次へ」をクリックします。

本番モードを選択する必要があります。Oracle ではデフォルトの JDK を選択することをお勧めします。

- 9 JDBC データ・ソースを構成し、「次へ」をクリックします。

Java Web アプリケーションごとに、EPM System コンフィグレータでのデータベース構成時に入力したデータベース接続情報を指定します。

製品ごとに異なるデータベースを構成した場合は、Java Web アプリケーションごとに個別にデータベース接続情報を入力します。Java Web アプリケーションを選択し、接続情報を入力します。

ヒント： EPMSystemRegistry は Shared Services とレジストリ・データベースです。

構成ウィザードにより、データベース接続がテストされます。

- 10 接続結果ログを確認し、「次へ」をクリックします。
- 11 「管理対象サーバー、クラスタおよびマシン」の「管理対象サーバーの構成」パネルで、デフォルトのリスニング・ポートを確認し、オプションでこれらを変更します。デフォルト・ポートのリストについては、[付録 A 「ポート」](#)を参照してください。

注： ポートをデフォルトから変更する場合、MIDDLEWARE_HOME/
user_projects/domains/EPMSYSstem/binにある停止スクリプトのポートも変更する必要があります。

- 12 分散環境の場合、「管理対象サーバー、クラスタおよびマシン」の「マシンの構成」パネルで、配置内のマシンごとにマシンを作成します。
- 13 各管理対象サーバーをマシンに割り当てます。
- 14 (オプション) 「管理対象サーバー、クラスタ、およびマシン」の「クラスタの構成」パネルで、クラスタを設定できます。また、配置を完了した後にクラスタを設定することもできます。Java Web アプリケーション・サーバー・クラスタリングの詳細については、[Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide](#) の WebLogic 手動配置での Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項を参照してください。
- 15 構成の要約を確認し、「作成」をクリックしてドメインを作成してから、Java Web アプリケーションを配置します。

Java Web アプリケーションがオフライン・モードで配置されます。

- 16 分散環境の場合:
 1. 配置内の各マシンでノード・マネージャを起動します。
 2. WebLogic 管理サーバー・マシンで、作成したドメインをパックします。
 3. 配置内の各マシンにパックをコピーします。
 4. 配置内の各マシンでアンパックします。

WebLogic Server により、配置内の各マシンですべての Java Web アプリケーションのアンパックが行われます。マシンごとに、マシンに関連付けられた管理対象サーバーが実行されます。

- 17 分散配置では WebLogic 管理サーバーをホストしているマシン以外の各マシンで、ドメインの場所へ移動し、現在の EPM Oracle インスタンス名(epmsystem1 など)を、すべてのファイル内のそのインスタンスの実際の EPM Oracle インスタンス名(epmsystem2 など)に変更します。
- 18 WebLogic 管理サーバーをホストしているマシンで、WebLogic 管理サーバーを起動して WebLogic 管理コンソールへ移動します。配置内の各マシンのノード・マネージャがアクセス可能であることを確認してください。それ以外の場合は nmEnroll コマンドを使用してノード・マネージャを同期化します。

19 テキスト・エディタで MIDDLEWARE_HOME/user_projects/domains/
domainName/config/fmwconfig/system-jazn-data.xml を開き、ファイル内
の最後の</grant>行の後に、次の行を追加します:(これらの変更は、EPM System 製
品を、別のマシンでホストされるドメインに配置し、ドメインが EPM System コン
フィギュレータを使用して作成されていない場合も必要なことに注意してくださ
い。)

Oracle では EPM_ORACLE_HOME/common/config/11.1.2.0/resources/
deployment/xml/custom-jazn-data.xml が用意されています。

```
<?xml version='1.0' encoding='utf-8'?>
<custom-jazn-data>
  <jazn-policy>
    <grant>
      <grantee>
        <codesource>
          <url>file:${EPM_ORACLE_HOME}/common/CSS/11.1.2.0/lib/css.jar</url>
        </codesource>
      </grantee>
      <permissions>
        <permission>

        <class>oracle.security.jps.service.policystore.PolicyStoreAccessPermission</
class>
          <name>context=APPLICATION,name=*</name>
          <actions>getApplicationPolicy</actions>
        </permission>
      </permissions>
    </grant>
    <grant>
      <grantee>
        <codesource>
          <url>file:${EPM_ORACLE_HOME}/common/jlib/11.1.2.0/lib/registry-api.jar</
url>
        </codesource>
      </grantee>
      <permissions>
        <permission>
          <class>oracle.security.jps.service.credstore.CredentialAccessPermission</
class>
          <name>context=SYSTEM,mapName=epm_sys_reg_cred_map,keyName=*</name>
          <actions>read,write,update,delete</actions>
        </permission>
      </permissions>
    </grant>
    <grant>
      <grantee>
        <codesource>
          <url>file:${EPM_ORACLE_HOME}/common/raframeworkrt/11.1.2.0/lib/
annotation.jar</url>
        </codesource>
      </grantee>
      <permissions>
        <permission>
          <class>oracle.security.jps.service.credstore.CredentialAccessPermission</
```

```

class>
  <name>context=SYSTEM,mapName=repository_cred_map,keyName=*</name>
  <actions>read,write,update,delete</actions>
  </permission>
</permissions>
</grant>
<grant>
  <grantee>
    <codesource>
      <url>file:${EPM_ORACLE_HOME}/products/Essbase/eas/server/lib/eascsf.jar</
url>
    </codesource>
  </grantee>
  <permissions>
    <permission>
      <class>oracle.security.jps.service.credstore.CredentialAccessPermission</
class>
    <name>context=SYSTEM,mapName=CSF_EAS_MAP,keyName=*</name>
    <actions>read,write,update,delete</actions>
  </permission>
</permissions>
</grant>
<grant>
  <grantee>
    <codesource>
      <url>file:${common.components.home}/modules/oracle.wsm.agent.common_11.1.
1/wsm-agent-core.jar</url>
    </codesource>
  </grantee>
  <permissions>
    <permission>
      <class>oracle.wsm.security.WSIdentityPermission</class>
      <name>resource=SHAREDSERVICES</name>
      <actions>assert</actions>
    </permission>
  </permissions>
</grant>
<grant>
  <grantee>
    <codesource>
      <url>file:${common.components.home}/modules/oracle.wsm.agent.common_11.1.
1/wsm-agent-core.jar</url>
    </codesource>
  </grantee>
  <permissions>
    <permission>
      <class>oracle.wsm.security.WSIdentityPermission</class>
      <name>resource=SHAREDSERVICES(11.1.2.0)</name>
      <actions>assert</actions>
    </permission>
  </permissions>
</grant>
<grant>
  <grantee>
    <codesource>
      <url>file:${common.components.home}/modules/oracle.wsm.agent.common_11.1.
1/wsm-agent-core.jar</url>

```

```

        </codesource>
    </grantee>
    <permissions>
        <permission>
            <class>oracle.wsm.security.WSIdentityPermission</class>
            <name>resource=FCCTaskExecutionComposite</name>
            <actions>assert</actions>
        </permission>
    </permissions>
</grant>
<grant>
    <grantee>
        <codesource>
            <url>file:${common.components.home}/modules/oracle.wsm.agent.common_11.1.
1/wsm-agent-core.jar</url>
        </codesource>
    </grantee>
    <permissions>
        <permission>
            <class>oracle.wsm.security.WSIdentityPermission</class>
            <name>resource=FinancialClose</name>
            <actions>assert</actions>
        </permission>
    </permissions>
</grant>
<grant>
    <grantee>
        <codesource>
            <url>file:${common.components.home}/modules/oracle.wsm.agent.common_11.1.
1/wsm-agent-core.jar</url>
        </codesource>
    </grantee>
    <permissions>
        <permission>
            <class>oracle.wsm.security.WSIdentityPermission</class>
            <name>resource=FINANCIALCLOSE</name>
            <actions>assert</actions>
        </permission>
    </permissions>
</grant>
<grant>
    <grantee>
        <codesource>
            <url>file:${common.components.home}/modules/oracle.wsm.agent.common_11.1.
1/wsm-agent-core.jar</url>
        </codesource>
    </grantee>
    <permissions>
        <permission>
            <class>oracle.wsm.security.WSIdentityPermission</class>
            <name>resource=AccountReconciliation</name>
            <actions>assert</actions>
        </permission>
    </permissions>
</grant>
<grant>
    <grantee>

```

```

        <codesource>
            <url>file:${common.components.home}/modules/oracle.wsm.agent.common_11.1.
1/wsm-agent-core.jar</url>
        </codesource>
    </grantee>
</permissions>
    <permission>
        <class>oracle.wsm.security.WSIdentityPermission</class>
        <name>resource=ACCOUNTRECONCILIATION</name>
        <actions>assert</actions>
    </permission>
</permissions>
</grant>
<grant>
    <grantee>
        <codesource>
            <url>file:${soa.oracle.home}/soa/modules/oracle.soa.workflow_11.1.1/bpm-
services.jar</url>
        </codesource>
    </grantee>
</permissions>
    <permission>
        <class>oracle.security.jps.JpsPermission</class>
        <name>IdentityAssertion</name>
        <actions>*</actions>
    </permission>
</permissions>
</grant>
<grant>
    <grantee>
        <codesource>
            <url>file:${soa.oracle.home}/soa/modules/oracle.soa.workflow_11.1.1/bpm-
services.jar</url>
        </codesource>
    </grantee>
</permissions>
    <permission>
        <class>oracle.security.jps.JpsPermission</class>
        <name>VerificationService.createInternalWorkflowContext</name>
        <actions>read,write,update,delete</actions>
    </permission>
</permissions>
</grant>
<grant>
    <grantee>
        <codesource>
            <url>file:${soa.oracle.home}/soa/modules/oracle.soa.workflow_11.1.1/bpm-
services.jar</url>
        </codesource>
    </grantee>
</permissions>
    <permission>
        <class>oracle.security.jps.service.credstore.CredentialAccessPermission</
class>
        <name>credstoressp.credstore.BPM-CRYPTO.BPM-CRYPTO</name>
        <actions>read,write</actions>
    </permission>

```

```
</permissions>
</grant>
</jazn-policy>
</custom-jazn-data>
```

20 テキスト・エディタで `MIDDLEWARE_HOME/user_projects/domains/domainName/config/fmwconfig/jps-config.xml` を開き、次の変更を行います。(これらの変更は、EPM System 製品を、別のマシンでホストされるドメインに配置し、ドメインが EPM System コンフィグレータを使用して作成されていない場合も必要なことに注意してください。)

- このドキュメントに設定されている `<serviceInstances>` に、次を追加します:

```
<serviceInstance provider="jaas.login.provider"
name="idstore.loginmodule">
  <description>Identity Store Login Module</description>
  <property
value="oracle.security.jps.internal.jaas.module.idstore.IdStoreLoginModule"
name="loginModuleName" />
  <property value="REQUIRED" name="jaas.login.controlFlag" />
  <property value="true" name="debug" />
  <property value="true" name="addAllRoles" />
</serviceInstance>
```

`virtualize` プロパティを追加するため、既存の `<serviceInstances>` “`idstore.ldap`” を変更します:

```
<serviceInstance provider="idstore.ldap.provider"
name="idstore.ldap">
  ...
  <property name="virtualize" value="true"/>
</serviceInstance>
</serviceInstances>
```

- `<jpsContexts default="default">` セクションに、次を追加します:

```
<serviceInstanceRef ref="idstore.loginmodule" />
```

21 (オプション) WebLogic サーバーの起動を単純化するには、ドメイン内のサーバーごとに `boot.properties` ファイルを編集して、ドメイン・ユーザーおよびパスワードを指定します。このファイルは、`MIDDLEWARE_HOME/user_projects/domains/domainName/servers/product/security` にあります。

Oracle ではすべての管理対象サーバーの起動プロパティを生成する `processBootProperties.*` スクリプトが用意されています。

注： これらの入力内容は、サーバーが起動するまではクリア・テキストに格納され、その後は WebLogic によって暗号化されることに注意してください。

22 次のコマンドを使用してシンボリック・リンクを作成します:

UNIX:

```
"ln -s  
SOURCE_FILE  
  
TARGET_FILE  
"
```

Windows 2008:

```
"cmd /c mklink  
TARGET_FILE  
  
SOURCE_FILE  
"
```

対象ファイル:

- "EPM_ORACLE_HOME/common/SharedServices/11.1.2.0/lib/audit-client.jar"から"EPM_DOMAIN_HOME/lib/audit-client.jar"へ
- "EPM_ORACLE_HOME/common/SharedServices/11.1.2.0/lib/wlpool.jar"から"EPM_DOMAIN_HOME/lib/wlpool.jar"へ
- "EPM_ORACLE_HOME/common/CSS/11.1.2.0/lib/css.jar"から"EPM_DOMAIN_HOME/lib/css.jar"へ
- "EPM_ORACLE_HOME/common/CSS/11.1.2.0/lib/ldapbp.jar"から"EPM_DOMAIN_HOME/lib/ldapbp.jar"へ
- "EPM_ORACLE_HOME/common/jlib/11.1.2.0/registry-api.jar"から"EPM_DOMAIN_HOME/lib/registry-api.jar"へ
- "EPM_ORACLE_HOME/common/jlib/11.1.2.0/ctg_custom.jar"から"EPM_DOMAIN_HOME/lib/ctg_custom.jar"へ
- "EPM_ORACLE_HOME/common/misc/11.1.2.0/opencsv-1.8.jar"から"EPM_DOMAIN_HOME/lib/opencsv-1.8.jar"へ

23 WebLogic 管理コンソールを起動してから、管理対象サーバーを起動します。

Java Web アプリケーションを手動で配置する場合は、DOMAIN_HOME/bin 内の開始スクリプトを使用してください。

Weblogic 管理コンソールを使用すると、すべてのマシンの Java Web アプリケーションを起動できます。これを行うには、最初に MIDDLEWARE_HOME/oracle_common/common/bin/setNMProps.sh(cmd) を実行して nodemanager.properties を変更する必要があります。

また、すべてのマシンの Java Web アプリケーションを起動するには、StartScriptEnabled を true (StartScriptEnabled=true など) に MIDDLEWARE_HOME/wlserver_10.3/common/nodemanager/nodemanager.properties で設定する必要があります。

管理対象サーバーの起動時に、配置した EPM System Java Web アプリケーションの値を使用して Oracle Hyperion Shared Services レジストリが更新されます。

24 EPM System Java Web アプリケーションをすべて停止します。

25 Financial Close Management の手動手順を実行します:

EPM_ORACLE_INSTANCE/bin に移動し、次のコマンドを実行します:

```
epmsys_registry.bat addproperty #APP_SERVER_ID/@adminUser ADMIN_USER
epmsys_registry.bat addencryptedproperty #APP_SERVER_ID/@adminPassword
ADMIN_PASSWORD
```

APP_SERVER_ID は、Shared Services レジストリの WebLogic AppServer コンポーネントの ID です。

Shared Services Registry の編集の詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の Shared Services Registry の更新に関する項を参照してください。

26 次のコマンドを使用して EPM System コンフィグレータを起動し、「Web サーバーの構成」タスクを選択します。

Windows:

```
EPM_ORACLE_HOME/common/config/
version_number/configtool-manual.bat
```

UNIX:

```
EPM_ORACLE_HOME/common/config/
version_number/configtool-manual.sh
```

EPM System コンフィグレータにより、Shared Services への登録タスクおよび「Web サーバーの構成」タスクが実行されます。

Java Web アプリケーションを手動で配置する際に Essbase も構成しようとする、configtool-manual.sh の初回実行時に「Essbase サーバーの構成」タスクが使用できませんでした。これは、この構成の第 2 段階で使用可能であるため、必要な場合はここで選択してください。

27 Financial Close Management の場合: WebLogic 管理サーバーを起動してから、SOA 管理対象サーバーを起動します。次に、EPM System コンフィグレータを起動し、Close Manager の場合は「SOA に配置」を選択して、Account Reconciliation Manager の場合は「SOA に配置」および「FDM EE の SOA に配置」を選択します。

- 28 FDMEE を使用している場合、追加の手動手順を実行します。177 ページの「FDMEE の追加の配置後手順」を参照してください。
- 29 Oracle Web Services Manager を使用している場合、追加の手動手順を実行します。178 ページの「JMS サーバーの構成」を参照してください。
- 30 すべての EPM System サービスおよび Java Web アプリケーションを起動します。Java Web アプリケーションを手動で配置する場合は、DOMAIN_HOME/bin 内の開始スクリプトを使用します。

ヒント： また、Weblogic 管理コンソールを使用すると、すべてマシンの Java Web アプリケーションを起動できます。これを行うには、最初に MIDDLEWARE_HOME/oracle_common/common/bin/setNMProps.sh(cmd) を実行して nodemanager.properties を変更する必要があります。

インストールを検証し、配置を確認するには、第 13 章「インストールの検証と配置の確認」を参照してください。

クラスタリングについては、Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の WebLogic 手動配置での Java Web アプリケーションのクラスタリングに関する項を参照してください。

- ヒント：** 正常に配置した後に Java Web アプリケーションを再配置する必要がある場合、EAR ファイルを置き換え、管理対象サーバーの tmp フォルダを削除してから、アプリケーションを起動します。

手動配置での Java Web アプリケーションのクラスタリングの詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide を参照してください。

FDMEE の追加の配置後手順

FDMEE を手動で配置する場合、配置後に次の手順を実行して FDMEE とともに Oracle Data Integrator を構成します。

- ▶ FDMEE の配置を完了するには:
 - 1 EPM System Java Web アプリケーションをすべて停止します。
 - 2 WebLogic 管理コンソールを起動してログインします。
 - 3 odiMasterRepository および odiWorkRepository データソースを ErpIntegrator にターゲット指定します。
 - 4 変更を保存します。
 - 5 MIDDLEWARE_HOME/oracle_common/common/bin に移動し、wlst.cmd|sh を起動します。
 - 6 次のコマンドを実行します:

```
connect(adminUser, adminPassword, adminUrl)
createCred(map="oracle.odi.credmap", key="SUPERVISOR", user="SUPERVISOR",
password="SUNOPSIS", desc="ODI SUPERVISOR Credential")
createCred(map="oracle.odi.credmap", key="ODI-DOMAIN", user=adminUser,
password=adminPassword, desc="ODI-DOMAIN Credential")
.
```

ここで adminUser および adminPassword は WebLogic 管理者のユーザーおよびパスワードで、adminUrl は WebLogic 管理 URL です。

7 FDMEE Java Web アプリケーションを起動します。

JMS サーバーの構成

Financial Management Web サービス、FDMEE または Financial Close Management を使用している場合、Web アプリケーションを手動配置する際に JMS サーバーを構成する必要があります。

▶ JMS サーバーを構成するには:

- 1 すべての管理対象サーバーを停止します。
- 2 コマンド・プロンプトから、MIDDLEWARE_HOME/wlserver_10.3/server/bin に移動し、setWLSEnv.cmd|.sh を実行します。
- 3 次のコマンドを実行します:

```
MIDDLEWARE_HOME
/oracle_common/webservices/bin/jrfws-async-createUDDs.py --domain_home
domain_home_directory
--cluster
your_cluster_name
```

ここで、your_cluster_name は HFMSWeb 管理対象サーバーのクラスタ名です。

- 4 ERPIntegrator 管理対象サーバーおよび FinancialClose 管理対象サーバーに対して手順 3 を繰り返します。

配置の拡張

一部の EPM System Java Web アプリケーションのみを配置した場合、追加の Java Web アプリケーションを配置することにより、配置を拡張できます。たとえば、以前に Planning を配置していた場合、配置を拡張して Profitability and Cost Management を配置できます。この章の手動配置手順を使用してください。ただし、「新規 WebLogic ドメインの作成」を選択するかわりに、「既存の WebLogic ドメインの拡張」を選択してください。

Oracle HTTP Server の手動構成

EPM System インストーラによってインストールされる Oracle HTTP Server を、EPM System コンフィグレータを使用して構成するのではなく、手動で構成するよう選択できます。

EPM System インストーラによってインストールされる Oracle HTTP Server 以外にサポートされている Web サーバーを使用する場合、Web サーバーを手動で構成する必要があります。

Web サーバーの手動構成の注意事項:

- IHS を構成する場合は、188 ページの「IBM HTTP Server の構成」を参照してください。
- IIS の手動構成はサポートされていません。

この項では、EPM System コンポーネントを構成する EPM System コンフィグレータをすでに使用し、手動でまたは EPM System コンフィグレータを使用して Java Web アプリケーションを配置していることを前提としています。

▶ Oracle HTTP Server を手動で構成するには:

- 1 EPM System コンフィグレータを起動します: EPM_ORACLE_INSTANCE\BIN に変更してから `configtool.bat|sh` を起動します。
- 2 EPM System コンフィグレータで、「タスクの選択」パネルで「すべて選択解除」を選択し、「Hyperion Foundation」を拡張してから、「Web サーバーの構成」を選択して、「次へ」をクリックします。
- 3 「Web サーバーの構成」で、「Web サーバー・タイプ」から「手動による Web サーバー構成のレジストリの設定」を選択し、「次へ」をクリックします。
- 4 EPM System コンフィグレータの手順を完了して、構成が完了したら「終了」をクリックします。

EPM System コンフィグレータでは、Web サーバーの手動構成を簡素化するための自動生成されたファイルが EPM_ORACLE_INSTANCE/httpConfig/autogenerated/ohs 内に作成されます。

- 5 自動生成されたファイルを、Oracle HTTP Server のインストールに関連する選択内容の場所にコピーします。
- 6 SSL を使用するように Oracle HTTP Server および EPM System コンポーネントを構成した場合、ファイルを次のように更新します:
 - "Listen"ディレクティブおよび<VirtualHost>ツリーディレクティブ内の `ssl.conf` のポートを更新します。
 - "Listen"ディレクティブ内の `httpd.conf` のポートを、SSL ポート以外のポートに更新します。
 - <VirtualHost>ツリーディレクティブ内の `HYSL-WebLogic-autogenerated.conf` のポートを、SSL ポート以外のポートに更新します。
- 7 `HYSL-WebLogic-autogenerated.conf` を次のように更新します:

- 必要に応じて、\${ORACLE_HOME}環境変数が正確になるようにすべての"LoadModule"ディレクティブを更新します。
- OHS_LISTEN_PORT 別名を更新して、それを実際の値(<VirtualHost *:OHS_LISTEN_PORT> would be <VirtualHost *:19000>など)と置き換えます。
- 実際のファイルの場所を使用して、次の行を更新します:

```
Include "conf/epm_online_help.conf"
```

```
Include "conf/epm_rewrite_rules.conf"
```

```
Include "conf/epm.conf"
```

例:

```
Include "
path_to_conf_files
/epm_online_help.conf"
```

```
Include "
path_to_conf_files
/epm_rewrite_rules.conf"
```

```
Include "
path_to_conf_files
/epm.conf"
```

8 Oracle HTTP Server のインストール・フォルダで、httpd.conf を参照してテキスト・エディタで開き、次の変更を行います:

1. ssl.conf および mod_wl_ohs.conf が含まれるすべての行をコメントします。
2. 次の行をファイル末尾に追加します:
 - Include path_to_modified_conf_files/HYSL-WebLogic-autogenerated.conf
 - Include path_to_modified_conf_files/ssl.conf

ここで ssl.conf は自動生成されたファイルです

Oracle HTTP Server Windows サービスが、ネットワーク・アクセスがあり、サービスとしてログオンする権限を持つユーザー・アカウントとして実行中である場合のみ、UNC 形式のパスを Windows のみで使用できます。

3. "Listen"ディレクティブを実際の Web サーバーのポートで更新します。

9 Financial Close Management を使用している場合、次のタスクを実行します:

1. 自動生成されたファイルの EPM_ORACLE_INSTANCE/httpConfig/autogenerated/soa/mod_wl_ohs.conf を新しい場所にコピーして、その名前を mod_wl_soa_ohs.conf に変更します。
2. mod_wl_soa_ohs.conf をテキスト・エディタで開き、soa_server_host および soa_server_port を SOA ホストおよびポートの実際の値で置き換えます。
3. テキスト・エディタで httpd.conf を開き、次の行を追加します:

```
Include
path to mod_wl_soa_ohs.conf
/mod_wl_soa_ohs.conf
```

10 WEB_SERVER コンポーネントを Shared Services レジストリで更新して、port プロパティが、Oracle HTTP Server が実行中のポートの実際の値になるようにします。たとえば、実際のポートを 19000 に変更するには:

1. EPM_ORACLE_INSTANCE\bin\epmsys_registry.bat を起動してレジストリ・レポートを生成します。プロンプトが表示されたら、Shared Services データベース・パスワードを入力します。
2. 構成されている EPM_ORACLE_INSTANCE とともにプロパティ "type" = MANUAL、"port" = -1 および "instance_home" を持つ WEB_SERVER コンポーネントを探します。
3. WEB_SERVER コンポーネントのオブジェクト ID を探して、それを次のコマンドにコピーします。

```
EPM_ORACLE_INSTANCE
/bin/epmsys_registry.bat updateproperty #
object_id
/@
property_name

property_value
```

例:

```
EPM_ORACLE_INSTANCE
/bin/epmsys_registry.bat updateproperty
#df17801dfc1dca40S24e400aa13a736f8a46S7921/@port 19000
```

11 Oracle HTTP Server および EPM System サーバーを再起動します。

8

WebSphere Application Server へのEPM System製品の配置

この章の内容

FDME の追加の配置後手順	186
IBM HTTP Server の構成	188
WebSphere Application Server の配置の検証.....	192

この章で説明するプロセスを使用して、EPM System 製品を WebSphere Application Server に配置できます。EPM System の 1 回の配置で、WebLogic と WebSphere の両方に Java Web アプリケーションを配置することはできません。

この章は、経験豊富な Java Web アプリケーション・サーバー管理者が対象です。

WebSphere への配置の注意:

- WebSphere Application Server を使用する場合でも、配置内の各マシンに WebLogic Server が EPM System とともに常にインストールされます。
- WebSphere Application Server に対する単一管理対象サーバーへの配置はサポートされていません。
- すべての EPM System 製品を 1 つのプロファイルに配置する必要があります。
- Oracle Enterprise Manager も配置できます。
- これらの手順は、EPM System インストールで提供されるスクリプト (runWASDeployment.bat|sh) を使用していることを前提とします。WebSphere 構成ウィザードを使用して配置する場合、追加の手順が必要な可能性があります。ここでその手順は含まれていません。
- runWASDeployment.bat|sh スクリプトは、単一ボックス構成のみをサポートしています。配置を拡張するには、Websphere 構成ウィザードを使用します。Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の WebSphere 配置の拡張に関する項を参照してください。
- リリース 11.1.2.3 に移行するためにメンテナンス・リリースを適用する場合には、Java Web アプリケーションを WebSphere Application Server に配置しているときは、[第 10 章「EPM System 製品のメンテナンス・リリースのインストールの実行」](#)を参照してください。

▶ EPM System Java Web アプリケーションを WebSphere Application Server に手動で配置するには:

1 **WebSphere Application Server Network Deployment** がまだインストールされていない場合はインストールします。単一マシンの開発環境の場合、**WebSphere Application Server Base Edition** をインストールできます。

さらに、IBM HTTP Server と必要なプラグインをインストールします。IIS も使用する EPM System 製品を配置する場合、IIS と IBM HTTP Server のデフォルト・ポートが同じであることを注意してください。ポートの競合を避けるために、別のデフォルト・ポートを使用して、IBM HTTP Server をインストールします。

Insight (Interactive Reporting Web クライアント)を使用している場合、同じマシンに IBM HTTP Server と Reporting and Analysis Java Web アプリケーションをインストールします。

2 **WebSphere のインストール後、次のタスクを実行します:**

- (UNIX のみ) `WAS_HOME/bin/wsadmin.sh` を編集して、`$PERF_JVM_OPTIONS` ステートメントを `$javaOption` ステートメントの前に移動します。
- Fix Pack 23+ を適用して WebSphere、IBM HTTP Server に対する WebSphere SDK、およびプラグインを更新します。 <http://www-01.ibm.com/support/docview.wss?uid=swg24032493> を参照してください。

3 **EPM System** インストーラを使用して **EPM System** 製品をインストールします。

4 **WebSphere** アプリケーション・サーバーのインストール場所を指すように `WAS_HOME` システム環境変数を設定します(たとえば、`c:/program files/IBM/WebSphere/AppServer`)。

5 `ALBAN*.ttf` を `EPM_ORACLE_HOME/./jdk160_29/jre/lib/fonts` から `WAS_HOME/java/jre/lib/fonts` にコピーします。

6 次のコマンドを使用して **EPM System** コンフィグレータを起動し、「Web サーバーの構成」タスクを除くすべての必須構成タスクを実行します。なお、「アプリケーション・サーバーへの配置」タスクは使用できません。プロセス内で後から Essbase サーバーを構成する必要があることにも注意してください。

```
EPM_ORACLE_HOME
/common/config/11.1.2.0/configtool-manual.bat|.sh
```

このコマンドを使用して **EPM System** コンフィグレータを起動すると、Java Web アプリケーションの配置タスクが非表示になり、Shared Services タスクへの Essbase 製品登録がスキップされます。

EPM System の構成の詳細が必要な場合、118 ページの「**EPM System** 製品の構成」を参照してください。

7 次のスクリプトを実行して、Java Web アプリケーションを **WebSphere** に配置します (**WebSphere** がすでに実行されている場合は停止する必要はありません):

```
EPM_ORACLE_INSTANCE
```



```
/bin/deployment/runWASDeployment.bat | sh
```

WebSphere 統合ソリューション・コンソールの新しい管理者ユーザー名およびパスワードを入力して、次のパラメータのスクリプトに値を指定するか、「[Enter]」を押してデフォルトの値を選択します(デフォルト値はカッコ内に記述されています)。各パラメータに一意の値を指定します。

- Deployment Manager プロファイル名(DM_PROFILE_NAME = EPMSystemDMPProfile)
- アプリケーション・サーバー・プロファイル名(PROFILE_NAME = EPMSystemProfile)
- セル名(CELL_NAME = EPMSystemCell)
- デプロイメント・マネージャ・ノード名(NODE_NAME = EPMSystemNode)
- アプリケーション・サーバー・ノード名(APP_NODE_NAME = EPMSystemAppNode)

プロファイルがない場合は、スクリプトによって作成されます。さらに、スクリプトによって一部の構成タスクも実行されます。

配置が完了すると、構成完了が表示され、ウィンドウが閉じられます。

8 Java Web アプリケーションの配置後、次のスクリプトを実行して、デプロイメント・マネージャとノード・エージェントを起動します:

```
WAS_HOME/profiles/  
DM_PROFILE_NAME  
/bin/startManager.bat [sh]
```

```
WAS_HOME/profiles/  
PROFILE_NAME  
/bin/startNode.bat [sh]
```

WebSphere AS を使用している場合は、かわりに次のスクリプトを実行します:

```
WAS_HOME  
/profiles/  
PROFILE_NAME  
/bin/startServer.bat [sh]  
SERVER_NAME
```

ここで、SERVER_NAME は指定されたサーバー名を示します。デフォルトのサーバー名は EPMServer です。

9 WebSphere 管理コンソール(統合ソリューション・コンソール) (<https://localhost:port/ibm/console/login.do?action=secure>)にログインします。

ヒント: 統合ソリューション・コンソールのポート番号を確認するために、`WAS_HOME/profiles/DM_PROFILE_NAME/properties/portdef.props` を開き、`WC_adminhost_secure` プロパティを検索します。

10 すべての EPM System サーバーを停止します。

アプリケーションを停止するには、統合ソリューション・コンソールにログインします。「サーバー」、「サーバー・タイプ」、「WebSphere アプリケーション・サーバー」の順に選択し、停止するアプリケーション・サーバーを選択してから「停止」をクリックします。スクリプト `WAS_HOME/profiles/PROFILE_NAME/bin/start[stop]Server.bat[sh]` `SERVER_NAME` を使用して、Java Web アプリケーションを開始または停止することもできます。

この手順は、Web サーバー構成に Shared Services Registry を準備するために必要です。

WebSphere ND の場合はサーバーの起動が必要なので注意してください。

WebSphere AS の場合はアプリケーションのみを起動できます。

11 Web サーバーを手動で構成します。188 ページの「IBM HTTP Server の構成」を参照してください。

12 (オプション)クラスタ化された Java Web アプリケーションの場合、Web アプリケーションの論理アドレスを構成します。そのためには、EPM System コンフィグレータを起動し、Foundation タスク「Web アプリケーションの論理アドレスの構成」を選択して、Java Web アプリケーションのホストおよびポートの論理アドレスを手動で構成した Web サーバーに設定します。

13 FDMEE を使用している場合、Oracle Data Integrator を構成するには追加タスクを実行します。186 ページの「FDMEE の追加の配置後手順」を参照してください。

14 配置を検証します。

192 ページの「WebSphere Application Server の配置の検証」を参照してください。

WebSphere の配置をスケール・アウトするには、Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide を参照してください。

ヒント: `EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/logs/config/configtool-wasdeployment.log` および `WAS_HOME/profiles/ApplicationServerProfileName/logs/serverName` にあるログ・ファイルを確認します。

FDMEE の追加の配置後手順

FDMEE を使用している場合、Oracle Data Integrator を構成するには追加タスクを実行します。

▶ **FDMEE を Oracle Data Integrator とともに構成するには:**

- 1 WebSphere ND の場合、デプロイメント・マネージャを起動してノード・エージェントを停止します:**

```
WAS_HOME/profiles/  
DM_PROFILE_NAME  
/bin/startManager.bat [sh]
```

```
WAS_HOME/profiles/  
PROFILE_NAME  
/bin/stopNode.bat [sh]
```

WebSphere AS の場合、サーバーを起動します:

```
WAS_HOME  
/profiles/  
PROFILE_NAME  
/bin/startServer.bat [sh]  
SERVER_NAME
```

- 2 次のコマンドを実行します:**

```
MIDDLEWARE_HOME  
/oracle_common/common/bin/wsadmin.cmd [sh] -profileName  
DM_PROFILE_NAME  
-user  
WAS_ADMIN_USER  
-password  
WAS_ADMIN_PASSWORD  
-conntype SOAP
```

- 3 次のコマンドを実行します:**

```
Opss.createCred(map="oracle.odi.credmap", key="SUPERVISOR",  
user="SUPERVISOR", password="SUNOPSIS", desc="ODI SUPERVISOR Credential")
```

```
Opss.createCred(map="oracle.odi.credmap", key="ODI-DOMAIN",  
user="<WAS_USER>", password="<WAS_PASSWORD>", desc="ODI-DOMAIN Credential")
```

```
AdminConfig.save()
```

- 4 ノードを起動して、FDMEE サーバーを再起動します。**

IBM HTTP Server の構成

Java Web アプリケーションを配置した後、IBM HTTP Server を構成します。

▶ IBM HTTP Server を構成するには:

- 1 デプロイメント・マネージャとノード・エージェントがまだ起動されていない場合は、次のスクリプトを実行して起動します:

```
WAS_HOME/profiles/DM_PROFILE_NAME/bin/startManager.bat [sh]
```

```
WAS_HOME/profiles/PROFILE_NAME/bin/startNode.bat [sh]
```

- 2 次のコマンドを使用して EPM System コンフィグレータを起動し、Foundation の「Web サーバーの構成」タスクを選択します。

```
EPM_ORACLE_HOME/common/config/11.1.2.0/configtool-manual.bat | .sh
```

Java Web アプリケーションを配置する際に Essbase も構成する場合、configtool-manual.sh の初回実行時には「Essbase サーバーの構成」タスクを選択できませんでした。これは、この構成の第 2 段階で使用可能であるため、必要な場合はここで選択してください。

- 3 「Web サーバーの構成」ページで「手動による Web サーバー構成のレジストリの設定」を選択します。
- 4 構成の完了後、EPM_ORACLE_INSTANCE/httpConfig/autogenerated/ihs/HYSL-Websphere-autogenerated.conf をテキスト・エディタで開き、次の変更を加えます:

1. HTTP_SERVER_ROOT_FOLDER のすべてのエントリを IBM HTTP Server のパス (/home/IBM/HTTPServer など)に置き換えます。
2. PLUGINS_ROOT_FOLDER のすべてのエントリを、HTTP_SERVER_ROOT_FOLDER/Plugins (/home/IBM/HTTPServer/Plugins など)に置き換えます。
3. 提供されるほとんどの IBM HTTP Server は 32 ビット・ソフトウェアである (そして 64 ビットの補完にも 32 ビットのプラグイン・バイナリが含まれる)ため、次の行をコメント化する(#)か非コメント化することで、ご使用のオペレーティング・システム・タイプの正しいプラグインをロードする必要があります:
 - オペレーティング・システムが 64 ビット(Solaris x64 または HP-UX for Itanium®を除く)の場合、次の行を非コメント化します: #LoadModule was_ap22_module "PLUGINS_ROOT_FOLDER/bin/32bits/mod_was_ap22_http.dll"
 - オペレーティング・システムが 32 ビット、Solaris x64 または HP-UX for Itanium®の場合、次の行を非コメント化します: LoadModule

```
was_ap22_module "PLUGINS_ROOT_FOLDER/bin/  
mod_was_ap22_http.dll"
```

4. 配置を拡張した場合、次の行を追加します:

```
<IfModule !headers_module>  
LoadModule headers_module modules/mod_headers.so  
</IfModule>
```

5. オンライン・ヘルプのプリファレンスに応じて、次の行をコメント化または非コメント化します。

```
Include conf/epm_online_help.conf
```

ヘルプをローカルに実行する場合、次の行をコメント化します。ホストされている Oracle サーバーからヘルプを実行するには、次の行を非コメント化したままにします。Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide のインストールおよび構成のオンライン・ヘルプを参照してください。

6. mod_was_ap22_http の拡張子をオペレーティング・システムに合わせて変更します:(Windows の場合は dll、UNIX の場合は so)。
7. IHS_LISTEN_PORT のすべてのエントリを Web サーバーのポート番号に置き換えます。

ヒント: ポート番号を確認するために、WAS_HOME/HTTPServer/conf/httpd.conf and search for Listen を開きます。

8. Insight (Interactive Reporting Web クライアント)を使用している場合、次の編集を行います:

- 次の行をコメント化するか削除します:

```
RewriteRule ^/InsightInstaller/(.*) /raframework/zeroadmin/  
component/Insight/$1 [PT]
```

- HYSL-WebSphere-autogenerated.conf で次の行を追加します:

```
AliasMatch /InsightInstaller/(.*) "  
EPM_ORACLE_HOME  
/products/biplus/InstallableApps/raframework/zeroadmin/  
component/Insight/$1"
```

ここで、EPM_ORACLE_HOME は、IBM HTTP Server がインストールされるサーバー上の EPM_ORACLE_HOME です。EPM System が別のマシン上または別のユーザー・ホーム・ディレクトリ内にインストールされている場合(UNIX 上など)、Insight ディレクトリ全体を IBM HTTP Server がアクセス可能な場所にコピーする必要があります。

5 EPM_ORACLE_INSTANCE/httpConfig/autogenerated/ihs/plugin-cfg.xml をテキスト・エディタで開き、次の変更を加えます:

1. PLUGINS_ROOT_FOLDER のすべてのエントリを、HTTP_SERVER_ROOT_FOLDER/Plugins (/home/IBM/HTTPServer/Plugins など)に置き換えます。
2. 非 SSL 構成の場合、IHS_PORT のすべてのエントリを Web サーバーのポート番号に置き換えます。
3. SSL 構成の場合、IHS_SSL_PORT のすべてのエントリを HTTP SSL ポートに置き換えます。

6 複数のマシンがある環境で、次のタスクを実行します。単一マシン環境では、この手順をスキップできます。

1. WebSphere ユーティリティを使用して plugin-cfg.xml ファイルを生成します: WAS_HOME/profiles/DM_PROFILE_NAME/bin から GenPluginCfg.bat|sh を起動します。

plugin-cfg.xml が WAS_HOME/profiles/DM_PROFILE_NAME/config/cells に生成されます。

2. クラスタ化された EPM System Java Web アプリケーションごとに、次の手順を実行します:
 1. 新しく生成された plugin-cfg.xml ファイルをテキスト・エディタで開きます。
 2. 必要な ServerCluster コンポーネントを検索します。物理サーバーに関する情報が含まれている必要があります。
 3. 必須の CloneID プロパティおよびその値を EPM_ORACLE_INSTANCE/httpConfig/autogenerated/ihs/plugin-cfg.xml にある適切なサーバーにコピーします。

7 plugin-cfg.xml、epm_online_help.conf および HYSL-Websphere-autogenerated.conf を、EPM_ORACLE_INSTANCE/httpConfig/autogenerated/ihs から HTTP_SERVER_ROOT_FOLDER/conf にコピーします。

8 HTTP_SERVER_ROOT_FOLDER/conf/httpd.conf を編集し、次の変更を行い、ファイルを保存します:

1. ファイルの末尾に次の行がある場合は、コメント化(#)します。

```
LoadModule WebSpherePluginConfig
pathToPlugin.cfg
```

2. ファイル末尾に次の行を追加します:

```
Include conf/HYSL-Websphere-autogenerated.conf
```

9 次のコマンドを実行し、Shared Services レジストリを Web サーバー・ポート (WEB_SERVER ノード)の実際の値で更新します:

```
EPM_ORACLE_INSTANCE
```

```
/bin/epmsys_registry.bat[sh] updateproperty WEB_SERVER/@port  
ACTUAL_PORT_VALUE
```

ACTUAL_PORT_VALUE は、実際の IBM HTTP Server ポートです。これは、前の手順のファイルで更新したポート番号と同じです。

複数の Web サーバーがデプロイメント内にある場合は、タイプ MANUAL および port -1 を持つ WEB_SERVER コンポーネントのオブジェクト ID を使用します。例:

```
EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/epmsys_registry.bat[sh] updateproperty #  
objectIDNumber  
/@port ACTUAL_PORT_VALUE
```

10 次のコマンドを起動するか、Windows サービスを開始することで、IBM HTTP Server を再起動します:

UNIX の場合: HTTP_SERVER_ROOT_FOLDER/bin/apachectl restart

Windows の場合: Windows サービスを起動します。サービスが存在しない場合は、次のコマンドを実行してサービスをインストールし、それを Windows サービスのコントロールパネルで開始します: HTTP_SERVER_ROOT_FOLDER/bin/apache -k install

11 IBM HTTP Server ポートが WebSphere の仮想ホストに追加されたことを確認します: WebSphere 管理コンソール(統合ソリューション・コンソール) (<https://localhost:port/ibm/console/login.do?action=secure>)にログインします。「環境」、「仮想ホスト」の順に選択します。EPM System 製品に使用した仮想ホスト(デフォルトでは default_host)をクリックします。ポートが表示されない場合は、「ホストの別名」プロパティを開き、IBM HTTP サーバー・ポートを追加し、ページの上にある「保存」をクリックします。

分散環境の各マシンでこの手順を実行します。

12 EPM System アプリケーションのサーバーとサービスをすべて再起動します。

次のスクリプトを実行して、デプロイメント・マネージャとノード・エージェントを停止および再起動します。

停止するには:

```
WAS_HOME  
/profiles/  
DM_PROFILE_NAME  
/bin/stopManager.bat[sh]
```

```
WAS_HOME  
/profiles/  
PROFILE_NAME  
/bin/stopNode.bat[sh]
```

再起動するには:

```
WAS_HOME/profiles/DM_PROFILE_NAME/bin/startManager.bat [sh]
```

```
WAS_HOME/profiles/PROFILE_NAME/bin/startNode.bat [sh]
```

13 FDMEE の場合のみ、次の手順を実行します。

1. EPM Workspace にログインし、「ナビゲート」、「管理」、「ERP Integrator」の順に選択して、FDMEE を起動します。
2. 「ERP Integrator」で、任意のリンク(「データ・ロード・ルール」など)をクリックし、ページを閉じます。
3. IBM コンソールにログインし、FDMEE サーバーを再起動します。

WebSphere Application Server の配置の検証

WebSphere の配置を検証するには、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System 診断を実行します。第 13 章「インストールの検証と配置の確認」を参照してください。

9

新しい配置での手動構成タスクの実行

この章の内容

Essbase 手動構成タスク	193
Reporting and Analysis 手動構成タスク	195
Financial Close Management 手動構成タスク	195
FDMEЕ 手動構成タスク	202

構成した後、管理者ユーザー・ディレクトリを構成し、機能の管理者をプロビジョニングし、デフォルトの管理者(admin)アカウントを非アクティブ化する必要があります。Oracle Enterprise Performance Management System User Security Administration Guide を参照してください。

Oracle Web Services Manager と連携するように EPM System コンポーネントを設定するには、Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide を参照してください。

配置をカスタマイズするために実行できる追加のオプション・タスクについては、Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide を参照してください。

実行する追加タスクについては、対象製品の管理ガイドを参照してください。

Essbase 手動構成タスク

サブトピック

- [64 ビット AIX でのユーザー制限の設定](#)
- [クライアントによるクラスタ名を使用した検索の有効化](#)

次の表に、Essbase 構成後のタスクを示します。

表 22 Essbase 構成後のタスク

タスク	参照
(UNIX)64 ビット AIX のユーザー制限を設定します。	194 ページの「64 ビット AIX でのユーザー制限の設定」
クライアントが、URL でなくクラスタ名によって Essbase を検索できるようにします。	194 ページの「クライアントによるクラスタ名を使用した検索の有効化」

タスク	参照
Oracle Exalytics In-Memory Machine で Essbase を使用している場合、Essbase.cfg を編集して OracleHardwareAcceration True に設定します。	

64 ビット AIX でのユーザー制限の設定

64 ビット AIX プラットフォームで Essbase サーバーを実行する場合は、ユーザー制限を変更してデータ・セグメントのサイズを大きくする必要があります。次の表は、推奨値を示しています:

ユーザー制限	値
時間(秒)	無制限
ファイル(ブロック)	無制限
データ(KB)	無制限
スタック(KB)	64 ビットの場合は 128MB 以下、32 ビットの場合は 64MB 以下
メモリー(KB)	無制限
コアダンプ(ブロック)	無制限
ファイル数(記述子数)	4096 (最大 32,000 未満)

クライアントによるクラスタ名を使用した検索の有効化

Essbase クライアントは、`http(s)://host:port/aps/Essbase?`

`ClusterName=clusterName` という形式の URL を使用して Essbase クラスタに接続できます。ログインを簡略化するには、Essbase クライアントは URL ではなくクラスタ名を直接使用できます。クラスタ名を使用したクライアント・ログインを有効にする場合、まずプロパティを指定して Provider Services を構成する必要があります。クラスタ名は、構成ファイル内に指定されている Provider Services サーバーによって解決されます:

▶ クラスタ名による参照を有効にするには:

1 次のように `essbase.cfg` および `essbase.properties` を変更します:

- サーバー間通信の場合、`essbase.cfg` を変更して、使用する Provider Services サーバーを次のような各 URL をセミコロンで区切る形式で指定します:

```
ApsResolver http(s)://
host
:
port
```

/aps

- クライアントからサーバーへの通信の場合、`essbase.properties` を変更して、使用する Provider Services サーバーを次の形式で指定します:

```
ApsResolver=http(s)://  
apshost1  
:  
port  
/aps
```

2 これらのファイルを更新した後、Essbase を再起動します。

アップグレードについての注意

アップグレード後、すべての `essbase.cfg` ファイル(サーバーにインストールされているファイル、および Essbase クライアントにインストールされているファイル)内の `ApsResolver` 設定を更新します。

Reporting and Analysis 手動構成タスク

次の表に、Reporting and Analysis 構成後のタスクを示します。

表 23 Reporting and Analysis 構成後のタスク

タスク	参照
IPv6 システム上の Reporting and Analysis Framework の場合、ファイルの最後に次のエントリが含まれるように <code>EPM_ORACLE_HOME/common/raframeworkrkt/11.1.2.0/lib</code> 内の <code>default-domain.cfg</code> を更新します: <code>policies:iiop:server_address_mode_policy:publish_hostname="true"</code>	

Financial Close Management 手動構成タスク

サブトピック

- [メッセージ保護のキースタアの設定](#)
- [OID、MSAD、SunOne への WebLogic ドメインの構成](#)
- [管理対象サーバーの起動](#)
- [接続プールの最大容量を増やす](#)
- [外部 LDAP プロバイダの接続プールの増加](#)

この項では、Financial Close Management の構成に必要なその他のタスクについて説明します。Oracle SOA Suite および Financial Close Management をインストールし、構成した後でこれらのタスクを実行します。

注意 Financial Close Management を開始および実行する前に、これらのタスクを実行する必要があります。記載されている順にタスクを実行します。

次の表に、Financial Close Management 構成後のタスクを示します。

注： 後述の手順で、WebLogic ドメインの作成時に「本番モード」を選択した場合、WebLogic 管理コンソールで変更を行うには、まずチェンジ・センターで「ロックして編集」をクリックする必要があることに注意してください。変更後、チェンジ・センターで「変更のアクティブ化」をクリックします。

表 24 Financial Close Management 構成後のタスク

タスク	参照
メッセージ保護のキーストアを設定します。	197 ページの「メッセージ保護のキーストアの設定」
SOA サーバーを構成して、Oracle Internet Directory、Microsoft Active Directory (MSAD) または SunOne に接続します。	199 ページの「OID、MSAD、SunOne への WebLogic ドメインの構成」
監視対象サーバーを順番に起動します。	200 ページの「管理対象サーバーの起動」
Microsoft SQL Server を使用している場合は、EDNLocalTxDataSource および EDNDataSource を削除します。	
場合によっては、SOA コンテキストは EPM System コンフィグレータによって構成されます。SOA コンテキストが自動的に構成されない場合は、手動で SOA コンテキストを構成する必要があります。 手動構成は、次の場合に必要です： <ul style="list-style-type: none">● 手動で Java Web アプリケーションを配置した場合。● Web サーバーを Financial Close Management と異なるインスタンスで構成した場合。● SOA および WSM-PM Java Web アプリケーションが異なる管理対象サーバー/クラスターに配置されている場合。	179 ページの「Oracle HTTP Server の手動構成」の手順 9

タスク	参照
<p>Java Web アプリケーションの論理アドレスを変更するために、任意の時点で構成を変更する場合(EPM System Configurator の Web アプリケーションの論理アドレスの更新ページを使用)、次のタスクを実行する必要があります。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Close Manager の場合: <ol style="list-style-type: none"> 1. 実行中のタスクまたはアラートがないことを確認します。 2. EPM System コンフィグレータを起動し、「タスクの選択」ページの「Financial Close」、「Financial Close Management」セクションで、「SOA に配置」を選択します。 3. 「次へ」をクリックして、構成を続行してから、「終了」をクリックします。 ● Account Reconciliation Manager の場合: <ol style="list-style-type: none"> 1. オープン期間がないことを確認します。オープン期間が存在する場合は、それらをロックします。実行しているデータロードがないことを確認します。 2. EPM System コンフィグレータを起動し、「タスクの選択」ページの「Financial Close」、「Financial Close Management」セクションで、「SOA に配置」および「FDM EE の SOA に配置」を選択します。 3. 「次へ」をクリックして、構成を続行してから、「終了」をクリックします。 4. ロックされた期間のロックを解除します。 ● 両方:soainfra データソースに接続し、次のクエリーを実行します。 <pre style="margin-left: 40px;">UPDATE WFTASKDISPLAY SET httpport = <LWA Port> , httpsport=0, hostname = <LWA Host> WHERE URI like '/workflow/ %';</pre> 	
<p>接続プールの最大容量を増やします。</p>	<p>200 ページの「接続プールの最大容量を増やす」</p>
<p>外部 LDAP プロバイダの接続プールを増やします。</p>	<p>201 ページの「外部 LDAP プロバイダの接続プールの増加」</p>
<p>Financial Close Management および SOA を使用するクラスタ環境で作業中の場合、電子メール・パスワードがすべてのサーバーに対して必ず構成されるように、電子メールの認証に使用されるパスワード(「共通設定」構成タスク・パネルで入力されている)は、タイプがクリア・テキスト・パスワードの使用である必要があります。パスワード・タイプを変更するには、Enterprise Manager を使用します。</p>	<p>Enterprise Manager のドキュメント</p>

これらの手順を実行すると、Account Reconciliation Manager も FDMEE とともに機能するように構成し、統合タイプを作成および管理できるようになります。Oracle Hyperion Financial Close Management Administrator's Guide を参照してください。統合 xml ファイルは、My Oracle Support からダウンロードできます。

メッセージ保護のキーストアの設定

▶ メッセージ保護のキーストアを設定するには:

- 1 まず、keytool コマンドを使用してキーストアを作成します。

EPM System ドメインをホストする WebLogic 管理サーバーが稼働しているサーバーの /Oracle/Middleware/user_projects/\$DOMAIN_HOME/config/fmwconfig に移動し、次のコマンドを実行します:

```
keytool -genkeypair -keyalg RSA -alias  
aliasName  
-keypass  
password  
-keystore  
keystoreName  
.jks -storepass  
password  
-validity 3600
```

注: keytool コマンドが認識されない場合、Path 環境変数に JDK が含まれていない可能性があります。次のコマンドを使用して、JDK を Path 変数に追加します: `set PATH=%PATH%;C:\Oracle\Middleware\JDK160_35\bin\;.;`

詳細は、『Oracle(R) Fusion Middleware Web サービスのためのセキュリティおよび管理者ガイド 11g リリース 1 (11.1.1)』の「メッセージ保護に関するキーストアの設定」の「Java キーストアの作成および使用方法」を参照してください (http://download.oracle.com/docs/cd/E14571_01/web.1111/b32511/setup_config.htm#BABJHIBI)。

2 次に、Web サービスのメッセージ保護を設定します:

1. WebLogic 管理者資格証明を使用して、Enterprise Manager にログインします (<http://WebLogicAdminServerHost:7001/em>)。
2. 「WebLogic ドメイン」を展開して、「EPMSystem」(または EPM System 配置に使用するドメイン名)を選択します。
3. 「EPMSystem」を右クリックして、「セキュリティ」を選択し、「セキュリティ・プロバイダ構成」を選択します。
4. 「キーストア」セクションにスクロールし、セクションを展開して、「構成」をクリックします。
5. 「キーストア・パス」で、./EPMKeystore.jks などの作成したキーストアのパスおよび名前を入力します。
6. キーストアの作成時に使用したキーストア・パスワードを入力して確認します。
7. キーストアの作成時に使用した別名およびパスワードを使用して、「署名鍵」および「暗号化鍵」の別名およびパスワードを入力します。パスワードを確認して、「OK」をクリックします。署名および暗号化鍵用の別名およびパスワードは、キーの保管および取得に使用される文字列の別名およびパスワードを定義します。

3 変更を有効にするため、Oracle Enterprise Manager Fusion Middleware Control をログアウトして再起動し、EPM System 管理対象サーバーを再起動します。

メッセージ保護の設定の詳細は、『Oracle(R) Fusion Middleware Web サービスのためのセキュリティおよび管理者ガイド 11g リリース 1 (11.1.1)』の http://docs.oracle.com/cd/E17904_01/web.1111/b32511/setup_config.htm#BABHIBHA を参照してください。

OID、MSAD、SunOne への WebLogic ドメインの構成

この手順は、OID、MSAD、SunOne などの外部プロバイダと通信する目的で、WebLogic ドメインまたは Financial Close Management の場合は SOA サーバーを構成するために必要です。この外部プロバイダと連携するよう Shared Services を構成する必要があります。使用するプロバイダに該当する項を参照してください。

注： Financial Close Management では、Shared Services ネイティブ・ディレクトリはサポートされません。Profitability and Cost Management、Provider Services、FDMEE および Financial Management の Web サービス機能は、Shared Services ネイティブ・ディレクトリで動作しません。詳細は、『Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ユーザーおよび役割セキュリティ・ガイド』を参照してください。

➤ OID、MSAD または SunOne を SOA サーバーに接続するには:

- 1 WebLogic 管理コンソールにまだログインしていない場合は、ログインします。
- 2 左側の「セキュリティ・レルム」をクリックし、「myrealm」をクリックして「プロバイダ」タブをクリックします。
- 3 「追加」をクリックして次の詳細を入力し、「OK」をクリックします。

OID の場合:

- 名前 - OID
- タイプ - OracleIntenetDirectoryAuthenticator

MSAD の場合:

- 名前 - MSAD
- タイプ - ActiveDirectoryAuthenticator

SunOne の場合:

- 名前 - SunOne

サーバーの再起動を促すメッセージは無視して問題ありません。この手順の最後に再起動します。

- 4 先ほど追加したプロバイダをクリックします。「プロバイダ固有」タブをクリックして、プロバイダの次の詳細を入力し、「OK」をクリックします。
 - ホスト
 - ポート
 - プリンシパル

- 資格証明
- ユーザー・ベース DB
- グループ・ベース DB
- 名前指定によるユーザー・フィルタ (MSAD のみ)
- ユーザー名属性 (MSAD のみ)

残りはデフォルト値のままかまいません。

- 5 「OID」、「MSAD」または「SunOne」をクリックし、「制御フラグ」に「SUFFICIENT」を選択します。
- 6 WebLogic Server を再起動します。

管理対象サーバーの起動

▶ 各管理対象サーバーは次の順に起動します:

- WebLogic 管理サーバー
- Hyperion Foundation Services 管理対象サーバー
- Oracle HTTP Server - Oracle Process Manager (ohsInstanceInstanceNumber)
- 任意の順序:
 - Financial Close Management Java Web アプリケーション
 - Financial Management Web サービス管理対象サーバー (Financial Close Management とともに Financial Management を使用する場合)
 - FDM Web アプリケーション (FDM とともに Financial Close Management を使用する場合)
 - Financial Reporting Java Web アプリケーション (Financial Close Management とともに Financial Reporting を使用する場合)
 - FDMEE (Account Reconciliation Manager を使用する場合)
- Oracle SOA 管理対象サーバー

接続プールの最大容量を増やす

必要な場合、データ・ソースに合わせて接続プールを大きくします。

▶ 接続プールの最大容量を増やすには:

- 1 WebLogic 管理コンソール (http://WebLogic_Admin_Host:WebLogic_Admin_Port/console) で、「サービス」、「JDBC」、「データ・ソース」の順に選択します。
- 2 データ・ソースを選択し、「接続プール」、「最大容量」の順に選択します。
- 3 設定を編集し、次のように容量を増やします:
 -

次のデータ・ソースに関するリソース・エラーが記録されている場合、その容量を増やします:

- EDNDataSource (Oracle Databaseのみ)
- EDNLocalTxDataSource (Oracle Databaseのみ)
- mds-owsm
- mds-soa
- EPMSystemRegistry
- OraSDPMDDataSource
- SOADataSource
- SOALocalTxDataSource

注: インストールの必要性に応じて、各データ・ソースの容量の増分を変えることができます。

Financial Close Management のログに「java.sql.SQLException: JNDI URL 'jdbc/data_source'を介してデータソースを取得できませんでした。
weblogic.jdbc.extensions.PoolDisabledSQLException:
weblogic.common.resourcepool.ResourceDisabledException: プールdata sourceは中断しています。リソースをアプリケーションに割り当てられません..」というエラー・メッセージが含まれている場合、指定されたデータ・ソースに対して接続プールで許容されている最大接続数を超えています。接続プールの容量を増やす必要があります。

外部 LDAP プロバイダの接続プールの増加

▶ 外部 LDAP プロバイダの接続プールを増加するには:

- 1 稼働している場合はすべてのサーバー(管理サーバー、およびすべての管理対象サーバー)を停止します。
- 2 domain_home\config\fmwconfig\ovd\default に移動します。
- 3 adapters.os_xml のバックアップを作成します。
- 4 adapters.os_xml を開いて<ldap id="XYZ" version="0">を探します。ここで XYZ は、WebLogic 管理コンソールから構成された外部 LDAP プロバイダの名前です。
- 5 <maxPoolSize>を 10 から 100 または 150 に変更します。例:

```
<pageSize>1000</pageSize>
<referrals>>false</referrals>
<heartbeatInterval>60</heartbeatInterval>
<timeout>120000</timeout>
<maxPoolSize>100</maxPoolSize>
<maxPoolWait>1000</maxPoolWait>
<maxPoolChecks>10</maxPoolChecks>
```

```
<quickFail>false</quickFail>
<escapeSlashes>true</escapeSlashes>
<kerberos>false</kerberos>
<useDNS>No</useDNS>
</ldap>
```

FDMEЕ 手動構成タスク

次の表に、FDMEЕ 構成後のタスクを示します。

表 25 FDMEЕ 構成後のタスク

タスク	参照
<p>Account Reconciliation Manager とともに使用される FDMEЕ の場合: Java Web アプリケーションの論理アドレスを変更するために、任意の時点で構成を変更する場合(EPM System Configurator の Web アプリケーションの論理アドレスの更新ページを使用)、次のタスクを実行する必要があります。</p> <ol style="list-style-type: none">1. 実行しているデータロードがないことを確認します。2. EPM System コンフィグレータを起動し、「タスクの選択」ページの「Financial Close」、 「Account Reconciliation」 セクションで、「SOA に配置」 および「FDMEЕ の SOA に配置」 を選択します。3. 「次へ」 をクリックして、構成を続行してから、「終了」 をクリックします。4. soainfra データソースに接続し、次のクエリーを実行します。 <pre>UPDATE WFTASKDISPLAY SET httpport = <LWA Port> , httpsport=0, hostname = <LWA Host> WHERE URI like '/workflow/%';</pre>	

10

EPM System製品のメンテナンス・リリースのインストールの実行

この章の内容

メンテナンス・リリースのインストール・チェックリスト	204
Financial Close Management のメンテナンス・リリースのインストール・チェックリスト	204
インストール・ファイルのダウンロードと解凍	206
メンテナンス・リリース・インストールの前提条件タスクの実行	206
メンテナンス・インストールでの EPM System 製品のインストールと構成	211
単一の管理対象サーバーへのメンテナンス・インストール配置	215
メンテナンス・インストールでの手動構成タスクの実行	217
配置の検証および配置レポートの生成	223
EPM System クライアントのメンテナンス・リリースのインストールの実行	224

EPM System リリース 11.2.0、リリース 11.1.2.1 またはリリース 11.1.2.2 からリリース 11.1.2.3 に移行するためにメンテナンス・リリースを適用する場合は、この章の手順に従います。

メンテナンス・インストールの注意：

- メンテナンス・リリースのインストールを適用する際、Oracle HTTP Server を共有ドライブに構成できません。
- Java Web アプリケーションを単一の管理対象サーバーに配置した場合、このリリースでも同じ方法で配置する必要があります。
- WebSphere Application Server に Java Web アプリケーションを配置した場合、Java Web アプリケーションを配置するために前のリリースで `runWASDeployment.bat|sh` を使用し、トポロジが変更されていない場合のみ、メンテナンス・リリースのインストールを適用できます。WebSphere 構成ウィザードを使用して配置した場合、追加の手順が必要な可能性があります、ここでその手順は含まれていません。
- 前のリリースをインストールおよび構成したユーザーと同じユーザーとしてログインする必要があります。

メンテナンス・リリースのインストール・チェックリスト

注： Financial Close Management にメンテナンス・リリースを適用する場合、204ページの「Financial Close Management のメンテナンス・リリースのインストール・チェックリスト」に記載されているインストール順序と構成順序に従ってください。

表 26 メンテナンス・リリースのインストール・チェックリスト

タスク	参照
システム要件を満たします。 データベース環境がアップグレードを必要とする場合、次に進む前にデータベースのアップグレードを実行します。詳細はデータベースのドキュメントを参照してください。	Oracle Enterprise Performance Management System Certification Matrix(http://www.oracle.com/technetwork/middleware/ias/downloads/fusion-certification-100350.html)
インストール・ファイルをダウンロードし、解凍します。	206 ページの「インストール・ファイルのダウンロードと解凍」
メンテナンス・リリース・インストールの前提条件タスクを実行します。	206 ページの「メンテナンス・リリース・インストールの前提条件タスクの実行」
EPM System 製品のインストールと構成	211 ページの「メンテナンス・インストールでの EPM System 製品のインストールと構成」
使用する製品に必要な手動構成タスクを実行します。	217 ページの「メンテナンス・インストールでの手動構成タスクの実行」
EPM System Diagnostics を使用して、インストールを検証し、配置レポートを生成します。	223 ページの「配置の検証および配置レポートの生成」

Financial Close Management のメンテナンス・リリースのインストール・チェックリスト

次の表に、Financial Close Management リリース 11.1.2.1 または 11.1.2.2 からリリース 11.1.2.3 に移行する場合の、Oracle SOA Suite および Financial Close Management のインストールと構成のプロセスの概要を示します。

Financial Close Management にメンテナンス・リリースを適用する際には、次の点に注意してください：

- メンテナンス・リリースのインストール・オプションは、Financial Close Management リリース 11.1.2.1 またはリリース 11.1.2.2 からのみサポートされています。
- メンテナンス・リリースを適用する前に、必ず「オープン」ステータスのスケジュールがないことを確認します。
- Account Reconciliation Manager を Financial Close Management 配置に追加する場合、EPM System インストーラの「メンテナンス・リリースの適用」オプション

ンを使用して、Financial Close Management Close Manager Java Web アプリケーションの 11.1.2.3 リリースを最初にインストールする必要があります。次に、EPM System インストーラの「新規インストール」オプションを使用して、Financial Close Management Reconciliation Manager Java Web アプリケーションをインストールします。

- .NET Framework がインストールされていない場合、EPM System インストーラがインストールします。

表 27 Financial Close Management にメンテナンス・リリースを適用するためのロードマップ

タスク	参照
EPM System、WebLogic および SOA のすべてのサービスをシャットダウンします。	
<p>Financial Close Management リリース 11.1.2.1 またはリリース 11.1.2.2 をホスティングしているマシンに、Financial Close Management リリース 11.1.2.3 をインストールします。</p> <p>注： インストール中に、「メンテナンス・リリースの適用」が選択されています。EPM System インストーラによってすべての使用可能な製品が選択されます。配置内のすべての EPM System 製品にメンテナンス・リリースを適用する必要があります。</p> <p>注意 インストール後、次の Oracle SOA Suite アップグレード手順を完了するまで、EPM System コンフィグレータを使用して EPM System 製品の構成に進まないでください。</p>	
<p>SOA Suite をアップグレードする前に、SOA データベースをバックアップします。</p> <p>Oracle SOA Suite コンポーネントを PS6 にアップグレードしてから、必要なパッチを適用します。次のリストに、この手順の概要を示します：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 既存のソフトウェア(SOA コンポーネント)を更新します。 2. Microsoft SQL Server を使用している場合、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Readme に記載されているとおりにパッチを適用します。 3. RCU スキーマをアップグレードします。詳細は、『Oracle(R) Fusion Middleware パッチ適用ガイド 11g リリース 1』のパッチセット・アシスタントの起動に関する項を参照してください。この手順で、_SOAINFRA、_MDS および_ORASDPM のスキーマがアップグレードされます。 4. SOA アップグレード・スクリプトを実行して、WebLogic ドメインをアップグレードします。詳細は、『Oracle(R) Fusion Middleware パッチ適用ガイド 11g リリース 1』の「soa-upgrade.py の実行によるポリシー・ストアの更新と共有ライブラリのデプロイ」を参照してください。 	<p>Oracle(R) Fusion Middleware パッチ適用ガイド 11g リリース 1</p> <p>ヒント： EPM System コンフィグレータに進む前に、エラーの SOA 起動ログを確認して、エラーを解決します。Enterprise Manager コンソールで SOA のステータスも表示できます。</p>
EPM System 製品を構成し、Close Manager の場合は「SOA に配置」、Account Reconciliation Manager の場合は「SOA に配置」および「FDM EE の SOA に配置」を除く、すべての必要な構成タスクを選択します。Shared Services および Financial Close Management の場合は、データベース構成や Java Web アプリケーション配置なども含まれます。	
WebLogic 管理サーバー、SOA 管理対象サーバーの順に起動します。	
EPM System コンフィグレータを起動し、Close Manager の場合は「SOA に配置」を選択して、Account Reconciliation Manager の場合は「SOA に配置」および「FDM EE の SOA に配置」を選択します。	

タスク	参照
すべてのサーバー(SOA サーバー、WebLogic 管理サーバー)をシャットダウンして再起動します。	
SOA サーバーを停止し、EPM System 製品、SOA サーバー、Financial Close Management の順に起動します。	344 ページの「Financial Close Management アプリケーション・サーバー」
すべての製品統合ファイルのリリース 11.1.2.3 バージョンをインポートすることにより、製品統合タイプを更新します。製品統合ファイルは My Oracle Support に公開されています。	『Oracle Hyperion Financial Close Management 管理者ガイド』の統合タイプの管理に関する項。

インストール・ファイルのダウンロードと解凍

EPM System ファイルを Oracle Software Delivery Cloud(<http://edelivery.oracle.com/>)の Oracle Enterprise Performance Management System メディア・パックからダウンロードします。ファイルを共有ドライブにダウンロードすることをお勧めします。インストール・ファイルのダウンロードおよび抽出の詳細は、第4章「インストール用ファイルのダウンロード」を参照してください。

メンテナンス・リリース・インストールの前提条件タスクの実行

▶ EPM System リリース 11.1.2.0、リリース 11.1.2.1 またはリリース 11.1.2.2 からリリース 11.1.2.3 に移行するためにメンテナンス・リリースを適用する場合は、インストールと構成の前に次のインストールのタスクを実行します:

1 メンテナンスのインストールを続行する前に、必要な PSE を適用します。

以前のリリース間で修正された不具合のリストを確認するには、問題修正ファインダを使用します。このツールでは、ユーザーが所有する製品と現在の実装リリースを識別できます。1回のクリックで、ツールは迅速に、関連付けられたプラットフォームおよびパッチ番号を使用して修正済み不具合の説明レポートをカスタマイズして生成します。このツールはこちらにあります:

<https://support.oracle.com/oip/faces/secure/km/DocumentDisplay.jspx?id=1292603.1>

2 すべての EPM System サービスおよびプロセスを停止して、IIS を再起動します。

3 Shared Services レジストリのデータベースをバックアップします。

4 配置レポートを生成します:

1. コマンドライン・ウィンドウを開き、EPM_ORACLE_INSTANCE/bin に移動します。
2. コマンド `epmsys_registry.bat|.sh report deployment` を実行します。

デフォルトでは、レポートは EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/reports/deployment_report_YYYYMMDD_HHMMSS.html として保存されません。

- 5 **Shared Services** レジストリのグローバル役割(特に、**Shared Services** グローバル役割)を無効化または削除した場合、メンテナンス構成プロセスを正しく使用するため、管理ユーザーに対して復元およびプロビジョニングする必要があります。
- 6 **EPM System** コンフィグレータを開始する前に、外部認証プロバイダがオンラインであることを確認します。
- 7 **Essbase** リリース 11.1.2.0 またはリリース 11.1.2.1 からリリース 11.1.2.3 に移行するためにメンテナンス・リリースを適用する場合は、まず旧リリースのデータベースからリンク・レポート・オブジェクト情報をエクスポートしてから、そのリンク・レポート・オブジェクトを削除する必要があります。メンテナンス・リリースを適用した後、エクスポート済のリンク・レポート・オブジェクトをインポートします。[207 ページの「Essbase のメンテナンス・リリース・インストールの前提条件」](#)を参照してください。
- 8 UNIX 上でメンテナンス・インストールを実行していて、以前のリリースでこのプラットフォームに **Financial Management** があった場合は、先に **Financial Management Web** サービスをアンインストールする必要があります。
- 9 リリース 11.1.2.0 または 11.1.2.1 の **Oracle Hyperion Business Rules** を使用している場合は、リリース 11.1.2.3 では **Calculation Manager** のルールに移行する必要があります。ビジネス・ルールを移行する前に、前提条件タスクを実行する必要があります。[208 ページの「Business Rules メンテナンス・リリースおよびアップグレード・インストールの前提条件」](#)を参照してください。リリース 11.1.2.2 からメンテナンス・インストールを適用する場合は、この手順をスキップできます。
- 10 **Financial Close Management** リリース 11.1.2.1 またはリリース 11.1.2.2 から移行する場合は、[204 ページの「Financial Close Management のメンテナンス・リリースのインストール・チェックリスト」](#)を参照してください。
- 11 **Oracle Web Services Manager** を **EPM System** 製品とともに使用している場合、**OWSM MDS** スキーマをアップグレードします。[211 ページの「Oracle Web Services Manager を使用中の場合のメンテナンス・リリース・インストールの前提条件」](#)を参照してください。
- 12 **EPM System** 製品のすべてのサービスを停止します。

タスク・マネージャを使用して、**Integration Services** サービスを手動で停止する必要があることに注意してください。

製品の構成タスクが完了するまで、その製品のサービスを開始しないでください。

Essbase のメンテナンス・リリース・インストールの前提条件

Essbase リリース 11.1.2.0、リリース 11.1.2.1 またはリリース 11.1.2.2 からリリース 11.1.2.3 に移行するためにメンテナンス・リリースを適用する場合は、まず旧リリースのデータベースからリンク・レポート・オブジェクト(LRO)情報をエクスポートしてから、そのリンク・レポート・オブジェクトを削除する必要があります。

す。インストールおよび構成の完了後に、エクスポート済のリンク・レポート・オブジェクトをインポートします。

▶ Essbase リリース 11.1.2.0、リリース 11.1.2.1 またはリリース 11.1.2.2 からリンク・レポート・オブジェクトをエクスポートするには:

- 1 旧リリースのインストールをホストしているマシンで、次の MAXL コマンドを使用して、アプリケーションのリンク・レポート・オブジェクト・データを指定のディレクトリにバックアップします。

```
EXPORT database
DBS-NAME
LRO to server directory '
directoryName
';
```

例:

```
MAXL> EXPORT database Sample.Basic LRO to server directory 'V1';
```

この例では、Sample.Basic LRO データが ARBORPATH/app 内の Sample-Basic-V1 にエクスポートされます。

- 2 次の MAXL コマンドを使用して、アプリケーションのリンク・レポート・オブジェクト・データを削除します。

```
ALTER database
DBS-NAME
delete LRO all
```

例:

```
MAXL> ALTER database sample.basic delete LRO all;
```

- 3 旧リリースの Essbase サーバーをシャットダウンします。

Essbase リリース 11.1.2.3 のインストールおよび構成後に実行する追加の手順があります。

Business Rules メンテナンス・リリースおよびアップグレード・インストールの前提条件

メンテナンス・リリースを適用してリリース 11.1.2.0 またはリリース 11.1.2.1 からリリース 11.1.2.3 に移行する場合、または旧リリースからアップグレードする場合に、旧リリースの Business Rules を使用しているときは、リリース 11.1.2.3 の Calculation Manager ルールに移行する必要があります。ビジネス・ルールを移行する前に、前提条件タスクを実行する必要があります。

リリース 11.1.2.2 からメンテナンス・インストールを適用する場合は、この手順をスキップできます。

▶ Business Rules の移行を準備するには、リリース 11.1.2.3 をインストールする前に現在の Business Rules 環境で次のタスクを実行します:

- 1 Business Rules では、ルール・エディタ内で、各ビジネス・ルールから関連するアウトライン(設計時の場所)を削除します。これを実行した後、「関連付けるアウトライン」ドロップダウン・リストにテキスト「アウトラインの選択」が表示されます。
- 2 ルール・エディタの「場所」タブで、各ビジネス・ルールに有効な起動場所があることを確認します。これは絶対位置である必要があります。"すべての場所"が Business Rules で有効でも、ビジネス・ルールを移行する場合、特定の起動場所の詳細(つまり、アプリケーション・タイプ - Planning または Essbase、サーバー名、アプリケーション名およびデータベースまたはプラン・タイプ)を指定する必要があります。1つのビジネス・ルールを複数の起動場所で有効にする場合でも、各場所に対して詳細を指定する必要があります。場所は異なるアプリケーションにある必要があります。同じビジネス・ルールを Calculation Manager 内の同じアプリケーションの異なるプラン・タイプに移行できません。

ルールがシーケンスの一部である場合、シーケンス内のルールの起動場所をルールの「場所」タブに示されている起動場所のいずれかにする必要があります。

- 3 ルール・エディタの「アクセス権限」タブで、各ビジネス・ルールにすべての場所ではなく特定の場所に定義されたセキュリティがあることを確認します。1つのビジネス・ルールに対して、その「場所」タブで複数の場所が定義されている場合、場所ごとに個々にセキュリティを追加する必要があります。
- 4 移行が完了するまで、Calculation Manager のルールを変更しないでください。
- 5 Planning とともに Business Rules を使用している場合、ルールのバックアップを作成します。Administration Services を使用して、ルールを Business Rules 形式で XML にエクスポートします。リリース 11.1.1.4 からアップグレードする場合は、Calculation Manager 形式にもルールをエクスポートします。EPM System コンフィグレータは、アプリケーションのアップグレード中に使用するデータベース構成中のルールをエクスポートします。
- 6 Essbase のみの Business Rules ユーザーの場合、ビジネス・ルールをエクスポートする必要があります。Business Rules から Essbase ルールをエクスポートするには:
 - 1 Administration Services コンソールで、「ビジネス・ルール」ノードを右クリックして「エクスポート」を選択します。
 - 2 Business Rules 形式のルールをエクスポートし、リポジトリのすべての Essbase ルールを選択します。リリース 11.1.1.4 からアップグレードする場合は、Calculation Manager 形式にもルールをエクスポートします。
 - 3 XML ファイルを保存する場所を指定し、「OK」をクリックします。アップグレードしている場合、場所は、アップグレードした環境からアクセス可能な共有ドライブにする必要があります。

場所をメモしておいてください。このファイルは、後のプロセスでインポートします。

EPM System コンフィグレータでの構成中に、「データベースの構成」タスクを実行すると、ルールが移行用に準備されます。

構成後、ビジネス・ルールのインポートおよび移行のために実行する追加のタスクがあります。

Financial Reporting のメンテナンス・リリース・インストールの前提条件

すべてのプラットフォームの Financial Reporting Java Web アプリケーションにデフォルトで含まれるため、Financial Reporting 印刷サーバーを個別にインストールする必要はなくなりました。個別の Financial Reporting 印刷サーバー・サービスは作成されません。ただし、リリース 11.1.2.0 またはリリース 11.1.2.1 で作業していた場合は、Financial Reporting をインストールする前に、次の前提条件を満たしてください:

- リリース 11.1.2.0 で作業している場合:

1. EPM_ORACLE_HOME/uninstall の uninstall.cmd を使用して、Financial Reporting Studio をアンインストールします。
2. Windows の「コントロールパネル」を使用して「プリンタ」リストから HRPrinter ドライバを削除します。
3. Windows サービスの Microsoft 管理コンソールの「Hyperion Financial Reporting - 印刷サービス」を無効化して、次の Windows レジストリ・エントリを削除します(先に進む前に、レジストリをバックアップしてください):

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Enum\Root
\LEGACY_FRPRINTSERVICE
HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\EventLog\Application
\FRPrintService
HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\FRPrintService
```

- リリース 11.1.2.1 で作業している場合:

1. /Program Files [(x86)]/Oracle/FinancialReportingStudio/products/financialreporting/install/bin の FRRemovePrintServer.cmd を使用して、「Hyperion Financial Reporting - 印刷サービス」を削除します。これにより、Windows サービスおよび HRPrinter ドライバの両方が削除されます。
2. Windows の「コントロールパネル」の「プログラムの追加と削除」(Windows XP または Windows 2003)または「プログラムと機能」(Windows 7 または Windows 2008)を使用して、Financial Reporting Studio をアンインストールします。
3. フォルダ/Program Files/Oracle/FinancialReportingStudio を削除します。

Oracle Web Services Manager を使用中の場合のメンテナン ス ・ リリース ・ インストールの前提条件

Profitability and Cost Management、Financial Close Management、FDMEE、Financial Management、Provider Services または Data Relationship Management とともに Oracle Web Services Manager を使用する 場合、OWSM MDS スキーマをアップグレードして、Oracle Web Services Manager をリリース 11.1.1.7.0 に更新します。

- `_MDS` スキーマを更新します。詳細は、『Oracle(R) Fusion Middleware パッチ適用ガイド 11g リリース 1』のパッチセット・アシスタントの起動に関する項と「無効なデータベース・オブジェクトの確認」を参照してください。
- 構成およびストアを更新します。詳細は、『Oracle(R) Fusion Middleware パッチ適用ガイド 11g リリース 1』を参照してください。
- Oracle Web Services Manager リポジトリを更新します。『Oracle(R) Fusion Middleware パッチ適用ガイド 11g リリース 1』の「新しい OWSM 事前定義ポリシーの追加」を参照してください。

『Oracle(R) Fusion Middleware パッチ適用ガイド 11g リリース 1』は Oracle Documentation Library の Fusion Middleware ページにあります。

メンテナン ス ・ インストールでの EPM System 製品のインストールと構成

メンテナン ス ・ リリースの適用時には、前のリリースのインストールおよび構成に使用したのと同じユーザーでインストールおよび構成を実行する必要があります。

▶ メンテナン ス ・ インストールで EPM System 製品をインストールするには:

1 EPM System インストーラを起動します。

- (Windows) EPM System インストーラファイルを抽出したルート・ディレクトリで `installTool.cmd` をダブルクリックします。
- (UNIX) EPM System インストーラ・ファイルを抽出したルート・ディレクトリに移動し、`./installTool.sh` と入力します。

2 次の選択を行いながら、EPM System インストーラを順を追って進みます:

- 「宛先」画面で、「次」をクリックします。宛先は変更できません。メンテナン ス ・ リリースは既存の EPM System インストールの上から適用します。
- 「メンテナン ス ・ リリースの適用」が選択されています。「次」をクリックします。
- 「製品の選択」で、「次」をクリックします。製品の選択は変更できません。

配置内のすべての EPM System 製品にメンテナン ス ・ リリースを適用する必要があります。メンテナン ス ・ リリースを一部の製品のみに適用することはできません。

「製品の選択」では、製品の選択または選択解除はできません。

メンテナンス・リリースを既存の配置に適用し、新しい EPM System 製品を既存の配置に追加する予定の場合、最初に既存の製品をインストールし、構成します。構成が完了した後、新しい製品をインストールします。

Integration Services は、Essbase サーバーとともにインストールされることに注意してください。

3 インストールが完了したら、「終了」をクリックまたは選択します。

注： Financial Close Management をインストールする場合、EPM System コンフィグレータを使用した構成を行う前に追加手順を実行する必要があります。204 ページの「[Financial Close Management のメンテナンス・リリースのインストール・チェックリスト](#)」

4 配置内の各マシンでインストール手順を繰り返します。

5 Foundation Services をホストしているマシンで、EPM System コンフィグレータを起動します：「スタート」メニューで、「すべてのプログラム」、「Oracle EPM System」、「EPM System コンフィグレータ(すべてのインスタンス)」の順に選択します。

WebSphere Application Server に Java Web アプリケーションを配置した場合、EPM System コンフィグレータを `/configtool-manual.bat|.sh` コマンドで起動します。

6 「Oracle インスタンス」で、構成を適用する既存の EPM Oracle インスタンスを指定します。

7 「Shared Services およびレジストリ・データベース構成」画面で、「前に構成された Shared Services データベースに接続」を選択し、Shared Services Registry のデータベース接続情報と、データベースへのアクセスに使用するデータベース・アカウントのユーザー名およびパスワードを確認します。

8 「タスクの選択」で「すべて選択解除」から選択内容をクリア(選択解除)し、Foundation Services の最上位ノードを選択して、「次へ」をクリックします。

このオプションでは Foundation Services の事前構成タスクのみが選択されません。

9 パネルを使用して続行し、構成が完了したら「終了」をクリックします。

10 構成時の問題を回避するために、Foundation Services をホストしているマシンから Shared Services レジストリ修復スクリプトを実行します：

1. 問題を検出するには、プレビュー・オプションを使用して、修復スクリプトを実行します：

コマンド・プロンプトから、EPM_ORACLE_INSTANCE/bin に変更し、次のコマンドを実行します：

```
epmsys_registry.bat|.sh preview
```

エラーはすべてコンソールに報告されますが、Shared Services Registry への変更は行われません。エラーがない場合は、213 ページの[手順 12](#)にスキップします。

2. 修復スクリプトで問題が検出された場合、スクリプトを再度、修復モードで実行します:

```
epmsys_registry.bat|.sh repair
```

- 11 別の配置レポートを生成すると、**Shared Services Registry** で修復スクリプトによって行われた変更が反映されます。

1. コマンドライン・ウィンドウを開き、EPM_ORACLE_INSTANCE/bin に移動します。
2. コマンド epmsys_registry.bat|.sh report deployment を実行します。

デフォルトでは、レポートは EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/reports/deployment_report.html として保存されます。

レポートが配置環境の実際の構成と一致しない場合は、Oracle サポートに問い合わせてください。

- 12 **EPM System** コンフィグレータを再度起動します: **Foundation Services** をホストしているマシンで、「スタート」メニューから、「すべてのプログラム」、「Oracle EPM System」、「EPM System コンフィグレータ(すべてのインスタンス)」の順に選択します。

分散環境では、**Foundation Services** を最初に構成する必要があります。他の製品を正しく構成するために、**Foundation Services** をインストールして構成する必要があります。

- 13 「Oracle インスタンス」で、構成を適用する既存の **EPM Oracle** インスタンスを指定します。
- 14 「**Shared Services** およびレジストリ・データベース構成」画面で、「前に構成された **Shared Services** データベースに接続」を選択し、**Shared Services Registry** のデータベース接続情報と、データベースへのアクセスに使用するデータベース・アカウントのユーザー名およびパスワードを確認します。
- 15 コンポーネント構成ページで、必要に応じて選択を行い、「次」をクリックします。EPM System コンフィグレータのすべての「保留中」タスクを完了する必要があります。

- EPM System コンフィグレータにより、この EPM Oracle インスタンスで製品に必要なすべての構成タスクが事前に選択されます。
- オプションで、**Foundation** の「Web サーバーの構成」タスクから選択内容をクリアできます。

構成後にすぐ **Foundation Services** を検証する場合は、「Web サーバーの構成」の選択内容を保持します。それ以外の場合は、その他すべての EPM System 製品が構成された後に Web サーバーを構成します。

- **WebSphere Application Server** に Java Web アプリケーションを配置する場合、「アプリケーション・サーバーへの配置」タスクおよび「Web サーバーの構成」タスクを除く必須構成タスクを実行します。次に、その他の手順を実行します。

- 前のリリースで一部の製品が単一の管理対象サーバーに配置された場合、それらはこのリリースでも同様に配置されます。製品の配置を変更する場合は、メンテナンスの配置が完了してから、再配置できます。
- メンテナンス・リリースのインストールを適用する際、Oracle HTTP Server を共有ドライブに構成できません。
- オプションで、EPM System Java Web アプリケーションを手動で配置します。第7章「EPM System Java Web アプリケーションの手動配置」を参照してください

16 EPM System コンフィグレータで残りのページを順を追って進みます。

メンテナンスの構成時には既存の構成設定を維持することをお勧めします。配置が完了した後は、構成の変更を行う必要に応じて再構成できます。

ページに関する情報が必要な場合は、「ヘルプ」をクリックするか、第6章「新しい配置での EPM System 製品の構成」を参照してください。

- 「データベース構成」ページで、データベース接続の詳細の更新が必要な場合のみ変更を行います。
- 製品の構成タスクが完了するまで、その製品のサービスを開始しないでください。

17 配置内の各 EPM Oracle インスタンスまたはサーバーについて、構成手順を繰り返します。

18 その他の EPM System 製品をすべて構成したら、最後に Web サーバーを構成します: Foundation Services をホストしているマシンで、EPM System コンフィグレータを起動して、Foundation タスクから「Web サーバーの構成」を選択します。

19 EPM System 製品を開始します。配置内の各マシンで、「スタート」、「すべてのプログラム」、「Oracle EPM System」、「EPM_ORACLE_INSTANCE」、「Foundation Services」、「EPM System の起動」の順に選択します。

リリース 11.1.2.3 の新しいクライアント・インストーラがあるクライアントの場合、メンテナンス・リリース・インストール・オプションを適用してもクライアント・ソフトウェアは更新されません。クライアント・インストーラを使用してクライアントをインストールする必要があります。97 ページの「EPM System クライアントのインストール」を参照してください。

Profitability and Cost Management のメンテナンス構成プロセス時に、リリース 11.1.2.2 のアプリケーションからのステージ・オブジェクト計算アーティファクトが、リリース 11.1.2.3 の計算済メジャー・タイプの計算ルールに置き換えられます。

単一の管理対象サーバーへのメンテナンス・インストール配置

サブトピック

- シナリオ 1: すべての Java Web アプリケーションを固有の管理対象サーバーに配置しているか、すべての Java Web アプリケーションをリリース 11.1.2.0、11.1.2.1 または 11.1.2.2 の単一の管理対象サーバーに配置しています
- シナリオ 2: 一部の Java Web アプリケーションは単一の管理対象サーバーに配置され、一部の Java Web アプリケーションは固有の管理対象サーバーに配置されている、リリース 11.1.2.1 または 11.1.2.2 環境で作業しています

リリース 11.1.2.0、リリース 11.1.2.1 またはリリース 11.1.2.2 からリリース 11.1.2.3 へのメンテナンス・リリースを適用している場合、単一の管理対象サーバーの配置の詳細は、次のシナリオを参照してください。

注: UNIX プラットフォームの場合、単一の管理対象サーバーでリリース 11.1.2.1 またはリリース 11.1.2.2 からリリース 11.1.2.3 へのメンテナンス・リリースを適用している場合、Financial Management Web サービスをアンインストールする必要があります。

シナリオ 1: すべての Java Web アプリケーションを固有の管理対象サーバーに配置しているか、すべての Java Web アプリケーションをリリース 11.1.2.0、11.1.2.1 または 11.1.2.2 の単一の管理対象サーバーに配置しています

このシナリオでは次を想定しています:

- 単一の管理対象サーバーに配置した場合、すべての Java Web アプリケーションを単一の管理対象サーバーに手動で配置し、EPM System コンフィグレータを使用した配置は実行していないことが必要です。(ただし、単一の管理対象サーバーへの配置はリリース 11.1.2.0 でサポートされていないので注意してください。)
- リリース 11.1.2.3 のすべての Java Web アプリケーションを単一の管理対象サーバーに配置します。

このシナリオでは、メンテナンス・リリースの適用中に単一の管理対象サーバーに配置できないため、最初に各 Web アプリケーションを固有の管理対象サーバーに配置し、次に Web アプリケーションを単一の管理対象サーバーに配置します。次の手順を実行します:

1. 「メンテナンス・リリースの適用」オプションを使用して、EPM System 製品をインストールおよび構成します。

EPM System コンフィグレータでの構成中、各 Java Web アプリケーションを固有の管理対象サーバーに配置します。「アプリケーション・サーバーへの配

置」ページで、「Web アプリケーションを単一の管理対象サーバーに配置してください」を選択しないでください。

2. 単一の管理対象サーバー「EPMServer0」がマシンに割り当てられていることを確認します。
 1. WebLogic 管理サーバーを起動します。
 2. WebLogic 管理コンソールにログインします。
 3. 「環境」、「サーバー」、「EPMServer0」の順に選択します。
 4. サーバーに対して「マシン」が選択されているかどうかを確認します。

サーバーに対して「マシン」が選択されていない場合、「ロックおよび編集」を選択し、ドロップダウン・リストからローカル・ホスト・マシンを選択します。
 5. 「保存」をクリックして、変更を有効にします。
3. WebLogic 管理サーバー・マシンから、すべてまたは一部の Java Web アプリケーションを単一の管理対象サーバーに配置します: EPM System コンフィグレータで、単一の管理対象サーバーに含める製品ごとに「アプリケーション・サーバーへの配置」タスクを選択します。「アプリケーション・サーバーへの配置」ページで、「Web アプリケーションを単一の管理対象サーバーに配置してください」を選択します。

シナリオ 2: 一部の Java Web アプリケーションは単一の管理対象サーバーに配置され、一部の Java Web アプリケーションは固有の管理対象サーバーに配置されている、リリース 11.1.2.1 または 11.1.2.2 環境で作業しています

このシナリオでは次を想定しています:

- リリース 11.1.2.1 または 11.1.2.2 で、一部の Java Web アプリケーションが固有の管理対象サーバーに配置されています。
- リリース 11.1.2.1 または 11.1.2.2 で、一部の Java Web アプリケーションが単一の管理対象サーバーに配置されています。
- リリース 11.1.2.2 のこれらの配置シナリオを維持します。

次の手順を実行します:

1. 「メンテナンス・リリースの適用」オプションを使用して、EPM System 製品をインストールします。
2. 単一の管理対象サーバー「EPMServer0」がマシンに割り当てられていることを確認します。
 1. WebLogic 管理サーバーを起動します。
 2. WebLogic 管理コンソールにログインします。
 3. 「環境」、「サーバー」、「EPMServer0」の順に選択します。

4. サーバーに対して「マシン」が選択されているかどうかを確認します。
サーバーに対して「マシン」が選択されていない場合、「ロックおよび編集」を選択し、ドロップダウン・リストからローカル・ホスト・マシンを選択します。
5. 「保存」をクリックして、変更を有効にします。
3. 単一の管理対象サーバーに配置された Java Web アプリケーションを構成します: EPM System コンフィグレータで、単一の管理対象サーバーに配置された Java Web アプリケーションのいずれかの「アプリケーション・サーバーへの配置」タスクを選択し、「Web アプリケーションを単一の管理対象サーバーに配置してください」を選択します。(残りの Java Web アプリケーションは自動的に選択されます。)
4. 固有の管理対象サーバーに配置された Java Web アプリケーションを構成します: EPM System コンフィグレータで、固有の管理対象サーバーに配置した各製品の「アプリケーション・サーバーへの配置」タスクを選択します。「Web アプリケーションを単一の管理対象サーバーに配置してください」を選択しないでください。

メンテナンス・インストールでの手動構成タスクの実行

サブトピック

- [メンテナンス・インストールでの一般的な手動構成タスク](#)
- [メンテナンス・インストールでの EPM Workspace 手動構成タスク](#)
- [メンテナンス・インストールでの Performance Management Architect 手動構成タスク](#)
- [メンテナンス・インストールでの Essbase 手動構成タスク](#)
- [メンテナンス・インストールでの Essbase Studio 手動構成タスクの実行](#)
- [Planning 手動構成タスク](#)
- [Profitability and Cost Management 手動構成タスク](#)
- [Strategic Finance 手動構成タスク](#)
- [FDM 手動構成タスク](#)
- [WebSphere Application Server へのメンテナンス・インストール配置](#)

メンテナンス・インストールでの一般的な手動構成タスク

- リリース 11.1.2.3 に移行するためにメンテナンス・リリースを適用した場合、構成後、キャッシュしたファイルを Web ブラウザから削除します。これにより、ブラウザが正しい Javascript ファイルを確実に使用します。
- MIDDLEWARE_HOME/user_projects/domains/EPMSystem/precompiled および MIDDLEWARE_HOME/user_projects/domains/EPMSystem/precompiledJSPs フォルダの内容を削除します。

メンテナンス・インストールでの EPM Workspace 手動構成タスク

メンテナンス・リリースの適用後、新たにサポートされた言語が使用可能な言語のリストに表示されます;ただし、割り当てられた言語リストには新しい言語を手動で追加する必要があります。

「ナビゲート」、「管理」、「WorkspaceServerSettings」の順に選択します。「サポートされているロケール」を選択し、目的のロケールを追加します。

メンテナンス・インストールでの Performance Management Architect 手動構成タスク

リリース 11.1.2.0 または 11.1.2.1 からリリース 11.1.2.3 への移行にメンテナンス・リリースを適用した場合、Financial Management アプリケーションに共有次元が含まれていれば、「アプリケーション・ビュー」ペインでアプリケーションを右クリックして、「すべての関連付けをアクティブにする」を選択します。リリース 11.1.2.2 で拡張次元用に導入された動的プロパティをサポートするには、これが必要です。

メンテナンス・インストールでの Essbase 手動構成タスク

サブトピック

- [リンク・レポート・オブジェクトのインポート](#)
- [Essbase と使用するための Business Rules の Calculation Manager へのインポート](#)

リンク・レポート・オブジェクトのインポート

Essbase リリース 11.1.2.0 またはリリース 11.1.2.1 から移行するためにメンテナンス・リリースを適用する場合、旧リリースからリンク・レポート・オブジェクトをインポートする必要があります。

この手順を完了する前に、リリース 11.1.2.0 または 11.1.2.1 からリンク・レポート・オブジェクトをエクスポートしておく必要があります。[207 ページの「Essbase のメンテナンス・リリース・インストールの前提条件」](#)を参照してください。

▶ リンク・レポート・オブジェクトをインポートするには:

- 1 Essbase サーバーを開始します。
- 2 次の MAXL コマンドを実行して、旧リリースのバックアップ・ディレクトリからリンク・レポート・オブジェクト・データをインポートします。

```
IMPORT database
DBS-NAME
LRO from server directory
```

```
directoryName  
,
```

例:

```
MAXL> IMPORT database Sample.Basic LRO from server directory  
'Sample-Basic-V1' ;
```

Essbase と使用するための Business Rules の Calculation Manager へのインポート

メンテナンス・リリースを適用して Essbase リリース 11.1.2.0 または 11.1.2.1 から Release 11.1.2.3 に移行する場合に、Essbase 限定の Business Rules ユーザーであるときは、Business Rules ルールを Calculation Manager に移行する必要があります。

206 ページの「メンテナンス・リリース・インストールの前提条件タスクの実行」の説明に従ってルールをエクスポートしたことを確認します。

- ▶ Essbase と使用するために Business Rules を Calculation Manager にインポートするには:
 - 1 Calculation Manager で、「ファイル」、「インポート」の順に選択します。
 - 2 エクスポートした XML ファイルを選択し、「インポート」をクリックします。

メンテナンス・インストールでの Essbase Studio 手動構成タスクの実行

「メンテナンス・リリースの適用」オプションを使用して、Essbase Studio リリース 11.1.2.0、11.1.2.1 または 11.1.2.2 からこのリリースに移行した場合、インストールおよび構成後に Essbase Studio カタログを更新する必要があります。

カタログを更新するには、Essbase Studio コマンド・ライン・クライアントで `reinit` コマンドを発行します。これにより、カタログが最新リリースのプロシージャで更新されます。

- ▶ Essbase Studio カタログを更新するには:
 - 1 Essbase Studio サーバーが実行されていることを確認します。
 - 2 `EPM_ORACLE_INSTANCE/bin` ディレクトリから、次のいずれかのスクリプトを実行します:

```
start_BPMS_bpms1_CommandLineClient.bat|sh
```

CPL シェルと呼ばれるコマンド・ウィンドウが表示されます。

- 3 プロンプトで、有効な Essbase Studio ホスト名、管理者ユーザー名およびパスワードを入力します。

注： `reinit` コマンドを使用するには、Essbase Studio 管理者権限が必要です。

4 プロンプトで、次のコマンドを入力します：

```
reinit
```

5 `exit` と入力して、CPL シェルを閉じます。

Essbase Studio カタログは現在使用できる状態にあります。

Planning 手動構成タスク

Oracle Project Financial Planning または Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting で作業する場合は、アプリケーションをアップグレードする前に、追加手順を実行する必要があります。

アプリケーションのアップグレード

Planning リリース 11.1.2.0、11.1.2.1 または 11.1.2.2 から移行するためにメンテナンス・リリースを適用した場合、アップグレード・ウィザードを実行して「アプリケーションのアップグレード」ページを使用する必要があります。EPM Workspace から、「ナビゲート」、「管理」、「Planning 管理」の順に選択し、「アップグレード・ウィザード」をクリックします。「アプリケーションのアップグレード」ページで、1 つ以上のアプリケーションを選択して、「アクション」メニューから、「アップグレード」を選択し、「OK」をクリックして続行します。詳細は、[269 ページの「再ホスティングされたサーバー環境への Planning 参照の更新およびアプリケーションのアップグレード」](#)を参照してください。

Planning と使用するための Business Rules の Calculation Manager への移行

Planning リリース 11.1.2.0 または 11.1.2.1 から移行するためにメンテナンス・リリースを適用し、かつ Business Rules ルールを使用していた場合は、ルールを Calculation Manager ルールに移行し、さらにルールのセキュリティを移行する必要があります。

移行する前に、Shared Services をアップグレードする際に、同じ SID を持つユーザー・ディレクトリおよびネイティブ・ユーザーが使用可能であることを確認します。

Planning アプリケーションが現在のリリースにアップグレードされ、システム・ビューの Calculation Manager で使用できることを確認します。

▶ Business Rules ルールを Calculation Manager ルールに移行するには：

- 1 Calculation Manager で、移行済の Planning アプリケーションを選択し、「移行」を選択します。

EPM System コンフィグレータでのデータベース構成時にエクスポートされたデータが Calculation Manager にインポートされます。

- 2 Planning アプリケーションごとに繰り返します。
- 3 ルールを Calculation Manager から Planning に配置します。Oracle Hyperion Calculation Manager Designer's Guide を参照してください。

ビジネス・ルールおよびルール・セキュリティを移行した後、ルールに複数の起動場所があり、複数の場所に移行した場合、Calculation Manager は最初の移行に対してルールを作成し、後続のすべての移行にショートカットを作成します。ルールにルールレベルの変数がある場合、新しい環境のアプリケーションで作成されるショートカットに対して、変数が Plan レベルに移動します。このシナリオで、ユーザーの環境でルールをテストして、想定どおりに機能していることを確認します。

Planning と使用するための Business Rules セキュリティの移行

アップグレードされたアプリケーションで Business Rules を使用していた場合、管理者はビジネス・ルールの起動アクセス権およびそのプロジェクトを、Business Rules から Planning の Calculation Manager ビジネス・ルールに HBRMigrateSecurity.cmd ユーティリティを使用して移行できます。

HBRMigrateSecurity.cmd ユーティリティで次の操作を実行します:

- 特定の Planning アプリケーションのビジネス・ルールに割り当てられている起動アクセス権を上書きします。
- Oracle Hyperion Shared Services Console で特定の Planning アプリケーションに提供されるユーザーおよびグループのアクセス権を移行します。

▶ ビジネス・ルールおよびそのフォルダのアクセス権を移行するには:

1 HBRMigrateSecurity.cmd を実行する前に:

- Business Rules から Calculation Manager にビジネス・ルールを移行したことを確認します。
- ビジネス・ルールを Planning に配置したことを確認します。

2 コマンド・ラインで、planning1 ディレクトリから次のコマンドとそのパラメータを入力し、それぞれをスペースによって区切ります:

```
HBRMigrateSecurity.cmd [-f:passwordFile] /A:appname /U:admin /  
F:output file
```

表 28 HBRMigrateSecurity のパラメータ

パラメータ	目的	必須?
[-f:passwordFile]	オプション: 暗号化されたパスワードを設定する場合、passwordFile で指定されたファイルのフル・パスおよび名前からパスワードを読み取るため、コマンド・ラインでの最初のパラメータとして使用します。	いいえ
/A: appname	ビジネス・ルールの起動アクセス権を移行する Planning アプリケーションを指定します。	はい

パラメータ	目的	必須?
/U: admin	管理者のユーザー名を指定します	はい
/F: output file	XML 出力ファイルの名前を指定します。ファイルが planning1 ディレクトリにない場合は、フル・パスを指定します。このファイルにはトランザクションのログが含まれ、トラブルシューティングに役立ちます。	はい
/?	HBRMigrateSecurity.cmd の構文とオプションを印刷します	いいえ

3 プロンプト表示があればパスワードを入力します。

例:

```
HBRMigrateSecurity.cmd /A:appname /U:admin /F:C:\temp
\HBRExportedSecurity.xml
```

Profitability and Cost Management 手動構成タスク

Profitability and Cost Management サンプル・アプリケーションをインストールする場合、まずメンテナンス・リリースのインストールと構成を完了します。次に、EPM System インストーラを再実行し、「製品の選択」パネルの「Profitability and Cost Management セクション」から「Profitability and Cost Management のサンプル」を選択します。

Oracle Web Services Manager と連携するように Profitability and Cost Management を設定するには、Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide を参照してください。

Strategic Finance 手動構成タスク

- リリース 11.1.2.0 または 11.1.2.1 からリリース 11.1.2.3 に移行するメンテナンス・リリースを適用している場合、インストールおよび構成の後、変換ユーティリティを使用して、Strategic Finance データベースを変換する必要があります。Strategic Finance リリース 11.1.2.1.000 のパッチ・セット例外(PSE): 13776302 を参照してください。
- メンテナンス・リリースの構成後、トランザクション・ログを新しい場所に移動します。ログを EPM_ORACLE_HOME/logs/hsf/userlogs から EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/logs/hsf/userlogs にコピーします。

FDM 手動構成タスク

メンテナンス・リリースのインストールおよび構成後、EPM System インストーラによってインストールされた Oracle Database Client のエントリが MIDDLEWARE_HOME/dbclient32 および MIDDLEWARE_HOME/dbclient64 に含まれるように MIDDLEWARE_HOME/user_projects/config/dbclient/tnsnames.ora を更新します。これによってスキーマ更新ユーティリティがデータベースに接続できるようになります。

WebSphere Application Server へのメンテナンス・インストール配置

EPM System コンポーネントをインストールおよび構成した後、次の手順を実行して Java Web アプリケーションを配置します。

▶ WebSphere Application Server に配置するには:

- 1 すべてのデータベースをバックアップしてから、manageprofiles コマンドを使用してプロファイルをバックアップします。
- 2 ノード・マネージャとすべての EPM System サーバーを停止します。
- 3 コマンド・ラインから、EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/deployment に変更して次のスクリプトを実行します:

```
runWASDeployment.bat [sh] -cellName  
EPMSysCell  
-profileName  
EPMSysDMPProfile  
-nodeName  
EPMSysNode  
-customProfile  
EPMSysProfile  
-appNode  
EPMSysAppNode  
-username  
admin  
-password  
password  
-maintenance
```

配置が完了すると、構成完了が表示され、ウィンドウが閉じられます。

- 4 すべての Java Web アプリケーションを起動します。
- 5 /configtool-manual.bat|.sh コマンドで EPM System コンフィグレータを再度起動し、Foundation の「Web サーバーの構成」タスクを選択します。
- 6 IBM HTTP Server の構成手順を実行します。

[188 ページの「IBM HTTP Server の構成」](#)を参照してください。

配置の検証および配置レポートの生成

配置を検証します。検証レポートにエラーが表示されなければ、配置レポートを生成します。

▶ 配置を検証し、配置レポートを生成するには:

- 1 「スタート」メニューから、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「インスタンス名」、「Foundation Services」、「EPM System 診断」の順に選択します。

- 2 結果を表示するには、EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/reports に移動して、validation_report_date_time.html を開きます。
- 3 エラーを解決してから、レポートを再実行します。
エラーの解決については、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide を参照してください。
- 4 分散環境では、配置内の各マシン上で EPM System 診断を実行します。
- 5 配置レポートを生成します:
 1. コマンドライン・ウィンドウを開き、EPM_ORACLE_INSTANCE/bin に移動します。
 2. コマンド epmsys_registry.bat|.sh report deployment を実行します。
デフォルトでは、レポートは EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/reports/deployment_report.html として保存されます。

EPM System クライアントのメンテナンス・リリースのインストールの実行

クライアントをリリース 11.1.2.3 に移行するためにメンテナンス・リリースを適用する場合は、旧リリースをアンインストールしてから新しいリリースをインストールする必要があります。Financial Reporting Studio には、追加の前提条件があります。210 ページの「[Financial Reporting のメンテナンス・リリース・インストールの前提条件](#)」を参照してください。

リリース 11.1.2.3 の新しいクライアント・インストーラのあるクライアントは、EPM System インストーラでメンテナンス・リリース・インストール・オプションを適用しても、クライアント・ソフトウェアは更新されません。クライアント・インストーラを使用してクライアントをインストールする必要があります。

クライアント・インストーラの詳細は、97 ページの「[EPM System クライアントのインストール](#)」を参照してください。

この章の内容

アップグレードについて.....	226
アップグレード・チェックリスト.....	228
アップグレード・インストールの前提条件.....	230
インストール用ファイルのダウンロードおよび準備.....	232
アップグレードのためのデータの準備.....	233
EPM System サービスの停止.....	247
EPM System 製品の前のリリースのアンインストール.....	247
アップグレード用の EPM System 製品のインストール.....	247
アップグレード時の EPM System 製品の構成.....	248
EPM System サービスの起動.....	256
インストールの検証.....	256
手動構成タスクの実行.....	257
再ホスティングされた環境への参照の更新.....	257
前のリリースから現在のリリースへのアプリケーションのアップグレード.....	274
アップグレードでの手動構成タスクの実行.....	275
Smart View のアップグレード.....	286
複数のリリースを含む環境からのアップグレード.....	286
アプリケーションのアップグレード・プロセスの繰返し.....	288

この章では、EPM System 製品のアップグレード手順を説明します。EPM System 製品をリリース 11.1.2.3 にアップグレードするには、リリース 11.1.2.3 のソフトウェアを新規の場所にインストールし、アプリケーションおよびデータを新規の配置に移動します。

注： アップグレードは、リリース 11.1.2.0、11.1.2.1 または 11.1.2.2 から 11.1.2.3 への移行には適用されません。かわりに、EPM System インストーラの「メンテナンス・リリースの適用」オプションを使用してください。204 ページの「メンテナンス・リリースのインストール・チェックリスト」を参照してください。メンテナンス・リリースを適用する場合、この章で説明するアップグレード手順に従う必要はありません。

注： Windows インストーラを使用して以前のリリースでクライアントをインストールした場合は、以前のリリースのクライアントをアンインストールする必要はありません。EPM System インストーラを使用して以前のリリースのクライアントをインストールした場合は、Windows インストーラを使用して新規バージョンのクライアントをインストールする前に、クライアントをアンインストールする必要があります。構成は必要ありません。Financial Reporting Studio の前のリリースがある場合、追加要件は、[210 ページの「Financial Reporting のメンテナンス・リリース・インストールの前提条件」](#)を参照してください。

アップグレードについて

EPM System 製品を使用する場合、アップグレードという用語は、新規のソフトウェア・リリースを配置し、以前の配置から新規の配置にアプリケーション、データおよびプロビジョニング情報を移動することと定義されます。

アップグレード・プロセスを必要に応じて繰り返し、以前のリリースから最新のデータを取得します。[288 ページの「アプリケーションのアップグレード・プロセスの繰り返し」](#)を参照してください。

EPM System 製品をリリース 11.1.2.3 にアップグレードするには、リリース 11.1.2.3 のソフトウェアを新規の場所にインストールおよび構成し、アプリケーションおよびデータを新規の配置環境に移動します。サポートされているシナリオは次の 2 つです。

- EPM System を新しいマシン(1 つまたは複数)にインストールします。既存のデータベースおよびデータを再使用するか、データベースおよびデータを新しいマシンに複製できます。

新しいマシンにアップグレードする場合、同じオペレーティング・システムのものにアップグレードする必要があります。たとえば、前のリリースが Windows オペレーティング・システムだった場合、Windows オペレーティング・システムにアップグレードする必要があります。前のリリースが Linux オペレーティング・システムだった場合、Linux オペレーティング・システムにアップグレードする必要があります。オペレーティング・システムの制約の範囲内であれば、オペレーティング・システムのバージョンおよびエディション間の切り替えは、32 ビットと 64 ビットのバリエーションと同様に可能です。たとえば、32 ビット Windows 2003 から 64 ビット Windows 2008R2 にアップグレードできます。

- EPM System を既存のマシン(1 つまたは複数)にインストールします(新しい場所にインストールすることをお勧めします)。既存のデータベースおよびデータを再使用するか、データベースおよびデータを新しいマシンに複製できます。

注意 前のリリースの環境を維持するには、新しいマシンにインストールし、データを複製する必要があります。

アップグレードに関連するログは、EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/logs/upgrades にあります。アップグレード中のロギングの詳細は、Oracle Enterprise

サポートされるアップグレード・パス

EPM System は、次のリリースからリリース 11.1.2.3 にアップグレードできます:

表 29 サポートされるアップグレード・パス

アップグレード・パスのリリース: 元	リリース 11.1.2.3 へ
11.1.2.x	11.1.2.3 リリース 11.1.2.x からリリース 11.1.2.3 に移行する場合、ドキュメントのアップグレード手順には従わず、EPM System インストーラの「メンテナンス・リリースの適用」オプションを使用することに注意してください。 注: Financial Close Management の場合、リリース 11.1.2.1 および 11.1.2.2 からのメンテナンス・リリースの適用のみがサポートされています。
11.1.1.4.x	リリース 11.1.2.3 へのアップグレード
リリース 11.1.1.0.x から 11.1.1.3.x	リリース 11.1.1.4 にメンテナンス・リリースを適用してから、リリース 11.1.2.3 にアップグレードします。
9.3.3.x	リリース 11.1.2.2 にアップグレードしてから、リリース 11.1.2.3 にメンテナンス・リリースを適用します。
複数のリリースが含まれている環境。1 つの Shared Services のインスタンスが含まれている環境、または 2 つの Shared Services のインスタンスが含まれている環境も該当します。	286 ページの「複数のリリースを含む環境からのアップグレード」 を参照してください。

注意: リリース 9.2.0.3+、9.3.0.x、9.3.1.x (Oracle Essbase 9.3.1.4.1、9.3.1.5、9.3.1.6、9.3.1.7 を除く) または 11.1.1.x から始める場合、まずリリース 11.1.1.3 にアップグレードしてから、リリース 11.1.1.4 にメンテナンス・リリースを適用し、リリース 11.1.2.3 にアップグレードすることをお勧めします。前のリリースから開始する場合、開始するリリースからのアップグレードを直接サポートしている最高レベルのリリースにアップグレードすることをお勧めします。Essbase と Shared Services 間のセキュリティの同期は、Essbase リリース 9.3 (リリース 9.3.1.4.1 から開始) で削除されました。ただし、Essbase と Oracle Hyperion Shared Services リリース 11.1.1.3 の間では、現在もセキュリティ情報が同期化されます。このため、Oracle Essbase リリース 9.3.1.4.1、9.3.1.5、9.3.1.6 または 9.3.1.7 を使用している場合、まずリリース 9.3.3 にすべての製品をアップグレードしてから、リリース 11.1.2.2 にアップグレードし、リリース 11.1.2.3 にメンテナンス・リリースを適用することをお勧めします。

アップグレード・チェックリスト

次の表に、EPM System 製品をアップグレードするために実行するハイレベルのタスクを示します。タスクはこの順序で実行する必要があり、チェックリスト全体を完了する必要があります。

この章で説明されている手順は、製品を1つずつアップグレードすることを前提としており、順序が決まっている箇所は明示されています。

注： 複数のリリースが含まれる環境からアップグレードする場合は、286 ページの「複数のリリースを含む環境からのアップグレード」を参照してください。

表 30 アップグレード・チェックリスト

タスク	参照	完了時に確認
次の項に示すタスクを、すべての EPM System 製品に対して 1 回実行します。		
アップグレードの準備		
1. このリリースの互換性、システム要件、およびその他の前提条件を確認します。 データベース環境がアップグレードを必要とする場合、次に進む前にデータベースのアップグレードを実行します。詳細はデータベースのドキュメントを参照してください。	<ul style="list-style-type: none"> Oracle Enterprise Performance Management System Certification Matrix(http://www.oracle.com/technetwork/middleware/ias/downloads/fusion-certification-100350.html) 	
2. 新しいリリース 11.1.2.3 インストールのための新しい環境を準備します。 注： Shared Services データを格納するための新しいデータベースを作成します。(ただし、リリース 11.1.1.4 からのアップグレードですべての製品に 1 つのデータベース・リポジトリを使用していた場合、Shared Services 用に新しいデータベースを作成する必要はありません。Shared Services のテーブルは、構成中に削除されます。) ヒント： 新しいインストールの準備の際、ワークシートを使用して、前のリリースの製品がインストールされていたマシン、および新しいリリースの製品をインストールするマシンを記録できます。この情報の詳細は後の手順で説明します。	<ul style="list-style-type: none"> 第 3 章「環境の準備」 	
3. 事前に必要なアップグレード固有のタスクを実行します。	230 ページの「アップグレード・インストールの前提条件」	
4. インストール・ファイルをダウンロードし、準備します。	232 ページの「インストール用ファイルのダウンロードおよび準備」	
5. アップグレード用にデータを準備します。	233 ページの「アップグレードのためのデータの準備」	
6. 同じマシンにアップグレードしている場合、EPM System サービスを停止します。	247 ページの「EPM System サービスの停止」	

タスク	参照	完了時に確認
<p>7. EPM System 製品の前のリリースをアンインストールします。</p> <p>同じマシンでアップグレードする場合は、アンインストールすることをお勧めします。</p>	<p>247 ページの「EPM System 製品の前のリリースのアンインストール」</p>	

各製品の次のチェックリスト項目を、一度に 1 製品ずつ、次の順序で繰り返します:

- Foundation Services。
- Essbase サーバー、および他のすべての Essbase 製品。他の Essbase 製品を構成した後、Web サーバーも構成する必要があります。構成した後、Web サーバーと EPM Workspace を再起動します。
- すべてのその他の EPM System 製品。順序は問いません。各製品を構成した後、Web サーバーも構成する必要があります。構成した後、Web サーバーと EPM Workspace を再起動します。

ヒント: 各手順が完了したら、正しい順序でアップグレード手順を実行できるように、このチェックリストに戻ることをお勧めします。

インストールおよび構成

<p>8. 新しいインストール場所に EPM System 製品をインストールします(「新規インストール」オプションを選択)。</p> <p>ヒント: インストール後、My Oracle Support(https://support.oracle.com/oip/faces/secure/km/DocumentDisplay.jspx?id=1292603.1)の EPM System 問題修正ファインダを使用して、環境に必要なパッチがあるかどうかを決定します。必要に応じて、インストール後にパッチを適用します。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● アップグレード時のインストール固有の情報は247 ページの「アップグレード用の EPM System 製品のインストール」を参照してください。 ● インストールに関する一般的な情報は、第 5 章「新しい配置での EPM System 製品のインストール」を参照してください。 	
<p>9. リリース 11.1.2.3 製品を構成します。</p> <p>Foundation Services を最初に構成する必要があります。他の製品を正しく構成するために、Foundation Services をインストールして構成する必要があります。</p> <p>注意 Web サーバーをすでに構成済で追加の製品を配置する場合は、EPM System コンフィグレータを再度実行し、Foundation Services の「Web サーバーの構成」タスクを選択する必要があります。その後、Web サーバーおよび EPM Workspace を再起動します。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● アップグレード時の構成固有の情報は 248 ページの「アップグレード時の EPM System 製品の構成」を参照してください。 	
<p>10. EPM System サービスを起動します。</p>	<p>第 12 章「EPM System 製品の開始と停止」</p>	

インストールの検証

<p>11. EPM System 診断を使用して、インストールを検証します。</p>	<p>第 13 章「インストールの検証と配置の確認」</p>	
---	--------------------------------	--

構成後のタスクの実行

<p>12. 製品固有の手動構成タスクを完了します。</p>	<p>第 9 章「新しい配置での手動構成タスクの実行」</p>	
<p>13. 製品が新しいサーバーに再ホスティングされた場合、データ・ソース接続の構成などの更新を行います。</p>	<p>257 ページの「再ホスティングされた環境への参照の更新」</p>	

タスク	参照	完了時に確認
<p>14. 次の製品のアプリケーションを前のリリースから現在のリリースにアップグレードします:</p> <ul style="list-style-type: none"> FDM <p>Planning アプリケーションはアップグレード・ウィザードを使用してアップグレードされ、ウィザードには再ホスティングの手順も含まれています。その他のアプリケーションは構成中にアップグレードされます。</p>	<p>274 ページの「前のリリースから現在のリリースへのアプリケーションのアップグレード」</p>	
<p>15. アップグレードした製品に対し、製品固有のアップグレード・タスクを実行します。</p>	<p>275 ページの「アップグレードでの手動構成タスクの実行」</p>	

アップグレード・インストールの前提条件

サブトピック

- 前のリリースのバックアップ
- 製品固有のアップグレード前提条件の実行
- [Business Rules メンテナンス・リリースおよびアップグレード・インストールの前提条件](#)

前のリリースのバックアップ

アップグレードを続ける前に、データベース、アプリケーションおよびその他のファイルを含む前のリリースの情報を必ずバックアップしてください。リリース 11.1.1.4 製品の手順については、Oracle Enterprise Performance Management System Backup and Recovery Guide を参照してください。

製品固有のアップグレード前提条件の実行

製品固有の次の要件が満たされていることを確認します:

- リリース 11.1.1.4 からのアップグレード中で、NTLM を外部ユーザー・ディレクトリとして Shared Services が構成されている場合は、アップグレード前にユーザーを移行する必要があります。

11.1.1.4 では、別のユーザー・ディレクトリ(通常、Active Directory)に NTLM ユーザーを移行します。また、構成されたユーザー・ディレクトリのリストから NTLM を削除します。詳細な手順は、リリース 11.1.1.4 の Oracle Enterprise Performance Management System Security Configuration Guide を参照してください。
- Business Rules を使用している場合、リリース 11.1.2.3 の Calculation Manager ルールに移行する必要があります。アップグレードする前に前提条件の手順を実行する必要があります。231 ページの「[Business Rules メンテナンス・リリースおよびアップグレード・インストールの前提条件](#)」を参照してください。

- Financial Reporting の場合、ソース・マシンとターゲット・マシンのどちらも Windows サーバー・マシンの場合、ソースとターゲットの両方のマシンで SMB 2.0 プロトコルが無効になっていること確認してから、アップグレードを実行してください。
- FDMEE に関しては、リリース 11.1.1.4 で実行されていなかったすべてのデータ・ルールに対し、シナリオ次元のデフォルト値を指定します。デフォルト値を指定していない場合、新しいリリースではこれらのルールにアクセスできません。リリース 11.1.1.4 の Performance Management Architect Essbase アプリケーションを使用している場合、データ・ロードの実行に進む前に「ターゲット・アプリケーション」の「メタデータのリフレッシュ」を使用します。
- FDM のために、Financial Management、Essbase、Planning または Hyperion Enterprise をターゲット・システムとして使用する場合、ターゲット・システム・クライアントを FDM と同じサーバーにインストールする必要があります。
- FDM を使用し、IIS をホスト EPM Workspace への Web サーバーとして使用する場合は、FDM Web アプリケーションと EPM Workspace Java Web アプリケーションを同じボックスにインストールする必要があります。

この手順が終了したら、[228 ページの「アップグレード・チェックリスト」](#)に戻ります。

Business Rules メンテナンス・リリースおよびアップグレード・インストールの前提条件

メンテナンス・リリースを適用してリリース 11.1.2.0 またはリリース 11.1.2.1 からリリース 11.1.2.3 に移行する場合、または旧リリースからアップグレードする場合に、旧リリースの Business Rules を使用しているときは、リリース 11.1.2.3 の Calculation Manager ルールに移行する必要があります。ビジネス・ルールを移行する前に、前提条件タスクを実行する必要があります。

リリース 11.1.2.2 からメンテナンス・インストールを適用する場合は、この手順をスキップできます。

- ▶ Business Rules の移行を準備するには、リリース 11.1.2.3 をインストールする前に現在の Business Rules 環境で次のタスクを実行します:
 - 1 Business Rules では、ルール・エディタ内で、各ビジネス・ルールから関連するアウトライン(設計時の場所)を削除します。これを実行した後、「関連付けるアウトライン」ドロップダウン・リストにテキスト「アウトラインの選択」が表示されます。
 - 2 ルール・エディタの「場所」タブで、各ビジネス・ルールに有効な起動場所があることを確認します。これは絶対位置である必要があります。"すべての場所"が Business Rules で有効でも、ビジネス・ルールを移行する場合、特定の起動場所の詳細(つまり、アプリケーション・タイプ - Planning または Essbase、サーバー名、アプリケーション名およびデータベースまたはプラン・タイプ)を指定する必要があります。1 つのビジネス・ルールを複数の起動場所で有効にする場合でも、各場所に対して詳細を指定する必要があります。場所は異なるアプリケーションに

ある必要があります。同じビジネス・ルールを Calculation Manager 内の同じアプリケーションの異なるプラン・タイプに移行できません。

ルールがシーケンスの一部である場合、シーケンス内のルールの起動場所をルールの「場所」タブに示されている起動場所のいずれかにする必要があります。

- 3 ルール・エディタの「アクセス権限」タブで、各ビジネス・ルールにすべての場所ではなく特定の場所に定義されたセキュリティがあることを確認します。1つのビジネス・ルールに対して、その「場所」タブで複数の場所が定義されている場合、場所ごとに個々にセキュリティを追加する必要があります。
- 4 移行が完了するまで、Calculation Manager のルールを変更しないでください。
- 5 Planning とともに Business Rules を使用している場合、ルールのバックアップを作成します。Administration Services を使用して、ルールを Business Rules 形式で XML にエクスポートします。11.1.1.4 からアップグレードする場合は、Calculation Manager 形式にもルールをエクスポートします。EPM System コンフィグレータは、アプリケーションのアップグレード中に使用するデータベース構成中のルールをエクスポートします。
- 6 Essbase のみの Business Rules ユーザーの場合、ビジネス・ルールをエクスポートする必要があります。Business Rules から Essbase ルールをエクスポートするには:
 1. Administration Services コンソールで、「ビジネス・ルール」ノードを右クリックして「エクスポート」を選択します。
 2. Business Rules 形式のルールをエクスポートし、リポジトリのすべての Essbase ルールを選択します。11.1.1.4 からアップグレードする場合は、Calculation Manager 形式にもルールをエクスポートします。
 3. XML ファイルを保存する場所を指定し、「OK」をクリックします。アップグレードしている場合、場所は、アップグレードした環境からアクセス可能な共有ドライブにする必要があります。

場所をメモしておいてください。このファイルは、後のプロセスでインポートします。

EPM System コンフィグレータでの構成中に、「データベースの構成」タスクを実行すると、ルールが移行用に準備されます。

構成後、ビジネス・ルールのインポートおよび移行のために実行する追加のタスクがあります。

インストール用ファイルのダウンロードおよび準備

リリース 11.1.2.3 のファイルをダウンロードし、zip ファイルの内容を展開します。[第4章「インストール用ファイルのダウンロード」](#)を参照してください。

この手順が終了したら、[228 ページの「アップグレード・チェックリスト」](#)に戻ります。

アップグレードのためのデータの準備

サブトピック

- [前のリリースの Shared Services データのエクスポート](#)
- [Financial Management および Strategic Finance データの旧リリースからのエクスポート](#)
- [構成中の一時使用のためのファイルのコピー](#)
- [データの複製](#)
- [データベースの複製](#)

前のリリースの Shared Services データのエクスポート

前のリリースの Shared Services のデータを使用するには、ユーティリティを使用してデータをエクスポートし、新しいインストールをホストしているマシンにエクスポートされたファイルをコピーします。構成中に、EPM System コンフィグレータによって現在のリリースで必要なデータが抽出されます。

注： この手順を実行する前に、データベース、Shared Services および OpenLDAP が実行中である必要があります。

注： Shared Services データを移行する前に、管理ユーザーが Essbase サーバーにプロビジョニングされていることを確認します。アップグレードの完了後に、このプロビジョニングを削除できます。

▶ 前のリリースから Shared Services データをエクスポートするには:

- 1 まだ準備していなければ、リリース 11.1.2.3 のファイルをダウンロードし、System インストーラ ZIP ファイルを展開します。

System インストーラ ZIP ファイル(Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemインストーラ, Fusion Editionリリース11.1.2.3 for プラットフォーム名)をまだダウンロードしていない場合は、Oracle Software Delivery Cloud からダウンロードします。第4章「インストール用ファイルのダウンロード」を参照してください。

ヒント： 7-Zip など、長いパス名を処理できる zip ファイルの解凍プログラムを使用します。

- 2 SystemInstallerExtractLocation/Migrate ディレクトリ内の HSSMigrate.zip を探し、内容を Shared Services の前のリリースをホストしているマシンの HYPERION_HOME ディレクトリに展開します。
- 3 コマンド・ラインから、HYPERION_HOME/Migrate ディレクトリの次のスクリプトを実行します:

```
hssmigrate.bat|sh
```

ユーティリティによって Shared Services 構成ファイルが検出され、確認のプロンプトが表示されます。

ヒント: UNIX 上のリリース 11.1.1.4 からの Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System Lifecycle Management データのエクスポートが成功したことを確認するには、\$home/にある set_hyphome_servername_1.sh に、実行可能権限を設定します。

- 4 プロンプトが表示されたら、ユーティリティが Shared Services 構成ファイルを展開する場所を確認します。パスが正しければ[Enter]キーを押します。パスが正しくなければ 2 を入力し、正しいパスを指定して[Enter]を押します。

ヒント: 入力するパスは、CSS.xml、Domain.xml および WorkflowEngine.properties ファイルのパス(例: HYPERION_HOME/AppServer/InstalledApps/WebServerName/WebServerVersion)である必要があります。

ユーティリティにより、ファイル hssmigratedata.zip が HYPERION_HOME/migrate に作成されます。ここに Shared Services のデータが保管されます。

ヒント: ユーティリティによってエラーが返された場合、HYPERION_HOME/migrate/logs のログを確認し、エラーを修正してユーティリティを再実行し、既存のファイルに置き換わる新しい ZIP ファイルを生成します。

- 5 hssmigratedata.zip を、HYPERION_HOME/migrate から Shared Services の新しいリリースをホストするマシンにコピーするか、またはファイルを共有ドライブ上で使用できるようにします。(同じマシンにインストールする場合、場所が HYPERION_HOME の外であることを確認してください。)

場所は構成中に指定します。

- 6 一部の製品の分散インストールでは、Shared Services をホストしているマシン以外のマシンに製品をインストールする場合、hssmigratedata.zip を各マシンにコピーします。

この手順は、Essbase Studio、Web Analysis および Performance Scorecard に必要です。

MIDDLEWARE_HOME ディレクトリが存在しない場合は作成します。インストール時に、この MIDDLEWARE_HOME を指定する必要があります。

Shared Services のデータ・インポート中の処理の詳細は、255 ページの「[Shared Services のデータ・インポート中の処理](#)」を参照してください。

Financial Management および Strategic Finance データの旧リリースからのエクスポート

Financial Management の場合、以前に権限を保有していたグループのアプリケーション作成者および Financial Management 管理者の役割のプロビジョニングを準備する必要があります。プロビジョニング情報をエクスポートすると、後のアップグレード・プロセスのデータベース構成時に、プロビジョニングが自動的に実行されます。

前のリリースで Strategic Finance ファイルをカスタマイズした場合、ユーティリティを使用してデータをエクスポートしてから、生成されたファイルを、新しいインストールをホストするマシンにコピーします。これらのファイルがカスタマイズされている場合のみ、この手順が必要になります。ファイルをカスタマイズしていない場合はこの手順をスキップできます。リリース 11.1.2.3 によってインストールされるベース・ファイルを使用します。

- .coa: アカウント・ファイルのチャート
- .drs: デフォルトのレポート仕様ファイル
- .alc: alcar ファイル
- .alt: alcar テンプレート
- currencies_user.xml
- convert.idx

▶ 前のリリースから Financial Management および Strategic Finance データをエクスポートするには:

- 1 まだ準備していなければ、リリース 11.1.2.3 のファイルをダウンロードし、Financial Management および Strategic Finance をホストしているマシンに、System インストーラ ZIP ファイルの内容を展開します。

System インストーラ ZIP ファイル(Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Systemインストーラ, Fusion Editionリリース11.1.2.3 for プラットフォーム名)をまだダウンロードしていない場合は、Oracle Software Delivery Cloud からダウンロードします。第4章「インストール用ファイルのダウンロード」を参照してください。

ヒント: 7-Zip など、長いパス名を処理できる zip ファイルの解凍プログラムを使用します。

- 2 SystemInstallerExtractLocation/Migration ディレクトリ内の HSSMigrate.zip を探し、内容を Financial Management および Strategic Finance の前のリリースをホストしているすべてのマシンの HYPERION_HOME ディレクトリに展開します。

- 3 Financial Management をホストしているマシンで、次の手順を実行します:

1. コマンド・ラインから、HYPERION_HOME/Migrate ディレクトリの次のスクリプトを実行します:

hfmigrate.bat

ユーティリティでは Financial Management ファイルが検索され、zip ファイルが HYPERION_HOME/migrate/temp/HFM 内の内容とともに生成されます。

2. HYPERION_HOME/migrate/temp/HFM フォルダの内容の zip ファイルを作成します。
3. その zip ファイルを、Financial Management の新リリースをホストする予定のマシンにコピーしてから、MIDDLEWARE_HOME/EPMDData 内で解凍します

4 Strategic Finance をホストしているマシンで、次の手順を実行します:

1. コマンド・ラインから、HYPERION_HOME/Migrate ディレクトリの次のスクリプトを実行します:

hsfmigrate.bat

ユーティリティでは Strategic Finance ファイルが検索され、zip ファイルが HYPERION_HOME/migrate/temp/HSF 内の内容とともに生成されます。

2. HYPERION_HOME/migrate/temp/HFM フォルダの内容の zip ファイルを作成します。
3. その zip ファイルを、Strategic Finance の新リリースをホストする予定のマシンにコピーしてから、MIDDLEWARE_HOME/EPMDData 内で解凍します

構成中の一時使用のためのファイルのコピー

Provider Services または Administration Services をアップグレードする際、EPM System の前のリリースの一部のファイルが、新しいリリースの構成中に必要になります。これらのファイルを、共有ドライブに置くか、前のリリースのインストールから新しいインストールをホストするマシンにコピーし、EPM System コンフィグレータによる構成中に使用できるようにする必要があります。

EPM System コンフィグレータによる構成中に、このデータは Shared Services レジストリに移動され、ファイルは使用されなくなります。

▶ 構成に必要なファイルをコピーするには:

- 1 新しいリリースをホストするマシンに、前のリリースのファイルを保存する一時的な場所を準備します。

構成中に、これらのファイルの場所を指定します。デフォルトでは、EPM System コンフィグレータは MIDDLEWARE_HOME/EPMDData でデータを検索します。

- 2 次のファイルを、前のリリースのインストールから、先ほど作成したディレクトリにコピーします:

表 31 構成中の一時使用のためのファイル

製品	一時的に使用するためにコピーするファイル
Provider Services	<p>次の 3 つの Provider Services ファイルを、サブフォルダのない単一フォルダ(EPMData/aps など)にコピーします:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● <code>essbase.properties</code> を <code>HYPERION_HOME/products/Essbase/aps/bin</code> から ● <code>datasources.xml</code> を <code>HYPERION_HOME/products/Essbase/aps/bin</code> から ● <code>domain.db</code> を <code>HYPERION_HOME/products/Essbase/aps/data</code> から <p>さらに、<code>HYPERION_HOME/products/Essbase/aps/data/cubeviews</code> にあるスマート・スライス定義をコピーします。cubeviews ディレクトリ構造全体をコピーします。</p>
Administration Services	<ul style="list-style-type: none"> ● <code>HYPERION_HOME/products/Essbase/eas/storage</code> にあるストレージ・ディレクトリ構造全体をコピーします。
Reporting and Analysis	<p><code>HYPERION_HOME/common/workspacert/9.5.0.0/common/config/dynamic/UUID</code> 内にある <code>server.xml</code>。UUID は、フォルダの動的 ID です。</p> <p>UUID フォルダが複数ある場合は、<code>irdas_default.txt</code> が含まれるフォルダから <code>server.xml</code> を取得します。</p> <p>データの複製先の場所を記録しておきます。Interactive Reporting の構成後のタスク中に、DAS データ・ソースをインポートする際にこのファイルの場所を指定します。</p>

データの複製

EPM System リリース 11.1.2.3 にアップグレードする場合、前のリリースのデータを次のいずれかの方法で使用します:

- データを新しいマシンに複製し、新しいインストール環境からアクセス可能にします。たとえば、前のリリース環境を維持したい場合はこのオプションを使用します。

EPM System コンフィグレータによる製品の構成中、製品データ・ディレクトリの場所を構成する際に新しい複製したデータの場所を指定します。

注: データを複製することをお勧めします。

- データを既存のマシンに残し、ドライブを共有可能にできます。データを既存のマシンに残す場合、この項の手順をスキップできます。EPM System コンフィグレータによる製品の構成中に、既存のデータの場所を指定します。前のリリース環境を維持する必要がない場合のみ、このオプションを選択できます。

注: Essbase では、サポートされたタイプの共有ドライブ(SAN ドライブなど)にデータがある場合のみ、このオプションを選択できます。

▶ 製品データ・ファイルを複製するには:

- 1 新しいリリースのデータをホストする共有ドライブまたはマシンに、複製した製品データを保存するディレクトリを作成します。

ヒント: この場所はリリース 11.1.2.3 のデータ保存場所となるため、データを重要な、恒久的な場所に保存してください。製品ごとに場所を指定することも可能です。たとえば EPMData/productName のようにします。EPM_ORACLE_INSTANCE として使用するディレクトリ(デフォルト・インストールでは Oracle/Middleware/user_projects/epmsystem1)にデータを格納しないでください。(EPM_ORACLE_INSTANCE は空のディレクトリにする必要があります。)

2 各 EPM System コンポーネントについて、次の表で説明されているようにデータを複製します。

アップグレード中の構成の際、EPM System コンフィグレータによってデータの場所の入力を求められます。

表 32 アップグレード時に複製するデータ

製品	複製するデータ
Essbase	<p>Essbase では、データの複製に役立つツールが提供されます。239 ページの「アップグレードのための Essbase データの準備」を参照してください。さらに、次のことに注意してください:</p> <p>Essbase のこのリリースを新しいマシンにインストールする場合、前のリリースのインストールをホストしているマシンから次の追加データを収集します:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 新しいマシンで再定義できるよう、マシンに定義されている ODBC DSN のリストを作成します。この手順を Essbase および Integration Services について実行します。 ● マシンに設定されている JAVA オプション(ESS_JVM_OPTIONn)のリストを作成し、新しいマシンでそれらを再定義できるようにします。 <p>注: ARBORPATH の UNC パスを指定できます。UNC パスを使用する場合、テーブル・スペースおよびディスク・ボリュームも UNC 形式にする必要があります。</p>
Essbase Studio	<p>データ・ソースとして使用されているテキスト・ファイル。これらのファイルは、デフォルトで HYPERION_HOME/products/Essbase/EssbaseStudio/Server/datafiles に保存されています。</p> <p>注: データの複製先の場所を記録しておきます。EPM System コンフィグレータでの構成中、「サンプルおよび顧客データ・ソースのテキスト・ファイルの Essbase Studio の場所の構成」の構成ページでこの場所を入力します。</p>
Administration Services	<p>次のファイルを、リリース 11.1.1.4 インストールをホストしているマシンから EAS_HOME/server/lib/cryptix32.jar のデータ・ストレージの場所にコピーします。</p>
Reporting and Analysis	<p>データ・ファイル。</p> <p>これらのファイルは、デフォルトで HYPERION_HOME/products/Foundation/workspace/data/RM1_servername に保存されています。</p> <p>注: データの複製先の場所を記録しておきます。EPM System コンフィグレータによる構成中に、「Reporting and Analysis Framework サービス」構成ページで、「リポジトリ・ディレクトリ」にこの場所を入力します。</p>
Performance Scorecard	<p>添付ファイルおよびノート・ファイル。</p> <p>これらのファイルは、デフォルトで HYPERION_HOME/deployments/WEB_SERVER/webappsconfの/attachments および/notes ディレクトリに保存されています。</p> <p>注: データの複製先の場所を記録しておきます。EPM System コンフィグレータによる構成中に、「Performance Scorecard」構成ページで、「Performance Scorecard ファイルを保管するディレクトリを指定してください」にこの場所を入力します。</p>

製品	複製するデータ
Strategic Finance	<p>データ・ファイル。</p> <p>これらのファイルは、デフォルトで <code>HYPERION_HOME/products/hsf/HSFData</code> に保存されています。</p> <p>注： データ・ファイルの複製先の場所を記録しておきます。EPM System コンフィグレータによる構成中に、「Strategic Finance」構成ページでこの場所を入力します。</p>
FDM	<p>データ・ファイル。アプリケーションごとに、データ・ディレクトリ構造全体をコピーします。ソース・アプリケーション・データの場所を調べるには: Workbench クライアントから、「アプリケーションの追加」を選択してアプリケーションを選択し、「変更」をクリックしてデータの場所を記録します。各アプリケーションについて繰り返します。</p> <p>新しいマシンの FDM データ・ディレクトリは、UNC 共有であり、FDM を構成するのに使用される DCOM ユーザーに使用可能である必要があります。新しい環境からアクセスできない場合、このディレクトリ構造を新しい環境に複製する必要があります。</p> <p>注： FDM データ・ディレクトリの複製先の場所を記録しておきます。FDM の構成中に、各アプリケーションに対して、新しいデータ・ディレクトリを指定します。</p>

アップグレードのための Essbase データの準備

Essbase ステージング・ツールによって、アップグレードのためのデータの準備を単純化できます。データを複製する必要がある場合、次の手順を使用します。すべてのアプリケーションを複製する必要があります。アップグレードされた環境に一部のアプリケーションを配置したくない場合は、アップグレード・プロセス全体の完了後にそのアプリケーションを削除します。

注意:

- Essbase ステージング・ツールを起動する前に、Essbase サーバーを実行している必要があります。このツールは、必要に応じてサーバーをシャットダウンします。データの整合性を確認するには、ステージング・ツールを起動する前に、ログインを無効にしてアクティブなユーザーがいないことを確認します。
- ステージング・ツールを実行するマシンに `ESSLANG` 環境変数が設定されていない場合、ステージング・ツールによって、`English_UnitedStates.Latin1@Binary` に値が設定されます。ステージング・ツールの `ESSLANG` の値は、Essbase サーバーの `ESSLANG` の値と同じである必要があります。
- 64 ビットの Linux システムでは、ステージング・ツールを実行する前に、64 ビット・バージョンの `libaio` パッケージ・バージョン 0.3.105-2 以降をインストールします。

以前のリリースからアップグレードしており、アプリケーションに 127 個以上のリンク・レポート・オブジェクトがある場合、次の手順を実行して、リンク・レポート・オブジェクトをエクスポートしてから、ステージング・ツールを実行します。

ヒント： アプリケーションにあるリンク・レポート・オブジェクトの数を判別するには、MAXL コマンド `query database DBS-NAME list lro all;` を使用します。たとえば、`MAXL> query database sample.basic list lro all;` のようになります。

▶ リンク・レポート・オブジェクトをエクスポートするには:

- 1 **Essbase の前のリリースをホストしているマシンでは、リンク・レポート・オブジェクトをエクスポートするには、次の MAXL コマンドを使用して、指定したディレクトリに、アプリケーションのリンク・レポート・オブジェクト・データをバックアップします:**

```
EXPORT database
DBS-NAME
LRO to server directory '
directoryName
';
```

例:

```
MAXL> EXPORT database Sample.Basic LRO to server directory 'V1' ;
```

この例では、Sample.Basic LRO データが、ARBORPATH/app にある Sample-Basic-V1 にエクスポートされます。ARBORPATH は、サーバー ARBORPATH です。

- 2 **次の MAXL コマンドを使用して、前のリリースのアプリケーションからリンク・レポート・オブジェクトを削除します:**

```
ALTER database
DBS-NAME
delete LRO all;
```

例:

```
MAXL> ALTER database sample.basic delete LRO all;
```

- 3 次の手順で説明するように、ステージング・ツールを使用して、アプリケーションをリリース 11.1.2.3 に移行します。
- 4 アップグレード・プロセスにおいて、後でリンク・レポート・オブジェクトを手動でインポートする必要があることに注意してください。

ヒント： 前のリリース環境を維持する場合は、アップグレード・プロセスの完了後に、ソース・システムのリンク・レポート・オブジェクトを再インポートします。

- ▶ アップグレードのための Essbase データを準備するには、前のリリースのインストールをホストしているマシンで、次のタスクを実行します:

1 Essbase アプリケーションのデータ検証を実行することをお勧めします:

- Essbase サーバーを開始します。
- MaxL コマンド `alter system resync sss` を使用して、セキュリティ情報を同期します。
- BSO アプリケーションについては、MaxL コマンド `alter database applicationName.databaseName validate using default error_file;` をデータベースに対して使用します。検証がエラーを返す場合、アップグレードを続行する前に、エラーのないバックアップに戻すかエラーを修正します。
- 次の MaxL コマンドを使用して、ユーザーおよびグループ・エラーを検索します:`display group all failed_sss_migration;` および `display user all failed_sss_migration;`。コマンドがエラーを返す場合、続行する前にエラーを解決します。
- Essbase サーバーを停止し、すべてのアプリケーション・ファイル、データベース・ファイルおよびセキュリティ・ファイルをバックアップします。
- Essbase サーバーを再起動し、Administration Services コンソールで、データベースの全体の再構築を実行します。

2 Administration Services を使用し、各アプリケーションのアプリケーション・プロパティを編集して(「一般」、「起動」の順に選択)、「Essbase サーバーの開始時にアプリケーションを開始」が選択されていないことを確認します。

MAXL コマンド `display application all` を使用して、すべてのアプリケーションのこのプロパティを表示して、すべてのアプリケーションで `autostartup` が `FALSE` に設定されていることの確認もできます。(MAXL コマンド `alter application DBSName disable autostartup;` を使用して、必要に応じて各アプリケーションのプロパティをオフにします。)

3 まだ準備していなければ、リリース 11.1.2.3 のファイルをダウンロードし、System インストーラ ZIP ファイルを展開します。

System インストーラ ZIP ファイルをまだダウンロードしていない場合は、Oracle Software Delivery Cloud からダウンロードします。第 4 章「インストール用ファイルのダウンロード」を参照してください。

名前に空白がないディレクトリに、コンテンツを抽出します。

ヒント: 7-Zip など、長いパス名を処理できる zip ファイルの解凍プログラムを使用します。

4 SystemInstallerExtractLocation/Migration ディレクトリ内の EssStagingTool.zip を探し、内容を Essbase の前のリリースをホストしているマシンの空のディレクトリ(EssStagingToolExtractLocation)に展開します。

Windows の場合、アップグレード元のプラットフォームのバージョンのステージング・ツールを使用します。たとえば、32 ビットのマシンから 64 ビットの

マシンにアップグレードする場合、32 ビットのステージング・ツールを使用します。

5 コマンド・ラインから、EssStagingToolExtractLocation ディレクトリの次のスクリプトを実行します:

```
essStage.bat | sh
username
[
agentPort
]
```

username は、管理者である Essbase ユーザーの名前です。agentPort はオプションで、Essbase インスタンスが実行されるポートを指定します。デフォルト値は 1423 です。

6 プロンプトが表示されたら、管理者パスワードを入力します。

ステージング・ツールは、Essbase に対して、定義されたアプリケーションおよびディスク・ボリュームのリストを問い合わせます。ASO アプリケーションの場合、ステージング・ツールは定義されたテーブルスペースのリストを問い合わせます。

7 プロンプトが表示されたら、アップグレードのためのデータを準備する方法のリストを確認し、次の方法から選択します:

- 「ソースとターゲットで同じ名前のディスク・ボリューム、テーブルスペースおよび ARBORPATH」。このオプションが最も高速です。この方法を選択した場合、アップグレードするシステムは、前のリリースと同じディスク・ボリューム、テーブルスペースおよび ARBORPATH を使用する必要があります。
- 「ソースとターゲットで異なる名前のディスク・ボリューム、テーブルスペースまたは ARBORPATH」。この方法を選択した場合、前のリリースのシステムで定義したものは異なるディスク・ボリューム、テーブルスペースまたは ARBORPATH を、アップグレード先のシステムで指定できません。

注： この方法を選択した場合、新しい ARBORPATH の場所を記録しておきます。EPM System コンフィグレータによる構成中に、Essbase 構成ページで、「アプリケーションの場所へのフル・パス(ARBORPATH)」にこの場所を入力します。

- 「データをエクスポートし、ターゲットでディスク・ボリュームまたはテーブルスペースを連結」。この方法は、アップグレード先のシステムでディスク・ボリュームを連結する場合に選択します。この方法では、アップグレードしたシステムに後でインポートできるよう、データをテキスト・ファイルにエクスポートします。この方法は最も時間がかかるため、ディスク・ボリュームを連結する必要がある場合(たとえば、ソース・マシンには c、d および e のドライブが定義されていて、ターゲット・マシンには c ドライブと d ドライブのみがある場合など)にのみ使用します。このオプションでは、エクスポート時にデータ検証が行われます。

- 8 この方法を、すべてのアプリケーションに適用するか、または一部のアプリケーションのみに適用するかを選択します。

すべてのアプリケーションを複製して、`essbase.sec` ファイルの整合性を確認する必要があることに注意してください。一部のアプリケーションのみを選択した場合は、残りすべてのアプリケーションのデータを準備するための2番目の方法を選択する必要があります。

「すべてのアプリケーションを選択」で「はい」を選択した場合、[手順 11](#)に進みます。

- 9 「すべてのアプリケーションを選択」で「いいえ」を選択した場合、データ準備の最初の方法として選択した方法を適用する各アプリケーションの番号を入力します。アプリケーションの選択が終了したら、[Enter]を押します。

- 10 「すべてのアプリケーションを選択」で「いいえ」を選択した場合、残りすべてのアプリケーションに使用するデータ準備の方法を選択します。

「ソースおよびターゲットの同じ名前のディスク・ボリューム、テーブルスペースおよび ARBORPATH」または「ソースおよびターゲットの別の名前のディスク・ボリューム、テーブルスペースまたは ARBORPATH」を選択した場合、ステージング・ツールは、残りのアプリケーションに対して、「データのEXPORTによるターゲットの連結ディスク・ボリュームまたはテーブルスペース」を自動的に選択します。

- 11 選択したデータ準備の方法に応じて、次の手順は異なります:

- 「ソースおよびターゲットの同じ名前のディスク・ボリューム、テーブルスペースおよび ARBORPATH」を選択した場合、「Y」を入力して、データの準備を続行します。

ステージング・ツールは、ファイル転送のための `essbase.cfg`、`essbase.sec`、データおよびアプリケーションを準備します。

- 「ソースおよびターゲットの別の名前のディスク・ボリューム、テーブルスペースまたは ARBORPATH」を選択した場合、次を実行します:

1. アップグレードするマシンの新しい ARBORPATH の場所を指定して、[Enter]を押します。現在のリリースの ARBORPATH が、参照の括弧の中に表示されます。

ヒント: 指定する ARBORPATH は、EPM_ORACLE_INSTANCE として使用するディレクトリ(デフォルト・インストールでは Oracle/Middleware/user_projects/epmsystem1)にすることはできません。(EPM_ORACLE_INSTANCE は空のディレクトリにする必要があります。)

ヒント: ARBORPATH は、アプリケーションの場所です;以前のリリースでは、インストール場所の参照に ARBORPATH を使用していました。現在は、ESSBASEPATH がインストール場所の定義に使用されます。詳細は、Oracle Essbase Database Administrator's Guide の Essbase のファイルの格納方法の理解に関する項を参照してください。

2. プロンプトが表示されたら、アップグレードするマシンの新しいディスク・ボリュームを指定して、[Enter]を押します。現在のリリースのディスク・ボリュームが、参照の括弧の中に表示されます。
3. プロンプトが表示されたら、アップグレードするマシンの新しいデフォルトのテーブルスペースを指定して、[Enter]を押します。現在のリリースのデフォルトのテーブルスペースが、参照の括弧の中に表示されます。(この手順は、ASO アプリケーションのみに適用されます。)
4. 「Y」を入力して、データの準備を続行します。

ステージング・ツールは、ファイル転送のための `essbase.cfg`、`essbase.sec`、データおよびアプリケーションを準備し、必要に応じて、`ARBORPATH`、ディスク・ボリュームおよびテーブルスペースへの内部参照を更新します。後で、アップグレード・プロセスでスクリプト (`editagtsec.msh`) を実行して、移行したアプリケーションの `essbase.sec` のディスク・ボリューム設定を更新する必要があります。

- 「データのエクスポートによるターゲットの連結ディスク・ボリュームまたはテーブルスペース」を選択した場合:
 1. データのエクスポート先のディレクトリを指定し、「Y」を入力して、データの準備を続行します。

ツールは、エクスポートするデータのリストを準備し、指定したエクスポート・ディレクトリにデータをコピーします。ツールでは、`Essbase` をシャットダウンしてから、ファイルをコピーします。`Essbase` をシャットダウンできない場合、`Essbase` をシャットダウンするよう求められます。
 2. `Essbase` をシャットダウンするよう求められた場合、シャットダウンし、[Enter]を押して続行します。

ステージング・ツールは、データ・ファイル、エクスポート済のデータとそれをインポートするスクリプト、およびセキュリティ・ファイルを編集するスクリプトを準備します。

このオプションを使用する場合、プロセス中に後で次の追加タスクを実行する必要があることに注意してください: スクリプト (`editagtsec.msh`) を実行して、移行したアプリケーションの `essbase.sec` のディスク・ボリューム設定を更新する必要があります。スクリプト (`importdata.msh`) を使用して、アップグレード・プロセスにおいて、後で `LRO` およびデータを手動でインポートする必要があります。

ステージング・ツールは、各アプリケーションの処理ステータスを表示します。

ステージング・ツールでサンプル・アプリケーションに「ファイル[%s]を開けません」というエラーが表示された場合、このメッセージを無視できます。EPM System インストーラによって、新しいホスト・マシンにサンプル・アプリケーションがインストールされます。

ステージング・ツールは、指定した ARBORPATH、ディスク・ボリュームの場所およびテーブルスペースの場所に、すべてのファイルおよびディレクトリをコピーすることに注意してください。

12 処理されたファイルを転送する方法を確認し、方法を選択し、「Y」を入力して続行します。

- 「マウント済またはマップ済のファイル・システムにファイルを自動的にコピー」。このオプションを選択した場合、ステージング・ツールによって、各宛先 ARBORPATH、テーブルスペース、ディスク・ボリュームおよびエクスポート・データ・ディレクトリのマウント済ドライブの場所を入力するよう求められます。データ準備の方法で指定した ARBORPATH パスと同じマウント済パスを指定します。テーブルスペースの宛先パスは、データ準備の方法で指定したテーブルスペースにマップする必要があります。ディスク・ボリューム・パスの宛先パスは、ディスク・ボリュームだけでなく完全なパスにマップする必要があります。

既存の空のディレクトリを指定します。

ファイル転送中にエラーが発生した場合、ステージング・ツールは閉じられ、Essbase はシャットダウンされます。

ステージング・ツールでは、ファイル転送指示を含むファイルも準備されます。何らかの理由でコピー処理が失敗した場合、EssStagingToolExtractLocation/work/FileTransferSteps.txt にある指示に従って、Essbase をアップグレードするマシンにデータを手動でコピーします。

- 「ファイル転送指示のリストを取得」。このオプションを選択した場合、ステージング・ツールはデータをエクスポートし、ファイル転送指示を含むファイルを準備します。詳細は EssStagingToolExtractLocation/work/FileTransferSteps.txt を確認し、手順に従って、Essbase をアップグレードするマシンにデータを手動でコピーします。
- 「終了」。アプリケーション・プロセス中に障害またはエラーが発生した場合、ステージング・ツールを終了し、エラーを修正し、ステージング・ツールを再起動できます。

ステージング・ツールで再作成できるように作業ディレクトリを削除します。

ステージング・ツールは、ファイル転送の完了時を記録し、Essbase をシャットダウンします。

13 必要に応じて、ファイルの所有者が Essbase をインストールするユーザーと同じであることを確認するように、ターゲット・マシンのファイルを更新します。

EssStagingToolExtractLocation/work/FileTransferSteps.txt には、更新するファイルのリストが含まれます。

14 (オプション)ステージング・ツールのアクションの詳細は、ログ・ファイル EssStagingToolExtractLocation/essStaging.log を確認してください。

EPM System コンフィグレータによる構成中にこのログを使用して、指定したオプションを通知できます。

ステージング・ツールのエントリでの間違えに気付いた場合は、再実行できます。

15 新しいリリースをホストしているターゲット・マシンで `essbase.cfg` に必須の更新を適用: DISKVOLUMES、SSAUDIT、SSAUDITR および TransactionLogLocation 設定を、新しいディレクトリの場所を反映するように更新します。

注： ステージング・ツールは、トランザクション・ロギングと再実行の機能に関連する ARBORPATH/app/appname/dbname/Replay をコピーします。Essbase の特定のリリースではトランザクション・ロギングと再実行を新たに実装することをお薦めしているため、次に進む前に、アップグレードしたシステムでこれらのファイルを削除することをお薦めします。ベスト・プラクティスとしては、LOGLOCATION と Replay のディレクトリのファイルを定期的にバックアップします。

アップグレード用の Essbase データの準備が完了したら、[237 ページの「データの複製」](#)に戻って他の EPM System 製品のデータをレプリケートします。

データベースの複製

オプションで、データベース全体を新しいマシンに複製します。データベースを複製することをお薦めします。

EPM System コンフィグレーターによるデータベースの構成中、新しい製品のデータベースの場所を指定します。

データベースの複製に関する次の点に注意してください：

- データベースのバージョンがアップグレードを必要とする場合、データを複製する前にデータベースのアップグレードを実行します。
- 前のリリースのインストールを維持するには、データベースを複製する必要があります。
- Shared Services データベースを複製する必要はありません。Shared Services は新しいデータベースを必要とし、前のリリースのデータが構成中にインポートされます。
- Essbase Studio リリース 11.1.1.4 からアップグレードする場合、アップグレード前にデータが有効であることを確認し、確実にアップグレードが成功するようにします。
- Financial Management と MS SQL Server では、既存のデータベースのバックアップを新しい環境に復元する場合、現在のデータベース・ユーザーが、インポートされたデータベース・オブジェクトにアクセスできることを確認します。これは、`master.sp_change_users_login` などのスクリプトを使用して行なえます。

この手順が終了したら、[228 ページの「アップグレード・チェックリスト」](#)に戻ります。

EPM System サービスの停止

リリース 11.1.2.3 を前のリリースのインストールと同じマシンにインストールする場合、すべての EPM System サービスを停止します。サービスの停止方法の詳細は、[第 12 章「EPM System 製品の開始と停止」](#)を参照してください。

この手順が終了したら、[228 ページの「アップグレード・チェックリスト」](#)に戻ります。

EPM System 製品の前のリリースのアンインストール

前のリリースの環境を維持する場合を除き、EPM System 製品の前のリリースをアンインストールすることをお勧めします。アンインストール中、EPM の Oracle ホーム・ディレクトリ内のすべてのファイルおよびディレクトリを削除するかというプロンプトが表示されたら、データを別の場所に移動していなければ、「いいえ」を選択します。

注： 既存のマシンでアップグレードを行い、前のリリースをアンインストールする場合、リリース 11.1.2.3 をインストールする前にアンインストールする必要があります。(リリース 11.1.2.3 を新しいマシンにインストールすることをお勧めします。)同じマシンで新しいリリースにアップグレードした後は、Shared Services の前のリリースをアンインストールできません。

既存のマシンの FDM をアップグレードする場合、前のリリースをアンインストールしてから続行する必要があります。

ヒント： 前のリリースをアンインストールしないように選択し、既存のマシンでアップグレードを行う場合、前のリリースへのすべての参照を削除するように PATH 変数を編集する必要があります。これにより、構成時に PATH 変数の文字数制限に到達するのを回避できます。

この手順が終了したら、[228 ページの「アップグレード・チェックリスト」](#)に戻ります。

アップグレード用の EPM System 製品のインストール

[第 5 章「新しい配置での EPM System 製品のインストール」](#)で説明されているように、EPM System インストーラを使用して EPM System 製品をインストールします。

アップグレードで EPM System 製品をインストールする際、次の点に注意してください：

- アップグレード時には、前のリリースのインストールおよび構成に使用したのと同じユーザーでインストールおよび構成を実行します。

- 各マシンについて、そのマシンでホストする製品をすべて同時にインストールできます。分散環境の追加要件は、[85 ページの「分散環境での EPM System 製品のインストール」](#)を参照してください。
- 同じマシンの新しい場所にインストールする場合は、前のリリースのインストールと構成に使用した同じユーザーを使用して、インストールと構成を行う必要があります。
- リリース 11.1.2.3 を新しいマシンにインストールすることをお勧めします。
- 前のリリースと同じマシンにインストールする場合、EPM System インストーラにより、現在のリリースをインストールすると前のリリースが使用できなくなる可能性があるという警告が表示されます。

この手順が終了したら、[228 ページの「アップグレード・チェックリスト」](#)に戻ります。

アップグレード時の EPM System 製品の構成

インストール後、EPM System コンフィグレータを使用して EPM System 製品を構成します。

注意 前のリリースからの Shared Services データをエクスポートするまで、構成を開始しないでください。[233 ページの「前のリリースの Shared Services データのエクスポート」](#)を参照してください。

アップグレード時の構成の注意:

- EPM System コンフィグレータを開始する前に、外部認証プロバイダがオンラインであることを確認します。
- EPM System コンフィグレータを開始する前に、`cryptix32.jar` を Administration Services のデータ・ストレージの場所(`EPMDATA/EAS` など)から `EPM_ORACLE_HOME/upgrades/eas/lib` にコピーします。
- Foundation Services を最初に構成する必要があります。他の製品を正しく構成するために、Foundation Services をインストールして構成する必要があります。
- 分散環境では、Shared Services の場合、他の製品の構成前に Shared Services をインストールする各マシンに、「データベースの構成」および「旧リリースからのデータのインポート」タスクを実行します。他の製品の場合、分散環境内の1つのマシンにのみ、データのインポート・タスクを実行します。
- 次に、Essbase および Essbase 製品を構成します。
- 「アプリケーション・サーバーへの配置」タスクの実行と同時または実行前に、「データベースの構成」タスクを実行する必要があります。
- 製品を一度に1つずつ構成するため、製品ごとにそれぞれ Web サーバーを構成します。(Foundation Services の「Web サーバーの構成」タスクを選択します。)構成後、Web サーバーおよび EPM Workspace を再起動します。

- すべての EPM System 製品を 1 つの WebLogic ドメインに配置する必要があります。この要件の例外は、165 ページの「UNIX ベースの EPM System 配置での Financial Management、Financial Reporting および Web Analysis の Windows への配置」に記載されています。
- Essbase のインスタンスを複数アップグレードする場合、アップグレードする各インスタンスに対し、リリース 11.1.2.3 で新しいインスタンスを作成する必要があります。Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の Essbase サーバーの追加のインスタンスの構成と開始に関する項を参照してください。

次の表に、EPM System コンフィグレータで選択する必要のあるタスクと、アップグレード時に EPM System コンフィグレータが実行するタスクを示します。EPM System コンフィグレータの実行手順の詳細は、第 6 章「新しい配置での EPM System 製品の構成」を参照するか、「ヘルプ」をクリックしてください。

注： Shared Services 以外のすべての製品については、製品データベースの構成中に、「現在のリリースにアップグレードする既存のデータベース」を選択し、リリース番号を選択します。次に、既存のデータベースまたは複製したデータベースの接続情報を入力します。

- ▶ EPM System コンフィグレータを起動するには、「スタート」メニューで、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「EPM System コンフィグレータ(すべてのインスタンス)」の順に選択します。

表 33 アップグレード時の必須の構成タスク

製品	構成タスク	アップグレード中の処理
すべての製品	Oracle インスタンスの構成 通常、すべての製品を 1 つのマシンにインストールする場合、最初に構成する製品に対して EPM Oracle インスタンスを作成します。その後の各製品については、既存の EPM Oracle インスタンスを変更します。分散環境にインストールする場合は、各マシンに新規の EPM Oracle インスタンスを作成します。	

製品	構成タスク	アップグレード中の処理
Shared Services	<ul style="list-style-type: none"> ● 共通設定の構成 ● データベースの構成 ● Oracle Configuration Manager の構成 ● Web サーバーの構成 ● アプリケーション・サーバーへの配置 ● 前のリリースからのデータのインポート <p>Shared Services データベースの構成時に、「Shared Services データベースの初回構成を実行」を選択し、新しいデータベースの接続情報を入力します。</p> <p>すべての EPM System 製品が 1 つのデータベースを使用するよう構成していた場合、既存の Shared Services テーブルがデータベース内で検出されたという警告が表示されます。表を削除および再作成するようプロンプトが表示されたら「はい」を選択します。</p> <p>「アプリケーション・サーバーへの配置」構成タスクで、新しい WebLogic ドメインに配置します。</p> <p>「前のリリースからのデータのインポート」構成タスクで、Shared Services データをインポートする場所を指定します。Shared Services アップグレード・ユーティリティによって作成される hssmigratedata.zip へのフル・パスを指定する必要があります。</p> <p>注意 このタスクは、1 つのマシンに一度のみ実行します。</p> <p>分散環境では、他の製品の構成前に Shared Services をインストールする各マシンに、「データベースの構成」および「旧リリースからのデータのインポート」タスクを実行します。</p> <p>この手順が終了したら、228 ページの「アップグレード・チェックリスト」に戻ります。</p>	<p>Shared Services データを前のリリースからインポートします。この処理の詳細は、255 ページの「Shared Services のデータ・インポート中の処理」を参照してください。</p> <p>注： 製品が再登録され、アプリケーションが移行された後に、EPM Workspace にアプリケーションが表示され、Shared Services にプロビジョニング情報が表示されるようになります。</p> <p>すべての EPM System コンポーネントをアップグレードし、Reporting and Analysis Framework を起動した後でのみ、前のリリースからアップグレードされた EPM Workspace のプリファレンスを確認できます。さらに、「IR HTML ビューア」または「IR WebClient ビューア」以外の Reporting and Analysis 役割で、ユーザーをプロビジョニングする必要があります。</p>

製品	構成タスク	アップグレード中の処理
Essbase	<ul style="list-style-type: none"> ● Essbase サーバーの構成 <p>「Essbase サーバーの構成」 ページで、「アプリケーションの場所へのフル・パス(ARBORPATH)」に指定する場所:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 新しいマシンにアップグレードする場合、ステージング・ツールの使用後にコピーしたデータの場所を指定します。 ● 同じマシン上の新しい場所にアップグレードするとき、新しい場所にデータを複製していない場合は、既存の Essbase データの場所を指定します。 <p>注: データを新しいマシンに複製した場合、および「ソースおよびターゲットの別の名前のディスク・ボリューム、テーブルスペースまたは ARBORPATH」または「データのエクスポートによるターゲットの連結ディスク・ボリュームまたはテーブルスペース」をデータの複製中に選択した場合、Essbase の構成直後にスクリプトを実行して、Essbase セキュリティ・ファイルを、アップグレードされたシステムのディスク・ボリュームを反映するように更新する必要があります。Essbase ステージング・ツールでは、セキュリティ・ファイル (essbase.sec) 内の設定を更新するためのスクリプトが提供されます:</p> <p>Essbase サーバーおよび EPM System サービスを起動します。アップグレードされた Essbase サーバーをホストしているマシンで ARBORPATH/app に移動し、MaxL を使用して次のスクリプトを実行します:</p> <pre> %ARBORPATH%/bin/startMaxl.bat -u userName editagtsec.msh </pre> <p>userName は、アップグレードされた Essbase サーバーに接続するための管理者ユーザー名です。スクリプトによって、パスワードを入力するよう求められます。</p> <p>注: editagtsec.msh が空の場合もあります。たとえば、ステージング・ツールを起動すると、ステージング・ツールは既存のボリュームについてレポートします。ボリュームがリストされていない場合、editagtsec.msh は空になります。</p>	<p>アプリケーションを Shared Services に登録し、アプリケーションをアップグレードします。</p> <p>注: 前のリリースからアップグレードする場合、前のリリースのセキュリティ・ファイルのバックアップを作成してから、セキュリティ・ファイルをアップグレードします。セキュリティ・ファイルのバックアップである Essbase.Bak_preUpgrade は、ARBORPATH/bin にあります。Essbase セキュリティの最新の状態を定期的にバックアップする Essbase_timestamp.bak ファイルとは異なり、アップグレード前のバックアップ・ファイルはそのまま保持され、その後の操作によって更新されません。</p>
Provider Services	<ul style="list-style-type: none"> ● アプリケーション・サーバーへの配置 ● 前のリリースからのデータのインポート ● Web サーバーの構成(Foundation タスク) <p>「前のリリースからのデータのインポート」・タスクで、既存の、または複製したデータの場所を指定します。</p>	<p>データを前のリリースから Shared Services レジストリに移行します。essbase.properties を EPM_ORACLE_INSTANCE/aps/bin に移動し、リリース 11.1.2.3 でインストールされた essbase.properties ファイルと内容をマージします。</p>

製品	構成タスク	アップグレード中の処理
Administration Services	<ul style="list-style-type: none"> ● データベースの構成 ● アプリケーション・サーバーへの配置 ● 前のリリースからのデータのインポート ● Web サーバーの構成(Foundation タスク) <p>「旧リリースからのデータのインポート」タスクで、既存の、または複製したデータの場所を指定します。</p>	<p>データを前のリリースから Shared Services レジストリに移行します。</p>
Essbase Studio	<ul style="list-style-type: none"> ● データベースの構成 ● サンプルおよび顧客データ・ソースのテキスト・ファイルの Essbase Studio の場所の構成 ● Web サーバーの構成(Foundation タスク) <p>「サンプルおよび顧客データ・ソースのテキスト・ファイルの Essbase Studio の場所の構成」ページで、既存または複製の Essbase Studio データの場所を指定します。</p>	<p>Essbase Studio カタログおよびデータベースをアップグレードします。</p> <p>EPM System コンフィグレータは、アップグレード・プロセス中に次のタスクを実行します:</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ソース・カタログから外部 xml ファイル(EPM_ORACLE_HOME/tmp/studio_dump.xml)にメタデータをエクスポートします。 2. 接頭辞 cp_ を接頭辞 cc_ に置き換えて、ソース・カタログ・テーブルおよび制約の名前を変更します。 3. 接頭辞 cp_ で、新しいカタログ・テーブルを作成します。 4. studio_dump.xml から新しいカタログに、メタデータをインポートします。 5. 前のリリースからアップグレードされたリリースの構造に、メタデータ・オブジェクトを変換します。 6. アップグレードが成功したら、studio_dump.xml を削除します。 <p>注: アップグレード中にデータベース構成に失敗した場合は、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide を参照してください。アップグレードが完了するまで、リリース 11.1.1.4 環境を維持します。</p>
Integration Services	<ul style="list-style-type: none"> ● Essbase Integration Services の構成 <p>この手順が終了したら、228 ページの「アップグレード・チェックリスト」に戻ります。</p>	

製品	構成タスク	アップグレード中の処理
Performance Management Architect	<ul style="list-style-type: none"> ● データベースの構成 ● アプリケーション・サーバーへの配置 ● Web サーバーの構成(Foundation タスク) ● 次元サーバーの構成 <p>この手順が終了したら、228 ページの「アップグレード・チェックリスト」に戻ります。</p>	<p>データベースを更新します。</p> <p>データベースの更新は、アップグレードするデータベースの内容およびサイズに基づいて、実行に時間がかかる場合があります。実行中に、このタスクを中断しないでください。</p>
Calculation Manager	<ul style="list-style-type: none"> ● データベースの構成 ● アプリケーション・サーバーへの配置 ● Web サーバーの構成(Foundation タスク) <p>この手順が終了したら、228 ページの「アップグレード・チェックリスト」に戻ります。</p>	<p>データベースを更新します。</p>
Reporting and Analysis	<ul style="list-style-type: none"> ● データベースの構成 ● アプリケーション・サーバーへの配置 ● Reporting and Analysis サービスの構成 ● Reporting and Analysis Framework サービスの構成 ● Financial Reporting RMI ポートの構成 ● Web サーバーの構成(Foundation タスク) <p>「Reporting and Analysis Framework サービス」構成ページの「リポジトリ・ディレクトリ」で、既存の、または複製したデータの場所を指定します。</p> <p>この手順が終了したら、228 ページの「アップグレード・チェックリスト」に戻ります。</p>	<p>Web Analysis アプリケーション設定を更新します。データベースを更新します。</p>
Planning	<ul style="list-style-type: none"> ● データベースの構成 ● アプリケーション・サーバーへの配置 ● Web サーバーの構成(Foundation タスク) <p>この手順が終了したら、228 ページの「アップグレード・チェックリスト」に戻ります。</p>	<p>データベースを更新します。</p> <p>Business Rules を使用している場合、EPM System コンフィグレータは、ルールを Calculation Manager に移行する際にアプリケーション・アップグレード・プロセスで使用するためにデータベース構成中にルールを <code>EPMDData/planning/hbrRules.xml</code> にエクスポートします。</p> <p>アップグレード・プロセスで、アプリケーションのアップグレードを後で実行します。</p>

製品	構成タスク	アップグレード中の処理
Financial Management	<ul style="list-style-type: none"> ● データベースの構成 ● アプリケーション・サーバーへの配置 ● DCOM の構成 ● アプリケーション・サーバーの構成 ● アプリケーション・クラスタの構成 ● Web サーバーの構成(Financial Management タスク) ● 前のリリースからのアプリケーションのアップグレード ● Web サーバーの構成(Foundation タスク) <p>「前のリリースのアプリケーションのアップグレード」を選択する必要があります。EPM System コンフィグレータにはこのタスクのページがなく、情報を入力する必要はありません。</p> <p>注： アップグレードするアプリケーションの数およびサイズにより、このタスクに時間がかかる場合があります。</p> <p>この手順が終了したら、228 ページの「アップグレード・チェックリスト」に戻ります。</p>	<p>データベース・テーブルを変換してアプリケーションをアップグレードし、アプリケーションを Shared Services に登録します。</p> <p>注： 構成する Financial Management アプリケーション・サーバーの数にかかわらず、アプリケーションのアップグレードは 1 回だけ実行してください。</p>
Performance Scorecard	<ul style="list-style-type: none"> ● データベースの構成 ● アプリケーション・サーバーへの配置 ● 添付ファイルの場所の構成 ● Web サーバーの構成(Foundation タスク) <p>Performance Scorecard の「Performance Scorecard ファイルを保管するディレクトリを指定してください」構成ページで、ファイルを保存する場所を指定します。</p> <p>この手順が終了したら、228 ページの「アップグレード・チェックリスト」に戻ります。</p>	<p>データベースを更新します。</p>
Profitability and Cost Management	<ul style="list-style-type: none"> ● データベースの構成 ● アプリケーション・サーバーへの配置 ● Web サーバーの構成(Foundation タスク) <p>この手順が終了したら、228 ページの「アップグレード・チェックリスト」に戻ります。</p>	<p>データベースを更新し、すべてのアップグレード済 Profitability and Cost Management アプリケーションを Shared Services に登録します。</p>
Strategic Finance	<ul style="list-style-type: none"> ● データ・ディレクトリの構成 ● Web サービス構成 ● Web サーバーの構成(Foundation タスク) <p>「Strategic Finance 構成」構成ページで、既存の、または複製したデータの場所を指定します。</p> <p>この手順が終了したら、228 ページの「アップグレード・チェックリスト」に戻ります。</p>	<p>データベースを更新します。</p>
Disclosure Management	<p>N/A。インストール時に「メンテナンス・リリースの適用」オプションを使用します。</p>	

製品	構成タスク	アップグレード中の処理
Financial Close Management	N/A。インストール時に「メンテナンス・リリースの適用」オプションを使用します。	
FDM	<ul style="list-style-type: none"> ● データベースの構成(FDMEE 用) ● アプリケーション・サーバーへの配置(FDMEE 用) ● FDM Web アプリケーションの構成 ● FDM サーバーの構成 ● Web サーバーの構成(Foundation タスク) <p>この手順が終了したら、228 ページの「アップグレード・チェックリスト」に戻ります。</p>	<p>FDM を Shared Services に登録します。</p> <p>FDMEE データベースを更新します。</p> <p>FDM で構成を完了し、アップグレード・プロセスでアプリケーションを後でアップグレードします。</p>

Shared Services のデータ・インポート中の処理

構成中に、Foundation の「旧リリースからのデータのインポート」タスクで、EPM System コンフィグレータによって hssmigratedata.zip の中身が展開され、データが Shared Services リリース 11.1.2.3 にインポートされます。

EPM System コンフィグレータは、次のデータをインポートします:

- セキュリティ(アプリケーションの役割を含む)
- プロジェクトおよびアプリケーション ID
- タスクフロー情報
- 監査情報
- CSS.xml

インポート・プロセスに関連するログは、EPM_ORACLE_INSTANCE\diagnostics/logs/upgrades/foundation/hss_upgrade_ps2.Log およびコンソールに書き込まれます。インポート処理中にエラーが発生した場合、「旧リリースからのデータのインポート」タスクのみを再実行できます。

EPM System コンフィグレータは、次のタスクを実行します:

- すべての DN ベース ID が対応する GUID ベース ID に更新されます。
- ネイティブ・ディレクトリが検索順序の最後に移動されます。
- プロジェクト(アプリケーション・グループ)が Shared Services レジストリにインポートされます。
- アプリケーション ID が Shared Services レジストリにインポートされます。アプリケーション・ノードは作成されますが、アプリケーションが後にアップグレード処理中に登録されるまで表示されません。

タスク・フローを移動する場合、タスク・フロー権限は次のように役割に移動されます:

表 34 権限タイプの役割への移動

権限のタイプ	役割名
読取り可能	タスクフローの実行
書込み可能または管理可能	タスクフローの管理
読取り不可、書込み不可、または管理不可	マッピングなし
なし	マッピングなし

Reporting and Analysis の分散配置のアップグレード

Reporting and Analysis の分散配置をアップグレードする場合、前のリリースでのアップグレード時と異なり、分散構成はアップグレード時に自動的に複製されません。リリース 11.1.2.3 環境で分散構成を設定する必要があります。次に説明されているように、アップグレード・チェックリストを使用し、必要に応じてインストールおよび構成手順を繰り返してください。

- ▶ アップグレード・シナリオで Reporting and Analysis の分散配置を構成するには:
 - 1 最初のホストをインストールおよび構成します。EPM System コンフィグレータによる構成中に、「現在のリリースにアップグレードする既存のデータベース」を選択し、リリース番号を選択します。次に、既存のデータベースまたは複製したデータベースの接続情報を入力します。
 - 2 前の配置にすでに存在していた次のホストについては、ホストをインストールおよび構成します。EPM System コンフィグレータによる構成中に、「現在のリリースにアップグレードする既存のデータベース」を選択し、リリース番号を選択します。次に、既存のデータベースまたは複製したデータベースの接続情報を入力します。
 - 3 前の配置に存在しなかったホストについては、新しいホストをインストールおよび構成します。EPM System コンフィグレータによる構成中に、製品のデータベース構成で、「前に構成したデータベースに接続」を選択します。次に、既存のデータベースまたは複製したデータベースの接続情報を入力します。

EPM System サービスの起動

続行する前に、EPM System サービスを開始します。第 12 章「EPM System 製品の開始と停止」を参照してください。

この手順が終了したら、228 ページの「アップグレード・チェックリスト」に戻ります。

インストールの検証

EPM System 診断を使用してインストールを検証します。第 13 章「インストールの検証と配置の確認」を参照してください。

手動構成タスクの実行

続行する前に、製品固有の必須の構成後タスクを実行する必要があります。第9章「新しい配置での手動構成タスクの実行」を参照してください。

この手順が終了したら、228 ページの「アップグレード・チェックリスト」に戻ります。

再ホスティングされた環境への参照の更新

サブトピック

- [再ホスティングされた Essbase サーバーへの参照の更新](#)
- [再ホスティングされた Essbase サーバーへの Provider Services 参照の更新](#)
- [再ホスティングされた Essbase サーバーまたは Provider Services サーバーへの Administration Services 参照の更新](#)
- [再ホスティングされた環境への Essbase Studio 参照の更新](#)
- [再ホスティングされたサーバー環境への Reporting and Analysis 参照の更新](#)
- [再ホスティングされたサーバー環境への Performance Management Architect 参照の更新](#)
- [再ホスティングされたサーバー環境への Planning 参照の更新およびアプリケーションのアップグレード](#)
- [再ホスティングされた Essbase サーバーへの Profitability and Cost Management 参照の更新](#)
- [再ホスティングされた Essbase サーバーまたは Financial Management サーバーへの Strategic Finance 参照の更新](#)
- [再ホスティングされた Essbase サーバーへの Performance Scorecard 参照の更新](#)
- [再ホスティングされたサーバー環境への Integration Services 参照の更新](#)

EPM System 製品を新しいホスト・マシンにインストールすることによってアップグレードする場合、新しいホスト名とポート番号を反映するように一部の製品の参照を更新する必要があります。最初に Essbase の再ホスティング手順を実行してください。作業を続行する前に、EPM System サービスが開始されていることを確認してください。

再ホスティングされた Essbase サーバーへの参照の更新

サブトピック

- [Essbase サーバー・ホスト名のクラスタ名へのマッピング](#)
- [再ホスティングされた Essbase サーバーへの内部 Essbase 参照の更新](#)

Essbase サーバーのホストおよびポートが前のリリースから変更された場合、Essbase がデータ・ソースとして使用されている Shared Services レジストリ(サーバー名をクラスタ名にマッピングする場合)、Essbase、およびその他の製品内の Essbase サーバーへの参照を更新する必要があります。

注： 他のサーバーが再ホスティングされている場合は、一部の製品でさらに追加ステップを必要とすることがあります。

次の場所にある Essbase サーバー・ホスト情報を更新します:

表 35 Essbase サーバー・ホストへの参照の更新

Essbase サーバー・ホストの参照	更新方法の詳細
<p>Essbase サーバー名をクラスタ名にマッピングします。</p> <p>他の製品の参照を更新する前に、この手順を実行する必要があります。</p>	<p>258 ページの「Essbase サーバー・ホスト名のクラスタ名へのマッピング」</p>
<p>Essbase 内の Essbase サーバー参照を更新します。</p> <p>他の製品の参照を更新する前に、この手順を実行する必要があります。</p>	<p>259 ページの「再ホスティングされた Essbase サーバーへの内部 Essbase 参照の更新」</p>
<p>Essbase がデータ・ソースとして使用されている製品について、Essbase サーバーのホストまたはポートが前のリリースから変更された場合、Essbase サーバーへの参照を更新します。</p> <p>各製品をインストールおよび構成してから、これらの手順を実行します。</p> <p>注： Essbase サーバーが再ホスティングされていない場合でも、Performance Management Architect の手順は必要です。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ● Provider Services - 260 ページの「再ホスティングされた Essbase サーバーへの Provider Services 参照の更新」 ● Administration Services - 261 ページの「再ホスティングされた Essbase サーバーまたは Provider Services サーバーへの Administration Services 参照の更新」 ● Essbase Studio - 262 ページの「再ホスティングされた環境への Essbase Studio 参照の更新」 ● Reporting and Analysis - 266 ページの「再ホスティングされたサーバー環境への Reporting and Analysis 参照の更新」 ● Performance Management Architect - 268 ページの「再ホスティングされたサーバー環境への Performance Management Architect 参照の更新」 ● Planning - 269 ページの「再ホスティングされたサーバー環境への Planning 参照の更新およびアプリケーションのアップグレード」 ● Profitability and Cost Management - 271 ページの「再ホスティングされた Essbase サーバーへの Profitability and Cost Management 参照の更新」 ● Strategic Finance - 272 ページの「再ホスティングされた Essbase サーバーまたは Financial Management サーバーへの Strategic Finance 参照の更新」 ● Performance Scorecard - 273 ページの「再ホスティングされた Essbase サーバーへの Performance Scorecard 参照の更新」

Essbase サーバー・ホスト名のクラスタ名へのマッピング

Essbase をデータ・ソースとして使用する製品の再ホスティング処理を単純化するには、次のタスクを実行して、サーバー・ホスト名をクラスタ名にマッピングします。これにより、他の EPM System 製品は、クラスタ名で Essbase に接続できます。

他の製品の参照を更新する前に、この手順を実行する必要があります。この手順によって、他の製品が Essbase ホスト環境を更新するために使用する Shared Services レジストリに、ホストの検索と置換のペアが追加されます。

注： Essbase サーバーが再ホスティングされていない場合でも、Performance Management Architect ではこの手順が必要です。

▶ Essbase サーバー・ホスト名をクラスタ名にマッピングするには:

1 ApsResolver プロパティを、`essbase.cfg` および `essbase.properties` に追加します。

194 ページの「クライアントによるクラスタ名を使用した検索の有効化」を参照してください。

2 Shared Services をホストしているマシンでコマンド・プロンプトを使用して、次のディレクトリに移動します: `EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/upgrades`。

3 次のスクリプトを実行します:

```
updateEssbaseServer
oldEssbaseServerHost

ClusterNameForNewHost
```

デフォルト・ポートを使用して製品を Essbase サーバーに接続する場合、`oldEssbaseServerHost` に対して、`Servername` を指定します。スクリプトを再実行し、`oldEssbaseServerHost` に対して `server name:port` を指定します。

デフォルト以外のポートを使用して製品を Essbase サーバーに接続する場合、一度だけスクリプトを実行し、`oldEssbaseServerHost` に対して、`server name:port` を指定します。

ヒント： デフォルトのクラスタ名は `EssbaseCluster-1` です。クラスタ名では大文字と小文字が区別されます。

ユーティリティにより、前のリリースの Essbase サーバーと、Shared Services レジストリ内の新しい論理クラスタ名との間のマッピング情報が保存されます。

4 各 Essbase サーバー・インスタンスについてこれを繰り返します。

再ホスティングされた Essbase サーバーへの内部 Essbase 参照の更新

この手順を実行する前に、Essbase サーバー名をクラスタ名にマッピングする必要があります。258 ページの「Essbase サーバー・ホスト名のクラスタ名へのマッピング」を参照してください。

Essbase サーバーのホストが前のリリースから変更された場合、ホストへの内部参照を更新する必要があります。この手順で、パーティション定義および別名の場所が更新されます。

▶ 再ホスティングされた Essbase サーバーへの内部参照を更新するには:

- 1 **Essbase をホストしているマシンでコマンド・プロンプトを使用して、次のディレクトリに移動します:** `EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/upgrades`。
- 2 **次のスクリプトを実行し、プロンプトが表示されたら、管理者パスワードを入力します:**

```
EssbaseUpdateEssbaseServer.bat | sh
newHost
:
port

userName
```

`newHost` は、アップグレード対象マシンの任意の別名または完全修飾名または IP アドレスで、`userName` は、リリース 11.1.2.3 でプロビジョニングされた Essbase 管理者ユーザーです。デフォルト・ポートは 1423 です。

ユーティリティにより、すべてのロケーション別名のホストおよびすべての Essbase アプリケーションのパーティション定義が更新されます。

- 3 **各 Essbase サーバー・インスタンスについてこれを繰り返します。**

スクリプトのアクションの詳細は、ログ・ファイル `EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/logs/essbase/EssbaseRehost.log` を確認してください。

すべての Essbase 製品を一度に構成する場合、次の項に進みます。それ以外の場合、この手順が終了したら、[228 ページの「アップグレード・チェックリスト」](#)に戻ります。

再ホスティングされた Essbase サーバーへの Provider Services 参照の更新

この手順を実行する前に Essbase サーバーの再ホスティング手順を実行する必要があります。[257 ページの「再ホスティングされた Essbase サーバーへの参照の更新」](#)を参照してください。

Essbase サーバーのホストが前のリリースから変更された場合、Provider Services が新しい Essbase データ・ソースを認識できるように更新する必要があります。

▶ 再ホスティングされた Essbase サーバーへの内部参照を更新するには:

- 1 **コマンド・プロンプトを使用して、次のディレクトリに移動します:**
`EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/upgrades`。

- 2 **次のスクリプトを実行します:**

```
ApsUpdateEssbaseServer.bat | sh
```

このユーティリティを 1 回実行します。

すべての Essbase 製品を一度に構成する場合、次の項に進みます。それ以外の場合、この手順が終了したら、[228 ページの「アップグレード・チェックリスト」](#)に戻ります。

再ホスティングされた Oracle Business Intelligence Enterprise Edition サーバーへの内部参照を更新するには、Oracle Hyperion Provider Services Administration Guide を参照してください。

再ホスティングされた Essbase サーバーまたは Provider Services サーバーへの Administration Services 参照の更新

この手順を実行する前に Essbase サーバーの再ホスティング手順を実行する必要があります。[257 ページの「再ホスティングされた Essbase サーバーへの参照の更新」](#)を参照してください。

Essbase サーバーのホストおよびポートが前のリリースから変更された場合、Administration Services が新しい Essbase データ・ソースを認識できるよう、更新する必要があります。アップグレード後、Administration Services コンソールのサーバーのリストを確認し、更新します。

▶ 再ホスティングされた Essbase サーバーへの Administration Services 参照を更新するには:

1 Administration Services コンソールにログインします。

前のインストールの Essbase サーバーがリスト表示されます。

2 Essbase サーバーのリストを確認します。

3 新しい配置環境での必要性に合わせてサーバーを追加、更新または削除します。

新しいサーバーを追加すると、「Essbase サーバーの追加」ダイアログ・ボックスにアップグレードされたインストールで使用可能なサーバーのリストが表示されます。これは Shared Services レジストリから読み込まれた情報です。

Enterprise ツリーから前の Essbase ホストを削除します。

詳細は、Administration Services オンライン・ヘルプを参照してください。

Provider Services サーバーのホストおよびポートが前のリリースから変更された場合、Administration Services が新しい場所を認識できるように更新する必要があります。

▶ 再ホスティングされた Provider Services サーバーへの Administration Services 参照を更新するには:

1 Administration Services コンソールにログインします。

前のインストールの Provider Services サーバーがリストされます。

2 サーバーのリストを確認します。

3 新しい配置環境での必要性に合わせてサーバーを追加、更新または削除します。

新しいサーバーを追加する場合、「プロバイダ・サーバーの追加」ダイアログ・ボックスで、新しいインストールのプロバイダ・ホストを入力します: 「URL」をクリックし(「プロバイダ URL」ボックスが更新されます)、ポートが正しいことを確認します。「Essbase サーバーの認証」メニューから、アクティブな「Essbase」を選択し、「OK」をクリックします。

4 「プロバイダ・サーバー」ツリーから、前の Provider Services サーバー・ホストを削除します。

すべての Essbase 製品を一度に構成する場合、次の項に進みます。それ以外の場合、この手順が終了したら、[228 ページの「アップグレード・チェックリスト」](#)に戻ります。

再ホスティングされた環境への Essbase Studio 参照の更新

サブトピック

- [再ホスティングされた Essbase サーバーへの Essbase Studio 参照の更新](#)
- [キューブ・リンケージの更新](#)
- [再ホスティングされた Performance Management Architect サーバーまたはデータ・ソースとして使用されたテキスト・ファイルへの Essbase Studio 参照の更新](#)

この手順を実行する前に Essbase サーバーの再ホスティング手順を実行する必要があります。[257 ページの「再ホスティングされた Essbase サーバーへの参照の更新」](#)を参照してください。

アップグレード後、Essbase サーバー接続および配置済キューブは、基礎となる Essbase サーバー・インスタンスまたはクラスタ、またはその他の Essbase Studio サーバー・インスタンスのホスト、ポート、またはデータ暗号化情報の変更に影響を受けます。

Essbase Studio 内のそれらのサーバー・インスタンスおよびクラスタへの参照を更新する必要があります。

表 36 Essbase サーバー・ホストおよび Essbase Studio ホストへの参照の更新

タスク	参照
Essbase サーバー・ホストおよびポートを新しい場所に移動させた場合、Essbase サーバーへの Essbase Studio 参照を更新します。	263 ページの「再ホスティングされた Essbase サーバーへの Essbase Studio 参照の更新」

タスク	参照
<p>Essbase Studio サーバー・ホストおよびポートを新しい場所に移動させており、前のリリースの Essbase Studio サーバーの場所をポイントするアプリケーションを配置している場合、それらの配置済アプリケーションが新しい Essbase Studioサーバー・インスタンスをポイントするようにキューブ・リンケージを更新します。</p>	<p>265 ページの「キューブ・リンケージの更新」</p>
<p>Performance Management Architect が新しい場所に移動された場合、前のリリースの場所をポイントするすべての Performance Management Architect データ・ソース接続について、新しいサーバーの場所を反映するように接続プロパティを編集します。</p>	<p>265 ページの「再ホスティングされた Performance Management Architect サーバーまたはデータ・ソースとして使用されたテキスト・ファイルへの Essbase Studio 参照の更新」</p>
<p>テキスト・ファイルがデフォルト以外のディレクトリに移動された場合、新しい場所をポイントするように、テキスト・ファイル接続の接続プロパティを編集します。</p>	<p>265 ページの「再ホスティングされた Performance Management Architect サーバーまたはデータ・ソースとして使用されたテキスト・ファイルへの Essbase Studio 参照の更新」</p>

再ホスティングされた Essbase サーバーへの Essbase Studio 参照の更新

▶ 再ホスティングされた Essbase サーバー・インスタンスまたはクラスタへの参照を更新するには:

- 1 Essbase Studio コンソールで、「ツール」、「Essbase 接続の再ホスティング」の順に選択します。
- 2 「Essbase 接続の再ホスティング」で、「Essbase 接続」から再ホスティングする接続を選択します。

前のクラスタ名または Essbase ホストおよびポート番号、および該当する場合はデータ暗号化方式は、「カタログ内のホスト/ポート/暗号化」に表示されません。

- 3 「新しいホスト/ポート/暗号化」に、新しいクラスタ名または新しいホスト名、ポート番号、および該当する場合はデータ暗号化方式を入力します。

注： Essbase サーバー・クラスタの場合、クラスタ名のみが必須です。ポート番号は必要ありません。デフォルトで、新しいクラスタ名が「新しいホスト/ポート/暗号化」列に表示されます。

次の構文を使用します:

- Essbase サーバー・インスタンスでデータの暗号化がない場合、次のように入力します:

```
host
:
port
```

- Essbase サーバー・インスタンスでデータを暗号化する場合、次のように入力します:

```
host
:
port
:ssl
```

- Essbase サーバー・クラスタでデータの暗号化がない場合、次のように入力します:

```
cluster_name
```

- 4 **オプション:** 「接続のテスト」をクリックして「新しいホスト/ポート/暗号化」に作成したエントリを検証します。

注: Essbase Studio では、エントリの入力時に検証を行いません。入力した情報を検証するには「接続のテスト」をクリックする必要があります。

- 5 現在選択されている Essbase サーバー接続の「配置履歴の更新」オプションを選択します:

- 「すべての配置履歴のホスト名およびポート番号の更新」 - 前の Essbase サーバーのホストおよびポート参照のすべてを、指定した新しいホストおよびポートに置き換えます。

これがデフォルトのオプションです。

- 「最新の成功した配置履歴を複製しコピーのみを更新」 - 最新の成功した配置履歴のリストのコピーを作成し、コピーを新しいホストおよびポート情報、再ホスティングの日時で更新します。

ヒント: 「複製」オプションを選択すると、更新の完了後、それぞれの再ホスティングされた Essbase モデルがメタデータ・ナビゲータに 2 回表示されます: 1 回目は前の host:port 情報、もう 1 回は新しい host:port、および必要な場合はデータ暗号化情報が表示されます。

注: 配置履歴は、Essbase サーバー接続の再ホスティングが成功した場合のみ更新されます。

- 6 「更新」をクリックします。

- 7 再ホスティングされたそれぞれの Essbase サーバー接続の再ホスティング・ステータスを確認するには、「Essbase 接続の再ホスティング」ダイアログ・ボックスの「ステータスの更新」列を選択します。

再ホスティングが成功すると、「カタログ内のホスト/ポート/暗号化」列が、新しいクラスタまたはホストおよびポート情報と、該当する場合は暗号化情報で更新されます。再ホスティングが失敗するとエラー・メッセージが表示されます。

注： 他の Essbase サーバー接続に前の host:port 設定と同じ設定がある場合、1 つのサーバー・インスタンスを再ホスティングすると他のすべてのサーバー・インスタンスも再ホスティングされます。

キューブ・リンケージの更新

▶ アップグレード後、または Essbase Studio を別のサーバーに移動した後、Essbase Studio を使用して構築されたキューブのキューブ・リンケージを更新するには:

- 1 Essbase Studio コンソールで、「ツール」、「キューブ・リンケージの更新」の順に選択します。
- 2 「現在の Essbase Studio サーバーにリンクするようすべての Essbase アプリケーションおよびデータベースを更新(すべての Essbase インスタンスを起動する必要あり)」を選択します。

すべての Essbase アプリケーションおよびデータベースが、現在接続している Essbase Studio サーバーにリンクされます。

注： キューブ・リンケージの更新が有効になるためには、すべての Essbase インスタンスまたはクラスタが実行されている必要があります。

- 3 **オプション:** 更新後、すべての Essbase アプリケーションの実行を続行するには、「更新後すべての Essbase アプリケーションを停止」チェック・ボックスの選択を解除します。

デフォルトでは、更新後すべての Essbase アプリケーションが停止されます。

- 4 「更新」をクリックします。

キューブ・リンケージの更新が成功したというメッセージが表示されます。

成功しなかった場合は、エラー・メッセージに詳細が表示されます。

- 5 終了するには、「閉じる」をクリックします。

再ホスティングされた Performance Management Architect サーバーまたはデータ・ソースとして使用されたテキスト・ファイルへの Essbase Studio 参照の更新

Performance Management Architect が前のリリースのインストールから新しいホストまたはポートに移動された場合、前のリリースの場所をポイントするすべての Performance Management Architect データ・ソース接続について、新しいサーバーの場所を反映するように接続プロパティを編集します。データ・ソースとして使用されたテキスト・ファイルがデフォルト以外の場所に移動した場合、接続プロパティを編集します。

Essbase Studio 内のデータ・ソース接続情報を編集します。

▶ データ・ソースのプロパティを編集するには:

- 1 Essbase Studio コンソールで、「ソース・ナビゲータ」から「データ・ソース」タブを選択します。
- 2 物理ツリーの「データ・ソース」で、編集するデータ・ソースを右クリックして、「プロパティ」を選択します。
- 3 ダイアログ・ボックスの「パラメータ」セクションで、次のタスクを実行します。

次元サーバー・ソース:

- 1 「サーバー名」で、Performance Management Architect が存在するコンピュータの名前を変更します。
- 2 ポート番号を変更するには、「ポート」の横にある「デフォルト」チェック・ボックスの選択が解除されていることを確認し、新しいポート番号を入力します。
- 3 この Performance Management Architect インスタンスの「ユーザー名」および「パスワード」を変更します。

テキスト・ファイル・ソース:

- 1 テキスト・ファイルのデータ・ソースの「場所」を変更するには、「参照」をクリックします。
- 2 「テキスト・ファイルの場所」ダイアログ・ボックスで、アクセスするテキスト・ファイルのデータ・ソースを含むディレクトリを選択します。

注: データ・ソースごとに選択できるディレクトリは1つのみです。
Essbase Studio では、同じディレクトリの異なるサブディレクトリにあるテキスト・ファイルはサポートされていません。

- 3 「選択したディレクトリのコンテンツ」の下にリストされたファイルを見直し、それが目的のテキスト・ファイルのデータ・ソースであることを確認します。
- 4 「適用」をクリックし、「OK」をクリックします。

この手順が終了したら、[228 ページの「アップグレード・チェックリスト」](#)に戻ります。

再ホスティングされたサーバー環境への Reporting and Analysis 参照の更新

サブトピック

- [再ホスティングされた Essbase サーバーへの Financial Reporting 参照の更新](#)
- [再ホスティングされた Essbase サーバーへの Web Analysis 参照の更新](#)
- [再ホスティングされた Production Reporting サーバーへの参照の更新](#)

この手順を実行する前に Essbase サーバーの再ホスティング手順を実行する必要があります。[257 ページの「再ホスティングされた Essbase サーバーへの参照の更新」](#)を参照してください。

表 37 Reporting and Analysis のアップグレード・タスク

アップグレード・タスク	参照
Financial Reporting - Essbase サーバーのホストおよびポートが前のリリースから変更された場合、Financial Reporting が新しい Essbase データ・ソースを認識できるように更新します。	267 ページの「再ホスティングされた Essbase サーバーへの Financial Reporting 参照の更新」
Financial Reporting - Provider Services ホストが変更された場合、Provider Services データ・ソースを更新します。	EPM Workspace で、「ツール」メニューから、「データベース接続マネージャ」を選択して、データベース接続を選択し、「編集」をクリックして、新しい接続情報を入力します。
Web Analysis - Essbase サーバーのホストおよびポートが前のリリースから変更された場合、Web Analysis が新しい Essbase データ・ソースを認識できるように更新します。	267 ページの「再ホスティングされた Essbase サーバーへの Web Analysis 参照の更新」
Production Reporting サーバーがこのリリースの新しいサーバーに移動した場合、新しいサーバーへの参照を更新します。	268 ページの「再ホスティングされた Production Reporting サーバーへの参照の更新」

再ホスティングされた Essbase サーバーへの Financial Reporting 参照の更新

この手順を実行する前に Essbase サーバーの再ホスティング手順を実行する必要があります。[257 ページの「再ホスティングされた Essbase サーバーへの参照の更新」](#)を参照してください。

Essbase サーバーのホストおよびポートが前のリリースから変更された場合、Essbase がデータ・ソースとして使用されている Financial Reporting 内の Essbase サーバー・ホストへの参照を更新します。

続行する前に、Financial Reporting サービスを起動していることを確認します。

➤ 再ホスティングされた Essbase サーバーへの Financial Reporting 参照を更新するには:

1 コマンド・プロンプトを使用して、次のディレクトリに移動します:

```
EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/upgrades。
```

2 次のスクリプトを実行します:

```
FRUpdateEssbaseServer.bat|.sh
```

再ホスティングされた Essbase サーバーへの Web Analysis 参照の更新

この手順を実行する前に Essbase サーバーの再ホスティング手順を実行する必要があります。[257 ページの「再ホスティングされた Essbase サーバーへの参照の更新」](#)を参照してください。

Essbase サーバーのホストおよびポートが前のリリースから変更された場合、Essbase がデータ・ソースとして使用されている Web Analysis 内の Essbase サーバー・ホストへの参照を更新します。

▶ 再ホスティングされた Essbase サーバーへの Web Analysis 参照を更新するには:

1 コマンド・プロンプトを使用して、次のディレクトリに移動します:

```
EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/upgrades。
```

2 次のスクリプトを実行します:

```
WebAnalysisUpdateEssbaseServer.bat | sh
```

再ホスティングされた Production Reporting サーバーへの参照の更新

前のリリースとは異なるホストに Production Reporting をインストールした場合、`rehostSQRConfig` ユーティリティを実行して、データベース内の前のリリースのホストから新しいホストに SQR エンジン関連のメタデータを再マッピングします。前のリリースと同じホストに Production Reporting をインストールした場合、このユーティリティを実行する必要はありません。

このユーティリティを実行する前に、すべての Reporting and Analysis Framework サービスをシャットダウンします。

▶ 再ホスティングされた Production Reporting サーバーへの参照を更新するには:

1 コマンド・プロンプトを使用して、次のディレクトリに移動します:

```
EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/ReportingAnalysis/SDK。
```

2 次のスクリプトを実行します:

```
rehostSQRConfig.bat | sh  
host1  
  
host2
```

`host1` はアップグレード元のマシンのホスト名で、`host2` はアップグレード対象マシンのホスト名です。

このスクリプトにより、新しいホストを反映するようテーブルが更新されます。

この手順が終了したら、[228 ページの「アップグレード・チェックリスト」](#)に戻ります。

再ホスティングされたサーバー環境への Performance Management Architect 参照の更新

この手順を実行する前に Essbase サーバーの再ホスティング手順を実行する必要があります。[257 ページの「再ホスティングされた Essbase サーバーへの参照の更新」](#)を参照してください。

Essbase サーバーが再ホスティングされていない場合でも、[258 ページ](#)の「[Essbase サーバー・ホスト名のクラスタ名へのマッピング](#)」の手順を実行する必要があります。

これらの手順が完了すると、Performance Management Architect は再ホスティングされた Essbase サーバーへの参照を自動的に更新します。スクリプトの実行は必要ありません。

再ホスティングされたサーバー環境への Planning 参照の更新およびアプリケーションのアップグレード

この手順を実行する前に Essbase サーバーの再ホスティング手順を実行する必要があります。[257 ページ](#)の「[再ホスティングされた Essbase サーバーへの参照の更新](#)」を参照してください。

Planning アップグレード・ウィザードを使用して再ホスティングされたデータ・ソースへの参照を更新し、Planning アプリケーションをアップグレードします。たとえば、Essbase サーバー・ホストおよびポートが前のリリースから変更されている場合、データ・ソースを更新し、Planning アプリケーションからレポート・アプリケーションへのマッピングを更新する必要があります。リレーショナル・データ・ソースが変更されている場合、データ・ソース接続を更新する必要があります。Planning アップグレード・ウィザードを使用すると、複数のデータ・ソースおよびレポート・アプリケーションを同時に更新できます。

注意 アプリケーションをアップグレードする前に、再ホスティングされたデータ・ソースへの参照を更新する必要があります。

注： データ・ソースへの参照を更新する前に、Essbase サーバーおよびリレーショナル・データベースが実行中であることを確認してください。

- ▶ データ・ソースへの参照を更新し、アプリケーションをアップグレードするには:
 - 1 EPM Workspace から、「ナビゲート」、「管理」、「Planning 管理」の順に選択し、「アップグレード・ウィザード」をクリックします。次元エディタまたはアプリケーション作成者の役割を持つ管理者ユーザーとしてログインします。
 - 2 「データ・ソースの更新」ページで、それぞれの Planning データ・ソースについて、リレーショナル・データベース情報および Essbase サーバー情報を確認します。アップグレード中に Essbase サーバーのホストおよびポートが変更された場合、またはリレーショナル・データベースが新しいホストに移動した場合、情報を更新します。
 - 複数のリレーショナル・データベースを同じ情報で更新するには:
 - 1 ページの一番下で、リレーショナル・データベースの更新を適用するデータ・ソースを選択します。

2. 「リレーショナル情報の更新」の下に、新しいデータベース情報を入力します。
 3. 「選択済に適用」をクリックします。
- 複数の Essbase サーバーを同じ情報で更新するには:
 1. ページの一番下で、Essbase 情報の更新を適用するデータ・ソースを選択します。
 2. 「Essbase 情報の更新」の下に、新しい Essbase サーバーの情報を入力します。

Essbase クラスタ名を指定できることに注意してください。
 3. 「選択済に適用」をクリックします。
 - 各データ・ソースを個別に更新するには:
 1. ページの一番下で、更新を適用するデータ・ソースを選択します。
 2. 各データ・ソースの新しい情報を入力します。

3 次のいずれかのオプションを選択します:

- 更新を元に戻すには「リセット」をクリックします。
- 「検証」をクリックし、選択したデータ・ソースへの接続をテストし、表示された問題を解決します。
- 「保存」をクリックし、選択したデータ・ソースの更新を保存します。

4 「次へ」をクリックして、「アプリケーションのアップグレード」ページを表示します。

5 「アプリケーションのアップグレード」ページで、「Relational サーバー」および「Essbase サーバー」の詳細が正しいことを確認します。詳細情報が正しくない場合は、「前へ」をクリックして修正します。「アクション」メニューから 1 つ以上のアプリケーションを選択し、「アップグレード」を選択して、「OK」をクリックして進みます。

アップグレード済のアプリケーションは表示されません。「ステータス」列に、各アプリケーションのアップグレード・ステータスが示されます。

選択したアプリケーションはアップグレードされ、Shared Services に登録されます。リリース 9.3.3 で作成されたアプリケーションは、アップグレード・ウィザードによって Planning スキーマの ID がアップグレードされます。アップグレード後、アプリケーションは、アップグレード前に関連付けられていたのと同じプロジェクトに関連付けられます。プロジェクトに関連付けられていなかったアプリケーションは、デフォルトの Shared Services プロジェクトに割り当てられます。

アプリケーションをアップグレードしている管理者には、それらのアプリケーションに対してプロビジョニング・マネージャの役割が割り当てられます。

メッセージに、合格および不合格のステータスが表示されます。「ステータス」列に各アプリケーションの詳細が表示されます。ログには、すべてのアプリケーションのアップグレードの詳細が記録されます。

アップグレードした各アプリケーションについてのアップグレード・ログ・ファイルは、EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/logs/planning/PlanningAppUpgradeLog_application_name.txt に作成されます。

6 「次」をクリックします。

7 リリース 11.1.2+からの更新の場合のみ: 「レポート用 Essbase サーバーの更新」ページで、レポート・アプリケーションの Essbase サーバー情報を確認または更新します。

アップグレード済で、Essbase サーバー(デフォルトの Essbase サーバー以外のもの)にレポート・アプリケーションが作成されているアプリケーションのみが表示されます。

- 複数のレポート・アプリケーションを同じ情報で更新するには:
 1. ページの一番下で、更新を適用するアプリケーションを選択します。
 2. 「レポート Essbase 情報の更新」の下に、新しい Essbase サーバーの情報を入力します。
 3. 「選択済みに適用」をクリックします。
- 各レポート・アプリケーションを個別に更新するには:
 1. ページの一番下で、更新を適用するレポート・アプリケーションを選択します。
 2. 各アプリケーションについて、新しい Essbase サーバー情報を入力します。

8 次のいずれかのオプションを選択します:

- 更新を元に戻すには「リセット」をクリックします。
- 「検証」をクリックし、選択した Essbase サーバーへの接続をテストし、表示された問題を解決します。
- 「保存」をクリックし、Essbase サーバーの更新を保存します。

9 「取消し」をクリックします。

注: Planning アプリケーションに更新が反映されていない場合、Planning サーバーを停止し、再起動します。

この手順が終了したら、[228 ページの「アップグレード・チェックリスト」](#)に戻ります。

再ホスティングされた Essbase サーバーへの Profitability and Cost Management 参照の更新

この手順を実行する前に Essbase サーバーの再ホスティング手順を実行する必要があります。[257 ページの「再ホスティングされた Essbase サーバーへの参照の更新」](#)を参照してください。

Essbase サーバーのホストおよびポートが前のリリースから変更された場合、Profitability and Cost Management が新しい場所を認識できるよう、更新する必要があります。

▶ 再ホスティングされた Essbase サーバーへの Profitability and Cost Management 参照を更新するには:

1 コマンド・プロンプトを使用して、次のディレクトリに移動します:

EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/upgrades。

2 次のスクリプトを実行します:

```
HPMUpdateEssbaseServer.bat
```

この手順が終了したら、[228 ページの「アップグレード・チェックリスト」](#)に戻ります。

再ホスティングされた Essbase サーバーまたは Financial Management サーバーへの Strategic Finance 参照の更新

この手順を実行する前に Essbase サーバーの再ホスティング手順を実行する必要があります。[257 ページの「再ホスティングされた Essbase サーバーへの参照の更新」](#)を参照してください。

Essbase サーバーのホストおよびポートが前のリリースから変更された場合、Strategic Finance が新しい場所を認識できるように更新します。Financial Management サーバーが前のリリースから変更された場合もこの手順が必要です。

▶ 再ホスティングされた Essbase サーバーまたは Financial Management サーバーへの Strategic Finance 参照を更新するには:

1 Strategic Finance で、「サーバー」メニューから「接続の更新」を選択します。

「接続の更新」ダイアログ・ボックスに、Strategic Finance サーバーにそんざいするすべてのバッチおよびマップが表示されます。

2 「接続タイプ」リストから適切な接続タイプを選択します。

3 再ホスティングされたサーバーに関連のあるバッチまたはマップ・アイテムを選択し、新しいサーバー名を入力して、「選択した項目の更新」をクリックします。

4 再ホスティングされた各サーバー、および関連付けられているバッチまたはマップ・アイテムについて、これらの手順を繰り返します。

この手順が終了したら、[228 ページの「アップグレード・チェックリスト」](#)に戻ります。

再ホスティングされた Essbase サーバーへの Performance Scorecard 参照の更新

この手順を実行する前に Essbase サーバーの再ホスティング手順を実行する必要があります。257 ページの「再ホスティングされた Essbase サーバーへの参照の更新」を参照してください。

Essbase サーバーのホストおよびポートが前のリリースから変更された場合、Essbase がデータ・ソースとして使用されている Performance Scorecard 内の Essbase サーバー・ホストへの参照を更新します。

▶ 再ホスティングされた Essbase サーバーへの Performance Scorecard 参照を更新するには:

- 1 Performance Scorecard で、「管理」、「データ・ソース・リスト」の順に選択します。
- 2 外部データ・ソースの名前を選択し、「編集」をクリックします。
- 3 各タブを選択して、一般的な設定と必要な次元マッピングを変更し、「保存」をクリックします。

この手順が終了したら、228 ページの「アップグレード・チェックリスト」に戻ります。

再ホスティングされたサーバー環境への Integration Services 参照の更新

Integration Services の次のアップグレード・タスクを実行する必要があります。

表 38 Integration Services のアップグレード・タスク

アップグレード・タスク	参照
Integration Services サーバー・ホストが前のリリースから変更されている場合(たとえば新しいマシンにアップグレードした場合)、Integration Services ODBC DSN を、新しいインストールをホストしているマシンで同じ名前を使用して再定義します。	詳細は、Oracle Essbase Integration Services System Administrator's Guide を参照してください。
Integration Services が配置されたアプリケーションの場合、新しい Integration Server の場所をポイントするようにドリルスルーを更新します。これにより、アプリケーションのアウトライン・ファイルが新しい Integration Server の接続情報に更新されていることを確認できます。	273 ページの「ドリルスルー・レポート用の代替 Integration Server の指定」

ドリルスルー・レポート用の代替 Integration Server の指定

すでに配置された Essbase アプリケーションの場合、各 OLAP metaoutline に対して、次の手順を実行します。

▶ ドリルスルー・レポート用にかわりの Integration Services サーバーを指定するには:

- 1 OLAP Metaoutline メイン・ウィンドウで、メタアウトライン名を選択します。

- 2 メタアウトライン名を右クリックし、メニューから「プロパティ」を選択し、次に「ドリルスルー・レポート」タブを選択します。
- 3 「代替 Integration Server」テキスト・ボックスに、ドリルスルー・レポートの実行に使用している新規 Integration Server インスタンスのマシン名およびポート番号(コロンで区切る)を入力します。

Integration Server をデフォルト・ポートで使用している場合、ポート番号を指定する必要はありません。

- 4 「OK」をクリックします。

これらの変更を行った後で、メンバー・ロードを実行するか、「アウトライン」メニューから「ドリルスルー・データの更新」を選択する必要があります。

この手順が終了したら、[228 ページの「アップグレード・チェックリスト」](#)に戻ります。

前のリリースから現在のリリースへのアプリケーションのアップグレード

これをまだ実行していない場合、前のリリースから現在のリリースに、次の製品のアプリケーションをアップグレードします:

- Oracle Hyperion Public Sector Planning and Budgeting または Oracle Project Financial Planning を使用している場合、新機能を利用するには Planning アプリケーションをアップグレードする前にオプションの手順を実行します。Oracle Hyperion Planning Readme を参照してください。
- Planning。アップグレード・ウィザードを使用します。[269 ページの「再ホスティングされたサーバー環境への Planning 参照の更新およびアプリケーションのアップグレード」](#)を参照してください。Essbase サーバー・ホストが前のリリースから変更された場合も、アプリケーションをアップグレードする前にアップグレード・ウィザードを使用してデータ・ソースへの参照を更新します。
- スキーマ更新ユーティリティを使用している FDM。FDM アプリケーションのアップグレードの詳細は、『Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Configuration Guide』を参照してください。

次の製品のアプリケーションは自動的にアップグレードされます:

- Essbase アプリケーションは EPM System コンフィグレータによる構成中に自動的に更新されます。
- Financial Management アプリケーションは EPM System コンフィグレータによる構成中(「旧リリースからのアプリケーションのアップグレード」タスク中)にアップグレードされます。
- Profitability and Cost Management アプリケーションは EPM System コンフィグレータによる構成中にアップグレードされます。

アップグレードでの手動構成タスクの実行

サブトピック

- Performance Management Architect のアップグレード・タスク
- Essbase アップグレード・タスク
- Essbase Studio アップグレード・タスク
- Reporting and Analysis アップグレード・タスク
- Planning のアップグレード・タスク
- Financial Management アップグレード・タスク
- Strategic Finance アップグレード・タスク
- FDMEE アップグレード・タスク
- FDM アップグレード・タスク

Performance Management Architect のアップグレード・タスク

表 39 Performance Management Architect のアップグレード・タスク

アップグレード・タスク	参照
インタフェース・データ・ソースがある場合、EPM Workspace で、「ナビゲート」、「管理」、「インタフェース・データ・ソースの構成」の順に選択し、「インタフェース・データ・ソースの構成」ページで「旧リリースからのデータ・ソースのインポート」を選択します。	
Performance Management Architect がアップグレード後に正しく表示されていることを確認するには、すべてのユーザーが Internet Explorer 内の一時インターネット・ファイルを削除するようにします。	
Financial Management アプリケーションに共有次元が含まれている場合、「アプリケーション・ビュー」ペインでアプリケーションを右クリックして、「すべての関連付けをアクティブにする」を選択します。リリース 11.1.2.2 で拡張次元用に導入された動的プロパティをサポートするには、これが必要です。	
前のバージョンとのデフォルト・プロパティ値の差異を確認し、必要に応じて新しいプロパティ値を設定します。	Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect Administrator's Guide
このリリースでは新しい検証機能が追加されたため、前のリリースで正常に検証されたアプリケーションが、現在のリリースでは検証されない場合があります。検証エラーと警告を確認および解決します。 各アプリケーションを検証するには、アプリケーション・ライブラリでアプリケーションを右クリックし、「検証」を選択します。検証エラーは、ジョブ・コンソールにレポートされます。	Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Architect Administrator's Guide

アップグレード・タスク	参照
<p>アップグレード後に、アプリケーションに「配置との非同期」と表示されることがあります。非同期のすべてのアプリケーションを再配置します。</p> <p>すべてのアプリケーションのステータスを「配置との同期」にしてから、続行する必要があります。</p>	

これらの手順が終了したら、[228 ページの「アップグレード・チェックリスト」](#)に戻ります。

Essbase アップグレード・タスク

サブトピック

- [Essbase データおよびリンク・レポート・オブジェクトのインポート](#)
- [リンク・レポート・オブジェクトの手動インポート](#)
- [Essbase と使用するための Business Rules の Calculation Manager へのインポート](#)

Essbase の次のアップグレード・タスクを実行します。

表 40 Essbase のアップグレード・タスク

アップグレード・タスク	参照
新しいマシンにアップグレードした場合、新しいインストールをホストしているマシンの Essbase ODBC DSN を再定義します。	
新しいマシンにアップグレードした場合、新しいマシンに JAVA オプションを指定します。	
新しいマシンにデータを複製し、「データのエクスポートによるターゲットのディスク・ボリュームまたは表領域の連結」を選択した場合、Essbase データおよびリンク・レポート・オブジェクトをインポートするためのスクリプトを実行します。	276 ページの「Essbase データおよびリンク・レポート・オブジェクトのインポート」
アップグレードされたアプリケーションに 127 個を超えるリンク・レポート・オブジェクトがある場合、リンク・レポート・オブジェクトを手動でインポートします。	277 ページの「リンク・レポート・オブジェクトの手動インポート」
アプリケーションのバックアップを取ることをお勧めします。これにより、確実にバックアップがアップグレードされた形式になります。	
Essbase 限定の Business Rules ユーザーの場合、Business Rules ルールを Calculation Manager に移行する必要があります。	278 ページの「Essbase と使用するための Business Rules の Calculation Manager へのインポート」

これらの手順が終了したら、[228 ページの「アップグレード・チェックリスト」](#)に戻ります。

Essbase データおよびリンク・レポート・オブジェクトのインポート

データを新しいマシンに複製した場合、および「データのエクスポートによるターゲットの連結ディスク・ボリュームまたはテーブルスペース」をデータの複製中

に選択した場合、スクリプトを実行して、アップグレードされたシステムの Essbase データおよびリンク・レポート・オブジェクトをインポートする必要があります。Essbase ステージング・ツールでは、このタスクを実行するためのスクリプトが提供されます。

- ▶ データおよびリンク・レポート・オブジェクトをアップグレードされたマシンにインポートするには:

アップグレードされた Essbase サーバーをホストしているマシンでデータ複製中に定義したエクスポート・データ・ディレクトリに移動し、MaxL を使用して次のスクリプトを実行します:

```
%ARBORPATH%/bin/startMaxl.bat -u
userName
importdata.msh
```

userName は、アップグレードされた Essbase サーバーに接続するための管理者ユーザー名です。スクリプトによって、パスワードを入力するよう求められます。

リンク・レポート・オブジェクトの手動インポート

アップグレードされたアプリケーションに 127 個を超えるリンク・レポート・オブジェクトがある場合、リンク・レポート・オブジェクトを手動でインポートします。

- ▶ リンク・レポート・オブジェクトをインポートするには:

- 1 Essbase サーバーを開始します。
- 2 次の MaxL コマンドを実行して、前のリリースのバックアップ・ディレクトリからリンク・レポート・オブジェクト・データをインポートします:(ステージング・ツールは、残りの Essbase データが含まれるリンク・レポート・オブジェクトを複製しました。)

```
IMPORT database
DBS-NAME
LRO from server directory '
directoryName
';
```

例:

```
MAXL> IMPORT database Sample.Basic LRO from server directory
'Sample-Basic-V1' ;
```

Essbase と使用するための Business Rules の Calculation Manager へのインポート

230 ページの「製品固有のアップグレード前提条件の実行」の説明に従ってルールをエクスポートしたことを確認します。

▶ Essbase と使用するために Business Rules を Calculation Manager にインポートするには:

- 1 Calculation Manager で、「ファイル」、「インポート」の順に選択します。
- 2 エクスポートした XML ファイルを選択し、「インポート」をクリックします。

Essbase Studio アップグレード・タスク

次に示すのは、Essbase Studio をリリース 11.1.2.3 にアップグレードするタスクです。

表 41 Essbase Studio アップグレード・タスク

タスク	参照
リリース 11.1.2 から、FDM URL へのドリルスルーのテンプレートが変更されます。リリース 11.1.1.4 から 11.1.2.3 にアップグレードする場合、Essbase Studio で作成された FDM へのすべてのドリルスルー・レポートを更新します。新しいテンプレートを使用するように、これらのレポートへの URL を変更する必要があります。	Oracle Essbase Studio User's Guide の、FDM URL テンプレートのサンプルに関する項
(オプション)アップグレードでは、旧リリースからの Essbase Studio プロパティは保持されません。アップグレード後のリリースでも同じ設定を使用する場合は、プロパティを再入力する必要があります。 Essbase Studio のプロパティをカスタマイズするには、 <code>server.properties</code> (EPM_ORACLE_INSTANCE/BPMS/bpms/bin にある <code>properties</code> 内)を編集します。詳細は、Oracle Essbase Studio User's Guide を参照してください	

Reporting and Analysis アップグレード・タスク

サブトピック

- [Reporting and Analysis Framework サービス・プロパティの構成](#)
- [Java Web アプリケーション・プロパティの構成](#)
- [DAS データ・ソースのインポート](#)
- [新しい Interactive Reporting 役割の割当て](#)

Reporting and Analysis の次のアップグレード・タスクを実行します。

表 42 Reporting and Analysis のアップグレード・タスク

アップグレード・タスク	参照
オプションで、Reporting and Analysis Framework サービスのプロパティを構成します。	279 ページの「Reporting and Analysis Framework サービス・プロパティの構成」

アップグレード・タスク	参照
オプションで、Reporting and Analysis Framework Java Web アプリケーションのプロパティを構成します。	279 ページの「Java Web アプリケーション・プロパティの構成」
DAS データソースをインポートします。	280 ページの「DAS データ・ソースのインポート」
新しい役割"IR WebClient Viewer"および"IR HTML Viewer"を割り当て、ユーザーが BQY ドキュメントまたはジョブ出力を開ける許可を付与します。	280 ページの「新しい Interactive Reporting 役割の割当て」
Interactive Reporting は、ダッシュボード・オブジェクトを更新します。	Oracle Hyperion Reporting and Analysis Framework Administrator's Guide のインパクト・マネージャに関する項の JavaScript 更新情報

Reporting and Analysis Framework サービス・プロパティの構成

アップグレードすると、前のリリースからの Reporting and Analysis Framework サービスのプロパティは維持されません。

▶ Reporting and Analysis Framework サービスのプロパティを構成するには:

- 1 EPM Workspace で、「ナビゲート」、「管理」、「Reporting and Analysis」、「サービス」の順に選択します。
- 2 サービスを右クリックして「プロパティ」を選択し、プロパティの設定を確認して必要であれば再設定します。

詳細は、Oracle Hyperion Reporting and Analysis Framework Administrator's Guide を参照してください。

Java Web アプリケーション・プロパティの構成

アップグレードすると、前のリリースからの Reporting and Analysis Framework Java Web アプリケーションのプロパティは維持されません。


▶ Reporting and Analysis Framework Java Web アプリケーションのプロパティを構成するには:

- 1 EPM Workspace で、「ナビゲート」、「管理」、「Reporting and Analysis」、「Web アプリケーション」の順に選択します。
- 2 Java Web アプリケーションを右クリックして「プロパティ」を選択し、プロパティの設定を確認して必要であれば再設定します。

詳細は、Oracle Hyperion Reporting and Analysis Framework Administrator's Guide を参照してください。

DAS データ・ソースのインポート

▶ DAS データ・ソースをインポートするには:

- 1 EPM Workspace の「サービス」セクションを開きます(「ナビゲート」、「管理」、「Reporting and Analysis」、「サービス」の順に選択します)。
- 2 「サービス」タブで、Interactive Reporting データ・アクセス・サービスを選択し、 をクリックします。
- 3 「データ・ソース」タブを選択し、「インポート」をクリックします。
- 4 ファイル・システムからソース `server.xml` を選択し、「OK」をクリックします。
データ複製中にコピーした `server.xml` の場所を指定します。
「OK」をクリックすると、新規データ・ソースが表示されます。
- 5 オプション: 新規のデータ・ソースを追加するか、既存のデータ・ソースを変更または削除します。
- 6 「OK」をクリックして、「データ・ソース」タブを終了します。

新しい Interactive Reporting 役割の割当て

役割に基づき、ユーザーの情報へのアクセスを制限するために、2つの役割が追加されました:

- IR HTML Viewer の役割 - HTML ビューワで BQY ドキュメントまたはジョブ出力を開くために必要です。
- IR WebClient Viewer の役割 - Interactive Reporting プラグインで BQY ドキュメントまたはジョブ出力を開くために必要です。

アップグレード後、必要に応じてユーザーにこれら2つの役割を割り当てます。新しい役割はデフォルトで割り当てられていません。役割を割り当てるには2つの方法があります:

- Shared Services を使用して役割をプロビジョニングします。詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System User Security Administration Guide を参照してください。
- 新しい役割をユーザーおよびグループに一括して割り当てるには、Java SDK プログラムを使用します。このプログラムの詳細は `EPM_ORACLE_HOME/products/biplus/SDK/samples/java/AddNewRole.java` を、SDK プログラムの実行方法の詳細は『Hyperion Reporting and Analysis Framework 開発者ガイド』を参照してください。

この手順が終了したら、[228 ページの「アップグレード・チェックリスト」](#)に戻ります。

Planning のアップグレード・タスク

サブトピック

- [Planning と使用するための Business Rules の Calculation Manager への移行](#)
- [ビジネス・ルール・セキュリティの移行](#)

Planning と使用するための Business Rules の Calculation Manager への移行

Business Rules ルールを使用していた場合は、ルールを Calculation Manager ルールに移行します。

移行する前に、Shared Services をアップグレードする際に、同じ SID を持つユーザー・ディレクトリおよびネイティブ・ユーザーが使用可能であることを確認します。

Planning アプリケーションが現在のリリースにアップグレードされ、システム・ビューの Calculation Manager で使用できることを確認します。

▶ Business Rules ルールを Calculation Manager ルールに移行するには:

- 1 Calculation Manager で、移行済の Planning アプリケーションを選択し、「移行」を選択します。

EPM System コンフィグレータでのデータベース構成時にエクスポートされたデータが Calculation Manager にインポートされます。

- 2 Planning アプリケーションごとに繰り返します。

- 3 ルールを Calculation Manager から Planning に配置します。Oracle Hyperion Calculation Manager Designer's Guide を参照してください。

ビジネス・ルールおよびルール・セキュリティを移行した後、ルールに複数の起動場所があり、複数の場所に移行した場合、Calculation Manager は最初の移行に対してルールを作成し、後続のすべての移行にショートカットを作成します。ルールにルールレベルの変数がある場合、新しい環境のアプリケーションで作成されるショートカットに対して、変数が Plan レベルに移動します。このシナリオで、ユーザーの環境でルールをテストして、想定どおりに機能していることを確認します。

ビジネス・ルール・セキュリティの移行

アップグレードされたアプリケーションで Business Rules を使用していた場合、管理者はビジネス・ルールの起動アクセス権およびそのプロジェクトを、Business Rules から Planning の Calculation Manager ビジネス・ルールに HBRMigrateSecurity.cmd ユーティリティを使用して移行できます。

HBRMigrateSecurity.cmd ユーティリティで次の操作を実行します:

- 特定の Planning アプリケーションのビジネス・ルールに割り当てられている起動アクセス権を上書きします。

- Shared Services Console で特定の Planning アプリケーションに提供されるユーザーおよびグループのアクセス権を移行します。

▶ ビジネス・ルールおよびそのフォルダのアクセス権を移行するには:

1 HBRMigrateSecurity.cmd を実行する前に:

- Oracle Hyperion Business Rules から Calculation Manager にビジネス・ルールを移行したことを確認します。
- ビジネス・ルールを Planning に配置したことを確認します。

2 コマンド・ラインで、planning1 ディレクトリから次のコマンドとそのパラメータを入力し、それぞれをスペースによって区切ります:

```
HBRMigrateSecurity.cmd [-f:passwordFile] /A:appname /U:admin /
F:output file
```

表 43 HBRMigrateSecurity のパラメータ

パラメータ	目的	必須?
[-f:passwordFile]	オプション: 暗号化されたパスワードを設定する場合、passwordFile で指定されたファイルのフル・パスおよび名前からパスワードを読み取るため、コマンド・ラインでの最初のパラメータとして使用します。	いいえ
/A: appname	ビジネス・ルールの起動アクセス権を移行する Planning アプリケーションを指定します。	はい
/U: admin	管理者のユーザー名を指定します	はい
/F: output file	XML 出力ファイルの名前を指定します。ファイルが planning1 ディレクトリにない場合は、フル・パスを指定します。このファイルにはトランザクションのログが含まれ、トラブルシューティングに役立ちます。	はい
/?	HBRMigrateSecurity.cmd の構文とオプションを印刷します	いいえ

3 プロンプト表示があればパスワードを入力します。

例:

```
HBRMigrateSecurity.cmd /A:appname /U:admin /F:C:\temp
\HBRExportedSecurity.xml
```

Financial Management アップグレード・タスク

Financial Management の次のアップグレード・タスクを実行します。

表 44 Financial Management のアップグレード・タスク

アップグレード・タスク	参照
EPM Workspace でアプリケーションを再登録します。	283 ページの「EPM Workspace へのアプリケーションの再登録」

アップグレード・タスク	参照
アップグレード中にクラスタ名を変更した場合、新しいクラスタ名を使用してタスク・フローを再作成する必要があります。	

EPM Workspace へのアプリケーションの再登録

▶ EPM Workspace にアプリケーションを登録するには:

- 1 「ナビゲート」メニューから、「連結管理」、「アプリケーションの管理」、「アプリケーションの再登録」の順に選択します。
- 2 クラスタを選択し、アプリケーションを選択し、クラスタ/サーバー、ユーザー管理プロジェクトおよびセキュリティ URL の値を確認し、必要に応じて更新します。
- 3 「登録」をクリックします。
- 4 各アプリケーションについて繰り返します。
- 5 すべてのアプリケーションを登録した後、Foundation Services および Web サーバーを再起動します。

この手順が終了したら、[228 ページの「アップグレード・チェックリスト」](#)に戻ります。

Strategic Finance アップグレード・タスク

注： Strategic Finance クライアントをスタンドアロン・プログラムとして使用する場合、新しいリリースで既存の .alc ファイルを開くと、Strategic Finance でデータがアップグレード・フォーマットに変換されます。クライアント・サーバー実装を使用し、構成時にアップグレード済 Strategic Finance サーバーに既存のデータベースを指定すると、サーバーの最初の起動時に該当するデータベースが変換され、各エンティティはユーザーの要求により開かれます。また、管理者は、Strategic Finance 管理者ユーティリティを使用してデータベース内の 1 つ以上のエンティティを強制的に変換できます。

表 45 Strategic Finance アップグレード・タスク

タスク	参照
リリース 11.1.1.4 からアップグレードしている場合、Strategic Finance 移行ユーティリティを使用して、前のリリースから現在のリリースに Strategic Finance プロビジョニングを移行します。	283 ページの「Strategic Finance プロビジョニング情報のアップグレード」

Strategic Finance プロビジョニング情報のアップグレード

リリース 11.1.1.4 からアップグレードしている場合、Strategic Finance 移行ユーティリティを使用して、前のリリースから現在のリリースに Strategic Finance プロビジョニング情報を移行します。

注： Shared Services リリース 11.1.2.3 を実行している必要があります。

▶ プロビジョニング情報をアップグレードするには:

- 1 EPM_ORACLE_HOME/products/hsf/scripts に移動し、テキスト・エディタで setenv.bat を開きます。
- 2 ファイルの次の部分で、EPM_ORACLE_INSTANCE の場所を指定します:

```
rem ***** EPM_ORACLE_INSTANCE needs to be defined, please complete the
environment variable definition below
rem * ex:
rem * set EPM_ORACLE_INSTANCE=C:\Oracle\Middleware\user_projects\epmsystem1
rem *
rem *****
set EPM_ORACLE_INSTANCE=
```

デフォルトのインストールでは、EPM_ORACLE_INSTANCE は Oracle/Middleware/user_projects/epmsystem1 です。

- 3 コマンド・プロンプトを使用して、次のディレクトリに移動します:

```
EPM_ORACLE_HOME
/products/hsf/scripts
```

- 4 次のコマンドを実行します:

```
ProvisioningMigrator.cmd /S:
earlierReleaseServerName
/U:
userName
```

ここで、userName は管理ユーザーです。

FDMEE アップグレード・タスク

次の FDMEE アップグレード・タスクを実行します。

表 46 FDMEE アップグレード・タスク

タスク	参照
FDMEE に基づかないデータ・ロード方式のターゲット・アプリケーションを使用している場合、データ・ロードを実行する前に期間マッピングを作成します。期間マッピングの構造が異なるため、期間マッピングはリリース 11.1.1.4 からリリース 11.1.2.3 にアップグレードされません。	285 ページの「 期間マッピングの更新 」

これらの手順が終了したら、[228 ページの「アップグレード・チェックリスト」](#)に戻ります。

期間マッピングの更新

▶ 期間マッピングを更新するには:

- 1 FDMEE で、「設定」の「期間マッピング」を選択します。
- 2 グローバル期間マッピングを定義し、必要に応じてアプリケーション期間マッピングを追加します。

▶ メタデータをリフレッシュするには:

- 1 FDMEE で、「ターゲット・アプリケーション」を選択します。
- 2 アプリケーションを選択して、「メタデータのリフレッシュ」をクリックします。

詳細は、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management, Enterprise Edition Administrator's Guide を参照してください。

FDM アップグレード・タスク

アップグレードのインストールおよび構成後、EPM System インストーラによってインストールされた Oracle Database Client のエントリが MIDDLEWARE_HOME/dbclient32 および MIDDLEWARE_HOME/dbclient64 に含まれるように user_projects\config\dbclient\tnsnames.ora を更新します。これによってスキーマ更新ユーティリティがデータベースに接続できるようになります。

アップグレードする場合は、FDM を構成し、アプリケーションをアップグレードします。FDM をアップグレードする場合の構成タスクは、次のとおりです:

- Web サーバー・コンポーネントの構成
- タスク・マネージャの構成
- アプリケーション・サーバー・コンポーネントの構成
- ロード・バランス・マネージャの構成
- ワークベンチの構成
- スキーマ更新ユーティリティを使用したアプリケーションのアップグレード。データを新しい場所に複製した場合、最初にアプリケーションを追加するように要求されます。アプリケーションを追加する際は、アプリケーションごとに、複製した FDM データ・フォルダおよびデータベース情報を指定します。
- アダプタの構成
- Shared Services へのユーザーおよびグループの初回転送(旧リリースの FDM で Shared Services セキュリティが使用されていなかった場合)。

FDM のアップグレードの詳細は、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Configuration Guide を参照してください。

Smart View のアップグレード

Smart View をアップグレードするには、いくつかの方法があります:

- ユーザーが EPM Workspace から Smart View をインストール: 「ツール」メニューから「インストール」、「Smart View」の順に選択します。
- Smart View インストーラを使用して Smart View をクライアント・マシンにインストールする。97 ページの「EPM System クライアントのインストール」を参照してください。また、このインストーラを起動して Smart View をサイレント・インストールすることもできます。
- 前のリリースの EPM System 製品とともに Smart View リリース 11.1.2.3 を使用する場合、サポートされたバージョンの Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System の動作保証マトリックスを確認してください。

複数のリリースを含む環境からのアップグレード

サブトピック

- [Shared Services のインスタンスが 1 つの環境からのアップグレード](#)
- [Shared Services のインスタンスが 2 つの環境からのアップグレード](#)

複数のリリースを含む環境からアップグレードする場合、次の情報を参照してアップグレードを計画してください。複数のシナリオが存在するため、配置に該当する手順を実行してください。これらのシナリオでは、すべての EPM System 製品を現在のリリースにアップグレードする必要があります。

Shared Services のインスタンスが 1 つの環境からのアップグレード

Shared Services (リリース 11.1.1.4)のインスタンスが 1 つの環境からアップグレードする場合は、228 ページの「アップグレード・チェックリスト」に説明されているようにアップグレードを実行します。

まず、リリース 11.1.1.4 製品のアップグレードを実行します。最初に Foundation Services を構成する必要があることに注意してください。次に、すべてのリリース 9.3.3 製品のアップグレード・タスクを実行します。

注: Essbase のインスタンスを複数アップグレードする場合、アップグレードする各インスタンスに対し、リリース 11.1.2.3 で新しいインスタンスを作成する必要があります。

Shared Services のインスタンスが 2 つの環境からのアップグレード

Shared Services のインスタンスが 2 つ(リリース 11.1.1.3、11.1.1.4、9.3.3 のいずれかとリリース 11.1.2)の環境からアップグレードする場合、次の手順でアップグレードします。

▶ Shared Services のインスタンスが 2 つの環境をアップグレードするには:

- 1 EPM System インストーラを使用して、「メンテナンス・リリースの適用」オプションによって、Foundation Services、Financial Close Management および Disclosure Management を、11.1.2.0 または 11.1.2.1 からリリース 11.1.2.3 に移行します。

Financial Close Management にメンテナンス・リリースを適用する場合、204 ページの「Financial Close Management のメンテナンス・リリースのインストール・チェックリスト」を参照してください。

- 2 EPM System コンフィグレータを使用して Foundation Services、Financial Close Management および Disclosure Management を構成します。

Foundation Services のデータベース構成中に、「現在のリリースにアップグレードする既存のデータベース」を選択し、リリース番号を選択し、「旧リリースからのデータのインポート」を選択します。

- 3 これらの製品に必要な構成後のタスクを実行します。第 9 章「新しい配置での手動構成タスクの実行」を参照してください。
- 4 アップグレード・チェックリストを使用して、Shared Services 以外のすべてのリリース 11.1.1.4 製品を、リリース 11.1.2.3 にアップグレードします。Shared Services を再度インストールする必要はありません。ただし、Shared Services データをエクスポートし、構成タスクを実行する必要があります。次の順序で、製品ごとにアップグレード・タスクを実行します:

- Foundation Services。タスクを実行して、Shared Services データをエクスポートします。233 ページの「前のリリースの Shared Services データのエクスポート」を参照してください。EPM System コンフィグレータによる構成中に、Shared Services を構成する際に、「旧リリースからのデータのインポート」のみを選択します。
- Essbase
- すべてのその他の製品

注: Essbase のインスタンスを複数アップグレードする場合、アップグレードする各インスタンスに対し、リリース 11.1.2.3 で新しいインスタンスを作成する必要があります。

アップグレード・プロセスの詳細は、228 ページの「アップグレード・チェックリスト」を参照してください。

- 5 Disclosure Management クライアントでレポートを開く場合、リリース 11.1.2.0、11.1.2.1 または 11.1.2.2 からの Disclosure Management マッピングがリリース 11.1.2.3 に移行されます。(マッピングは、各レポートに個別に移行されます。)マスター・

ドキュメント(ドックレットではなく)を開いて移行を実行することをお薦めします。移行を正常に完了させるには、すべてのドックレット・ファイルを…
_doclets に格納する必要があります。

アプリケーションのアップグレード・プロセスの繰り返し

このリリースのアップグレード・ロジックは、新規のソフトウェア・リリースを配置し、以前の配置から新規の配置にアプリケーション、データおよびプロビジョニング情報を移動することに基づいています。この方法では、アップグレード・プロセスを繰り返すことができます。新規データベースから始め、既存の構成を削除して、記載のとおりアップグレード・プロセスを繰り返します。

▶ アプリケーションのアップグレード・プロセスを繰り返すには:

- 1 既存の 11.1.2.3 の配置をバックアップします。
- 2 配置内のマシンごとに、既存の user_projects フォルダを別の名前に変更して、使用から削除します。
- 3 [228 ページの「アップグレード・チェックリスト」](#)に記載されている通常の 11.1.2.3 のアップグレード手順に従って配置を再構成します。
 - Shared Services レジストリに新規データベースを使用します
 - 複製された(以前のリリースの)本番データベースを再利用します

注： この手順を必要に応じて繰り返し、以前のリリースから最新のデータを取得します。

この章の内容

単一スクリプトを使用したサービスの開始	289
クライアントの起動	290

この章では、EPM System サービスおよびアプリケーションの起動および停止方法を説明し、EPM System クライアントのデフォルトの URL を提供します。

サービスまたはプロセスを開始する前に、リポジトリとして使用されるすべてのデータベースを開始します。データベースを起動すると、Financial Close Management を除いて EPM System に必要な起動順序はありません。

注意 Financial Close Management を構成するために SOA サーバーを開始している場合は、EPM System のサービスを開始する前に SOA サーバーを停止してください。Financial Close Management を使用している場合は、必要なサービス起動順序を344 ページの「Financial Close Management アプリケーション・サーバー」で確認してください。

注：「Windows サービスをローカル以外のシステム・アカウントとして実行」を選択し、EPM System コンフィグレータの「共通設定の構成」パネルでユーザー名およびパスワードを指定した場合、Windows サービスは指定されたユーザー名を使用して開始されます。ユーザー名およびパスワードを指定しなかった場合、EPM System コンフィグレータがローカル・システム・アカウントを使用して Windows サービスを作成します。サービスを開始する前に、適切なドメイン・アカウントに変更してください。

単一スクリプトを使用したサービスの開始

EPM System インストーラは、start.bat|sh という単一開始スクリプトを EPM_ORACLE_INSTANCE/bin にインストールします。EPM System 配置内のマシンで単一開始スクリプトを実行すると、そのマシンにインストールされているすべての EPM System サービスが開始されます。各製品の個々の開始スクリプトを呼び出すと、単一開始スクリプトが機能します。

起動スクリプトを実行しているユーザーは、管理者グループのメンバーである必要があります。

▶ EPM System サービスを開始するには:

- 1 「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE_NAME、「Foundation Services」、「EPM System の起動」の順に選択します。
- 2 環境内の各マシンでこの開始スクリプトを実行します。

単一の開始スクリプトが完了した後、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System 診断を実行して、マシン上でどのサービスが実行中かを判断できます。第 13 章「インストールの検証と配置の確認」を参照してください。

単一停止スクリプト stop.bat|sh も、EPM_ORACLE_INSTANCE/bin にインストールされます。EPM System 配置内のマシンで停止スクリプトを実行すると、そのマシン上のすべての EPM System 製品が停止します。

クライアントの起動

この項では、EPM System クライアントの起動方法を説明します。デフォルトの URL および必要に応じてスクリプト名をリストします。ほとんどのクライアントは、Windows の「スタート」メニューを使用して起動することもできます。

次の表に、EPM System クライアントを起動するための URL とスクリプトを示します。

サーバーまたはクライアントから Java Web アプリケーションに接続するには、URL の Web サーバー・ポート(machine_name:web_server_port)を使用する必要があります。たとえば、machine_name:19000 は Oracle HTTP Server のデフォルトで、machine_name:9000 はプロキシ・サーバーのデフォルトです。

表 47 クライアントの起動

クライアント	URL	スクリプトまたはその他の起動メソッド
Oracle Hyperion Shared Services Console	http://WebServer:Port/interop/	「スタート」メニューから、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE、「Foundation Services」、「Shared Services URL」の順に選択します。 注： この「スタート」メニュー・アイテムは、Web サーバーをインストールしたマシンにのみ表示されます。
EPM Workspace	http://WebServer:Port/workspace/	「スタート」メニューから、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE、「Workspace」、「Workspace URL」の順に選択します。 注： この「スタート」メニュー・アイテムは、Web サーバーをインストールしたマシンにのみ表示されます。
Data Relationship Management Web クライアント	http://drm_web_server_name/drm-web-client	「スタート」メニューから、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE、「Data Relationship Management」、「Web Client」の順に選択します。
Data Relationship Management 移行ユーティリティ	http://drm_web_server_name/drm-migration-client	「スタート」メニューから、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE、「Data Relationship Management」、「移行ユーティリティ」の順に選択します。

クライアント	URL	スクリプトまたはその他の起動メソッド
Data Relationship Management バッチ・クライアント	N/A	Windows コマンド・ライン・プロンプトから、EPM_ORACLE_HOME/products/DataRelationshipManagement/client/batch-client/drm-batch-client.exe を実行します。
Disclosure Management	N/A	N/A
管理サービス・コンソール	http:// WebServer:port/ easconsole/ console.html	「スタート」メニューから、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE、「Essbase」、「Essbase Administration Services」、「管理サービス・コンソールの開始」の順に選択します。
Integration Services コンソール	N/A	「スタート」メニューから「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE、「Essbase」、Integration Services、「コンソール」の順に選択します。 または EPM_ORACLE_HOME/products/Essbase/eis/console/bin/startOlapbldr.bat
Essbase クライアント	NA	「スタート」メニューから、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE、「Essbase」、「Essbase クライアント」の順に選択します。
Essbase Studio コンソール	NA	「スタート」メニューから「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE、「Essbase」、「Essbase Studio」、「Essbase Studio コンソール」の順に選択します。 または EPM_ORACLE_HOME/products/Essbase/EssbaseStudio/Console/startStudio.bat
FDM Web クライアント	http:// WebServerName/ HyperionFDM	N/A
FDM ワークベンチ・クライアント	N/A	「スタート」メニューから「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE、「Financial Data Quality Management」、ワークベンチ、「ワークベンチ・クライアント」の順に選択します。
Financial Management クライアント	N/A	「スタート」メニューから、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE、「Financial Management」、「Financial Management」の順に選択します。 または 32 ビットの場合: EPM_ORACLE_HOME/products/FinancialManagement/Client/HFM.exe 64 ビットの場合: EPM_ORACLE_HOME/products/FinancialManagement/Client/32bit/HFM.exe

クライアント	URL	スクリプトまたはその他の起動メソッド
Financial Reporting Studio	N/A	<p>「スタート」メニューから「プログラム」、「Oracle」、「Financial Reporting Studio」の順に選択します。</p> <p>または</p> <pre>%ProgramFiles%/Oracle/FinancialReportingStudio/HReports.exe</pre>
Interactive Reporting	N/A	<p>「スタート」メニューから「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE、「Reporting and Analysis」、「Interactive Reporting」、「Dashboard Architect」の順に選択します。</p> <p>「スタート」メニューから「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE、「Reporting and Analysis」、「Interactive Reporting」、「Dashboard Studio」の順に選択します。</p> <p>「スタート」メニューから「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE、「Reporting and Analysis」、「Interactive Reporting」、「Studio」の順に選択します。</p>
Interactive Reporting Studio	N/A	<p>「スタート」メニューから「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE、「Reporting and Analysis」、「Interactive Reporting」、「Studio」の順に選択します。</p> <p>または</p> <pre>EPM_ORACLE_HOME/products/biplus/bin/brioqry.exe</pre>
Performance Management Architect	N/A	<p>ファイル・ジェネレータ:</p> <p>「スタート」メニューから、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE、「Performance Management Architect クライアント」、「EPMA ファイル・ジェネレータの起動」の順に選択します。</p> <p>または</p> <pre>EPM_ORACLE_HOME/products/Foundation/BPMA/EPMAFileGenerator/bin/EPMAFileGenerator.exe</pre> <p>バッチ・クライアント:</p> <p>「スタート」メニューから、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE、「Performance Management Architect」、「EPMA バッチ・クライアントの起動」の順に選択します。</p> <p>または</p> <pre>EPM_ORACLE_HOME/products/Foundation/BPMA/EPMABatchClient/epma-batch-client.bat</pre>
Planning オフライン	N/A	なし
予測プランニング	N/A	なし
Production Reporting	N/A	<p>「スタート」メニューから「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE、「Reporting and Analysis」、そして「Production Reporting Studio」または「Production Reporting Viewer」の順に選択します。</p>

クライアント	URL	スクリプトまたはその他の起動メソッド
Smart View	NA	Microsoft Excel、Microsoft Word、Microsoft PowerPoint の「Smart View」メニュー、または「Oracle Hyperion Smart View for Office」リボンを使用します。
Strategic Finance クライアント	NA	「スタート」メニューから「プログラム」、「Oracle」、「Strategic Finance」の順に選択します。 または EPM_ORACLE_HOME/products/hsf/bin/HSF.exe
Strategic Finance サーバー管理		「スタート」メニューから、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE、「Strategic Finance」、「サーバー」、サーバー管理の順に選択します または EPM_ORACLE_HOME/products/hsf/bin/HSFAdmin.exe
Oracle Hyperion Web Analysis Studio	Sun Java プラグインは、Web Analysis Studio の初回使用時にインストールされます。Web Analysis Studio を起動するには、Web ブラウザのアドレス・バーに Web Analysis Studio の URL http:// WebServer:Port/ WebAnalysis を入力します	「スタート」メニューから、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE、「Reporting and Analysis」、Web Analysis URL の順に選択します。

この章の内容

インストールの検証	295
配置レポートの生成	297
配置の確認	298
Financial Close Management の配置の検証	301

インストールの検証

EPM System 診断はインストールされて構成された EPM System コンポーネントの接続性をテストします。配置されている各マシンで EPM System 診断を実行します。テストの結果は、HTML フォーマットで保存されます。

EPM System Diagnostics を同じユーザーとして、インストール、構成および実行する必要があります。

前提条件

EPM System 診断を使用する前に、次の前提条件を整えます:

- EPM System 製品をインストールします。第 5 章「新しい配置での EPM System 製品のインストール」を参照してください。
- Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System コンフィグレータを使用して各製品に必要な構成タスクをすべて実行します。第 6 章「新しい配置での EPM System 製品の構成」を参照してください。
- 構成後のタスクを実行します。
第 9 章「新しい配置での手動構成タスクの実行」を参照してください。
- EPM System サービスを起動する。
第 12 章「EPM System 製品の開始と停止」を参照してください。

EPM System 診断の使用方法

▶ EPM System 診断を実行するには:

- 1 方法を選択します:

- (Windows) EPM_ORACLE_INSTANCE/bin で、validate.bat をダブルクリックします。
- 「スタート」メニューから、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「インスタンス名」、「Foundation Services」、「EPM System 診断」の順に選択します。
- (UNIX) コンソールから、EPM_ORACLE_INSTANCE/bin に移動して、validate.sh と入力します。

コマンド・ウィンドウに進行状況が表示されます。

2 結果を表示するには、EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/reports に移動して、validation_report_date_time.html を開きます。

3 失敗したテストを探し、問題を診断して修正します。

EPM System 診断では、便宜上 EPM_ORACLE_INSTANCE/logszips にすべてのログの ZIP ファイルが作成されます。

ログの詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Troubleshooting Guide を参照してください。

4 EPM System 診断をもう一度実行し、レポートを表示して問題が解決されたことを確認します。

注： ブラウザのリフレッシュ・ボタンをクリックしてもレポート出力はリフレッシュされません。

5 分散環境では、配置内の各マシン上で EPM System 診断を実行します。

レポートには、次の情報が取り込まれます：

- テストの日付と時刻
- テスト・ステータス: 各テストの成功または失敗
- サービス: 各テストのテスト・タイプ
- テストの説明: 各テストの詳しい説明
- 時間: 各テストの所要時間
- テストの開始時刻
- テストの終了時刻
- テスト時間の合計

診断の実行

次のリストに、EPM System 製品に対して実行される Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System 診断テストの概要を示します。

- CFG: 構成 - すべての構成タスクが完了したかどうかを確認します
- DB: データベース - データベース host:port;databaseName への接続を確認します
- EXT: 外部認証 - ネイティブ・ディレクトリ外部認証プロバイダ構成を確認します

- HTTP: http - Web サーバー用に構成された全コンポーネントの HTTP コンテキストの可用性を確認します。
- SSO:
 - Shared Services セキュリティ(ネイティブ・ディレクトリおよび外部ディレクトリ)のステータスを確認します
 - Shared Services、タスクフロー、監査、Shared Services Java Web アプリケーションおよび Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System ライフサイクル管理へのログインの可否を確認します
- WEB: Web アプリケーション - host:port における Java Web アプリケーションの可用性を確認します
- 追加製品固有のテスト

配置レポートの生成

EPM System の配置が完了したら、次の情報がリストされた配置レポートを生成できます:

- EPM 配置トポロジ・レポート
 - 論理 Web アドレス - 構成されているすべての論理 Java Web アプリケーションおよびすべての Web サーバー
 - アプリケーション層コンポーネント - この配置で EPM インスタンスごとに構成されたコンポーネント(各 Java Web アプリケーションの Java Web アプリケーション URL およびドメイン名を含む)
 - データベース接続 - EPM System 製品用に構成されたすべてのデータベース
 - ユーザー・ディレクトリ - EPM System 製品で使用されるユーザー・ディレクトリ; 構成済のセキュリティ・プロバイダは、Oracle Hyperion Shared Services で構成されているのと同じ順序でリストされます
 - データ・ディレクトリ - EPM System 製品で使用されるデータ・ディレクトリ(共有ファイル・システムで必要とされるディレクトリを含む)
- EPM 配置履歴レポート - 配置内の各サーバーの指定日におけるアクティビティの構成履歴

このレポートは、配置内で発生する問題の解決に役立ちます。たとえば、このレポートを使用して、WebLogic ドメインが 1 つしかないことや、配置が正しい数のデータベース・スキーマをポイントしていることを確認できます。配置レポートは、Oracle Hyperion Shared Services Registry データベースから作成されます。配置内の任意のサーバからレポートを生成でき、これには Oracle Enterprise Performance Management System サービスが実行されている必要があります。

レポートには配置履歴を示す追加セクションがあります

▶ 配置レポートを生成するには:

- 1 コマンドライン・ウィンドウを開き、EPM_ORACLE_INSTANCE/bin に移動します。

- 2 コマンド `epmsys_registry.bat|.sh report deployment` を実行します。

デフォルトでは、レポートは `EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/reports/deployment_report_YYYYMMDD_HHMMSS.html` として保存されます。

オプションのファイル名引数をコマンドに追加すると、別のファイル名で、または別の場所に HTML レポートを保存できます。たとえば、次のコマンドを実行すると、レポートが `c:/epm_setup/epm_deployment.html` として保存されます:

```
epmsys_registry.bat|.sh report deployment c:/epm_setup/epm_deployment
```

配置の確認

サブトピック

- [Shared Services 配置の確認](#)
- [EPM Workspace 内の EPM Workspace 配置および製品の確認](#)
- [Financial Close Management の追加確認](#)
- [Administration Services 配置の確認](#)
- [Provider Services 配置の確認](#)

Shared Services 配置の確認

▶ 配置を確認するには:

- 1 「スタート」メニューから、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「インスタンス名」、「Foundation Services」、「Shared Services URL」の順に選択します。または、Web ブラウザを使用して次を開きます:

```
http://  
Hostname.Example.Com:WebServerListenPort  
/interop/
```

- 2 **Shared Services** にログオンします。
- 3 `MIDDLEWARE_HOME/user_projects/domains/EPMSystem/servers/SERVER_NAME/logs` にある **WebLogic** 管理対象サーバーの出力を確認します。
- 4 `EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/logs` にある製品ログを確認します。また、`EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/reports` にある診断レポートを確認することもできます。

EPM Workspace 内の EPM Workspace 配置および製品の確認

▶ 配置を確認するには:

- 1 「スタート」メニューから「プログラム」、「Oracle EPM System」、「インスタンス名」、「Workspace」、「Workspace URL」の順に選択します。または、Web ブラウザで次のページを開きます。

```
http://  
Hostname.Example.Com:WebServerListenPort  
/workspace/
```

- 2 MIDDLEWARE_HOME/user_projects/domains/EPMSystem/servers/
SERVER_NAME/logs にある WebLogic 管理対象サーバーの出力を確認します。
- 3 EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/logs にある製品ログを確認します。また、EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/reports にある診断レポートを確認することもできます。
- 4 EPM Workspace の「ヘルプ」メニューから「バージョン情報」を選択し、「詳細」セクションで、インストールされている製品のリストを確認します。
- 5 リストされた各製品を EPM Workspace から起動します。EPM Workspace から起動できる製品は、次のとおりです:

- Reporting and Analysis Framework
- Financial Reporting
- Oracle Hyperion SQR Production Reporting
- Web Analysis
- Planning
- Financial Management
- Performance Scorecard
- Profitability and Cost Management

EPM Workspace で Profitability and Cost Management にアクセスして配置を確認する前に、いくつかの初期タスクを実行する必要があります。『Oracle Hyperion Profitability and Cost Management 管理者ガイド』を参照してください。

- Performance Management Architect
- Calculation Manager
- FDMEE
- Financial Close Management。追加の Financial Close Management 確認を実行するには、300 ページの「Financial Close Management の追加確認」を参照してください。

Financial Close Management の追加確認

- ▶ Oracle SOA サーバーと Financial Close Management が通信しているかどうかを確認するには:
 - 1 Financial Close Management を起動した後、本日の日付が含まれる範囲を使用してスケジュールを作成します。
 - 2 本日の日付で「基本タスク・タイプ」を使用してタスクを作成しますが、開始時刻は現在の時刻より前に設定します。
 - 3 「スケジュールの管理」に移動し、スケジュールを強調表示し、「ステータスの設定」を実行してから、ステータスを「オープン」に変更します。
 - 4 「開く」をクリックし、「タスク・リスト」ビューでスケジュールを開きます。
タスクは開始予定時間を過ぎているため、タスクの状態が保留中から実行中(緑色の三角形)に変わります。

Administration Services 配置の確認

- ▶ 配置を確認するには:
 - 1 Web ブラウザを使用して、次を開きます:

```
WebServer
:
port
/easconsole/console.html
```

- 2 Java Web Start コンソールを使用して、Administration Services にログオンします。
- 3 MIDDLEWARE_HOME/user_projects/domains/EPMSysstem/servers/ SERVER_NAME/logs にある WebLogic 管理対象サーバーの出力を確認します。
- 4 EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/logs にある製品ログを確認します。また、EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/reports にある診断レポートを確認することもできます。

Provider Services 配置の確認

- ▶ 配置を確認するには:
 - 1 Web ブラウザを使用して、次を開きます:

```
http://
Hostname.Example.Com:WebServerListenPort
/aps/APS
```

- 2 MIDDLEWARE_HOME/user_projects/domains/EPMSysstem/servers/ SERVER_NAME/logs にある WebLogic 管理対象サーバーの出力を確認します。

- 3 EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/logs にある製品ログを確認します。また、EPM_ORACLE_INSTANCE/diagnostics/reports にある診断レポートを確認することもできます。

Financial Close Management の配置の検証

Financial Close Management 検証ツールは、Financial Close Management の正常な機能に必要なシステム構成設定をスキャンします。インストールおよび構成手順を実行して、Financial Close Management のコンポーネントが正しく配置および構成されていることをテストした後、Financial Close Management 検証ツールを実行することをお勧めします。

▶ Financial Close Management 検証ツールを使用するには:

- 1 Web ブラウザから、次の URL を開きます:

```
FCMHOST
:
FCMPORT
/fcc/faces/oracle/apps/epm/fcc/ui/page/FCCValidation.jspx
```

ここで、FCMHOST は Financial Close Management を構成するマシンで、FCMPORT はポート 8700 です。WebLogic 管理コンソールからこの情報を確認できます。この情報を表示するには、管理コンソールにログインし、「環境」、「サーバー」の順に移動します。

- 2 外部プロバイダのユーザーで Financial Close Management 検証ツールにログインします。外部プロバイダ構成に問題がある場合、シードされているユーザー(WebLogic サーバーおよび Shared Services ネイティブ・ディレクトリでシードされている)でログオンし、ツールを実行して外部プロバイダ構成の問題を識別します。
- 3 次の各ステータスを確認します:

表 48 Financial Close Management の検証テスト

検証項目	結果
管理サーバー	ホスト ポート ステータス(実行/シャットダウン)
Foundation Services サーバー	ホスト ポート ステータス ターゲットのデータ・ソース
Financial Close 管理対象サーバー	ホスト ポート ステータス ターゲットのデータ・ソース

検証項目	結果
SOA サーバー	ホスト ポート ステータス ターゲットのデータ・ソース SOA-infra ステータス
FCM Web アプリケーション	バージョン ステータス DB タイプ
外部 JNDI	EDN JMS (SQL Server 用) SOA JMS
認証プロバイダ	EPM ID アサータ・プロバイダ情報 Lib OVD 構成ステータス
外部 Idstore	外部 ID ストア構成をリストします。ツールは、構成に使用する値をリストします。入力された値が正しいことを確認する必要があります。
SOA コンポジット	SOA コンポジットとステータスのリスト
OWSM キーストア	実際に存在する場合、jps-config.xml で参照するキーストア。

- 4 失敗したテストを探し、問題を診断して修正します。
- 5 すべてのテストに成功するまで、Financial Close Management 検証ツールを再実行します。

Financial Close Management 検証ツールの後半には、テストのメイン編成プロセスを生成して、SOA サーバーに配置し、テスト・タスクを開始するユーティリティがあります。表に、各タスクのステータス、エラーの考えられる原因およびエラーの修正手順が表示されます。先に進む前に、Financial Close Management 検証ツールにログインしているユーザーが Shared Services ユーザーでもあることを確認します。

- 6 「テスト・スケジュールの検証」をクリックします。

表 48 のすべての必要な構成テストがエラーなしで成功した場合のみ、「テスト・スケジュールの検証」ボタンを使用できます。

- 7 次のタスクのステータスを確認します:

- SOA コンポジット配置
- ビジネス・イベント
- コンポジット・インスタンス
- FCM 基本タスク
- ヒューマン・ワークフロー

エラーがある場合、テストの SOA コンポジットおよびテストの FCCTaskExecutionComposite インスタンスは削除されず、Enterprise Manager コ

ンソールからエラーの詳細を確認できます。すべての検証項目が正常な場合、テストのコンポジットおよびインスタンスが削除されます。

▶ Account Reconciliation 検証ツールを使用するには:

- 1 Web ブラウザから、次の URL を開いて Account Reconciliation Manager 検証ツールを実行します。

```
FCMHOST
:
FCMPORT
/arm/faces/oracle/apps/epm/arm/ui/page/common/ARMValidation.jspx
```

ここで、FCMHOST は Financial Close Management を構成するマシンで、FCMPORT は WebLogic 管理コンソールの FinancialClose0 管理対象サーバーのリスニング・ポートです。WebLogic 管理コンソールからこの情報を確認できます。この情報を表示するには、管理コンソールにログインし、「環境」、「サーバー」の順に移動します。

- 2 Account Reconciliation 検証ツールに Shared Services 管理ユーザーでログインします。
- 3 「Account Reconciliation Manager 構成の検証」をクリックします。
- 4 次の各ステータスを確認します:

表 49 Financial Close Management の検証テスト

検証項目	結果
管理サーバー	ホスト ポート ステータス(実行/シャットダウン)
Foundation Services サーバー	ホスト ポート ステータス ターゲットのデータ・ソース
Financial Close 管理対象サーバー	ホスト ポート ステータス ターゲットのデータ・ソース
SOA サーバー	ホスト ポート ステータス ターゲットのデータ・ソース SOA-infra ステータス

検証項目	結果
ARM Web アプリケーション	バージョン ステータス DB タイプ
認証プロバイダ	プロバイダ(構成済/未構成) 制御フラグ(十分/不十分)
外部認証	認証プロバイダをリストします
SOA コンポジット	SOA コンポジットとステータスのリスト
外部 JNDI	EDN JMS (SQL Server 用) SOA JMS
OWSM キーストア	外部 ID ストア構成をリストします。ツールは、構成に使用する値のみをリストします。入力した値が正しいことを確認するのは顧客の責務です。警告は無視できます。

- 5 失敗したテストを探し、問題を診断して修正します。
- 6 すべてのテストが合格するまで Account Reconciliation 検証ツールを再度実行します。



ポート

この付録の内容

デフォルトのポートと Shared Services レジストリ	305
WebLogic 管理サーバー・ポート	306
WebSphere ポート	306
Oracle Enterprise Manager Java Web アプリケーションのポート	307
SOA サーバー・ポート	307
SSL ポート	307
Foundation Services のポート	307
Essbase のポート	309
Reporting and Analysis のポート	310
Financial Performance Management アプリケーションのポート	312
データ管理のポート	315

この付録には、EPM System 製品のデフォルト・ポート番号に関する情報(ポートを構成可能な場所を含む)が記載されています。

注意 これらのポートは、製品のアクセスのために使用するものではありません。製品の開始に関する情報は、第 12 章「EPM System 製品の開始と停止」を参照してください。

デフォルトのポートと Shared Services レジストリ

構成プロセス中、ほとんどの EPM System 製品では、デフォルトのポート番号が Shared Services Registry に自動的に移入されます。構成時に EPM System コンフィグレータを使用して、デフォルトの番号を変更できます。マシンの各ポート番号は一意であることが必要です。(別のマシン上の同じ製品のポート番号は同じにできません。)「ポートはすでに使用されています」や「バインド・エラー」のようなエラー・メッセージが表示された場合は、ポート番号が競合している可能性があります。

デフォルトのポートがマシンですでに使用されている場合や、競合している場合、EPM System コンフィグレータは処理を続行しません。デフォルトのポート番号が変更されていない場合、ソフトウェアはデフォルトの値で構成されます。

WebLogic 管理サーバー・ポート

表 50 WebLogic 管理サーバー・ポート

デフォルトのポート番号	構成可能な場所
7001	WebLogic 管理サーバー・ポートは構成中に指定します。デフォルト・ポートを変更するには、WebLogic 管理コンソールを使用します。

WebSphere ポート

サブトピック

- [WebSphere Application Server ポート](#)
- [IBM HTTP Server ポート](#)

WebSphere Application Server ポート

表 51 WebSphere Application Server ポート

デフォルトのポート番号	構成可能な場所
9043	WebSphere Application Server ポートは構成中に指定されます。デフォルト・ポートを変更するには、WebSphere 管理コンソールを使用します。

IBM HTTP Server ポート

表 52 IBM HTTP Server ポート

デフォルトのポート番号	構成可能な場所
80	IBM HTTP Server ポートは、IBM HTTP Server のインストール中に指定されます。デフォルト・ポートは<IHS>/conf/httpd.conf ファイルで変更できません。Oracle Enterprise Performance Management System Installation and Configuration Guide の IBM HTTP Server の構成に関する項を参照してください。

注： IBM HTTP Server と IIS Web サーバーはどちらも、デフォルト・ポートとして 80 を使用します。WebSphere を使用している場合、これらのデフォルトの 1 つを変更して、競合するポートをなくす必要があります。

Oracle Enterprise Manager Java Web アプリケーションのポート

表 53 Oracle Enterprise Manager Java Web アプリケーションのポート

デフォルトのポート番号	構成可能な場所
7001	Oracle Enterprise Manager Java Web アプリケーションのポートは、EPM System コンフィグレータでのドメイン作成時に構成されます。

SOA サーバー・ポート

表 54 SOA サーバー・ポート

デフォルトのポート番号	構成可能な場所
8001	WebLogic Server 管理コンソール

SSL ポート

SSL ポートの構成の詳細は、Oracle Enterprise Performance Management System Security Configuration Guide を参照してください。

Foundation Services のポート

Foundation Services のポートの詳細は、次の項を参照してください:

- [307 ページの「Foundation Services のポート」](#) のポート
- [308 ページの「Performance Management Architect のポート」](#)
- [309 ページの「Calculation Manager Java Web アプリケーションのポート」](#)

Foundation Services のポート

次の表に、Foundation Services 管理対象サーバー Java Web アプリケーションのポートと、その構成場所を示します。Foundation Services 管理対象サーバーには、Shared Services、EPM Workspace および Foundation Web サービスが含まれます。

表 55 Foundation Services Java Web アプリケーションのポート

ポート・タイプ	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
リスニング・ポート	28080	EPM System コンフィグレータ
SSL リスニング・ポート	28443	EPM System コンフィグレータ

表 56 Web サーバー・ポート

サーバー	デフォルトのサーバー・ポート	構成可能な場所
Oracle HTTP Server	19000	MIDDLEWARE_HOME/user_projects/epmsystem1/httpConfig/ohs/config/OHS/ohs_component/httpd.conf を EPM System コンフィグレータで構成可能です。
IIS	80 443 (SSL)	Microsoft Internet Information Services (IIS) Manager Console。TCP ポート値の設定を変更します。

Performance Management Architect のポート

表 57 Performance Management Architect Java Web アプリケーションのポート

ポート・タイプ	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
Performance Management Architect Java Web アプリケーション		
リスニング・ポート	19091(SSL 用に構成可能)	EPM System コンフィグレータ
SSL リスニング・ポート	19047	EPM System コンフィグレータ
データ・シンクロナイザ Java Web アプリケーション(Performance Management Architect)		
リスニング・ポート	19101 (SSL 用に構成可)	EPM System コンフィグレータ
SSL リスニング・ポート	19145	EPM System コンフィグレータ

表 58 Performance Management Architect サーバー・ポート

サービス	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
Performance Management Architect 次元サーバー	5251	EPM System コンフィグレータ
Net JNI Bridge	5255	EPM System コンフィグレータ

表 59 Performance Management Architect Web サービス(IIS)ポート

デフォルトの Web サーバー・ポート	構成可能な場所
80 (HTTP)または 443 (SSL が使用可能な場合)	Microsoft Internet Information Services (IIS) Manager Console。TCP ポート値の設定を変更します。

Calculation Manager Java Web アプリケーションのポート

表 60 Calculation Manager Java Web アプリケーションのポート

ポート・タイプ	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
リスニング・ポート	8500	EPM System コンフィグレータ
SSL リスニング・ポート	8543	EPM System コンフィグレータ

Essbase のポート

Essbase のポートの詳細は、次の項を参照してください:

- [309 ページの「Essbase のポート」](#)
- [310 ページの「Administration Services のポート」](#)
- [310 ページの「Provider Services のポート」](#)
- [310 ページの「Essbase Studio のポート」](#)

Essbase のポート

表 61 Essbase のデフォルトのサービス・ポート

サービス	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
Essbase エージェント	1423	EPM System コンフィグレータ
Essbase サーバー・アプリケーション(ESSSVR)	32768-33768 (プロセスごとに 2 つのポート)	EPM System コンフィグレータ
Essbase SSL エージェント	6423	EPM System コンフィグレータ
Integration Services サーバー	3388	EPM_ORACLE_HOME/products/Essbase/eis/bin/ais.cfg -Pポート番号を追加

注： 11.1.1 以降のリリースの開始では、Essbase のポート番号を EPM System コンフィグレータで指定しないと、デフォルトのポートが使用されます。

表 62 OPMN (Oracle Process Manager and Notification Server)のデフォルト・ポート

サービス	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
Oracle Notification Server のローカル・ポート	6711	opmn.xml ファイルを開き、“local” パラメータを変更します。その後、ファイルを保存します。

サービス	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
Oracle Notification Server のリモート・ポート	6712	opmn.xml ファイルを開き、“remote” パラメータを変更します。その後、ファイルを保存します。

Administration Services のポート

表 63 Administration Services Java Web アプリケーションのポート

ポート・タイプ	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
リスニング・ポート	10080	EPM System コンフィグレータ
SSL リスニング・ポート	10083	EPM System コンフィグレータ

Provider Services のポート

表 64 Provider Services Java Web アプリケーションのポート

ポート・タイプ	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
リスニング・ポート	13080	EPM System コンフィグレータ
SSL リスニング・ポート	13083	EPM System コンフィグレータ

Essbase Studio のポート

表 65 Essbase Studio サーバーのポート

ポート・タイプ	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
リスニング・ポート	5300	EPM_ORACLE_INSTANCE/BPMS/bpms1/bin/server.properties パラメータ: transport.port=新しいポート番号
HTTP リスニング・ポート	12080	EPM_ORACLE_INSTANCE/BPMS/bpms1/bin/server.properties パラメータ: server.httpPort=新しいポート番号

Reporting and Analysis のポート

Oracle Hyperion Reporting and Analysis のポートの詳細は、次の項を参照してください:

- 311 ページの「[Reporting and Analysis Framework のポート](#)」
- 311 ページの「[Financial Reporting のポート](#)」
- 312 ページの「[Interactive Reporting のポート](#)」

- 312 ページの「Web Analysis のポート」

Reporting and Analysis Framework のポート

表 66 Reporting and Analysis Framework Java Web アプリケーションのポート

ポート・タイプ	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
リスニング・ポート	45000	EPM System コンフィグレータ
SSL リスニング・ポート	45043	EPM System コンフィグレータ

表 67 Reporting and Analysis Framework のデフォルトのサービス・ポート

サービス	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
Reporting and Analysis Framework エージェント	6860	EPM System コンフィグレータ
Reporting and Analysis Framework エージェント RMI	6861	EPM System コンフィグレータ
Reporting and Analysis Framework サービス <ul style="list-style-type: none"> ● グローバル・サービス・マネージャ(GSM) ● コア・サービス ● サービス・ブローカ ● ジョブ・サービス ● イベント・サービス ● リポジトリ・サービス 	6800-6805 この表に一覧されている各サービスは、デフォルトの範囲である 6800-6805、または構成中に指定された範囲のいずれかの範囲内のポートに割り当てられます。	<ul style="list-style-type: none"> ● 最初のマシンで Reporting and Analysis Framework サービスをインストールまたは構成する場合、EPM System コンフィグレータを使用します。 ● ポート番号を変更するか、特定のコンポーネントで使用している正確なポートを見つけるには、EPM Workspace から「ナビゲート」、「管理」、「Reporting and Analysis」、「サービス」の順に選択し、Reporting and Analysis Framework サービスの「プロパティ」ダイアログ・ボックスを選択します。

Financial Reporting のポート

表 68 Financial Reporting Java Web アプリケーションのポート

ポート・タイプ	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
リスニング・ポート	8200	EPM System コンフィグレータ
SSL リスニング・ポート	8243	EPM System コンフィグレータ

表 69 Financial Reporting のデフォルトのサービス・ポート

サービス	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
RMI サービスおよびリモート ADM サーバー	8205-8228 各 Financial Reporting Java Web アプリケーションは、RMI サービス用のポートと、リモート ADM サーバー用のポートの 2 つのポートを使用します (たとえば、最初の Financial Reporting Java Web アプリケーションは 8205 および 8206 のポートを使用します)。	EPM System コンフィグレータ

Interactive Reporting のポート

表 70 Interactive Reporting のデフォルトのサービス・ポート

サービス	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
<ul style="list-style-type: none">Interactive Reporting ロギング・サービスInteractive Reporting インテリジェンス・サービスデータ・アクセス・サービス(DAS)Interactive Reporting ジョブ・サービス	6810、6811 (ログ・サービス) 6812、6813 (インテリジェンス・サービス); 6814、6815 (データ・アクセス・サービス) 6816、6817 (ジョブ・サービス)	<ul style="list-style-type: none">最初のマシンで Reporting and Analysis Framework サービスをインストールまたは構成する場合、EPM System コンフィグレータを使用します。ポート番号を変更するか、特定のコンポーネントで使用している正確なポートを見つけるには、EPM Workspace から「ナビゲート」、「管理」、「Reporting and Analysis」、「サービス」の順に選択し、Reporting and Analysis Framework サービスの「プロパティ」ダイアログを選択します。

Web Analysis のポート

表 71 Web Analysis Java Web アプリケーションのポート

ポート・タイプ	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
リスニング・ポート	16000	EPM System コンフィグレータ
SSL リスニング・ポート	16043	EPM System コンフィグレータ

Financial Performance Management アプリケーションのポート

Oracle Hyperion Financial Performance Management アプリケーションのポートの詳細は、次の項を参照してください:

- [313 ページの「Financial Management のポート」](#)
- [313 ページの「Financial Close Management のポート」](#)
- [314 ページの「Planning のポート」](#)
- [314 ページの「Performance Scorecard のポート」](#)
- [314 ページの「Strategic Finance のポート」](#)
- [315 ページの「Profitability and Cost Management のポート」](#)
- [315 ページの「Disclosure Management のポート」](#)

Financial Management のポート

表 72 Financial Management Java Web アプリケーションのポート

ポート・タイプ	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
リスニング・ポート	7363	EPM System コンフィグレータ
SSL リスニング・ポート	7365	EPM System コンフィグレータ

表 73 Financial Management のデフォルトのサービス・ポート

サービス	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
Financial Management サービス	135-およびエフェメラル高範囲ポート (1024-5536)	Windows の設定 - DCOM エフェメラル・ポートを固定。 DCOM で使用するポートの設定方法は、Microsoft のサポート記事: http://support.microsoft.com を参照してください。「restrict DCOM port (DCOM ポートの制約)」で検索します。
Financial Management DME リスナー・サービス (Performance Management Architect で使用)	9097	EPM System コンフィグレータ
Financial Management ADM リスナー・サービス	9099	Oracle Hyperion Shared Services レジストリの更新

表 74 Financial Management IIS Web アプリケーションのポート

デフォルトの Web サーバー・ポート	構成可能な場所
80 (HTTP)または 443 (SSL が使用可能な場合)	Microsoft Internet Information Services (IIS) Manager Console では、TCP ポート値の設定を変更します。

注： Financial Management IIS Web アプリケーション: Financial Management Web サービス IIS Web アプリケーション、Financial Management Smart View IIS Web アプリケーション、Financial Management IIS Web アプリケーション、Financial Management LCM IIS Web アプリケーション

Financial Close Management のポート

次の表に、Financial Close Management のポートと、その構成場所を示します。

表 75 Financial Close Management Close Manager と Account Reconciliation Manager Java Web アプリケーションのポート

ポート・タイプ	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
リスニング・ポート	8700	EPM System コンフィグレータ
SSL リスニング・ポート	8743	EPM System コンフィグレータ

Planning のポート

表 76 Planning Java Web アプリケーションのポート

ポート・タイプ	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
リスニング・ポート	8300	EPM System コンフィグレータ
SSL リスニング・ポート	8343	EPM System コンフィグレータ

表 77 Planning RMI サーバー・ポート

サービス	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
Planning RMI サーバー	11333	EPM System コンフィグレータ

Performance Scorecard のポート

表 78 Performance Scorecard Java Web アプリケーションのポート

ポート・タイプ	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
リスニング・ポート	18080	EPM System コンフィグレータ
SSL リスニング・ポート	18443	EPM System コンフィグレータ

次の表に、Performance Scorecard Alerter Java Web アプリケーションのポートと、その構成場所を示します。

表 79 Performance Scorecard Alerter Java Web アプリケーションのポート

ポート・タイプ	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
リスニング・ポート	18081	EPM System コンフィグレータ
SSL リスニング・ポート	18444	EPM System コンフィグレータ

Strategic Finance のポート

表 80 Strategic Finance のデフォルトのサービス・ポート

サービス	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
Strategic Finance サーバー	7750	EPM System コンフィグレータ 注： このポートを変更する場合は、「接続」ダイアログ・ボックスで、各 Strategic Finance クライアントのポートも変更する必要があります。

表 81 Strategic Finance Web サーバー・ポート

デフォルトの Web サーバー・ポート	構成可能な場所
80 (HTTP)または 443 (SSL が使用可能な場合)	Microsoft Internet Information Services (IIS) Manager Console。(TCP ポート値の設定を変更します。)

表 82 Strategic Finance Web アプリケーションのポート

ポート・タイプ	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
リスニング・ポート	8900	EPM System コンフィグレータ
SSL リスニング・ポート	8943	EPM System コンフィグレータ

Profitability and Cost Management のポート

表 83 Profitability and Cost Management Java Web アプリケーションのポート

ポート・タイプ	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
リスニング・ポート	6756	EPM System コンフィグレータ
SSL リスニング・ポート	6743	EPM System コンフィグレータ

Disclosure Management のポート

表 84 Disclosure Management Java Web アプリケーションのポート

ポート・タイプ	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
リスニング・ポート	8600	EPM System コンフィグレータ
SSL リスニング・ポート	8643	EPM System コンフィグレータ

データ管理のポート

Oracle データ管理のポートの詳細は、次の項を参照してください。

- [315 ページの「FDM のポート」](#)
- [316 ページの「FDMEE ポート」](#)
- [317 ページの「Data Relationship Management のポート」](#)

FDM のポート

次の表に、FDM のデフォルトのサービス・ポートと、その構成場所を示します。

表 85 FDM のデフォルトのサービス・ポート

サービス	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
FDM ロード・バランスおよび FDM アプリケーション・サーバー	135-およびエフェメラル高範囲ポート (1024-65536)	Windows の設定 - DCOM エフェメラル・ポートを固定。 DCOM で使用するポートの設定方法の詳細は、Microsoft のサポート記事: http://support.microsoft.com を参照してください。「restrict DCOM port (DCOM ポートの制約)」で検索します。
ファイル共有	137-139, 445	オペレーション・システムが制御します。デフォルトでは、すべての FDM アプリケーション・サーバーとデータ・サーバー間でファイル共有が使用可能です。デフォルトのポート番号は次のとおりです： <ul style="list-style-type: none"> ● NetBIOS Datagram Service = 138 番ポート ● NetBIOS Name Resolution = 137 番ポート ● NetBIOS Session Service = 139 番ポート NetBIOS がオフになっている場合は、SMB = 445 番ポートを使用します。
ファイアウォール	135 およびエフェメラル高範囲ポート (1024-65536)	Windows の設定 - DCOM エフェメラル・ポートを固定。 DCOM で使用するポートの設定方法の詳細は、Microsoft のサポート記事: http://support.microsoft.com を参照してください。「restrict DCOM port (DCOM ポートの制約)」で検索します。

注： FDM では、DMZ 環境で実行している場合に、DCOM ポート 135 が開いていることが必要です。

次の表に、FDM Web サーバー・ポートと、その構成場所を示します。

表 86 FDM Web サーバー(IIS)ポート

デフォルトの Web サーバー・ポート	構成可能な場所
80 (HTTP)または 443 (SSL が使用可能な場合)	Microsoft Internet Information Services (IIS) Manager Console。(TCP ポート値の設定を変更します。)

FDMEE ポート

次の表に、FDMEE Java Web アプリケーションのポートと、その構成場所を示します。

表 87 FDMEE Java Web アプリケーションのポート

ポート・タイプ	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
リスニング・ポート	6550	EPM System コンフィグレータ
SSL リスニング・ポート	6553	EPM System コンフィグレータ

Data Relationship Management のポート

次の表に、Data Relationship Management のデフォルトのサービス・ポートと、その構成場所を示します。

表 88 Data Relationship Management のデフォルトのサービス・ポート

サービス	デフォルトのポート番号	構成可能な場所
Data Relationship Management のサーバー・アプリケーション	5200-5400	drm-config.xml、Data Relationship Management コンソールを使用。

次の表に、Data Relationship Management Web サーバー・ポートと、その構成場所を示します。

表 89 Data Relationship Management Web サーバー・ポート

デフォルトの Web サーバー・ポート	構成可能な場所
80 (HTTP)または 443 (SSL が使用可能な場合)	Microsoft Internet Information Services (IIS) Manager Console。(TCP ポート値の設定を変更します。)



JDBC URL属性

この付録の内容

JDBC ドライバ..... 319

JDBC ドライバ

構成中、「データベースの構成」ページで「拡張」をクリックして、EPM System JDBC ドライバがデータベースに接続するために使用する追加の JDBC パラメータを指定できます。

次の表に、JDBC ドライバの使用時に、パラメータの入力に使用するフォーマットを示します。

データベース	フォーマット
Oracle Database	<code>jdbc:oracle:thin:@hostname:port:SID</code>
SQL Server	<code>jdbc:weblogic:sqlserver://hostname:port;databaseName=databaseName</code>
DB2	<code>jdbc:weblogic:db2:// hostname:port;databaseName=databaseName;DynamicSections=3000</code>

次の表に、パラメータの追加情報を示します:

プロパティ	SQL Server	DB2
LOADLIBRARYPATH	はい	はい
MAXPOOLEDSTATEMENTS	はい	はい
ALTERNATESERVERS	はい	はい
CONNECTIONRETRYCOUNT	はい	はい
CONNECTIONRETRYDELAY	はい	はい
LOADBALANCING	はい	はい
DYNAMICSECTIONS		はい
CREATEDEFAULTPACKAGE		はい
REPLACEPACKAGE		はい
DATABASENAME	はい	はい

Oracle Database パラメータの詳細は、Oracle Thin JDBC ドライバのドキュメントを参照してください。

Oracle RAC の URL

Oracle RAC のクライアント側のフェイルオーバーおよびロード・バランシングを実行するには、次の形式で URL を入力します:

```
jdbc:hyperion:oracle//server1:1521;ServiceName=TEST;AlternateServers=(server2:1521,server3:1521,server4:1521);LoadBalancing=true
```

Oracle Database の LDAP ベースの URL

Oracle Database は LDAP サーバーを使用する認証をサポートします。LDAP ベースのデータベース認証を使用するには、次の形式で URL を入力します:

```
jdbc:oracle:thin:@ldap://oid:5000/mydb1,cn=OracleContext,dc=myco,dc=com
```

SSL の URL

JDBC 接続用として SSL を使用可能にするには、構成時に、「データベースの構成」ページで、「拡張」をクリックして「データベースに対して保護された接続を使用 (SSL)」を選択します。

JDBC SSL が選択されていて、DB2 または Microsoft SQL Server を使用している場合は、次の追加パラメータを使用します。

- ENCRYPTIONMETHOD=SSL
- TRUSTSTORE=Path to trust store
- TRUSTSTOREPASSWORD=trust store password
- VALIDATESERVERCERTIFICATE="true"

JDBC SSL が選択されていて、Oracle Database を使用している場合は、次の URL フォーマットを使用します。

```
jdbc:oracle:thin:@(DESCRIPTION=(ADDRESS=(PROTOCOL=tcps)
```

```
(HOST=host1)(PORT=1521))
```

```
(CONNECT_DATA=(SERVICE_NAME=service_name)
```

```
)
```

```
)
```




Financial Managementのデータベース情報

この付録の内容

データベース接続のプール.....	321
-------------------	-----

データベース接続のプール

Financial Management の構成中に、各アプリケーションが使用するリレーショナル・データベースの接続の最大数を指定します。Financial Management は、接続プールを使用してデータベースと通信します。接続プールによって、データベースの使用が効率化され、各ユーザーがリレーショナル・リポジトリを設定する必要がなくなります。

EPM System コンフィグレータでは、構成中に、プールされたデータベース接続の数を指定できます。EPM System コンフィグレータで指定する接続数は、アプリケーションが使用するプールされた接続の最大数です。プールは 8 つの接続から開始されます。一定回数の試行後に、プールが追加の接続を要求したサービスを提供できない場合、さらに 8 つの接続が追加されます。システムは、ユーティリティで定義されている接続の最大数に到達するまで、8 つの接続のブロックを追加し続けます。この限界を超える追加接続が必要になると、タスクの完了時に閉じられる一時的な接続が、要求に応じてサービスを提供するために作成されます。

システムの使用のために予約され、ユーザーのアクティビティには使用されない追加の接続プールも作成されます。システム用プールの接続タイプは、次のとおりです:

- システムのアクティビティに使用される、アプリケーションごとに 9 つの接続のプール。
- エラー処理に使用される、アプリケーションごとに 8 つの接続のプール。
- ユーザー・ログオン・アクティビティのために、アプリケーション・サーバーごとに 8 接続のプールが作成されます。ユーザー・ログオン・プールは、システムで定義された最大値(16 接続)まで 4 つずつ増やせます。この最大値を超える接続は、一時的に確保されます。

全般的に、システムレベルのアクティビティには 25 接続が割り当てられます。各アプリケーション・サーバーに 8 接続が予約され、各アプリケーションに 17 接続が予約されます。また、DME リスナー・プロセスは、最大 8 つの接続を使用します。このプロセスを実行しているかぎり、これらの接続は開いたままです。

接続の使用は、アクティビティのタイプに依存します。読取りアクセスを保有するアプリケーションのほとんどのユーザーは、一般に接続を使用しません。書込みアクセスを保有するユーザーはデータベースに書き込むので、より多くの接続

を使用できます。集計を実行するユーザーなどの書込みアクセスを保有するユーザーが使用する接続数は、アプリケーション・サーバーのハードウェアおよび書き込むデータ量に依存します。全般的に、書込みアクセスを保有するユーザーは、5から 10 の接続を使用します。

Financial Management は、アプリケーションが初めて開かれたときに、定義された数の接続を開きます。その後に、システムのユーザーは、接続を使用できるようになります。ユーザーのプロセスが接続を要求したときに、すべての接続が使用中の場合、システムは短時間接続プールをポーリングし、接続が使用可能になるのを待ちます。使用できる接続が得られない場合、システムは 8 つの接続を作成してプールに追加します。接続プールは、EPM System コンフィグレータで定義された総数に制限されます。

接続はアプリケーションに固有です。デフォルト・プールは、アプリケーションが開かれた後にのみ作成されます。すべてのユーザーがアプリケーションからログアウトし、すべての Web セッションが閉じている場合、アプリケーションがシャットダウンし、アプリケーションで所有するすべてのデータベース接続が解放されます。すべての開いているアプリケーションがシャットダウンすると、アプリケーション・サーバー・アクティビティに予約されている 8 つの接続も解放されます。アプリケーションが 1 つでも開いたままの場合、アプリケーション・サーバー接続も開いたままです。

Financial Management Service を実行している場合、アプリケーション単位で接続が割り当てられて解放されます。特定のアプリケーションにログインしているユーザーがいない場合、アプリケーションがシャットダウンし、アプリケーションで使用しているすべての接続が解放されます。

Financial Management Service を実行していない場合、最後のユーザーがアプリケーションからログアウトした後、アプリケーションに割り当てられているすべての接続が解放されます。Financial Management Service を実行している場合、マシンを再起動するときまたはサービスを停止するときおよびすべてのユーザーが特定のアプリケーションからログアウトするときに、接続が解放されます。

注： Financial Management サービスが実行されている場合、すべてのアプリケーションからすべてのユーザーがログアウトしても、アプリケーション・プロセスはシャットダウンされません。これは、このサービスによってアプリケーション・インスタンスが永続化されるためです。また、複数の Financial Management アプリケーション・サーバーを含む環境では、アプリケーション・プロセスがシャットダウンされてデータベース接続が解放される前に、すべてのサーバー上の全アプリケーションからすべてのユーザーがログアウトする必要があります。どちらの場合も、Financial Management サービスをシャットダウンすることも必要になります。

Financial Management では、Analytic Service などの他のシステムで使用してリレーショナル・データベースにデータを抽出できる拡張分析もサポートされます。抽出プロセスには、スター・スキーマが作成されるときに作成される専用の接続プールがあります。デフォルト・プールには、プロセスが完了すると破壊される 16 の一時接続があります。

例 1

1つのアプリケーション・サーバーに3つのアプリケーション、デフォルトの最大接続プール数が使用(40 接続)されている場合

- アプリケーション A がログオン: 8 接続(およびシステム)
- アプリケーション B がログオン: 8 接続(およびシステム)
- アプリケーション C がログオン: 8 接続(およびシステム)
- システム接続: 59(8+アプリケーションごとに 17)
- 合計接続数: 83

注: 合計接続数は、アプリケーションの接続プールが EPM System コンフィグレータで定義したシステムの最大数まで拡張されると、最大 96 接続まで増やすことができます(デフォルトは 40)。

- アプリケーション B がログオフ(ユーザーなし)
- 合計接続数: 83
- すべてのユーザーがすべてのアプリケーションをログオフ
- 合計接続数: 0

例 2

2つのアプリケーション・サーバーに1つのアプリケーション、デフォルトの最大接続プール数が使用(40 接続)されている場合

- アプリケーション A がログオン(サーバー 1): 8 接続(およびシステム)
- アプリケーション A がログオン(サーバー 2): 8 接続(およびシステム)
- システム接続: 50(アプリケーション・サーバーごとに、8+アプリケーションごとに 17)
- 合計接続数: 66
- アプリケーション A(サーバー 2)がログオフ(ユーザーなし)
- 合計接続数: 33
- すべてのユーザーがすべてのアプリケーションをログオフ
- 合計接続数: 0

アプリケーション・サーバーとデータベース・サーバー間の接続性は、ネットワーク問題などによって消失することがあります。接続が有効でないことが検出された場合、接続の再作成が試行されます。

アプリケーションの削除では、プール接続のデフォルト数も使用されます。Financial Management は、アプリケーションを削除する前に、接続のデフォルト数を使用してセキュリティ・アクセスを確認するためにアプリケーションを開きます。セキュリティが検証された後、アプリケーションが削除されます。



EPM System サービス

この付録の内容

EPM System のサービスおよびプロセス	326
-------------------------------	-----

この付録では、各 EPM System コンポーネントのスタート・メニュー、サービス名、起動および停止スクリプトの詳細を提供します。

Java Web アプリケーションの「開始」メニュー・アイテムは、Web サーバーがインストールされているマシンでのみ使用可能です。

Oracle Enterprise Manager を使用して、EPM System Java Web アプリケーションの状態とパフォーマンスを監視できます。Oracle WebLogic Server を使用して Java Web アプリケーションを配置する場合、これは Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System コンフィグレータを使用して自動的に配置されます。稼働中のサーバーと Java Web アプリケーション、Java Web アプリケーションが稼働しているサーバー、および Java Web アプリケーションがリスニングしているポートの状態を確認できます。Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide の Enterprise Manager を使用した EPM System Java Web アプリケーションの監視に関する項を参照してください。

EPM System のサービスおよびプロセス

サブトピック

- Web サーバー
- Foundation Services アプリケーション・サーバー
- Performance Management Architect 次元サーバー・サービス
- Performance Management Architect アプリケーション・サーバー
- Performance Management Architect データ・シンクロナイザ・アプリケーション・サーバー
- Calculation Manager アプリケーション・サーバー
- Essbase サーバー
- Administration Services サーバー
- Integration Services サーバー
- Essbase Studio サーバー
- Provider Services アプリケーション・サーバー
- Hyperion Reporting and Analysis Framework - エージェント・サービス
- Reporting and Analysis Framework アプリケーション・サーバー
- Financial Reporting アプリケーション・サーバー
- Web Analysis アプリケーション・サーバー
- Planning アプリケーション・サーバー
- Financial Management のサービス
- Financial Management アプリケーション・サーバー
- Strategic Finance サーバー
- Strategic Finance Web アプリケーション
- Performance Scorecard アプリケーション・サーバー
- Performance Scorecard Alerter アプリケーション・サーバー
- Profitability and Cost Management アプリケーション・サーバー
- Disclosure Management アプリケーション・サーバー
- Financial Close Management アプリケーション・サーバー
- Data Relationship Management
- FDM
- FDMEE アプリケーション・サーバー

Web サーバー

次の表に、EPM System インストーラによってインストールされた Oracle HTTP Server を使用する場合の Web サーバーのサービスおよびプロセスを示します。

Oracle HTTP Server サービスは、OPMN を使用して管理されます。

OPMN の詳細は、Oracle(R) Fusion Middleware Oracle Process Manager and Notification Server 管理者ガイド リリース 11g (11.1.1.2.0) (http://download.oracle.com/docs/cd/E15523_01/doc.1111/e14007/toc.htm)を参照してください

表 90 Web サーバーのサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	<ul style="list-style-type: none"> ● Oracle Process Manager (ohsInstanceInstanceNumber) ● IIS: IIS Admin Service ● IBM HTTP Server 7.0
説明	<ul style="list-style-type: none"> ● OHS の OPMN サービス ● IIS: このサーバーで Web サービスおよび FTP サービスを管理できるようにします。このサービスが停止すると、サーバーは Web、FTP、NNTP、SMTP のサイトの実行、または IIS の構成を行えなくなります。このサービスが使用不可の場合、このサービスに明示的に依存するサービスは、すべて開始に失敗します。 ● IHS: IBM_HTTP_Server/7.0.0.17 (Win32)
Windows 起動スクリプト(EPM System インストーラによってインストールされた Oracle HTTP Server のみ)	<p>EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startOHS.bat</p> <p>この開始スクリプトは Oracle HTTP Server が OPMN の使用を開始するように指示します。OPMN 開始スクリプト opmnctl.bat は、EPM_ORACLE_INSTANCE/httpConfig/ohs/bin にあります。</p>
UNIX 起動スクリプト(EPM System インストーラによってインストールされた Oracle HTTP Server のみ)	<p>EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startOHS.sh</p> <p>この開始スクリプトは Oracle HTTP Server が OPMN の使用を開始するように指示します。OPMN 開始スクリプト opmnctl は、EPM_ORACLE_INSTANCE/httpConfig/ohs/bin にあります。</p>
Windows 停止スクリプト(EPM System インストーラによってインストールされた Oracle HTTP Server のみ)	<p>EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopOHS.bat</p>
UNIX 停止スクリプト(EPM System インストーラによってインストールされた Oracle HTTP Server のみ)	<p>EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopOHS.sh</p>

Foundation Services アプリケーション・サーバー

次の表に、Oracle Hyperion Shared Services および Oracle Hyperion Enterprise Performance Management Workspace Java Web アプリケーションを含む Oracle Hyperion Foundation Services アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセスを示します。

表 91 Foundation Services アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE_NAME、FoundationServices の開始の順に選択します
登録サービス名	HyS9FoundationServices_instanceName
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Oracle Hyperion Foundation Services - 管理対象サーバー(instanceName)

情報タイプ	詳細
説明	Hyperion Foundation Services は、認証、ユーザー・プロビジョニング、タスク・フロー管理、データおよびメタデータの同期化などの Hyperion アプリケーションをサポートしています。
Windows 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startFoundationServices.bat
UNIX 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startFoundationServices.sh
Windows 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopFoundationServices.bat
UNIX 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopFoundationServices.sh

Performance Management Architect 次元サーバー・サービス

次の表に、Performance Management Architect サービスのサービスおよびプロセスを示します。

注： 次元サーバーおよびデータベースが異なるサーバーでホストされる場合、Performance Management Architect が起動中にデータベースを呼び出すため、起動に数分時間がかかる場合があります。

表 92 Performance Management Architect サービス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	N/A
登録サービス名	HYS9EPMAServer_instanceName
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Oracle Hyperion EPMA Server (instanceName)
説明	Hyperion EPM Architect Dimension Server は、次元、アプリケーションおよびジョブ・コンソールを含めた、EPMA Web 層に必要なバック・サービスを提供します。
Windows 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/StartEpmaServer.bat
UNIX 起動スクリプト	NA
Windows 停止スクリプト	<ul style="list-style-type: none"> プロセス・マネージャ: EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopEpmaServer.bat
UNIX 停止スクリプト	NA

Performance Management Architect アプリケーション・サーバー

次の表に、Performance Management Architect アプリケーション・サーバーのサービスとプロセスを示します。

表 93 Performance Management Architect アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE_NAME、「Foundation Services」、「Performance Management Architect」、startEpmaWebReports の順に選択します
登録サービス名	HyS9EPMAWebTier_instanceName
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Oracle Hyperion EPMA Web 層 - Java Web アプリケーション(instanceName)
説明	EPMA Web サーバーへのアクセス・サービスを提供します。
Windows 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startEpmaWebReports.bat
UNIX 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startEpmaWebReports.sh
Windows 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopEpmaWebReports.bat
UNIX 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopEpmaWebReports.sh

また、Performance Management Architect には、IIS で稼働する Web 層コンポーネントが含まれています。

Performance Management Architect データ・シンクロナイザ・アプリケーション・サーバー

次の表に、Oracle Hyperion EPM Architect データ・シンクロナイザ・アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセスを示します。

表 94 Performance Management Architect データ・シンクロナイザ・アプリケーション・サーバーのサービス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE_NAME、「Foundation Services」、「Performance Management Architect」、startEPMADataSync の順に選択します
登録サービス名	HyS9EPMADataSynchronizer_instanceName
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Oracle Hyperion EPMA データ・シンクロナイザ - Java Web アプリケーション(instanceName)
説明	EPMA データ・シンクロナイザ Web サーバーへのアクセス・サービスを提供します。
Windows 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startEPMADataSync.bat

情報タイプ	詳細
UNIX 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startEPMDataSync.sh
Windows 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopEPMDataSync.bat
UNIX 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopEPMDataSync.sh

Calculation Manager アプリケーション・サーバー

次の表に、Oracle Hyperion Calculation Manager のサービスおよびプロセスを示します。

表 95 Calculation Manager のサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE_NAME、「Calculation Manager」、CalcMgr の開始の順に選択します
登録サービス名	HyS9CALC_instanceName
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Oracle Hyperion CALC Manager - Java Web アプリケーション (instanceName)
説明	CALC Manager Web サーバーへのアクセス・サービスを提供します。
Windows 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startCalcMgr.bat
UNIX 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startCalcMgr.sh
Windows 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopCalcMgr.bat
UNIX 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopCalcMgr.sh

Essbase サーバー

インストール中、Oracle Hyperion Enterprise Performance Management System Installer により OPMN がインストールされ、OPMN 用の Essbase サーバーが登録されます。OPMN が Essbase エージェントを管理し、エージェントが Essbase サーバーを管理します。

EPM_ORACLE_INSTANCE/bin に移動し、次のコマンドを使用して Essbase サーバーを起動および停止します:

- opmnctl startall
- opmnctl stopall

クラスタリングされている環境で Essbase を使用している場合、クラスタの 2 つのノードで Essbase フェイルオーバーを設定するために必要な追加手順があります。Oracle Enterprise Performance Management System Deployment Options Guide のアク

タイプ-パッシブ Essbase クラスタの OPMN.XML の編集に関する項を参照してください。

次の表に、Essbase サーバーを起動および停止するためのその他の方法を示します。Essbase サーバーの起動および停止スクリプトは OPMN にリダイレクトされます。

OPMN の詳細は、Oracle(R) Fusion Middleware Oracle Process Manager and Notification Server 管理者ガイド リリース 11g (11.1.1.2.0) (http://download.oracle.com/docs/cd/E15523_01/doc.1111/e14007/toc.htm)を参照してください

表 96 Essbase サーバーの起動と停止

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE_NAME、「Essbase」、「Essbase サーバー」、「Essbase の起動」の順に選択します このコマンドは、startEssbase.bat を起動(および OPMN にリダイレクト)します。
登録サービス名	Oracle Process Manager_instanceName
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Oracle Process Manager_instanceName
説明	Essbase の OPMN サービス(instanceName)
Windows 起動スクリプト	<ul style="list-style-type: none"> ● Essbase サーバー - EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startEssbase.bat (OPMN にリダイレクト) <p>Essbase サーバーの各インスタンスには、独自の起動スクリプトがあります。Essbase の追加インスタンスを構成した場合、startEssbase.bat sh は additionalInstanceLocation/bin に置かれます。Essbase のこのインスタンスを起動するには、この場所から開始スクリプトを開始します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ESSCMD - EPM_ORACLE_INSTANCE/EssbaseServer/EssbaseServerInstanceName/bin/startEsscmd.bat (/EssbaseClient ディレクトリにもあり) ● ESSMESH - EPM_ORACLE_INSTANCE/EssbaseServer/EssbaseServerInstanceName/bin/startMaxl.bat (/EssbaseClient ディレクトリにもあり) <p>すべてのスクリプトは、開始前に setEssbaseEnv.bat を呼び出して、ESSBASEPATH、ARBORPATH、PATH を設定します。</p>

情報タイプ	詳細
UNIX 起動スクリプト	<ul style="list-style-type: none"> ● Essbase サーバー - EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startEssbase.sh (OPMN にリダイレクト) <p>Essbase サーバーの各インスタンスには、独自の起動スクリプトがあります。Essbase の追加インスタンスを構成した場合、startEssbase.bat sh は additionalInstanceLocation/bin に置かれます。Essbase のこのインスタンスを起動するには、この場所から開始スクリプトを開始します。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● ESSCMD - EPM_ORACLE_INSTANCE/EssbaseServer/EssbaseServerInstanceName/bin/startEsscmd.sh (/EssbaseClient ディレクトリにもあり) ● essmsh - EPM_ORACLE_INSTANCE/EssbaseServer/EssbaseServerInstanceName/bin/startMaxl.sh (/EssbaseClient ディレクトリにもあり) <p>すべてのスクリプトは、開始前に setEssbaseEnv.sh を呼び出して、ESSBASEPATH、ARBORPATH、PATH を設定します。</p> <p>Essbase をコンソールから手動で実行する場合、コンソールは UTF-8 エンコード方式には設定できません。</p>
Windows 停止スクリプト	<p>サーバー:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Essbase サーバー - EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopEssbase.bat (OPMN にリダイレクト)
UNIX 停止スクリプト	<p>サーバー:</p> <ul style="list-style-type: none"> ● Essbase サーバー - EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopEssbase.sh (OPMN にリダイレクト)

Essbase サーバーの停止は、サーバー上で実行している Essbase アプリケーションの数に応じて、多少時間がかかる場合があります。Essbase サーバーを停止するには、管理者権限が必要です。

Essbase サーバーの停止の詳細は Oracle Essbase Database Administrator's Guide を参照してください。

Essbase サーバーの停止については、Oracle Essbase Database Administrator's Guide および『Oracle Essbase テクニカル・リファレンス』を参照してください。

Administration Services サーバー

次の表に、Oracle Essbase Administration Services サーバーのサービスおよびプロセスを示します。

表 97 Administration Services アプリケーション・サーバーのサービス/プロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE_NAME、「Essbase」、「Essbase Administration Services」、EssbaseAdminServices の開始の順に選択します

情報タイプ	詳細
登録サービス名	Hys9eas_instanceName
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Oracle Hyperion Administration Services - Java Web アプリケーション (instanceName)
説明	HyS9eas - アプリケーション・サーバーの実行を制御します
Windows 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startEssbaseAdminServices.bat
UNIX 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startEssbaseAdminServices.sh
Windows 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopEssbaseAdminServices.bat
UNIX 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startEssbaseAdminServices.sh

Integration Services サーバー

次の表に、Integration Services サーバーのサービスおよびプロセスを示します。

表 98 Integration Services サーバーのサービス/プロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE_NAME、「Essbase」、Integration Services、「Essbase Integration Server の起動」の順に選択します。 ¹
登録サービス名	Essbase Integration Server_instanceName
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Oracle Hyperion Integration Services (instanceName)
説明	N/A
Windows 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startEisServer.bat
UNIX 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startEisServer.sh
Windows 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopEisServer.bat タスク・マネージャを使用して、Integration Services サービスを手動で停止する必要がありますことに注意してください。
UNIX 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopEisServer.sh プロセスを停止して、Oracle Essbase Integration Services サービスを手動で停止する必要がありますことに注意してください。

¹ コマンドラインから、olapisvr コマンドのその他の起動スイッチから、および ais.cfg ファイルを使用して、Integration Services サーバーを開始および停止する方法の詳細は、『Essbase Integration Services システム管理者ガイド』を参照してください。

Essbase Studio サーバー

次の表に、Essbase Studio サーバーのサービスおよびプロセスを示します。

表 99 Essbase Studio サーバー

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE_NAME、「Essbase」、「Essbase Studio」、「サーバーの開始」の順に選択します。
登録サービス名	HYS9EssbaseStudio_instanceName
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Oracle Hyperion Essbase Studio Server (instanceName)
説明	NA
Windows 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startBPMS_bpms1_Server.bat
UNIX 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startBPMS_bpms1_Server.sh
Windows 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopBPMS_bpms1_Server.bat
UNIX 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopBPMS_bpms1_Server.sh

UNIX 上では、デフォルトで Essbase Studio サーバーはバックグラウンドで実行されます。この動作は Essbase Studio サーバーのプロパティ (server.runInBackground)、EPM System の環境変数および startServer.sh によって制御されます。

▶ UNIX で、フォアグラウンドで Essbase Studio サーバーを起動するには:

1. Essbase Studioserver.properties ファイルで、server.runInBackground プロパティを false に設定するか、コメントアウトします。

server.properties ファイルは、EPM_ORACLE_INSTANCE/user_projects/epmsystem1/BPMS/bpms/bin/server.properties にあります。このプロパティの詳細は、Oracle Essbase Studio User's Guide を参照してください。

2. startServer.sh を実行する環境で次の変数を設定します:

```
EPM_ORACLE_INSTANCE=/
installationPath
/Oracle/Middleware/user_projects/epmsystem1
```

```
EPM_ORACLE_HOME=/
installationPath
/Oracle/Middleware/EPMSystem11R1
```

```
JAVA_HOME="${EPM_ORACLE_HOME}/../jdk160_21/jre"
```

```
JAVA_OPTIONS="-DESSBASE_STUDIO_INSTANCE=${EPM_ORACLE_INSTANCE}/BPMS/bpms1
-DsuppressAPSPProductInfo=true"
```

3. Essbase Studio の startServer.sh シェルを次のように編集します:

startServer.sh は EPM_ORACLE_HOME/products/Essbase/EssbaseStudio/Server/startServer.sh にあります。

- ファイルの最後の行を見つけます:

```
nohup "${JAVA_HOME}/bin/java" -Xms128m -Xmx768m $JAVA_OPTIONS -jar
"${EPM_ORACLE_HOME}/products/Essbase/EssbaseStudio/Server/server.jar" >/dev/
null &
```

- 行の先頭にある nohup、行の最後にある NULL への出力である STDOUT 命令(>/dev/null)、およびバックグラウンド処理コマンド(&)を除去します。次はその例です:

```
"${JAVA_HOME}/bin/java" -Xms128m -Xmx768m $JAVA_OPTIONS -jar "$
${EPM_ORACLE_HOME}/products/Essbase/EssbaseStudio/Server/server.jar"
```

4. ./startServer.sh ステートメントを実行して Oracle Essbase Studio サーバーを開始します。

Provider Services アプリケーション・サーバー

次の表に、Oracle Hyperion Provider Services アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセスを示します。

表 100 Provider Services アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE_NAME、「Essbase」、「Provider Services」、Analytic Provider Services の開始の順に選択します。
登録サービス名	HyS9aps_instanceName
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Oracle Hyperion Provider Services - Java Web アプリケーション(instanceName)
説明	Hyperion Provider Services へのアクセス・サービスを提供します。
Windows 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startAnalyticProviderServices.bat
UNIX 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startAnalyticProviderServices.sh
Windows 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopAnalyticProviderServices.bat
UNIX 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopAnalyticProviderServices.sh

Hyperion Reporting and Analysis Framework - エージェント・サービス

次の表に、Reporting and Analysis Framework エージェントのサービスおよびプロセスを示します。

表 101 Reporting and Analysis Framework エージェント

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE_NAME、「Reporting and Analysis」、「RA Framework エージェントの開始」の順に選択します
登録サービス名	HyS9RaFrameworkAgent_instanceName
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Oracle Hyperion Reporting and Analysis Framework (instanceName)
説明	HyS9RaFrameworkAgent - Hyperion Reporting and Analysis Framework エージェント
Windows 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startRaFrameworkAgent.bat
UNIX 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startRaFrameworkAgent.sh
Windows 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopRaFrameworkAgent.bat
UNIX 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopRaFrameworkAgent.sh

Reporting and Analysis Framework エージェント・サービスとともに開始するサービスおよびプロセス

Reporting and Analysis Framework エージェントが開始すると、次の付加的サービスおよびプロセスが開始します:

- Oracle Hyperion Interactive Reporting プロセス。
- Reporting and Analysis Framework の共通サービスおよびプロセス

Reporting and Analysis Framework アプリケーション・サーバー

次の表に、Reporting and Analysis Framework アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセスを示します。

表 102 Reporting and Analysis Framework アプリケーション・サーバー

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE_NAME、「Reporting and Analysis」、RA Framework の開始の順に選択します このメニュー・アイテムが開始されます: <ul style="list-style-type: none"> ● Reporting and Analysis Framework Java Web アプリケーション ● Oracle Hyperion Reporting and Analysis Framework エージェント・サービス
登録サービス名	HyS9RaFramework_instanceName
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Oracle Hyperion Reporting and Analysis Framework - Java Web アプリケーション (instanceName)
説明	HyS9RaFramework - Hyperion Reporting and Analysis Framework Web アプリケーション
Windows 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startRaFramework.bat
UNIX 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startRaFramework.sh
Windows 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopRaFramework.bat
UNIX 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopRaFramework.sh

Financial Reporting アプリケーション・サーバー

次の表に、Financial Reporting 印刷サーバーを含む Financial Reporting アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセスを示します。

表 103 Financial Reporting アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE_NAME、「Reporting and Analysis」、FinancialReporting の開始の順に選択します
登録サービス名	HyS9FRReports_instanceName
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Oracle Hyperion Financial Reporting - Java Web アプリケーション(instanceName)
説明	Hyperion Financial Reporting Web サーバーへのアクセス・サービスを提供します。
Windows 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startFinancialReporting.bat
UNIX 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startFinancialReporting.sh
Windows 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopFinancialReporting.bat
UNIX 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopFinancialReporting.sh

Web Analysis アプリケーション・サーバー

次の表に、Oracle Hyperion Web Analysis アプリケーション・サーバーのサービスとプロセスを示します。

表 104 Web Analysis アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE_NAME、「Reporting and Analysis」、Reporting and Analysis Web Analysis の開始の順に選択します
登録サービス名	HyS9WebAnalysis_instanceName
Windows コントロール・パネルの表示名	Oracle Hyperion Web Analysis - Java Web アプリケーション(instanceName)
説明	Hyperion Web Analysis - Web アプリケーションへのアクセス・サービスを提供します。
Windows 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startWebAnalysis.bat
UNIX 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startWebAnalysis.sh
Windows 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopWebAnalysis.bat
UNIX 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopWebAnalysis.sh

Planning アプリケーション・サーバー

次の表に、Planning アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセスを示します。

表 105 Planning アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE_NAME、「Planning」、Planning の開始の順に選択します
登録サービス名	HyS9Planning_instanceName
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Oracle Hyperion Planning - Java Web アプリケーション(instanceName)
説明	Planning Web サーバーへのアクセス・サービスを提供します
Windows 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startPlanning.bat
UNIX 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startPlanning.sh

情報タイプ	詳細
Windows 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopPlanning.bat
UNIX 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopPlanning.sh

また、Oracle Hyperion Planning では、Hyperion RMI レジストリを使用します。

表 106 Hyperion RMI レジストリ・アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	N/A
登録サービス名	Hyperion RMI レジストリ_instanceName
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Oracle Hyperion RMI レジストリ(instanceName)
説明	N/A
Windows 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/startRMI.bat
UNIX 起動スクリプト	EPM_ORACLE_HOME/common/RMI/11.1.2.0/ HyperionRMIService
Windows 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/stopRMI.bat
UNIX 停止スクリプト	N/A

Financial Management のサービス

次の表に、Financial Management のサービスおよびプロセスを示します。

表 107 Financial Management のサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	
登録サービス名	<ul style="list-style-type: none"> ● HYS9FinancialManagementService_instanceName ● HYS9 FinancialManagemen DMEListener_instanceName ● HYS9FinancialManagementWebServiceManager_instanceName
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	<ul style="list-style-type: none"> ● Oracle Hyperion Financial Management - 管理対象サービス(instanceName) ● Oracle Hyperion Financial Management - DME リスナー(instanceName) ● Oracle Hyperion Financial Management - Web サービス・マネージャ(instanceName)

情報タイプ	詳細
説明	<ul style="list-style-type: none"> ● Hyperion Financial Management サービス: ログインのパフォーマンスを最適化するために、アプリケーション・インスタンスを永続化するサービス ● Hyperion Financial Management DME リスナー: Hyperion Data Movement Engine と通信するための Hyperion Financial Management IP リスナー。このサービスが停止すると、DME Web サービスはこのサーバー上のすべての HFM インスタンスと通信できなくなります。 ● Financial Management Web サーバーでの接続に関するセッション情報を管理します。
Windows 起動スクリプト	<ul style="list-style-type: none"> ● EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startHFMMangementService.bat ● EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startHFMDMEListener.bat ● EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startHFMMWebServiceManager.bat
UNIX 起動スクリプト	NA
Windows 停止スクリプト	<ul style="list-style-type: none"> ● EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopHFMMangementService.bat ● EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopHFMDMEListener.bat ● EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopHFMMWebServiceManager.bat
UNIX 停止スクリプト	NA

注: Financial Management アプリケーション・サーバー間の同期化はシステム時刻に基づきます。クロックの変更は、この同期化に影響します。夏時間への変更については、まずサーバーを停止してから時刻を変更し、それから再起動することをお勧めします。

Financial Management アプリケーション・サーバー

次の表に、FM Web サービスおよび FM ADF Java Web アプリケーションを含む、Financial Management Java Web アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセスを示します。

表 108 Financial Management Java Web アプリケーションのサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE_NAME、「Financial Management」、HFMMWeb の開始の順に選択します
登録サービス名	HyS9FinancialManagementWeb_instanceName
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Oracle Hyperion Financial Management - Web 層(instanceName)
説明	Financial Management に JEE サポートを提供します。
Windows 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startHFMMWeb.bat
UNIX 起動スクリプト	NA

情報タイプ	詳細
Windows 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopHFWeb.bat
UNIX 停止スクリプト	NA

また、Financial Management には、IIS で稼働する Web 層コンポーネントが含まれています。

Strategic Finance サーバー

次の表に、Strategic Finance のサービスおよびプロセスを示します。

表 109 Strategic Finance のサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE_NAME、「Strategic Finance」、「サーバー」、「Strategic Finance サービスの開始」の順に選択します
登録サービス名	HYS9HsfSrv_instanceName
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Oracle Hyperion Strategic Finance - サーバー(instanceName)
説明	エンティティ・リポジトリ管理や認証、アクセス管理、集計、データおよびメタデータ管理などの、Oracle Hyperion Strategic Finance, Fusion Edition サービスを提供します。
Windows 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startStrategicFinanceService.bat
UNIX 起動スクリプト	NA
Windows 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopStrategicFinanceService.bat
UNIX 停止スクリプト	NA

Strategic Finance Web アプリケーション

次の表に、Strategic Finance Web アプリケーションのサービスおよびプロセスを示します。

表 110 Strategic Finance アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE_NAME、「Strategic Finance」、HSFWeb の開始の順に選択します
登録サービス名	HyS9HsfWeb_instanceName

情報タイプ	詳細
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Oracle Hyperion Strategic Finance - Java Web アプリケーション (instanceName)
説明	HSF Web サーバーへのアクセス・サービスを提供します。
Windows 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startHsfWeb.bat
UNIX 起動スクリプト	
Windows 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopHsfWeb.bat
UNIX 停止スクリプト	

また、Oracle Hyperion Strategic Finance には、IIS で稼働する Web 層コンポーネントが含まれています。

Performance Scorecard アプリケーション・サーバー

次の表に、Performance Scorecard アプリケーション・サーバーのサービスとプロセスを示します。

注： Essbase を Performance Scorecard のデータ・ソースとして使用している場合、最初に Oracle Essbase を開始する必要があります。

表 111 Performance Scorecard アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「スコアカード」、HpsWebReports の起動の順に選択します
登録サービス名	WebReports
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Oracle Hyperion Performance Scorecard WebReports - Java Web アプリケーション(instanceName)
説明	Oracle Hyperion Performance Scorecard Web Reports - Java Web アプリケーション(instanceName)
Windows 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startHpsWebReports.bat
UNIX 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startHpsWebReports.sh
Windows 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopHpsWebReports.bat
UNIX 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopHpsWebReports.sh

Performance Scorecard Alerter アプリケーション・サーバー

次の表に、Oracle Hyperion Performance Scorecard Alerter アプリケーション・サーバーのサービスとプロセスを示します。

表 112 Performance Scorecard Alerter アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「スコアカード」、HpsAlerter の起動の順に選択します
登録サービス名	HyS9HPSAlerter_instanceName
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Oracle Hyperion Performance Scorecard Alerter - Java Web アプリケーション(instanceName)
説明	Oracle Hyperion Performance Scorecard Alerter - Java Web アプリケーション
Windows 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startHpsAlerter.bat
UNIX 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startHpsAlerter.sh
Windows 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopHpsAlerter.bat
UNIX 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopHpsAlerter.sh

Profitability and Cost Management アプリケーション・サーバー

次の表に、Oracle Hyperion Profitability and Cost Management のサービスとプロセスを示します。

表 113 Profitability and Cost Management のサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE_NAME、「Profitability」、Profitability の開始の順に選択します
登録サービス名	HyS9HyS9PftWeb_instanceName
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Oracle Hyperion Profitability - Java Web アプリケーション(instanceName)
説明	Profitability の Workspace モジュールを提供します。
Windows 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startProfitability.bat
UNIX 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startProfitability.sh
Windows 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopProfitability.bat
UNIX 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopProfitability.sh

Disclosure Management アプリケーション・サーバー

次の表に、Oracle Hyperion Disclosure Management のサービスおよびプロセスを示します。

表 114 Disclosure Management のサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE_NAME、「Disclosure Management」、Disclosure Management の開始の順に選択します
登録サービス名	HyS9Disclosure_instanceName
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Oracle Hyperion Disclosure Management - Java Web アプリケーション (instanceName)
説明	Disclosure Management へのアクセス・サービスを提供します。
Windows 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startDisclosureManagement.bat
UNIX 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startDisclosureManagement.sh
Windows 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopDisclosureManagement.bat
UNIX 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopDisclosureManagement.sh

Financial Close Management アプリケーション・サーバー

次の表に、Close Manager および Account Reconciliation Manager を含む Financial Close Management アプリケーション・サーバーのサービスおよびプロセスを示します。

注： Financial Close Management を開始する前に構成後のタスクが完了していることを確認してください。195 ページの「Financial Close Management 手動構成タスク」を参照してください。

注意 Financial Close Management を構成するために SOA サーバーを起動した場合、それを停止してから Oracle Enterprise Performance Management System サービスを開始してください。

注： Financial Close Management を開始する前に、次のサーバーの起動順に留意してください：

- WebLogic 管理サーバー

- Hyperion Foundation Services 管理対象サーバー
- Oracle HTTP Server - Oracle Process Manager (ohsInstanceInstanceNumber)
- 任意の順序:
 - Financial Close Management Java Web アプリケーション
 - Financial Management Web サービス管理対象サーバー(Financial Close Management とともに Oracle Hyperion Financial Management を使用する場
合)
 - FDM Web アプリケーション(FDM とともに Financial Close Management を
使用する場
合)
 - Financial Reporting Java Web アプリケーション(Oracle Hyperion Financial
Reporting と Oracle Hyperion Financial Close Management を使用する場
合)
 - FDMEE (Account Reconciliation Manager を使用する場
合)
- Oracle SOA 管理対象サーバー

表 115 Financial Close Management のサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマ ンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_ INSTANCE_NAME、「Financial Close」、FinancialClose の開始の順に選択しま す
登録サービス名	HyS9FinancialClose_instanceName
Windows サービス・コントロール・ パネルでの表示名	Oracle Hyperion Financial Close Management - Java Web アプリケーション (instanceName)
説明	Financial Close Manager Java Web アプリケーションへのアクセス・サービ スを提供します
Windows 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startFinancialClose.bat
UNIX 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startFinancialClose.sh
Windows 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopFinancialClose.bat
UNIX 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopFinancialClose.sh

Data Relationship Management

次の表に、Data Relationship Management のサービスとプロセスを示します。

表 116 Data Relationship Management のサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・ コマンド	「スタート」メニューから、「プログラム」、「Oracle EPM System」、「Data Relationship Management」、「構成コンソール」の順に選択するか、EPM_ ORACLE_HOME/ products/DataRelationshipManagement/server/bin/ drm-server-console.exe を実行します。

情報タイプ	詳細
登録サービス名	Oracle DRM サーバー・プロセス
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Oracle DRM サーバー・プロセス
説明	Oracle DRM 環境内で必要なサーバー・アプリケーションの開始と停止を処理します
Windows 起動コマンド	Net start "Oracle DRM Server Processes"
UNIX 起動スクリプト	NA
Windows 停止コマンド	Net stop "Oracle DRM Server Processes"
UNIX 停止スクリプト:	NA

また、Oracle Data Relationship Management には、IIS で稼働する Web 層コンポーネントが含まれています。

FDM

次の表に、FDM のサービスとプロセスを示します。

表 117 FDM タスク・マネージャのサービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE_NAME、「Financial Data Quality Management」、「タスク・マネージャ」、「タスク・マネージャ」の順に選択します
登録サービス名	HyS9FDMTaskManagerSrv_instanceName
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Oracle Hyperion Financial Data Quality Management - タスク・マネージャ (instanceName)
説明	Hyperion Financial Data Quality Management のタスクをスケジュール設定できるようにします。
Windows 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startFDMTaskManager.bat
UNIX 起動スクリプト	NA
Windows 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopFDMTaskManager.bat
UNIX 停止スクリプト	NA

また、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management には、IIS で稼働する Web 層コンポーネントが含まれています。

FDMEE アプリケーション・サーバー

次の表に、Oracle Hyperion Financial Data Quality Management Enterprise Edition のサービスとプロセスを示します。

表 118 FDMEE サービスおよびプロセス

情報タイプ	詳細
Windows 「スタート」メニュー・コマンド	「スタート」、「プログラム」、「Oracle EPM System」、EPM_ORACLE_INSTANCE_NAME、「FDM Enterprise Edition」、ErpIntegrator の開始の順に選択します
登録サービス名	HyS9aifWeb_instanceName
Windows サービス・コントロール・パネルでの表示名	Oracle Hyperion FDM Enterprise Edition - Java Web アプリケーション (instanceName)
説明	ERPI の Workspace モジュールを提供します。
Windows 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startERPIntegrator.bat
UNIX 起動スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/startERPIntegrator.sh
Windows 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopERPIntegrator.bat
UNIX 停止スクリプト	EPM_ORACLE_INSTANCE/bin/stopERPIntegrator.sh

用語集

EPM Oracle インスタンス EPM System 製品のアクティブで動的なコンポーネント(実行時に変更できるコンポーネント)が含まれているディレクトリです。EPM Oracle インスタンス・ディレクトリの場所は構成時に EPM System コンフィグレータを使用して定義します。

EPM Oracle ホーム EPM System 製品に必要なファイルを含むミドルウェア・ホームのサブディレクトリです。EPM Oracle ホームの場所は、EPM System インストーラでのインストール中に指定されます。

ID 外部認証におけるユーザーまたはグループの固有の ID です。

Java Web アプリケーション・サーバー・クラスタ Java 仮想マシン(JVM)のアクティブ-アクティブ・アプリケーション・サーバー・クラスタです。

Oracle ホーム 特定の製品に必要なインストール・ファイルを含むディレクトリで、ミドルウェア・ホームのディレクトリ構造内にあります。「ミドルウェア・ホーム」も参照してください。

Shared Services レジストリ Shared Services リポジトリの一部で、ほとんどの EPM System 製品の EPM System 配置情報(インストール・ディレクトリ、データベース設定、コンピュータ名、ポート、サーバー、URL、依存サービス・データなど)を管理します。

WebLogic Server ホーム WebLogic Server インスタンスに必要なインストール・ファイルを含むミドルウェア・ホームのサブディレクトリです。WebLogic Server ホームは Oracle ホームと対です。

Web アプリケーションの論理アドレス Web アプリケーションの内部ホスト名、ポート、およびコンテキストの識別に使用される別名の参照です。クラスタ化された、または高可用性の環境では、これは分散されたコンポーネントのために 1 つの内部参照を確立する別名です。EPM System において、クラスタ化されていない Web アプリケーションの論理アドレスは、その Web アプリケーションを実行している物理ホストにデフォルトで設定されます。

アクティブ-アクティブ高可用性システム システムのすべての使用可能メンバーが要求に対応でき、アイドル状態のメンバーがないシステムです。通常、アクティブ-アクティブ・システムは、アクティブ-パッシブ・システムより豊富な拡張性オプションを備えています。「アクティブ-パッシブ高可用性システム」と対比してください。

アクティブ-パッシブ高可用性システム 常に要求に対応するアクティブ・メンバーと、アクティブ・メンバーに障害が発生した場合にのみアクティブ化されるパッシブ・メンバーを含むシステムです。「アクティブ-アクティブ高可用性システム」と対比してください。

アセンブリ EPM System 製品またはコンポーネントのインストール・ファイルです。

アップグレード 新規のソフトウェア・リリースを配置し、以前の配置から新規の配置にアプリケーション、データおよびプロビジョニング情報を移動すること。

アプリケーション・サーバー・クラスタ 複数のアプリケーション・サーバーが緩やかに結合したグループです。これらのアプリケーション・サーバーは、信頼性と拡張性を実現するために連携して同時に実行し、ユーザーには 1 つのアプリケーション・サーバーのように見えます。「垂直アプリケーション・クラスタ」と「水平アプリケーション・クラスタ」も参照してください。

移行 アプリケーション、アーチファクト、またはユーザーを、別の環境またはコンピュータにコピーするプロセスです。たとえば、テスト環境から本番環境にコピーします。

移行スナップショット アプリケーションの移行のスナップショットです。移行ログに取込まれます。

移行ログ アプリケーションの移行のすべてのアクションとメッセージを取込むログ・ファイルです。

インストール・アセンブリ EPM System インストーラにプラグインする製品インストール・ファイルです。

拡張性 システムのサイズを大きくまたは小さく変更する機能。増加に関して、「垂直にスケーリング」または「スケール・アップ」は単一マシンの機能の拡張を指します。「水平にスケーリング」または「スケール・アウト」はマシンをさらに追加することを指します。

管理対象サーバー 内蔵された Java 仮想マシン (Java Virtual Machine: JVM) で実行されるアプリケーション・サーバー・プロセスです。

外部認証 アプリケーションの外部に保管されたユーザー情報を使用して、Oracle EPM System 製品にログオンすることを指します。ユーザー・アカウントは EPM System によって保持されますが、パスワード管理およびユーザー認証は、Oracle Internet Directory(OID)、Microsoft Active Directory(MSAD)などの企業ディレクトリを使用して、外部のサービスによって実行されます。

共有ストレージ フェイルオーバー・クラスタのすべてのノードから使用できる必要があるデータを含むディスクのセット、共有ディスクとも呼ばれます。

共有ディスク 「共有ストレージ」を参照してください。

クラスタ 単一リソースとして動作して、タスクの負荷を共有し、フェイルオーバーのサポートを提供する一連のサーバーまたはデータベースです。システムにおける単一障害点となるサーバーやデータベースを排除します。

クラスタ・サービス システムとしてクラスタ・メンバーの操作を管理するソフトウェアです。クラスタ・サービスを使用すると、一連のリソースやサービスを定義して、クラスタ・メンバー間でのハートビート・メカニズムを監視し、これらのリソースやサービスをできるだけ効率良くかつ透過的に別のクラスタ・メンバーに移動できます。

クラスタ内部接続 ハートビート情報に関するノード障害を検出するためにハードウェア・クラスタで使用されるプライベート・リンクです。

権限 データまたは他のユーザーとグループを管理するために、ユーザーおよびグループに付与されるアクセス・レベルです。

高可用性 障害が発生した場合でもアプリケーションが継続してサービスを提供できるようにするシステム属性です。これは、シングル・ポイント障害の除去、フォルト・トレラント・ハードウェアおよびサーバー・クラスタにより実現されます。1つのサーバーで障害が発生すると、処理要求は別のサーバーにルーティングされます。

サイレント応答ファイル インストール管理者が提供する必要があるデータをかわりに提供するファイルです。応答ファイルにより、EPM System インストーラまたは EPM System コンフィグレータはユーザーの介入または入力なしで実行できます。

障害リカバリ 地理的に離れたスタンバイ・サイトにアプリケーションおよびデータを置いたリカバリ戦略により、自然災害または予測できない事態による実稼働サイトの停止に対して保護する機能です。

シングル・サインオン(SSO) 一度ログオンすれば、再度認証を要求されずに複数のアプリケーションにアクセスできる機能です。

シングル・ポイント障害 システム内のコンポーネントで、そこで障害が発生すると、ユーザーは通常の機能にアクセスできなくなります。

垂直アプリケーション・サーバー・クラスタ 同じマシン上にある複数のアプリケーション・サーバー・インスタンスを含むクラスタです。

水平アプリケーション・サーバー・クラスタ 異なるマシン上にあるアプリケーション・サーバー・インスタンスを含むクラスタです。

セキュリティ・エージェント Web アクセス管理プロバイダ(Oracle Access Manager、Oracle Single Sign-On、CA SiteMinder など)です。企業の Web リソースを保護します。

セキュリティ・プラットフォーム Oracle EPM System 製品で外部認証とシングル・サインオン機能を使用するためのフレームワークです。

対称トポロジ 本番サイトおよびスタンバイ・サイトの層の間で同一である Oracle Fusion Middleware 障害リカバリ構成です。対称トポロジでは、実稼働サイトおよびスタンバイ・サイトには同数のホスト、ロード・バランサ、インスタンスおよびアプリケーションが存在します。両方のサイトで同じポートが使用されます。システムは同様に構成され、アプリケーションは同じデータにアクセスします。

トークン 外部認証システム上の 1 つの有効なユーザーまたはグループの暗号化された ID です。

ネイティブ認証 サーバーまたはアプリケーション内で、ユーザー名とパスワードを認証するプロセスです。

ハードウェア・クラスタ ネットワーク・サービス(たとえば IP アドレス)やアプリケーション・サービス(データベースや Web サーバーなど)のシングル・ビューを、これらのサービスのクライアントに提供するコンピュータの集合です。ハードウェア・クラスタの各ノードは、独自のプロセスを実行するスタンドアロン・サーバーです。これらのプロセスは互いに通信し、連携してアプリケーション、システム・リソース、データをユーザーに提供する 1 つに見えるシステムを形成します。

バックアップ アプリケーション・インスタンスの複製コピーです。

非対称トポロジ 本番サイトおよびスタンバイ・サイトの層の間で異なっている Oracle Fusion Middleware 障害リカバリ構成です。たとえば、非対称トポロジには、本番サイトよりもホストおよびインスタンスが少数のスタンバイ・サイトが含まれることがあります。

フェイルオーバー プライマリ・データベース、サーバーまたはネットワークに障害が発生したり、これらがシャットダウンしたりする場合に、冗長性のあるスタンバイ・データベース、サーバーまたはネットワークに自動的に切り替える機能です。フェイルオーバー用にクラスタリングされているシステムは、高可用性、サーバーの冗長性を利用したフォルト・トレランス、および共有ディスクなどのフォルト・トレラント・ハードウェアを提供します。

復元 データベースが破損または破壊された場合にデータおよび構造の情報を再ロードする操作です。通常、データベースをシャット・ダウンおよび再起動した後で実行されます。

プロキシ・サーバー セキュリティを保証するために、ワークステーション・ユーザーとインターネットの間で仲介を行うサーバーです。

プロビジョニング ユーザーおよびグループに対して、リソースへのアクセス権限を付与するプロセスです。

ミドルウェア・ホーム Oracle WebLogic Server ホームを含み、EPM Oracle ホームおよびその他の Oracle ホームも含むことができるディレクトリです。ミドルウェア・ホームは、ローカル・ファイル・システム、または NFS を介してアクセス可能なリモート共有ディスク上に配置できます。

役割 リソースへのアクセス権をユーザーおよびグループに付与する際に使用される手段です。

ユーザー・ディレクトリ ユーザーおよびグループの情報を集中管理する場所です。リポジトリまたはプロバイダとも呼ばれます。通常のユーザー・ディレクトリには、Oracle Internet Directory(OID)、Microsoft Active Directory(MSAD)および Sun Java System Directory Server が含まれています。

ライフサイクル管理 製品環境間でのアプリケーション、リポジトリ、または個別のアーチファクトの移行プロセスです。

リポジトリ ビューおよびクエリーに使用するためのメタデータ、フォーマット、および注釈の情報の場所を格納します。

リレーショナル・データベース 関連する 2 次元テーブルにデータを保管するデータベースです。「多次元データベース」と対比してください。

ロケール コンピュータで使用される言語、通貨、および日付フォーマット、データのソート順、文字セットのエンコード方式を指定するコンピュータ設定です。Essbase ではエンコード方式のみが使用されます。エンコード方式「ESSLANG」も参照してください。

ロード・バランサ クラスタの個別のアプリケーション・サーバーに要求を送信するハードウェアまたはソフトウェアで、システムへの唯一のエントリ・ポイントです。

ロード・バランシング サーバーのグループ全体に要求を分散することで、エンド・ユーザーのパフォーマンスが最適化されます。

索引

記号

.NET のインストール, 52

A - Z

ActiveX、使用可能にする, 56

Administration Services

アプリケーション・サーバー

UNIX 起動スクリプト, 332

Windows サービス名, 332

開始, 332

デフォルト・ポート, 310

ais.cfg ファイル, 333

ARBORPATH, 143

Calculation Manager

EPM Workspace からの起動, 290

UNIX 起動スクリプト, 330

Windows 起動スクリプト, 330

Windows サービス名, 330

開始, 330

Calculation Manager、デフォルト・ポート, 309

Data Relationship Management

Windows サービス名, 345

開始, 345

デフォルトの URL, 290

デフォルト・ポート, 317

DCOM, 149

Disclosure Management

Windows サービス名, 344

デフォルト・ポート, 315

Profitability and Cost Management

Windows 起動スクリプト, 344

開始, 344

DISPLAY 変数, 84

EPM Oracle インスタンス, 17, 123

EPM Oracle ホーム, 17, 91

アーキテクチャ、EPM System, 21

EPM System 診断, 295

EPM System 製品

概要, 15

層、EPM System のアーキテクチャ, 21

EPM Workspace

デフォルトの URL, 290

FDMEEE

Windows サービス名, 347

開始, 347

構成後のタスク, 202

Essbase

構成後のタスク, 193

再ホスティング, 257

スタンドアロン・モード, 164

メンテナンス・リリース・インストールの前
提条件, 207

essbase.cfg ファイル, 142, 143

Essbase Studio

UNIX 起動スクリプト, 334

Windows 起動スクリプト, 334

開始, 334

Essbase Studio、デフォルト・ポート, 310

Essbase サーバー

OPMN を使用した開始, 330

UNIX 起動スクリプト, 330

開始, 330

構成, 142

従来のセキュリティ, 144

従来のセキュリティ、Essbase サーバー, 144

Essbase、デフォルト・ポート, 309

Essbase のスタンドアロン・モード, 164

ESSLANG, 144, 145

FDM

Windows サービス名, 346

開始, 346

構成, 161

デフォルトの URL, 290

FDMEEE、デフォルト・ポート, 316

FDM、デフォルト・ポート, 315

Financial Close Management

- UNIX 起動スクリプト, 344
- Windows 起動スクリプト, 344
- Windows サービス名, 344
- 開始, 344
- 構成, 159
- Financial Close Management
 - インストールの前提条件, 73
 - 構成後のタスク, 195
 - 構成の前提条件, 109
 - デフォルト・ポート, 313
 - メンテナンス・リリース・インストールの前
提条件, 204, 210
- Financial Management
 - DCOM の構成, 149
 - EPM Workspace からの起動, 290
 - Windows サービス名, 339
 - アプリケーション・サーバー
 - Windows サービス名, 340
 - 開始, 339, 340
 - 構成, 149
 - デフォルト・ポート, 313
 - データベース接続のプール, 321
 - 文キャッシング, 43
- Financial Management での文キャッシング, 43
- Financial Reporting
 - アプリケーション・サーバー
 - UNIX 起動スクリプト, 337
 - Windows サービス名, 337
 - デフォルト・ポート, 311
- Foundation Services
 - アプリケーション・サーバー
 - UNIX 起動スクリプト, 327
 - Windows サービス名, 327
 - 開始, 327
 - デフォルト・ポート, 307
- HBRMigrateSecurity.cmd ユーティリティ, 221
- IBM AIX
 - 64 ビット・プラットフォームでのユーザー
制限の設定, 194
- IBM DB2 データベースの要件, 45
 - サイズ, 46
 - テーブルスペース, 47
 - 役割と権限, 46
- IBM HTTP Server, 306
 - 構成, 188
- IIS, 51
- Integration Services
 - UNIX 起動スクリプト, 333
 - Windows サービス名, 333
 - 開始, 333
- Interactive Reporting
 - 開始および停止, 336
- Interactive Reporting、デフォルト・ポート, 312
- Java Web アプリケーションサーバー, 50
- Java アプリケーション・サーバー。「Web アプ
リケーション・サーバー」を参照
- JDBC URL, 127
- JDBC URL 属性, 319
- LDAP ベースの JDBC URL, 127, 319
- ライフサイクル管理
 - 高可用性の構成, 133
- Microsoft Internet Information Services (IIS), 51
- Microsoft SQL Server Windows 認証, 127
- Microsoft SQL Server のデータベース要件, 44
 - サイズ, 44
 - 役割と権限, 44
- OPMN
 - Essbase サーバーの起動, 330
- OPMN のデフォルト・ポート, 309
- Oracle BI EE の統合, 87
- Oracle Configuration Manager、構成, 137
- Oracle Database の要件, 40
 - サイズ, 41
 - テーブルスペース, 42
 - 役割と権限, 40
- Oracle Enterprise Manager の配置, 131
- Oracle HTTP Server
 - インストール・ログ, 82
 - 手動構成, 179
- Oracle HTTP Server Web サーバー
 - UNIX 起動スクリプト, 326
 - Windows サービス名, 326
- Oracle HTTP Server インストールの前提条件,
82
- Oracle RAC, 126, 127, 136, 319
- Oracle SOA Suite インストールの前提条件, 73
- Oracle Software Delivery Cloud, 67
- Oracle インスタンス, 123
- Performance Management Architect
 - EPM Workspace からの起動, 290
 - Windows サービス名, 328
 - アプリケーション・サーバー
 - Windows サービス名, 329
 - 開始, 328

- デフォルト・ポート, 308
- データ・シンクロナイザ・アプリケーション・サーバー
 - Windows サービス名, 329
- Performance Scorecard
 - EPM Workspace からの起動, 290
 - アプリケーション・サーバー
 - UNIX 起動スクリプト, 342
 - Windows サービス名, 342
 - 開始, 342
 - 構成, 157
 - デフォルトの URL, 290
 - デフォルト・ポート, 314
- Performance Scorecard Alerter
 - アプリケーション・サーバー
 - UNIX 起動スクリプト, 343
 - Windows サービス名, 343
- Planning
 - EPM Workspace からの起動, 290
 - アプリケーション・サーバー
 - UNIX 起動スクリプト, 338
 - Windows サービス名, 338
 - 開始, 338
- Planning、デフォルト・ポート, 314
- Profitability and Cost Management
 - EPM Workspace からの起動, 290
 - UNIX 起動スクリプト, 343
 - Windows 起動スクリプト, 343
 - Windows サービス名, 343
 - 開始, 343
- Profitability Management
 - デフォルト・ポート, 315
- Provider Services
 - アプリケーション・サーバー
 - UNIX 起動スクリプト, 335
 - Windows サービス名, 335
 - 開始, 335
- Provider Services、デフォルト・ポート, 310
- RAC, 126, 136, 319
- Reporting and Analysis
 - EPM Workspace からの起動, 290
 - 構成, 147
 - 構成後のタスク, 195
 - デフォルト・ポート, 310
- Reporting and Analysis Framework
 - アプリケーション・サーバー
 - UNIX 起動スクリプト, 336
 - Windows サービス名, 336
 - 開始, 336
- Shared Services
 - デフォルト・ポート, 307
- 登録、Shared Services, 134
- Shared Services Console
 - デフォルトの URL, 290
- Shared Services レジストリ , 18, 134
 - ポート, 305
- SOA サーバー
 - 開始, 111
- SSL, 136, 307。「SSL ポート」も参照
 - 構成, 132
 - 構成順序, 114
 - 使用可能にする, 136
 - ポート, 307
- SSL 構成, 114
- SSL ポート
 - WebLogic, 130
- Strategic Finance
 - Windows サービス名, 341
 - 開始, 341
 - 構成, 158
 - デフォルト・ポート, 314
- UNIX 起動スクリプト, 289
 - Administration Services アプリケーション・サーバー, 332
 - Calculation Manager , 330
 - Essbase Studio サーバー, 334
 - Essbase サーバー, 330
 - Financial Close Management , 344
 - Financial Reporting アプリケーション・サーバー, 337
 - Foundation Services アプリケーション・サーバー, 327
 - Integration Services , 333
 - Interactive Reporting , 336
 - Oracle HTTP Server Web サーバー, 326
 - Performance Scorecard Alerter アプリケーション・サーバー, 343
 - Performance Scorecard アプリケーション・サーバー, 342
 - Planning アプリケーション・サーバー, 338
 - Profitability and Cost Management , 343
 - Provider Services アプリケーション・サーバー, 335

- Reporting and Analysis Framework アプリケーション・サーバー, 336
- Web Analysis アプリケーション・サーバー, 338
- URL、デフォルト, 290
- UTF8, 40, 46
- Web Analysis
 - アプリケーション・サーバー
 - UNIX 起動スクリプト, 338
 - Windows サービス名, 338
- Web Analysis、デフォルト・ポート, 312
- WebLogic
 - 手動配置, 167
 - 単一の管理対象サーバーの配置, 129
 - 配置, 129
- WebLogic Server, 50
- WebLogic 管理サーバー・ポート, 306
- WebSphere, 50, 306
- WebSphere Application Server
 - Web アプリケーションの配置, 183
 - メンテナンス・リリースのインストールの適用, 203
- Web アプリケーション
 - 手動配置, 167
 - 分散環境での配置, 85, 86
- Web アプリケーション・サーバー, 50
 - IBM WebSphere, 50
 - WebLogic Server, 50
- Web アプリケーションの手動配置, 167
- Web サーバー, 51
 - Microsoft Internet Information Services (IIS), 51
 - 構成, 140
 - 手動構成, 179
- Web サーバーの手動構成, 179
- Web ブラウザ
 - 準備, 54
 - 設定, 54
- Windows 起動スクリプト
 - Administration Services, 332
 - Calculation Manager, 330
 - Disclosure Management, 344
 - Essbase Studio サーバー, 334
 - Essbase サーバー, 330
 - Financial Close Management, 344
 - Foundation Services, 327
 - Integration Services, 333
- Interactive Reporting, 336
- Oracle HTTP Server Web サーバー, 326
- Profitability and Cost Management, 343
- Provider Services, 335
- Reporting and Analysis Framework, 336
- Windows サービス名, 289
 - Administration Services アプリケーション・サーバー, 332
 - Calculation Manager, 330
 - Data Relationship Management, 345
 - Disclosure Management, 344
 - FDMEE, 347
 - FDM, 346
 - Financial Close Management, 344
 - Financial Management, 339
 - Financial Management アプリケーション・サーバー, 340
 - Financial Reporting アプリケーション・サーバー, 337
 - Foundation Services アプリケーション・サーバー, 327
 - Integration Services, 333
 - Oracle HTTP Server Web サーバー, 326
 - Performance Management Architect, 328
 - Performance Management Architect アプリケーション・サーバー, 329
 - Performance Management Architect データ・シンクロナイザ・アプリケーション・サーバー, 329
 - Performance Scorecard Alerter アプリケーション・サーバー, 343
 - Performance Scorecard アプリケーション・サーバー, 342
 - Planning アプリケーション・サーバー, 338
 - Profitability and Cost Management, 343
 - Provider Services アプリケーション・サーバー, 335
 - Reporting and Analysis Framework アプリケーション・サーバー, 336
 - Strategic Finance, 341
 - Web Analysis アプリケーション・サーバー, 338
- Xvfb
 - AIX 5L 用, 83
 - HP-UX 用, 84
 - ディスプレイの設定, 84
- zip ファイル

ダウンロード, 67

あ行

アセンブリ, 67
 アップグレード, 92, 225
 アプリケーション, 274
 構成, 248
 構成後の手順, 275
 再ホスティングの手順, 257
 サポートされるパス, 227
 前提条件, 230
 チェックリスト, 228
 手順, 88
 データの準備, 233
 データの複製, 237
 データベースの準備, 39
 複数のリリースを含む環境から, 286
 ログ, 226
 アップグレードでサポートされるリリース番号, 227
 アプリケーション、アップグレード, 274
 アプリケーション・サーバーの配置
 WebLogic, 129
 時間変更, 152
 移行
 ビジネス・ルール, 281
 ビジネス・ルールの起動アクセス権, 221
 インスタンス・ホーム、構成, 123
 インストール
 宛先, 91
 共有ドライブ, 72
 検証, 295
 コンポーネントごと, 92, 93
 サイレント, 94, 96
 順序, 85
 層ごと, 92, 93
 タイプ, 92
 手順, 88
 分散環境, 85, 86
 インストール・アセンブリ, 67
 ダウンロード, 67
 インストール・チェックリスト, 69
 メンテナンス・リリース, 204
 インストールの検証, 295
 インストールの前提条件, 79
 Financial Close Management, 73
 Oracle HTTP Server, 82

インストール・ファイル、準備, 67
 エラー・ログ
 アップグレード, 226
 診断, 296
 トラブルシューティング, 165
 応答ファイル
 サイレント・インストール, 94, 96
 サイレント構成, 162

か行

開始スクリプト, 289
 手動配置された Web アプリケーション, 175, 177
 起動依存, 289
 共通設定, 132
 共有ドライブ, 72
 クラスタリング, 113
 構成, 193。「構成後のタスク」も参照
 Essbase, 142
 FDM, 161
 Financial Close Management, 159
 Financial Management, 149
 Performance Scorecard, 157
 Reporting and Analysis, 147
 Shared Services への登録, 134
 SSL, 132
 Strategic Finance, 158
 WebLogic の配置, 129
 Web サーバー, 140
 アップグレードの手順, 248
 インスタンス・ホーム, 123
 概要, 105
 共通設定, 132
 共有ドライブ, 72
 コマンド・ライン, 162
 サイレント, 162
 順序, 111
 前提条件, 106
 タスクの選択, 124
 タスクの要約, 115
 手順, 118
 データベース, 124, 127
 トラブルシューティング, 165
 分散環境, 113
 ログ, 165
 構成後のタスク, 193

FDMEEE , 202
 Essbase , 193
 Financial Close Management , 195
 Reporting and Analysis , 195
 一般的なタスク, 217

構成順序

SSL, 114
 アップグレード, 248
 概要, 111

さ行

再インストール, 92
 手順, 88
 サイズのガイドライン
 IBM DB2, 46
 Microsoft SQL Server, 44
 Oracle Database, 41
 再ホスティング, 257
 サイレント・インストール, 94, 96
 応答ファイル, 94
 サイレント構成, 162
 応答ファイル, 162
 サービス名。「Windows サービス名」を参照
 手動配置, 114, 167
 新規インストール, 92
 診断, 295
 順序
 アップグレード, 228
 インストール, 85
 構成, 111
 垂直のスケーリング, 56
 製品別のクラスタリング方法, 56
 接続のプール, 321
 前提条件, 67
 アップグレード, 230
 インストール, 79
 Financial Close Management , 73
 Oracle HTTP Server, 82
 Oracle SOA Suite, 73
 インストールと構成, 16
 構成, 106
 メンテナンス・リリース, 206
 Essbase , 207
 Financial Close Management , 204, 210

た行

タスクの選択、構成, 124
 単一の管理対象サーバーの配置, 129
 ダウンロード
 インストール・ファイル, 67
 チェックリスト
 アップグレード, 228
 インストール, 69
 メンテナンス・リリースの適用, 204
 停止スクリプト, 289
 テーブルスペース
 IBM DB2, 47
 Oracle Database, 42
 ディスク・スペースおよび RAM の要件
 クライアント・ソフトウェア, 36
 サーバー・ソフトウェア, 37
 デフォルトの URL, 290
 データのエクスポート, 237
 データの複製, 237
 データベース
 IBM DB2 の要件, 45
 Microsoft SQL Server の要件, 44
 Oracle Database の要件, 40
 準備, 39
 データベース構成, 124
 Shared Services , 134
 詳細設定オプション, 127
 データベース接続のプール, 321
 データベースの役割と権限
 IBM DB2, 46
 Microsoft SQL Server, 44
 Oracle Database, 40
 データベースの要件
 IBM DB2, 45
 Microsoft SQL Server, 44
 Oracle Database, 40
 トラブルシューティング, 165, 295

は行

配置
 WebLogic, 129
 確認, 299
 配置の確認
 WebLogic
 Administration Services , 300
 Calculation Manager , 299
 EPM Workspace , 299

FDMEE , 299
Financial Close Management , 299
Financial Management , 299
Financial Reporting , 299
Performance Management Architect , 299
Performance Scorecard , 299
Planning , 299
Production Reporting , 299
Profitability and Cost Management , 299
Provider Services , 300
Shared Services , 298
Web Analysis , 299

Shared Services のアップグレード, 255
アップグレード, 226
構成, 165
診断, 296
トラブルシューティング用のすべてのログの
zip ファイル, 165

ビジネス・ルール

Calculation Manager ルールへのアップグレード, 230

Calculation Manager ルールへの移行, 207, 208, 220, 231, 281

移行, 281

起動アクセス権の移行, 221

ブラウザ, 54。「Web ブラウザ」も参照

分散インストール, 85, 86

ポート, 305, 307

ま行

ミドルウェア・ホーム, 17, 91

メンテナンス・インストール, 92

メンテナンス・リリース

インストール・チェックリスト, 204

インストールの前提条件, 206

Essbase , 207

Financial Close Management , 204, 210

メンテナンス・リリースの適用, 204

や行

ユーザー制限

64 ビット AIX, 194

ユーティリティ

HBRMigrateSecurity, 221

ら行

ライフサイクル管理のエクスポートとインポートの場所, 133

レジストリ。「Shared Services レジストリ」を参照

ログ

Oracle HTTP Server , 82

